
翡翠記

ものぐさ三郎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

翡翠記

【Nコード】

N9889U

【作者名】

ものぐさ三郎

【あらすじ】

港町マーレの靴屋の息子は情性で平和な町に安穩として暮らしていました。しかし16歳になって進むべき道について考えなくてはならない時期となっていました。彼は学術、剣術、魔法と様々の技を修得したものの、これら無用のものが邪魔して将来の仕事を決める事ができません。

そんなおり、師匠が何者かによって殺され命を狙われることになります。しかも魔法使いの転身の術によって娘に姿を変えられたしまったのです。将来の淡い夢も吹き飛び、生存することのみの目的の

為に逃亡の旅は始まったのでした。
内容：活劇童話　ですます調

第1回 静かな港町

パテリア王国の西、隣国ガツリアとの国境近くにマーレという町がありました。

この町は海に面していたものの内陸部を走る主要道ビタ街道よりずいぶんと離れていたため旅人があまり訪れない町でした。しかし港町ということもあり、人知れずのんびり一日を過ごすには最高のところでした。

町の正面には海が広がり大小様々の島が点在していました。町を囲む岡に登り辺りを見渡せば色白の島が緑の木々を背負って海に浮かんでいる姿を観ることが出来ます。

町はこの丘の下、海に向かってくだる緩やかな斜面にありました。白服に赤い帽子を被った家々が少ない土地をせめぎ合って建っていました。そしてその先には海に大きく腕を広げた港が懷に沢山の船を抱えていたのです。

遠くに風を受け軽やかに疾走する船たち、空には海鳥達が翼を広げ舞っているそんな日の光を蓄えたのかな町でした。

しかしこの静かでまったりとした町にも人の住むところというものでしょうか、争いというものがありました。

風を受けて鳴きながら飛んでいる海鳥たちの眼下には幾人かの男達が一人の男を相手に言い争いをしていたのです。

「こいつ何度言ったら分かるんだ！」

色黒の男肩を震わせました。

するとあばた顔の男は鼻で笑うと太々しく

「どうしようが俺の勝手だ」と言い返しました。

二人ににらみ合いが起きました。

黙って聞いていた男は眉間に深く皺を寄せると瞳に鋭い光を放し

「癖が悪い奴だ」と爆発するように拳を繰り出しました。

骨と骨が当たる鈍い音がしました。

砂が宙に舞い、男は地面に音をたたて倒れました。

「殴りやがったな」

鼻を押さえて男は起きあがると吠えるように言い、色黒の男に渾身の力を込めて打ちかかったのです。

しかし彼が色黒の男に届く前に別の四角い顔の男が立ちはだかり、お腹に大きな拳を打ち込んだのでした。あばた顔の男はくの字の曲がり口の中から中身が飛び出さんばかりの苦しい表情をいたしました。

かろうじて彼は持ちこたえると砂を踏みしめ二人に襲いかかるました。でもまた別の鬚顔の男が現れると頬に激しい衝撃を受けたのです。彼の顔は大きく横に振られ頭がくらくらとしました。

打った男はと言うと、痛さに耐えかね自分の手を一生懸命振っていました。

倒れそうな彼を別の猿顔の男が抱きかかえます。

「倒れちゃ困るんだよ」

猿顔の男はそう言うのを羽交い締めにして仲間の方へ指しだしました。

四角い顔の男が笑いながら近づくと再びあばた顔の男の腹に、胸に、顔にと拳をお見舞いしました。男が息が出来ないほど苦しんでいると色黒の男は言いました。

「今日はこの辺で勘弁してやる、いいか二度とするんじゃないねえ」

するとあばた顔の男は喘ぎながらも声を捻りだし「やだね」と言いました。

男達の形相が鬼のようになりました。

羽交い締めにしていた男が彼を投げ捨てると力無く男は地面に横たわりました。色黒の男が目を青白く輝かせ男の顔を踏んづけました。するとそれに呼応するように他の男達は倒れた男を足で蹴り始めたのでした。転がった男から鈍い音が響いてまいります。男達は飢えた野犬のように男に襲いかかりました。

若者は荷物を背負って港の道を歩いていました。海風が心地よい昼下がりで気分も上場でした。しかしそれを打ち消すかのような荒々しい声が飛び込んで来たのでした。

声の方向、浜を見れば幾隻かの小舟の横たわる砂浜で男達が争っているのが分かりました。若者はその様子を不安な様子で眺めていたのですが、突然目を見開くと荷物を傍らに置いて駆けだしたのでした。

「まった」

大きな声が辺りに響きました。男達は怒りの形相のまま動きを止め、その方向を見つめました。そこには砂地を蹴って走ってくる若者の姿がありました。男達は怪訝な様子で若者が間近にやってくるまで見届けました。

その若者は目鼻立ちが整い知性に満ちた顔立ちの若者でした。息を切らしながらは走って来たのでしょうか言葉が直ぐに出ない様子でした。

「なんだお前」

痺れを切らして色黒の男は訊ねました。

「おやめください」

やっと若者は口を開きました。男は不機嫌そうに若者を睨むと確かめるように言いました。

「お前、こいつの仲間か？」

「なじみのお客さんなのです」

若者の返事に色黒の男は見下すような眼差しを向けました。

「ならお前には関係ない。俺達はちよいと話し合いをしていただけだ」

「話し合い？　これがですか」

戯けたような仕草で地面に横たわっている男の姿を見ました。

色黒の男は恐れを知らない若者の様子に少々戸惑いました。体格もすっかりしたこの若者は自分たちと全く違う感じで、この町には不釣り合いの雰囲気をもっていました。しかし若者の言葉は自分たちの自尊心を著しく傷つけるものであったのでその躊躇も直ぐに失せて怒りの衝動がすぐわき湧く上ってきたのでした。

「正義漢面するんじゃないぜ。小僧は家へ帰えんな」

「いいえ止めてください。これ以上したらこの人は死んでしまいます」若者は稟として食い下がります。

「邪魔するならこうだ」

男は荒々しく唾を地面に吐き捨てると拳を若者に突き出してみせました。するとどうでしょう、その行為に若者はたじろぐどころが静かに立っていました。ただ深緑の瞳を愛嬌良く開いていた眼は遠くでも見るかのように半眼になっていました。

「俺達の邪魔をする気だな」

そう叫ぶと色黒の男は力を込めて若者に打ちかかりました。男の拳は若者の顔を捕らえ、打ち砕いたように思えましたがその感覚も直ぐに修正されました。不思議なことに男の拳は空を切り若者には当たらなかったのです。というより拳が巻き込まれるように絡み取られて力を無くしたのです。男は自分の渾身に力を込めた拳が無

力化したことに狼狽致しました。その感覚は力が吸い取られたように思えたのでした。

我が身に起こったことに一瞬驚きましたが男は再び地面を蹴って渾身の拳を何発も打ち出しました。ところがどうでしょう、それらの攻撃はことごとく流されてしまい若者が懷に深く侵入し密着状態のまま捌くので拳を打ち出せなくなってしまうたのでした。

拳を出そうとすると動きだしの所で封殺され男は確実に若者の制御下に置かれたことを肌で感じたのでした。

「よししょう」

若者は静かに言うと言は驚きの様子で動きを止めました。

色黒の男は力無く腕を降ろしましたが他の男達の怒りは治まっていませんでした。仲間がねじ伏せられたと分かると一斉に若者めがけて襲いかかってきたのでした。若者は素早く転身すると男達の間を燕が林を飛び去るようにすり抜けました。

目標を一瞬見失った男達。

慌てて背後を見ると若者が静かに立っていました。狐に馬鹿されたような感覚が全員に襲いました。

四角い顔の男が若者めがけて走り寄ってきました。するとどうでしょう、ずいぶん離れた所にいたはずの若者は一瞬にして自分の前に現れたのでした。何故？ という問いが脳裏をよぎった瞬間男は地面に倒れていました。鬚面の男は間近に若者がいたので襲いかかりました。一瞬男は若者を確実に捉えたと思い打ちかかるうとしたのですが、若者は影を残して横にいました。若者がくると回転するのが見えたかと思うと地面に打ち据えられたのでした。

最後に残った猿顔の男は一瞬にして二人がうち倒されたのを見て立ちすくんでしまいました。そして若者がこちらを見ているのが分かりました。

「来るな」

男は怯えました。

「おじさんなにもしませんよ」

若者はにっこりしました。

ところが地面が砂地だったためでしょうか倒された二人の男は軽傷で、再び起きあがると若者に再び挑んでまいりました。

二人の間をなんなくすり抜けて、若者は何かを口ずさみ指を振ると空気を通じて何かが走りました。すると男達の体を何かが突き抜け体々に激痛をもたらしました。体が痺れたまま男達はうずくまり苦しそうです。

「なにが起こった？」

他の男達は突然仲間が苦しみ出したので唖然と立ちつくします。

「少々、動けなくなりました」

若者は笑顔で答えると、この若者には到底敵わないと男達は戦意喪失してしまいました。

「あんたが強いてのはよく分かった。若いからと馬鹿にして悪かった」

黒い顔の男は言いました。他の者も反省しているようでした。

「しかし、分かってほしんだよ。悪いのは俺達じゃなくて転がっている奴なんだ」

男は訴えかけます。

「彼は一体何をしたというのです？」

「こいつはなあ。獲っちゃいけない魚に手をだしやがったんだ」

若者には思い当たるものがありました。

「この近海にしかないという魚」

「そう、そいつだ」

男は弾けるように返しました。

その魚は乱獲で少なくなつた魚でした。

「こいつは、儲かるからこつそり漁をしたやがったんだ」

色黒の男は喘いで地面に伏していれるあばた顔の男を指しました。
「頭にくるのは言い分だ。俺は昔ながらの漁をしているだけだ。悪いのは商売根性出して卵巣を金持ち連中あいてに売ったお前達だといいやがる」

「こつちだつて我慢しているというのによ」

色黒の男は怒りが治まらないのかまくしたてました。

「事情はわかりました。でもここまで怪我をさせるのはどうでしょう。その主張が正しかったとしてもこの状況は褒められたものではないということですよ」

「この状況？」

男には若者の言わんとすることが分かりませんでした。

「おじさん達盛んに蹴っていたんだけど、かなり急所に当たっているみたいです」

厳しい表情で若者は語りました。

男は指摘され地面に伏している男を思わず見ました。

「殺すつもりだったのですか？」

「いや、それは」

男は声が詰まりました。

「俺達もやりすぎたのかもしれない。こいつを懲らしめるだけだったんだ。それに殺人で捕まって家族が路頭に迷うことになったら目も当てられねえ」

「この人にこれ以上の制裁は不要でしょう」

男達は返す言葉もなく項垂れて、バツが悪そうにその場を去って行きました。

暫くすると倒れていたあばたの男も元氣を取り戻し起きあがれるようになりました。彼は相変わらず強気の言葉を吐き捨ていましたが、怒りが治まると若者に礼を言いびっこを引きながら去って行ったのでした。

港の道。道は海沿いにアーチを画いて延びており片側には倉庫や民家などの家々が軒を連ね、もう片側には大小様々の沢山の船が停泊していました。道は広々としており船が繫留されている付近は石畳の道と変化していました。

お昼過ぎです。朝の人やものが慌ただしく往来する喧噪もなく落ち着いた港の様子でした。海鳥の声が良く聞こえ静かです。時折、空から白いものが降ってきて石畳にシミをつくりますがそれも愛嬌というものでした。

船の近くでは漁師が網を一杯道に広げ繕いに余念がありません。船から箱を抱えた男が現れ船と桟橋に掛けた板の上を器用に渡っていました。船では帆を綺麗にたたむ人がおりのんびりとした感じでした。

暫く進むと家々の間を割って岡の上から下ってくる石畳の道が現れました。町の東側の港に通じる道でした。この道は岡を越えよその町へとは通じてはいませんが、町の主要な道でした。

港の道をのんびり歩いていると石畳を叩く足音が聞こえてまいりました。若者が坂の方を見上げると少女等が楽しげにはしゃいでおり、その中の一人がスカートをひらひらさせこちらに駆け下りてくるのが分かりました。幼なじみのプエラでした。

あまりにも元気良く走っているので彼女の栗色の三つ編みにされた長い髪は揺れるように波打ち、花飾りの付いた帽子は飛んで行きそうでした。スカートに足を取られ今にも転びそうで、喜び溢れんばかりに走って来る少女を見て彼は小さな子供のようだなと思いました。

「グレーティア」

少女は青年の名前を叫ぶと息を切らしたまま彼に抱きつかしました。

彼は思わず荷物を落としそうになりましたがなんとか持ち堪えました。彼女はそのまま一回転すると道に降り何かを言おうとしましたが呼吸も荒く咳き込んでしまいまいました。そして大きく息をする
と「確保！」と言いました。きらきら光輝く青い瞳が印象的でした。
「なにそれ？」
「いいの」

彼女は悪戯ぽく微笑んだ後に彼の腕に手をゆっくり通し、一緒に歩き初めました。

「勢いよく来たのでこれ落としそうだったよ」

彼は少しだけ厳しい顔をしました。

「ご免なさい。そんなつもりなかったの。あの坂早歩きしたら止まらなくなったの」

「走ってたよあれ」

「そうかしら」

彼女はとぼけました。

先ほどまで少女たちは誰が彼の恋人になるか競いあっていたのでした。幼なじみの彼女は他のものに今更割り込まれては不愉快だと実力行使にでたのでした。

坂の上から少女達がプエラに盛んに話しかけています。負けたわ。降参降参とも聞こえました。

「あの娘達は君の友達だろう。僕にかまっていいいの？」

「いいの丁度さよならしたところだから」

うち消すように彼女は言いました。

「私には幼なじみを守るといふ大事な勤めがあるのよ」

「僕を守る？」

青年は訳が分からなくなりました。

「そう、守るのよ」

その時坂道いた少女達が彼女に手を振りました。するとすかさず彼女は強く寄り添うと手を振り返しました。これで良しと彼女は思いました。

東の坂道から少し二人は進みました。彼の歩みは少女に会わせたそれになっていました。猫が地面を注意深く嗅ぎながら横切って行きます。その傍らで寝そべっていた男は不機嫌そうに二人を見ていました。

「ところで今日はなんのお使いだったの」

彼女は彼の肩に背負ったものに目をやりました。

「お父さんが忙しいので代わりに靴の材料を受け取りに行ってきたんだよ」

「大変ね」

同情するように彼女は言いました。

「プエラだってパン屋だから店番あって忙しいだろう。同じさ。ところで今日は自由の日なの？」

彼女はちよつと戸惑いました。

「たまには休まないね。店の中でそのまま干からびてもなんだし」
「それもそうだね」

彼も分かるような気がしました。

「ところで行く方向一緒でいいの？」

「家に帰るところだったの」

彼女は言葉を詰まらせました。

「そうか」

彼は納得した様子でした。

「ところでお兄さんがいなくなってお手伝い増えたんじゃないの」

「そうだね」

彼はぼつりと言いました。

「あたし手伝ってあげようか」

跳ねるように彼女は言いました。

「いいよ君も暇じゃないんだし、それに兄さんが帰って来るまでの二、三年の事だし」

グレーティアには四つ上の兄がいました。大変弟思いの兄で、幼い時分は兄弟して海やら野山を走り回っていました。その兄は十五歳の時父親の後を継いで靴屋になる決心をし、腕を磨き始めました。瞬く間に兄は父親の技術を習得し、彼はそれに飽きたらずさらなる技術を得たくなったのでした。丁度その頃父親の兄弟弟子がその話を聞き及びフォルムの町で修行しないかとの誘いをかけてきたのでした。兄弟弟子はその町で靴屋を興し革新的デザインで人気を集め繁盛しているのです。フォルムといえば国一番の港町。いろんな国の船が出入りする交易の拠点です。見知らぬ国の文化に接する機会があるので喜んで兄は修行に出かけることにしたのでした。

「お兄さんが出た行ったのも分かるわ。この町僻地過ぎるしね。こんな田舎町なんかじゃ お洒落な靴なんて望めないし。お兄さん期待の星だわ」

「ありがとう」

彼は少し嬉しそうでした。

「でも一生この町なんでしょうね」

プエラは悲しそうに呟きました。

「町が嫌いなのかい」

「この町でもものすごく平和でしょう。毎日が退屈でしょうがないわ。なんかこう暇がくつつきそうというか、一年中春の陽気の中にあるというか」

「最高じゃないの」

「うっん、駄目なのこのままじゃ。そうよ冒険の嵐がこの町に吹き荒れないといけないんだわ」

彼女は決意したように力強く拳を握りました。

「冒険ねえ」

彼は頭を掻きました。夢見がちな少女にいさかさ付いていけないようでした。

「平和が一番で思わない？」

「そんなのつまらない」

少女が駄々をこねようように返事すると彼は少し呆れ返りました。

「この町もそんな平和な町なんかじゃないんだよ」

「どういう事？」

彼女は興味深く目を開きました。

「港の向こうで喧嘩騒ぎがあつたんだよ」

「え。どこどこ」

彼女は辺りを見渡します。

犬が杭におしっこをかけている姿が目にはいりました。

「とつくに終わっているさ」

息が抜けたように彼女は肩を落しました。

「なんだ見たかったなあ」

「お祭りじゃないんだよ」

「それであなたは見たの？」

突然の振りに彼は狼狽えました。

「見たというか、関係したというか。見てたな」

「なによそれ」

不満そうに彼女はむくれました。

「平和といたって争いはあるってことだよ。双方に言い分があるからね。貴重なものはみんな欲しがると奪い合いとなるわけさ。仲良く分けられたいのだからけど独占したくなるらしい」

「その気持ち分かるわ」

慎重に考えたかのように彼女は言いました。

「どうということ」

彼は思わず彼女を目を向けると、彼女は澄ました顔でなぞるように言いました。

「貴重なものでしょう。だったら誰かのものになる前に自分のものにしておくちゃ」

「そうなの？仲良く分けられればいいじゃない」

「分けるんですって。とんでもない。そんなことあり得ないわ」

「どういうこと？」

彼は少女の主張は全く理解できませんでした」

「どーしても分けられないの」

彼はそれ以上は言えませんでした。しかし彼女が大真面目だということはいくぶん分かりました。

暫く行くと港の道に穏やかに下る町の大通りとぶつかりました。

坂の上から荷馬車が果実をいっぱい積んで下ってまいりました。蹄の規則的な音が次第に近づいてきて車輪が石畳のでこばこに弾かれ、ブレーキの軋む音とともに辺りに騒音をまき散らします。鼻息を立てた馬の長い顔が目の中の現れてきたので二人はやり過ごすために少しの間待ちました。赤や緑や黄色の果物を積んだ箱が上下の小さく揺れて通り過ぎて行きました。

この通りの道は北に延びており、長い坂を上り岡を越えさらに森を越えて外界とつうじている道でした。もちろん他に道はないことはいないのですがどれも狭い道で物資の輸送が円滑に出来るのはこの道だけでした。それでこの道は結構往来の多いものでした。

坂の家を見上げると大通りを挟むように大きな建物が反り立って見えました。道も建物も先に行くに従って小さくなりその先は空に消えていきました。遠くに小さく荷馬車が下ってくるのわかり、手前には人が往来していました。

この通りには立派な建物多く、町の重要な建物がここに集まっています。若い二人には縁がないものでした。

近くの事務所から男が慌てて飛び出してまいりました。港ののんびりした様子と少し違っていました。ここまで来ると心なしか海鳥の鳴き声が遠くなったようでした。

ほどなく町の大広場に出ました。町は狭い土地に押し合いへし合いしながら建っているのに何故か町の真ん中に大きな広場がありま

した。しかもこの広場は石が敷き詰められ二つの噴水まで備えていたのです。その整備された広場には薔薇のアーチや草花の花壇もあり田舎町に似つかわしくないようなものでした。伝えられたことによると昔この町に左遷された行政官が都を懐かしみ強引に改造したと言われています。

二人はここで左に逸れ西に向かいました。ベンチでは老人が日向ぼっこをし、噴水では若い二人が愛を語っていました。広場の隅では婦人達が世間話に夢中になっています。

広場を進み外れていくと小さな商店街の通りがありました。左右にいろんな軒を連ね様々な商品が目飛び込んで参ります。この通りは商店街の一つでここを歩くだけで楽しくなる所でした。2人の目的地はもう目の前でした。商店街の奥に2人の家のパン屋と靴屋がありました。

「いけない。私忘れ物しちゃった」

思い出したかのように彼女は声を上げました。

「何処に？」

彼は疑いの眼差しを向けました。

「友達の家によ。ちよつと引き返してみる」

彼女は作り笑いをしながら口を横に開くと逃げ抱くかのようにその場を離れようとしました。ところがそんな後ろから、辺りに響き渡るような大きな声が飛んで参りました。

「姉ちゃん見っけ！」

彼女は凍り付いたように動かなくなりました。恐る恐る声の方を振り返ると、そこに立っていたのは泥だらけで鼻を袖で拭いている男の子でした。

「遅かったか」

彼女は舌打ちし頭を抱えるような仕草をしました。しかし意を決したのか胸を張ると両足で地面を踏みしめ来いとばかりに少年に相

対したのです。

「逃亡者を只今から逮捕する」

少年はそう言う素早く走り寄って来ました。そして彼女のスカートを驚掴みにすると強引に引つ張ったのです。堂々と少年を撃退するつもりだった彼女はあられもない格好に大慌て。必死で裾を押さえます。

「あんなにやるの！」

彼女が大声を張り上げていると呆氣にとられた彼は我に返り急いで止めに入りました。

「駄目だろう。服破けるよ」

諭すように注意された少年は引き寄せた腕を弛めました。

「グレイ兄い。確かに破れる」

その言葉を聞いた二人は胸を撫で下ろし息を付こうとしたところ、少年は飛び寄ると彼女の腰まで伸びた栗色の髪を掴んだのです。

「これなら大丈夫」

少年は意地悪く言う、思いつき彼女の髪を引っ張ったのです。痛さに耐えかねて彼女は少年に連れて行かれます。彼は少年の行為に意表をつかれ啞然として見送ってしまったのですが、慌てて二人の後を追いかけてました。

暫く行くとプエラが少年を捕らえ拳骨で殴っている姿に出くわしました。

「痛いな。姉ちゃん」

少年は地べたに尻餅をついて頭を抱えていました。彼女というと厳しい顔で腰に手をやり睨み付けています。

「だいたい、店サボったぐらいでなんでアンタにこんなことされなきゃならないの」

彼女はもの凄く怒っていました。

「やっぱりそうだったか」

後ろから彼の声がしました。彼女は弾かれたように反応するとバツが悪そうにもじもじしました。

「それじゃ。家に帰ろうか」

優しく彼は言いました。

彼女は深く肩を落とすとぼとぼと引きずられるように歩きました。その後ろを男の子はこれから起こることを楽しむかのように鼻歌を歌いスキップしながらついて参りました。

「ただいま」

店の呼び鈴が鳴ってグレーティアが中に入ってまいりました。

店の中は大小様々の靴で一杯でした。靴は壁際と中程の棚に綺麗に整理され並んでいました。男物の靴は丈夫そうで、女性の靴も軽く長持ちしそうなもので実用重視といった品揃えでした。しかし派手さはないものの革に光沢があり縫い目もしっかりして良いものであることは分かりました。

呼び鈴の音に奥から丸顔のエプロンをした婦人が出て参りました。

「お帰り。重かったでしょう」

ニコニコしながらその女性は彼を迎え入れました。

「お母さん、この位平気だよ」

「あらそう」

お母さんは頼もしくなつた我が子に嬉しくなりました。彼は肩に担いだ荷物をそつと台の上に置きました。

「お隣の奥さんがプエラちゃんを探していたんだけど、知らない？」
思い出したかのようにお母さんは訊ねました。

「もちろん知っているさ。今まで一緒だったからね」

意味ありげに彼は言いました。

「まさか連れ出したんじゃないだろうね」

「そんなことないよ」戯けるような仕草を彼はしました。

「いつもの脱走だよ。帰り道に港で出逢つてね。一緒に帰ってきたんだ。彼女小母さんにさんざん怒られていたよ」

お母さんはクスクス笑いました。

「隣の奥さんたら怒り出したら止まらないから、さぞかし元気なプ

エラちゃんも塩かけられた野菜みたいに萎びたことでしょう」
彼も思わず笑ってしまいました。

二人が会話しているとお父さんが現れました。ぼさぼさの髪にエラが張って人でした。

「帰ってきたか」

お父さんはお尻を掻きながらやって来て、運ばれた荷物のところで立ち止まりました。厳しい目が持ち込まれた革に注がれます。

「どうやら注文通りだったようだ。奴のところの品は信用できる。おかげで息子に任せられるというものだ」

お父さんは満足げに白髪の入った鬚を撫でました。

「お父さんお茶にしましょう」

お母さんはそう言うのとテーブルにお茶を用意いたしました。みんなが席に着くとカップにお茶が注がれ、芳ばしい香りが辺りに広がりました。

「なかなかいいでしょう。このお茶は香りが素晴らしいの」
自慢げにお母さんは言いました。

「そうだね花の香りかな」

彼は相づちを打ちましたが、お父さんは渋い顔をしていました。そして「僕は普通のが良い」とぼそりと言いました。

「これはお高いのに飲ませがないわねえ」

お母さんはご機嫌を損ねてしまいました。

お父さんはこれはまずいことをしたものだと言を振り替えました。

「西のガッリアとの境界線でなにかあったらしい」

「まさか軍隊がやって来たの」

「そんなことではないが境界線となっているラセオ河のガッリア側の関を破ってこちらに入った者がいるらしい」

「まあ」

「どうも関の役人が金をせしめようと因縁をかけたらしく、男は怒って関の兵士を相手に大立ち回りをし難なく国境を越えたらしい」

「すごい人がいるもんだね。どこかの武芸者に違いないね」

「そうだな、どうやら槍の使い手らしく。しかもた多人数を相手にし、一人も殺していないときた。半端でないな」

「その武芸者この国に使えてくれたら安心だね。この町ビタ街道からずいぶん離れているといっても国境の町ベトーに近いでしょう。そんな猛者が守ってくれるといいわね」

「まあ、ガッリアは休戦協定もありここ何年も侵攻していないのでその心配は必要ないな。むしろ東のヘテロの方だろう。国境の町キヤンプスではヘテロの南下を警戒してる」

そのあとお母さんが町のうわさ話や育てている野菜の話題になり時間はだいぶ経ちました。最後にフォルムの町で修行中の兄の話になったのですが突然お父さんは言いました。

「お前、魔法が使えるらしいな」

お父さんが話題をそちらに持ってきたので彼はちよつとだけ緊張しました。お父さんの真意が分からないので、ここは面白く自慢してみるのがいいのか控えめに様子を窺ったほうがいいのか悩みました。

「少しだけだよ」

彼は後者を選びました。

「靴屋の息子が魔法か」

お父さんは呟きました。

これは靴屋なのに魔法が出来てすばらしいという意味なのか、それとも靴屋の息子には魔法は必要ないという事なのか彼には判断できませんでした。でも思いこんだような言葉なので非難されているのではと思いました。

「魔法で素晴らしいじゃないですか。魔法の靴でどんなものかしら母親はどんな時にも子供の味方です。」

でもお母さんの言葉がお父さんには聞こえていないようでした。

「何になりたい？」

お父さんは質問してきました。

魔法使いになりたいのか訊ねているように思えました。彼はお父さんから視線を逸らしました。

「昼間からそんな話はよしでしょう」

お母さんは話題を変えたがっていました。

彼はどんな職業に就きたいのか自分でも分かりませんでした。でも十六歳にもなり自分の道も見定めなくては成らない時期でもありました。兄は十五歳のとき靴職人に成ることを決心しました。それより彼は一年遅くなっていました。魔法についても魔法使いになる覚悟があつて修得したものではありません。ただ学んで楽しいという漠然としたものがあるだけだったのです。

お父さんはカップの中に起こる小さな波紋を見つめていました。

「靴職人かな」

耐えかねて彼は思つてもいないことを言いました。するとお父さんは目を閉じて思索を巡らしました。

「それは違うな。お前は先生に憧れている」

お父さんは彼の言葉を否定しました。

お父さんの言葉は本当でした。お父さんの先生と言つたのはビルトス先生のことでした。町より離れた森の中で薬草を採取している薬剤師でした。不思議な人でありとあらゆる知識に通じ魔法まで使える人物なのです。今は薬剤師を生業にしているようですが昔は偉い学者だったのではと思える人でした。それで彼のことを先生と呼んでいるのです。

靴屋の夫婦とこの先生は親しくしていて彼が小さい頃から度々店に訪れては楽しい話を聞かせてくれたので夢中になってしまったのです。先生のお話は宝箱のようで煌めく宝石が飛び出して来るように心ときめかせるのです。大きくなった今では自分の方から先生のご自宅を訊ね教えを請うという状態になっていたのです。

先生から教わったのは国語、数学、歴史、地理、文学、天文、動植物、医学、治政、軍事、魔法さらには武術などと広範囲に及んで

いました。普通この様な田舎の子供はわずかばかりの読み書きに簡単な計算が精一杯のところなのですが、彼はそれを遙かに越えて知り得ることも出来ない知識を得ているのです。

この知識が逆に彼を混乱させているのです。もし先生のように薬剤師を目指すのであれば植物学に薬学を学べば済むことであり他は余分でした。いつたいこれらの知識の交わる先はなんなのか彼にはよく分かりませんでした。

またお父さんお母さんについても不思議でした。この様な職業に単純に結びつかないものに夢中になっている子供を止めようとしなかったのか。普通そんな学問より働くことを推奨するのではないのか。それは跡継ぎの兄がいることで自由にさせてもらえたのであるとも思えました。こういう理由で彼は進路について迷っていました。

「学士ということになるのかな」

お父さんは知恵を絞り出しました。

学士それは貴族や裕福な家の子息が志す道。国を治める行政に携わる職業に就くことが出来るのでした。しかし平民がこの道を志すのは難しく並はずれた能力を持たなくてはなりません。事実このマーレの町から出た学士というものは一人も存在しないのでした。

「無理だよそれは」

彼は力無く否定しました。

「ビルトス先生がなんとかするさ」

お父さんは安易なことを言いました。田舎の薬剤師になにが出来るというのだろうと彼は思いました。

ビルトス先生は確かに博学でした。この様な人が何故こんな田舎町にいるのか全く不明でした。都会の人と繋がりがある様子もなく、それらしい便りも訪問客を見たことはありませんでした。それに先生自身が人と交わることを避けていらつしやるようでした。

「相談してみるんだな」

お父さんはそう言うとかップを置いて部屋に戻って行きました。
お父さんは分かっていたいました彼が靴職人の道を歩んでいないことを。
優柔不断で先に進まない自分にお父さんは後押ししたのだと彼は理解しました。

「急がなくてもいいのよ。ゆっくり決めればいいの」

お母さんは優しく慰めました。

知識とは学べば見識も広くなり様々な問題も解決でき苦悩と無縁に世界をもたらすはずでした。しかし学んだ結果が道を失わせ迷わすものとなったのです。こんなことなら何も知らずに直に職人になつてしまふのが良かったのかもしれない。それにしても先生は何故田舎の靴屋の息子に熱心に学問を教授されたのだろうかと彼は自問自答を繰り返しました。

ビルトス先生について思いを巡らしていたところお借りしていた本について思い出しました。そろそろ返却する時期でした。お父さんの箴言に従って先生にご相談しようと彼は思いました。

「母さん。先生のところに行つてきます」

彼は立ち上がると引き出しから本を取りだし大切に袋に入れると店から出ていきました。するとお母さんは何か不安な気持ちになつて店の入り口からその後ろ姿を追いかけたのでした。彼の姿はもう遠くにあります。

第1回 静かな港町（後書き）

自分の漫画がギャグタッチで、劇画調の絵が描けないので漫画ネタを小説にしてみました。絵とは違い文字なので気楽に書けるものと思ったら大間違いでした。

かなり苦戦しました。小説世界に降り立った漫画界の住人てかんじ。ファンタジーの世界なのであえてですます調にしてみました。アクションが緩慢になってしまいましたが、これの方は童話ばいです。最終話までいくつもりですので宜しくお願いいたします。

ラストは何故転身されたのかの理由が分かります。

第2回 師の最後の戦い

大広場を抜けて大通りを上り右に逸れた所を彼は歩いていました。大通りから入ったこの場所はずいぶん曲がりくねっていました。三階建ての建物が塀のように道を囲むので、知らない人は迷路に迷い込んだと錯覚しそうです。大通りから少しは入ったこの場所は馬車の往来もなく安全で、多くの家族が住むからでしょうか沢山の子供達が路上で遊んでいます。子供達のはしゃぐ声や泣きさけぶ声が辺りに満ちており二階からお母さんと思える姿がありました。道の中は洗濯物で埋め尽くされてお祭りのようでした。

暫く行くと彼は早足で歩く少女の姿を発見いたしました。プエラでした。

「また脱走かい」

駆け寄ると彼は陽気に言いました。

「失礼ね。ちゃんとお仕事」

彼女の頬がふくれ上がりました。そうして彼女は肩に掛けていたパン籠を目の前に差し出したのでした。

「ご免。こんな所で逢ったものでね」

「分かれれば結構よ」

済ましたように彼女は言いました。

「まだ怒られていると思つてね」

言い訳をしたつもりが、嫌なことを彼女に思い起こさせたようでした。途端にプエラはげんなりとした顔をしました。

「もうさつきは散々よ。それでもかみたいに怒られちゃって。お母さんの声キンキンするのよね」

彼女は耳に人差し指を突っ込むと震える仕草をしました。

「とにかく許してもらつて良かったじゃないか」

苦笑いをしながら彼は言いました。

「ところで、あなたはこんな所になんの用？」

彼女は家に帰ったばかりの彼が直ぐ外に出かけたので疑問に思ったのでした。

「今からビルトス先生の所にいくんだよ」

「先生の処へ」

その時少女の瞳が輝きました。

とつさに彼は彼女の次の言葉が脳裏に浮かんできました。慌ててさよならしようとしたのですが、それより早く彼女の言葉が飛んできたのでした。

「連れてって」

釘を打たれてしまいました。

「君お仕事中でしょう」

彼は切り返しました。

「もう一件で配達終わりなの。その後は自由の身よ」

明るく微笑み返しをされてしまいました。

「だから」

捕まってしまったと彼は観念いたしました。

「最後のお届け先は何処だい」

「そこを曲がった入り口の鹿の絵があるお家」

彼女ははしやぎながら上機嫌でした。

ドアの呼び鈴を鳴らすと中から白髪交じりの老婦人が現れました。彼女がお届け物をお渡しし二言三言会話すると婦人は一旦中に消え何かを彼女に渡しました。彼女はお礼を言つて彼のもとに駆け戻つてまいりました。

「終わったわ」

彼女は開放感から大きく背伸びをしました。

「それはなに？」

彼は籠中を覗き込みました。

「裁縫道具を頂いたの」

彼女は嬉しそうです。

「君って縫い物できるんだ」
「失礼ね完璧よ」

二人は町の外に向かって坂道を上っていきます。上に行くに従って路地が狭くなり家は迫ってまいりました。両側の白い壁からは緑のツタが降りてきており、その向こうには鼻歌を歌いながら庭の手入れをしている人の姿がありました。この辺りの庭は小さな庭が多いためかよく手入れされていました。道を歩んでいると家々から話し声を聞こえてまいります。

二人は道の頂上近くまでやって参りました。ここま来るとスロープは終わり階段が上へと延びていました。これを登り切ると町の外です。二人は一気に階段を駆け上がりました。

すると目の前に開けた大地がありました。マレーの耕作地帯です。振り返ると今まで見上げていた家々の赤い屋根が眼下にありました。石畳の道はここで切れます。その代わりに土の道が岡の向こうまで延々と延びていました。道を左に行けば大通りにぶつかり右に行けば海岸沿いに岡を巡れました。二人は森のある北の方に向かう道を選びました。

両側には畑が広がって、それを切り分けるかのように道ははしっていました。道には荷馬車の轍のあとがくつきり残っており、ずいぶんぬかるんでいたことが分かりました。今はそれも乾燥し固まって靴が汚れてしまうということはないのですが路面がでこぼこしてとても歩きにくいのです。しかもそのへこみや出っ張りは元氣良く生えた雑草によって隠され石畳のような調子で歩いていると足を躓きそうでした。

広い畑の中に二人きりでした。近くに農作業をしている人の姿はなく歩く足音だけがしました。目の前を黄色い蝶が舞い空には雲がゆったりと流れていました。遠くにある畑と畑の境目のノッポの並木はそよ風に葉を揺らしていました。

「どうしてついできたの？」

彼は訊ねました。

彼女は言葉を選ぶかのように少し考えた後に

「それは、私があなたの守り人だからよ」とウィンクしました。
ついていけないと彼は思いました。

「回りに誰もいないのに警護付ですか」

「最強、最良の守り人よ」

力こぶを作るまねを彼女はしました。

（最弱、最悪だ）と彼は心の中で叫びました。

「それに子守役もね」

彼女は付け加えました。

（今度は子供扱いですか）

「ところで今日は先生になんのご用？　また凄い魔法でも教わりに行くの」

彼女が今度は訊ねました。

「魔法が見たくてついできたのかい」

「面白いじゃないの」

「曲芸ぢやないんだから」

彼は不満そうな顔をしました。

「けち」

「今日はねえ、この本を返すことと進路についてご相談しようとしていたんだよ」

諭すように彼は言いました。

「進路ですって」

彼女の中で好奇心の拍動がしましたが押さえ込みました。

「今日お父さんにどんな職業に就きたいのかと質問されて答えられなかったんだ。学ぶのが楽しいだけで先のことなんにも考えていなかったんだ」

「そう」

二人は沈黙しました。

「そうだ、だったら私が決めてあげる」

彼女は陽気に元気つけようとした。

「君がかい。面白いね。それで僕にはなにがぴったりの職業かな」

興味津々で彼は彼女の言葉を待ちました。

彼女は占いででもするかのように一心に思いを巡らし

「王子様」と言いました。

先ほどと今度といい流石にこの娘にはついていけないと彼は思いました。

「乙女ぽくないものでお願いできないかな」

彼は要求しました。

すると彼女は男の子らしいものが宜しいと暫く考えた後に低い声で

「世界の支配者」と答えました。

真面目に聞こうとした自分が愚かであつたと彼は悟りました。

彼女は思い浮かんだことを正直に言葉にしたつもりだったので、
彼が表情を曇らせたのでご機嫌を損ねたことに気がつき慌てて付け加えたのでした。

「というのは冗談。読み書き上手だから交易なんてどうかしら。魔法の出来る商人なんて何処にもいないわよ」

うって代わって具体的な仕事を提示されて逆に彼は戸惑いました。
自分の修得したことから一気に商人に結びつけるものがなかったからでした。

「そうだね、それもいいかも」

彼の反応が鈍かつたので彼女は様子を窺い

「それとも、靴職人になる？ お兄さんみたいに修行に行つて独立するの。もちろん私を連れてね。」と余計なものを付け加えました。

「靴職人かそれもいいか」

彼は呟きました。

「だめだめ靴職人なんて！」

彼女はうち消しました。

「もし靴職人に成る気持ちがあつたら迷つたりしないもの。そうしたら学んだことが全くの無駄になっちゃう。目指すはもっと大きなものでしょう」

お父さんの言っていたことと同じでした。彼は返す言葉ばかり見つかりません。しかし大きなものといつてもそれが何なのか問題なものでした。漠然と霧の中に像を画いているようで明瞭に捉えられるものではなかったのです。無駄ともいえる知識を得なければこの様な迷いも生じることもなく、この町で職人の道を選んだはずなのですが。禁断の実に手を出した後ではそのような世界では満足出来なくなつてしまつていたのです。

「大きなものか。その大きなものが分からないんだよ。田舎の靴屋の息子が成し得る大きなものとはなんなんだろう。どういうものがあり、どんな研鑽を積まなくてはならないのか」

彼は頭を掻きむしりました。

「そうね、漁師には漁師の農夫には農夫の修行というものがあるし。職人だつたら弟子入りが最初なんでしょうね。仮に魔法使いだつたとしたらそれはどんな風な職業なのかしら。私たち凄い人達という位しか分からないわ。ましてやどんな所に行かなくてはならないのか想像出来ない。これは先生に教えて頂くしかなさそうだね」

二人の出した結論はこのまま先生の所に向かうのは正しいということでした。

二人は畑中の道をどんどん北東に向かつて歩きました。町はずいぶん遠くになり目の前には森が迫つてまいりました。道はそのまま森に吸い込まれその先を伺い知ることが出来ませんでした。森の木々が海からのそよ風にさらさらと音を立てています。森は海のような眩しさはなく緑の色が光を優しくします。海鳥の騒がしい鳴き声とは違つて森の鳥たちは小さい可愛い声でさえずり、恥ずかしそうに森の木々に隠れその姿を見せません。

彼等は森の中を歩きました。木漏れ日が地面に落ちて模様を画いています。二人の顔も彩れました。道は畑中よりさらにでこぼこしていて、あちらこちらに大きな石が転がっていました。道はその度に体をくねらせどんどん奥に進んでいました。森の中ということもあり道は次第に狭くなつてはいましたが荷馬車が通る程度の幅を維持していました。

「それにしても先生のご自宅て遠いわよね。なんで町に住まないのかしら」

彼女は不満そうに言いました。

「こちらから勝手に押し掛けているんだそれはないだろう。先生は森で薬草を採取しているんだよ。町なんかに住んでいたらそれこそ大変だよ」

それでも彼女はご機嫌斜めになっている様子でした。手に提げた大きな籠を抱えているのがしんどくなってきたようでした。

「それ持つてあげるよ」

彼は手を差し出しました。

「ありがとう」

小さな声で申し訳なさそうに彼女は言いました。

プエラも元気を取り戻したようです。

「辺鄙な所に住むお仕事にしないでね。あんた先生みたいに薬剤師になりたいと言いついて山の中に住んじゃったら私大変だから。薬剤師なら売る方にしちやいなさい」

「おいおい君の都合で決められちゃ適わないよ」

「これは大きな問題です」

口が動くようになっていたら大丈夫だと彼は思いました。

「そういえば何の本読んでいたの？」

彼女は袋に入っている本を覗き込みました。

「これは魔法の本だよ」

袋から出された本を見て彼女は興奮しました。

「魔法の本ですって！ その本を持つと魔法が出せるの」
彼は苦笑しました。

「違うよ。これはただの本。魔法について書かれているだけさ」
「なーんだ。つまらない」

彼女は興味を失った様でした。

「これは魔法の入門書なんだ。魔法の基礎理論が載っている。タイトルは言葉の変容と数の生成に関する形式の統一可能性についての考察というもの」

「意味不明だわ。タイトルも長すぎてもっと分かり安くつけられないのかしら」

彼女は無惨にも価値無しと決めつけたようでした。

「この著者はなかなか魔法に精通しているんだ。初心者に分かりやすく説明出来るて本当に熟知していないと出来ないものなんだ」

「それでどこのどなた」

「著者はホステイス。今はヘテロ王国の魔法宰相の」

「ヘテロのあの極悪人の宰相なの？」

何故というような顔を彼女はしました。

「敵国だから、この国ではそんな風に評価されているんだろうね。」

でも、この本を見る限りかなりの理論家だと思うね」

「そうなの」

「多分ね」

「あなたが信じるなら、私も信じるわ」

彼女にはどうでもいいことでした。ヘテロの宰相が極悪人だろうがなんだろうが、マーレの町は遙か西の僻地で関係はないように思えたのでした。

試しに彼女は本を開いてみました。そこには見たこともない文字が敷き詰められていました。ところどころ読める文字もありましたが、それだけでは何が書かれているのか全く理解できませんでした。「良く読めるわねこんなの」

彼女は感嘆しました。町の子では絶対に不可能なことでした。プエラは彼が悩むのもなんとなく分かるような気がしました。「しかし、こんな本持っている先生も先生よね。あの方本当はなんなのかしら。単なる薬剤師には思えないわ」

森の中には心地よいさわやかな風が流れてました。少し湿気があるのか大きなミミズがうねうねと道を横切ってきます。悲鳴を上げて度々プエラは彼にしがみつきました。両側には崩れたところがあり地面が顔を覗かせていました。ほかはシダが生え茂っており、そこから木々が立ち上がっていました。

暫く行くと右のほうから細い山道が合流してきました。その道は少し上り坂になっており、森はさらに深く緑に覆われていました。ここで二人は右に折れどんどん森の奥へと進んでまいりました。

踏みしめる砂の音。道はやや砂地になってまいりました。上り坂だったので、とき面彼女の不満の桶が一杯になってしまいました。

「先生なんでも知っているんだから町にどんな仕事でもあるでしょうに。なんで山の中なんでしょう」

話を彼女は蒸し返しました。

「森が好きなのさ」

彼は素っ気なく返事しました。

「その森好きの男があなたを特別扱いするのは何故かしら」

「さあ」

これは彼も不思議に思っていたことでした。

「亡くなる前に弟子でも思っただわきつと。そして白羽の矢が当たった」

プエラは彼の胸に指を突き立てました。

「まさかたまたまだよ。それに先生には他にお弟子さんがいるんだ」「あら、あなた一人でなかったの」

彼女は興味津々でした。

「昔、グノーというお弟子さんがいらつしやったらしい。僕の弟子ということになるね。この方は大変優秀な弟子で瞬く間に先生の知識や技を習得されたらしい。十五年前に先生の命で東の果ての地目指して旅に出られたらしんだ。その後どうなったかは分からないけど」

「そうかあなたは二番手だったんだ。だったら酔狂ということ？」
真実らしくて辛いところがあると彼は心中思いました。

「一番弟子はもしかしたら旅の途中で亡くなっているかもしれないから、あなたはやはり貴重なお弟子よ自信持って頂戴」
持ち上げたり下げたり彼女は忙しいのでした。

道は小高い丘の上に出ました。丘の上は広く木々がはげ落ちており白い砂地があらわに表に出ていました。木々が剥がされないようにしっかりと根を出して踏ん張っているようでしたが虚しい努力に見えました。ここまで来ると彼女の不満も解消いたします。目的地はもうすぐそこです。

岡の先は緩やかに下って谷になっていました。頂が禿げていたので谷全体が見渡せます。

谷全体が木々で覆われ谷の底の小川や先生のお住まいはまったく見えませんでした。細く下って行く山道の先には人の住むところがあるような気配を感じさせました。お昼時や夕方であれば森の中に立ち上る煙を眺めることができたでしょうが今は谷は緑一色でハッキリと確認はできません。この坂を下りうつそうと茂る木々の間を幾重にも蛇行を重ねやがてそれは小石が沢山転がる小川とでます。

小川には簡素な丸太の橋が架けられ、この橋を恐る恐る渡り少し駆け上がり林を抜けると開けた土地に至ります。ここがビルトス先生のご自宅です。二人は丘の上からこれからたどっていく道の様子を思い浮かべながらはしゃぐように岡の道を下ってまいりました。

ところが二人が喜び勇んで掛けだして頂上を少し下ったところ、

谷間全体に轟音が鳴り響きました。二人に笑みは雷鳴にも似た音に吹き飛ばされ何事が起こったのか辺りを見渡しました。すると谷間の底、先生のご自宅近くの森から勢いよく砂煙が舞い上がってくるのが分かりました。重い砂は直ぐさま落ち茶色い煙は次第に色を失ってしまいましたが、微細な土煙は形を保ったまま流されて行きます。

只ならぬことが起こったことを彼は悟りました。

「僕は様子を見てくる。君はここで待っていてくれ」

そう言うとは彼は持っていた籠を彼女に手渡し全速力で岡を下っていきました。取り残された彼女は突然の事態におろおろし森の中に一人取り残されたので慌てて彼の後を追いかけたのですが、二人の距離はどんどん開きやがて森の中に姿を見失ったのでした。

「俺の攻撃を受けて無傷とはな。技は衰えていないというわけか」

鼻の尖った男は低い声で言いました。

男の後ろには法衣らしい黒い服をまとった七人の男が並んで立っていました。

相對しているのは白い鬚をたくわえた丸顔にふとつちよの老人でした。

「セラペンスおぬしの技も衰えてはおらん。むしろ強くなったというべきか」

静かな眼差しを老人は男に向けました。

先ほどの攻撃で舞い上がった砂が辺りに落ちてきて、男達の肩を汚します。舞い上がって土埃は風に静かに流され辺りの木々を薄く茶色に染めました。地面には円を描くように大きな穴が空きその中に老人は立っていました。魔法の攻撃が老人を襲って地面を切り裂いたようでしたが、老人は微動だにせず無傷のままでした。

「我々は十五年かかってやっとお前を捜し当てることができたぞ。もう国外に逃亡したのかと思っていたが国内に隠れ潜んでいたとはな。跡を完璧に消したので時間がかったぞ」

「そのまま放っておいてもらって良かったのだがのう。久しぶりの挨拶が魔法の一撃とは。普通に訪問してくれるならお茶でも出したものを」

ビルトスは多数の男達に恐れを抱くことなく語りかけます。ここに訪れた男達は全員魔法使いであることが気配でわかりました。とくにリーダーのセラペンスは少々骨の折れる相手であることは承知のことでした。通常魔法使いは集団に一人なのですが全員魔法使となると如何にこの捕り物に執念を燃やしたのかがわかるのでした。特殊な編成のこの部隊にいかにお引き取り頂くかなかなか難しい問題であると彼は思いました。

「我々が遊びでここまでやって来たと本気で思っではいまい。さあ、教えてもらおうか。災いの種の在処を」

「そんなもの知らん。僕はここで隠居しているだけだ」

「あくまでもシラを切る気か。ならばここにいる全部を相手して魔法で勝てるというのか」

「お前が望むのであればな」

二人の男に沈黙が訪れました。

セラペンスが首を振って合図をすると、背後に控えていた黒服の男達は一斉に動き出しビルトスを囲むように位置取りをしました。八方から唱えられる魔法の呪文。先ほどのセラペンスの攻撃に七人の魔法使いの攻撃が加えられ集団魔法の一撃がビルトスを襲おうとしてました。しかしビルトスは攻撃を避けるどころかなされるがまま平然とし円の中から動こうとしませんでした。

魔法使い達最大の魔法がビルトスを襲いました。

辺りを衝撃波が襲い大きな木立が幹ごとなぎ倒されました。男達を中心として外に向かって木々が伏し、遠くにあってもその圧力を全身に感じる事が出来るほどでした。その音は先ほどの何倍もあつたのですが、こんどは目もくらむ閃光を伴っていました。大地にはさらに大きな穴が空き大きく地面を引き裂いており、ビルトスの自

宅は積み木細工のように森に吹き飛ばされてしまいました。技をかけた魔法使い達も服が爆風ではためき砂で目を開けることが出来ませんでした。やがて空中に高く舞った砂がパラパラと肩を叩き辺りを確認出来ないほど茶色に染めるました。魔法使い達はビルトスが立っていたところを息を凝らして見つめました。するとややもやした中に人影らしきものが見え始め、一陣の風が辺りをよぎると砂煙はぬぐい去られて以前と変わらぬビルトスの姿を発見したのでした。「八人の一斉攻撃を受けて微動だにしないとは。やはりこの国一、二位を争う魔法使いよな。噂に聞く魔法防御陣か。そこから出さないとも出来ないと言うわけだな」

セラペンスは魔法使いとしては上級クラスとしての自負があったものの、あっさり退けられたに少なからず衝撃を受けていました。この攻撃でビルトスに深手を負わせ在処を聞き出すはずが計算違いになってしまいました。そうなるとビルトス本人ではなく周囲から探って行くしかないと考え初めていたのでした。

「分かればよい。目的のものは他を探すことだ。ここでは見つけれんよ」

ビルトスは優しく、しかも堂々と言い放しました。

しかしセラペンスの闘志は無くなったわけではありませんでした。かれは不敵な笑いを浮かべると包囲陣を戻し今度は一人ずつ魔法の攻撃をさせたのでした。魔法の攻撃は当然の事ながら容易くはじき返されました。しかし執拗に攻撃は繰り返されます。

「なるほど考えたものじゃのう。おぬしはこの強力な防御魔法陣が長時間維持できないと読んで持久戦に持ち込んだというわけか。」

「その通りお前が疲れてそいつを解いたとき、全員でお前を倒す。」

「それは結構だがその時はお前達も疲れ切っているだろうに、まあ我慢比べというわけか。宜しいつき合うとしよう」

ビルトスの自信にセラペンスは齒ぎしりをし配下に絶え間なく攻撃を仕掛け続けました。しかし暫くすると彼は攻撃を受けている防御陣に変化が起こり始めたのに気がつきました。それまで加えられ

た攻撃は全て弾かれていたのですが次第に吸収をし始めたのです。これでは持久戦で敗退してしまう。奴の方が一枚上手だったとセラペンスは舌打ちしました。

ちょうどその時、予想外の難題に苦しんでいたセラペンスに突然背後から雷撃が飛んできました。突然の異変にセラペンスは反応し身を翻すと難なく技を弾いたのでした。

「先生！」という声がしてきました。

薙ぎ倒された木々をぬって走り抜ける若い男の姿がありました。

（こんな所に若僧の魔法使いが何故？）

セラペンスは新たな相手について思索しました。

（この小僧は未熟な技しか持ち合わせていないようだ。しかし攻めあぐねているところに邪魔をされては我らの敗退に繋がってしまう。早いところこの小僧を始末しなくてはならん。）

セラペンスが合図すると3名の配下が若者めがけて駆け出しました。

ところがその時、今まで何をされても魔法陣がら動こうとしなかったビルトスが慌ててと飛び出してきました。いつもは何事にも動じないビルトスの、ひどく狼狽している珍しい姿でした。

（あの陣内にいれば安全なはずが、弟子が危なくなって飛び出したか。ならば小僧は放っておいて強敵を始末するでしょう）

しかし一方でビルトスの慌てぶりに疑念が起きました。

（まてよ、小僧なんて魔法が使える？ ビルトスのお気に入りとはいえ、持って生まれた資質がなければそれは不可能だ。まして正規に訓練された魔法ではないのに）

（ビルトスにそこまで執着を起こす対象がこの小僧なのか。）

セラペンスは灰色の瞳で若者を凝視し、その向こう隠れたものを見いだそうと思念いたしました。

そして彼は悟りました。

（そうか、年の頃は十五、六。お前だったか！）

してやつたりとセラペンスはほくそ笑みました。

（目的のものを発見した以上ビルトスには用はない。全員一斉にあの小僧を始末する。）

グレーティアを襲った三人の魔法使いうちの先頭の一人が彼の間近にせまり魔法を繰り出うとしたところ背後から強力な攻撃を受けてバラバラになって碎け散りました。

ビルトスが放った技でした。

しかし残り二人は直ぐ迫っていました。セラペンスはこの手練に襲われては未熟な小僧では防ぎようもなしと勝利を感じました。しかしこの瞬間二人の魔法使いがなんの前触れのなく頭から真二つに断ち切られ地面に転がり落ちたのでした。

我が目を疑うセラペンス。

何が起こったのかセラペンスには理解できませんでした。配下とはいえあの二人は自分と遜色のない技をもつ魔法使い。それが全くの無防備状態で一瞬のうちに二人も葬り去られたのでしたから。普通に考えてもビルトス以上の手練れでした。

（小僧が殺ったのか？ いやそれはない。この小僧の放った雷撃は未熟だった。となるとビルトスか。）

ビルトスの方を見ると彼は辺りを警戒するように目を動かしていました。

（俺達の他に敵がいなか警戒してやがる。抜け目ない奴だ。先ほどの一撃の後、間髪を置かずに技を繰り出すとはおそれいったぜ）
（やはりこいつだ。この強敵を倒してからでないかと若僧に手出しは出来ない。若僧に圧力をかけビルトスをもう少し防御陣から引き離さなくては。）

若者に魔法攻撃が加えられます。彼は何とか防いでいたものの次第に耐えられなくなってまいりました。するとビルトスが陣内を大きく離れ救援に向かったのです。

（ついに陣から引き離れた。強者揃いの五人に一人で勝てるかビル

トスよ)

「そこを動かでない」

そう弟子に言っているとビルトスは五人の真ん中に立ちました。

待ちかまえたかのように魔法使い達の攻撃が襲いました。

セラペンスの攻撃がビルトスを襲います。強力な技はビルトスの手に絡みとられ地面に叩きつけられ大地に穴を作りました。振り向くと魔法の技。はじき出すと離れた所の巨石が粉碎しました。しかしその息つく暇もなく上空から空気の切れる音。横に振り払うと遠く木立が断ち切られます。右から火炎が襲い、左からは雷撃が、そして背後から冷気が襲い、それらの攻撃はビルトスを中心として目まぐるしく移動しながら繰り返されました。しかしその全てをビルトスは交わし続けたのでした。

すると今度はビルトスの方が攻撃に移りました。放った技はセラペンスに襲いかかり彼はパワーで押されながらも持ち堪え、技を弾くと付近の地面に大きな砂柱が立ちました。振り向きざまにビルトスが掌を出すと空気が悲鳴をあげ魔法使いを襲います。魔法使いは両掌をもってなんとか弾くと、地面が真っ直ぐ遠くまで切り裂かれました。左手に入り込んだ敵に対して雷撃が放されました。魔法使いは空気を引き裂く閃光に全身をもってはじき、それは倒れた木々をへし折り焦げ臭い匂いを辺りに漂わせました。

ビルトスと魔法使いの死闘は周囲を粉碎しながら繰り返されたのでした。

セラペンスの技と魔法使いの技が混合された魔法がビルトスを襲います。単体の攻撃より威力をましたそれはじわじわとビルトスを追いつめてまいります。技は弾かれ谷間の斜面に噴煙が立ち登りました。ビルトスは二人の組み合わせから一人残った魔法使いに技を繰り返すと、魔法使いは火炎に飲み込まれ粉々に燃え散りました。地面は黒く変色しその後には燻った炎が草木を焼いていました。

一人減ったものの状況は四対一でした。

グレーティアは魔法使い達の熾烈な死闘を傍観するだけでした。

あまりにも強力な魔法が息つく暇もなく繰り出されとても素人が分け入る隙など少しもなかったのです。師匠の身を案じてはいませんが自分の力ではどうしようもなく、下手に動けば足手まといになってしまうのは目に見えてました。

ビルトスは右からセラペンスと魔法使いの協力された攻撃がくると右手でこれを封じ、左から二人の魔法使いが二倍に強化された技を繰り出すと左手で封じなんとか交わしていたのですが次第に押されつつあることを実感いたしました。

（このまま四人を相手に戦い続ければ力尽きるであろう）

ビルトスは目まぐるしく攻防が変化するなかで思いました。

（あとはグノーが引き継いでくれるであろう）

そして彼は決意しました。

セラペンスは激しい攻防のなか次第にビルトスを追いつめているのが分かりました。この難敵はもう少しで倒せると確信したのでした。しかし彼がそう楽観視した時でした、ビルトスの動きに変化を感じたのでした。ビルトスから湧き上がる異様な呪文。

セラペンスはとっさに禁断の魔法が使われたことを悟りました。

慌てて全員にその場を離れる様に指令を送ろうとしたのですが、それより早く魔法は全員を捕らえていました。

（貴様、俺達を道連れに死ぬきだな）

黒い闇が全員を覆いゆらゆらと動き、その闇のなかで魔法使い達は上下のない空間に放り出されたかのように手足をばたつかました。そして揺れが治まったとき空間はねじ曲がったのでした。

魔法使い達の体が地面に落ちました。

落ちた体はばらばらでした。ある者は足だけ、あるものは頭だけ、腕だけといった具合で残りは空間に食いちぎられどこかに消えていました。

技を掛けたビルトスも下半身を食いちぎられ、仰向けになって横たわり。セラペンスも彼に近い位置で戦っていたせいでしょつか同様

に上半身をうつ伏せにして転がっていました。これらのものを吐き出すと黒い闇は消えてしまいました。

眼前で空間に引きちぎられ転げ落ちる師の姿を観たグレーティアは駆け出しました。ビルトスの無惨な姿に彼は泣き崩れました。涙目で師の顔を見ていると、ビルトスの顔に表情が現れ、僅かに動くその手で彼の涙を拭きました。

「これでいい。これで」

「先生！」

涙がビルトスの顔に落ちました。

最後の力を振り絞って師は弟子に言いました。

「お前は命を狙われている、早く逃れよこの町から。メディカス。アデベニオのトゥーリスという寺院にメディカスがいる彼に守ってもらえ」

「メディカスですね」

「これから一人で生き抜くじゃぞ。そのうち仲間が守ってくれよう」
そう言うビルトスは静かに目を閉じ息を引き取りました。

魔法使い達の谷間を揺さぶる戦いは終わり、辺りには静けさが戻りました。谷間の底にはビルトスの住まいだったところを中心にして荒れ地と化していました。早くも鳥たちは地面に舞い降りてまいました。谷間を下る風がくすぶり続ける煙を吹き流します。

戦いの後には大地には沢山の亀裂や穴があき、辺りに焦げ臭い匂いが立ちあがっていました。その真ん中に魔法使い達の亡骸が転がっていました。

若者は悔し涙で一杯でした、師の残た言葉によりこの魔法使達は自分を狙ってここにやって来たのであり、師は自分の為に死ぬこととなったことが分かったからでした。もう少し自分に力があつたらと彼は悔やんでいるのでした。

傍らにそつと少女は立ちました。

師の亡骸を前に膝をつき肩を落として動かない彼にプエラはかける言葉が見つからず静かに見守ることしか出来ませんでした。

暫くすると彼は立ち上がり彼女のほうを向いて涙目で微笑み「先生は逝ってしまわれた」言いました。「しっかり」と彼女は抱きつきました。

「どうやらこの魔法使い達は僕の命を狙ってきたらしいんだ」

「あなたの？」

「何故だか分からない。でも先生は早く町から逃げよとおっしゃられた」

「逃げるって何処に」

「アデベニオ」

「北のずいぶん遠いところじゃないの」

絶望的な顔を彼女はしました。

「そこに行けば謎が解けるかもしれない」

彼は真剣でした。

セラペンスは意識を取り戻しました。ビルトスの魔法を受けて体の自由がきかず自分の体が引き裂かれるまでは記憶がありました。そこから先は闇のに消えていました。意識は取り戻したもののそれはぼんやりとしたもので、今にも消えて無くなりそうなものでした。草地に顔を埋めた状態から目を横に動かすと、ビルトスらしき体の上半身が横たわっているのが分かりました。（俺は勝ったのか？）しかし自分も体も同じようなものであることは分かりました。（奴に負けたまま死ぬのか俺は）と彼は思いました。ビルトスの近くに立つ人の足が見えたので彼は朦朧とする意識の中、首を少し横に動かしました。見えたのはあの若者の姿でした。（彼奴を目の前にしながら手も足も出せないとは）彼は悔しがりました。彼には若者に攻撃魔法を出せる力が残っていませんでした。（一撃でいい傷を負わせるだけでも）彼はあと一歩で届かない自分の運命を呪いました。そのとき彼は閃きました。（そうか殺せなくとも）

グレーティアはこのまま先生のご遺体を放置は出来ないと、埋葬の手段について考えていました。丁度先ほどの戦いで大きな穴が沢山出来ていたので場所については問題なかったものの土をかける道具がありませんでした。先生のご自宅は粉々に吹き飛ばされその後を探せば道具を見つけはできるのでしようが簡単に発見できるものか自信がありませんでした。それに敵とはいえ魔法使いの達の遺体を鳥についばまれるのも不憫。

そう思つて魔法使い達の遺体に顔を向けた時でした、一番近くにある死体が突然動き出したのです。彼は意表をつかれ反応できませんでした。体を何かが貫き、時の刻みを止めました。「これで逃げ隠れすることもできない」そう言つとセラペンスは最後の力を使い果たして息絶えました。

プエラは突然死体が動いたので思わず籠を落とすほど吃驚しました。再び動きそうな気配がないので少しは安心はしましたが、おそるおそる様子を窺いながらどうしたものかと彼の方を振り向きましました。すると魔法使いの遺体の方を向いたまま驚いた表情で静止している彼の姿を見たのでした。彼女は怪訝な様子で、こちらに気づくどころか石像のように固まっている彼にいったいなにが起こったのか理解出来ませんでした。するとどうでしょう次第に彼の体から霧の様なものが湧きだし次第にその周囲を囲みました。それに従つてその姿は薄れていったのでした。霧は次第に濃さを増しやがてその中から人の背丈ほどのクリスタルを浮かび上がらせたのでした。日の光を浴びてキラキラと輝く透き通ったクリスタル（これはいったい何？）彼女が物体に触れようとした瞬間それは音を立てて小さく砕け散りました。

激しく割れる音に彼女は首を引っ込め顔を手で覆つたのでした。クリスタルがあつたところを指の間から覗き込むと人らしき姿が浮かび上がってまいりました。覆つた手を下ろしそれをよく確かめよ

うと顔を前に突き出しました。

そこにはプエラと背格好の似た知らない人が立っていました。

（この人は誰？）わけがわからず、彼女はその人を食い入るように見ました。

着ている服は彼のもの。でも背丈はずいぶん低く自分ぐらい。服がだぶだぶしています。

彼と比べれば背格好が全然違い、がっちりした体格ではありませんでした。むしろ目の前にいる人は肩幅も狭く全体的に小さくなっており、その線は柔らかで女性的な感じがしました。しかも何故か髪が伸び放題で地面に着いていました。よく見ると胸に二つのふくらみ。（女の人？）顔を確かめるように近づいてみるとその顔は上品な顔立ちで金色に流れるような髪に澄んだ深緑の瞳。肌は色白できめ細やか。透き通る艶やかさはあるもののほんのり赤みを帯びている。唇はみずみずしく桜桃のよう。少女の顔でした。

でも彼女はなにか見覚えがある顔でした。丸く柔和な少女らしい顔立ちになってはいたもののそれはグレーティアのものでした。全体的にたおやかで優美な姿になっていましたが彼だと彼女はわかりました。

「グレーティアなの？」

プエラの問いに少女らしき人は今目覚めたかのようにぼんやりと彼女を見つめました。

「プエラ何が起こったの。倒した敵が起きあがってそれから・・・」

「

彼に間違いありませんでした。

「あなた、女の子に変えられちゃったのよ！」

彼女の言っている意味が分かりませんでした。両手を上げてみると白くて細い小さな手が目の前にありました。大きくなった服。それに先ほどの声は自分の声でなく鈴の音のような声。

（これは・・・）

（あの男、最後に逃げ隠れ出来ないといっていたのはこのことであつたか）

彼女は自分に放された技がこれであつたと知つたのでした。

確かに女の身では逃亡の旅を続けるとしても何かと不利になるのは分かります。やっかいな術をかけられたものだと思ひました。

「どうするの」

心配そうにプエラは訊ねます。

「どうするも、逃げるんだよ。その前に先生を埋葬しなくちゃ」

「よくそんな状況でてきぱきできるわね。立ち直り早いのね」

「危険が迫っているんだ」

そう彼女はきっぱり言いました。

「そうね、その前にその髪なんとかしなくちゃ。伸び伸びじゃない。まるで何処かに生まれたときから幽閉されてたみたい」

彼女は言われて髪に目をやると確かにこれでは邪魔です。プエラはハサミを取り出すと背中 of 長さに揃えて切り落とし、前髪も同様に切りおとし髪を整えました。

プエラは自分の理髪の腕前に満足していましたが、ふとこの娘のほうがずっと美人だと少し嫉妬心が湧きあがるのを感じました。「ところで、あなた自分が息子でどう親に説明するの。信じてもらえるかしら。目の前で変身したのを見た私でも信じられないだから」

「それは」

「私に任せなさい。こういう時に私がいるんだから」

第2回 師の最後の戦い（後書き）

すぐ第二回を発表したので怪しまれた事でしょう。

この翡翠記の第一回は前座みたいなもので、これではどんな話かさっぱり分からないのですぐ第2回を公開しました。

少しは物語の雰囲気はお分かりになられたことでしょうか。

この物語は趣味の漫画の合間に書いているので

こんなに早く次回作は登場しないのが本当です。

小説を書くにあたり参考にいたしましたのは

「お姫様とゴブリンの物語です」マクドナルド著 岩波少年文庫です。

これに派手なアクションを加えたのがこの小説とだけば正解です。

第3回 旅立ち（前書き）

<登場人物>

ビルトス 主人公の師

グノー 主人公の兄弟子

グレーティア 主人公

プエラ 主人公の幼なじみの娘

ソシウス 斧使いの大男

ホステイス ヘテロ国魔法宰相

セラペンス ビルトスと死闘した魔法使い

第3回 旅立ち

お母さんは夕飯の準備をしていました。外も少し暗くなり何時まで経っても帰ってこない息子に心配していました。もちろん郊外の森まで先生を訪ねて出て行き、簡単には帰り着くものでないことは分かっていました。が今日は何故か不安感で一杯なものでした。これといった理由というのはないのですが息子が出て行った時から抱いている気持ちでした。店のドアの呼び鈴が鳴りました。もしや帰ってきたのではと慌ててお母さんは店にかけだしてみましたがお客さんでした。お父さんかというと作業場で靴の型を考案中で全く心配していない様子でした。老婆心とは分かっているけど早く息子の顔を見たいと、つい店のドアを開けて外のの様子を窺ったりいたりするのでした。

日も完全に沈み町に灯りが点る頃、呼び鈴が鳴りました。急いで店に行ってみるとそこに立っていたのは隣の娘のプエラちゃんでした。

「いらつしゃい。なんのご用？」

お母さんは優しく語りかけました。

すると少女はもじもじしながら言葉が出せないようでした。

（どうしたのかしら。いつも元気な娘が面白いわ）とお母さんは少女が可愛く思えました。

「あ、あのね小母さん」

「なあに」

幼い子供に相対するようにお母さんは返事をしました。

「小母さん、私がリンゴをトマトと言っても信じられる？」

唐突な質問にお母さんは首を傾げました。

「それはそのトマトをよく調べないとね」

「それが魔法で変えられたとしてです」

少女は訴える様な仕草をしてお母さんを見つめました。

「魔法で？」

「そうです」

真剣な瞳がお母さんに向けられました。魔法という言葉にいやな予感がお母さんの胸を過ぎりました。

「グレーティアがどうかしたの？」

こくりとプエラは首を縦に振りました。

この時お母さんは息子が大変なことになり、そのことをこの娘は知らせに來たのだと分かったのでした。

「店のドアの前にいるの。中に入れるから驚かないでね」

プエラはそつと店のドアを開けると静かに中に入ってくる少女の姿がありました。お母さんはなにがなんだか理解できませんでした。目の前にいるのはしっかりした体格の息子でなく小柄で柔和な体つきの少女だったからです。でもその少女は息子が着ていた服を着ていました。よくよく見てみると全体的に丸みを帯びて愛らしくなつてはいるものの何処かしら息子の面影を残しているように思えるのです。その瞳は深緑できりりと引き締まった目ではなく柔和なものになっていましたが、お母さんはその瞳に息子を見いだしたのでした。おそろおそろお母さんは訊ねました。

「おまえなのかい？」

彼女は小さく頷きました。

お母さんは驚きのあまり声も出ず、ぼうぜんと立ちすくみました。

「魔法で変えられたの」

プエラが説明します。するとお母さんは我に返り慌てて作業場のお父さん呼びました。その声にお父さんは重い腰を上げて何が起こつたのかとやってまいりました。店の中には妻に隣の娘、もうひとり男装の少女がいたので、隣の娘が変わり者の友達でも連れてきたのかと思いました。

「あなた大変。ここにいるのグレーティアなの」

お母さんは震えながら少女を指さしました。お父さんはお母さんがとんでもない事をいったのでからかいでもしているのかと思いましたが、念のため少女に尋ねました。

「おまえそうなのか？」

「はい、お父さん」

綺麗な少女の声が返ってきました。

お父さんの顔が深く歪みました。そして右に左に居場所を求めるように動き再び元の意位置に戻ると言いました。

「いったい何があった！」

「それは私が説明します」

すぐさまプエラが口を挟み、彼女に代わってこれまでのいきさつを説明しました。

全ての説明が終わるとお父さんは力が抜けたように近くに椅子に腰を落とし、暫く手を組み考え込みました。お母さんはただおろおろするばかりです。

「ビルトス先生が正体不明の男達に殺されただと。しかもお前は女にされ。そいつ等に命を狙われているというのか」

あまりの事にお父さんも答えが出せないようでした。

「ビルトス先生は早くこの町から逃れよとおっしゃられたそうです」
プエラは迫り来る敵に対し何を成すべきか指示された事を伝えました。

「逃げるいつでも何処へ」

「アデベニオのある人を訪ねよと申されました」

彼女が今度は自分で答えます。

「そこに逃れよと・・・」

お父さんは何か記憶の糸を辿っているようにも見えました。

ここにいる娘は確かに息子なのであろう。命を狙う者も本当だろう。しかしそこに行けば本当に安全なのか。あそこは寺院が集まる町、修行者の町だ。あの町に身を隠すということなのか。平穏な暮らしに降って湧いたような災難でした。しかしぐずぐずはしてい

れないのも事実でした。

「他に選択枝はないし。そこに逃れるしかあるまい」

お父さんは苦悩の色を浮かべました。

「私はこれで失礼します」

突然プエラはそう別れの挨拶をすると店から飛び出していきました。慌ただしくプエラが飛び出したので彼女はさよならもいうこともなくお別れしなくてはならなくなったことに寂しさを覚えました。

「儂と一緒にいていこう」

お父さんはイスから立ち上がりました。

「一人でまいります」

「馬鹿な、女の身では旅は危険だ」

お父さんは声を荒らげました。

「僕には魔法があるし武芸の嗜みもあります。あの様な追って相手にお父さんがいては戦えません」

彼女はきつぱり断りました。

「儂が足手まといというか」

「いいえ、お父さんはこの店にいてお母さんを守らないと、安心して先に進めないということです」

お父さんは黙りました。

「こんな日がいつか来るとは思っていたわ」

お母さんは悲しそうにお父さんに語りかけます。そして娘に近寄るとそつと慈しむように抱きました。

お父さんは過去の出来事を語り初めました。

靴屋を始める前、若い頃お父さんは兵士でした。戦場に出たものの殺し合いに恐怖し脱走しました。しかし食糧も金も持っておらず、空腹のまま逃亡生活。民家を襲う勇氣もなくのたれ死にしそうなところをビルトス先生に助けられたのでした。その後先生に知り合いの靴屋を紹介してもらって以降この仕事を生業としてきました。妻も迎え子供も生まれたある日先生は赤ん坊を携えて夫婦の前においてになりました。この子を実の子供として育てて欲しい申されたのでした。

養育費も準備されており恩人であつたので快く引き受け今日に至つてということでした。

先生はこの赤ん坊がどの様な生まれの子なのかはいっさい説明されず、この町に居を構えると度々訪れては成長を確かめられていたのでこの子の将来は先生にお任せしようと思つていたという事でした。

彼女は初めて聞く事実に驚きを隠せませんでした。事情が分かればなおさらのことこれ以上両親に迷惑をかけては成らないと決心したのでした。

「お前の素性がわかれば、命を狙う理由も分かるのだが。僕はなにもしてやれない」

「お父さんその答えは僕が見つけます」

力無く頂垂れるお父さんに優しく彼女は慰めました。

「早く町を立つたほうがいいだろう。直ぐ旅の支度を」

お父さんは彼女の肩を軽く叩きました。

慌ただしく旅の支度が整えられました。お母さんは着せる衣装に迷いました。女物といえは自分の服ですが一人旅に女の服では不安です。しかし今着ている服は大きすぎてこれもどうかしています。しまい込んだ子供の昔の服を引っ張りだして丈に合いそうなものを選び出しました。胸とお尻が窮屈そうでしたがこれは仕方がないことでした。背囊には換えの下着やら食糧を詰め込み、雨風や寒さをしのげるようフード付の外套を用意しました。またお父さんは長旅に耐えられる小さな足に合った靴を選び、いま集められる精一杯の旅に十分な金を準備いたしました。

全ての準備が揃うと最後の晚餐をおこない出発の時はやってまいりました。

家族は店の前にいました。店の明かりが三人を照らしていました。

「必ず生き延びるんだよ」

お母さんは悲しそうな声で彼女を抱きしめました。

「再びここに帰って参ります。それまでお母さんお元気でいて下さい」

お父さんの方を振り返ると、お父さんはいか手に持っていました。そしてそれを彼女の方へ差し出しました。

「儂が昔使っていた剣だ。使わぬことを祈る」

彼女はその剣を受け取ると腰に下げました。

「お父さんお母さん行ってまいります。」

元気良く彼女はそう言うのと町の通りの暗闇に消えて行きました。

お父さんとお母さんは名残惜しそうに、その場にたたずみ何時までも暗がりのなかに姿を追ひ求めたのでした。

町を抜けた丘の上にグレーテアはいました。

時は初夏。陸からの風が海に流れ、髪が緩やかに揺れます。辺りには静けに満ちて、人の気配はありません。見下ろす眼下に町の灯りがほんのり見え、海では漁火が点っていました。空には星々が煌めき東方には上弦の月がやわらかな光を投げかけ、淡く辺りを照らします。

彼女は住み慣れた町を見下ろし、その中には彼女の両親の語らう様子や友人らが楽しい夕餉の一時を過ごしている姿を思い浮かべました。つい昨日までは自分もこの町なかで同様の平和な日々を過ごしていたのですが、今はその町を離れ旅人として眺望しています。自分はもうこの町の住人ではないのだと彼女は思いました。

しばしこの場に佇み故郷の町の姿を目に焼き付けた後に、振り払うかのように町の灯に背を向けました。向かうべき方向には闇が広がっていました。人気のない薄暗い世界。月の光によりかろうじて大地に様子は伺い知れはしましたが、昼の明るさに満ちた畑の姿とは違いどこまでも闇が限りなく広がっているようにも思えました。

吸い込まれて行きそうな闇の中にこれから消えていくのかと思うと怖い気持ちがありました。大地に一人あることに恐怖がつのったのでした。ただ救いといえのはこの暗闇の中でも降るように輝く星々が空を覆っていたことでした。あの星の光を心の支えにしてこの闇の中に飛び込んで行こうと思いました。

意を決して彼女は岡を西に向かう畑中の道を歩み始めました。

ただ一人の足音に寂しさがつのります。たった一日で自分の運命がこんなにも変転したことに彼女は心の整理が出来ませんでした。ついお昼までは満ち足りた日々。お父さんから用を仰せ付かって港をのんびり散歩したのは昔のことではありません。町の様子も変わりなくお父さんお母さんもいつも通りでした。このままこの満ちた生活がどこまで続くのではないのかと思えたのでした。しかし、お父さんの将来の道について質問され、その生活の慣れきってしまつて安穩としているのに気がつきました。そして将来の道について決着をつけなければならなかったのです。

この決心は今から思えばほんの階段を一段上がる程度の、まだ保護された環境に首まで浸かった甘いものでした。自分が砂の上の楼阁の上に立っているのに気がづかず、腰掛けようか立っていようか悩んでいるようなものでした。進路についての悩みも今までの生活の延長線のものでしかありません。

しかしのどかな岸边に上流から突如激流が襲いかかるように、運命は全てを押し流してしまいました。今やこの町に住むことも出来ず、人として最低限の命を守るといふ事に一所懸命にならざるをえませんでした。追つては迫っているのです。

師の最後の口から出た、一人で生きていくのだと言う言葉が胸に刺さります。帰る所もなくなんの保護もないのです。背中に背負った背囊の僅かな品と身一つで世界に飛び出して行かなくてはならないのです。

あの魔法使い達は何者だったのだろう。なぜ自分の命を狙うのか。

全てが謎ばかりでした。だたはつきりしていることは師は自分のため命を投げ出して救ってくれた事でした。師の為、自分の為この困難は乗り切っていかなくてはならないのです。この町での平和な日々こそが偽りの姿だったのであり、本来自分という存在は危険と隣り合わせのものであったことを彼女は痛感しました。今回自分と関係して九名の者が理由はいかなるにせよ命を失ったのは事実でした。彼等が命を落としてまで成し遂げなければならない目標が自分であつたことに恐怖を覚えました。

自分とはいったい何者であろうか。

彼女は自分に問いました。しかし答えは返つて来ませんでした。全ては先生の死によつて分らないものとなり、それは自分で見いださなくてはなりません。しかしながらこれまで先生にご教授頂いたことの中に全ての答えがあるような気もしました。今までお教えいただいたものはこの町で一生を過ごすには余計なものばかりでした。それが逆に混乱をもたらしていたのですが、一人の旅人となつた今持ち合わせるのはこの知識と技のみでした。こういうことを想定して先生は教育されていたのであろうかと彼女は思いました。

これまでは目標がぼんやりとしたものでした。でもこの事件により成すべき事は逆にハッキリいたしました。すなわち生きて逃れること、メディカスという名の人物を訪ねること、敵の正体を知ること、自分は何者が探し当てること、そしてこの転身の技を破ることでした。

あの魔法使いは最後にこれで逃れられないと言いました。確かにあの様な屈強な魔法使いが一人でも自分の前に現れたら、未熟な技しか持ち合わせていない自分ではいとも容易く仕留められてしまう事でしょう。戦うのではなく追つてを振り切り逃れることが今なし得る最善の手でした。追つてを有利にするため魔法使いは転身の技により自分の姿をこの様に変え遠くに逃れにくくしたのであろうと推察しました。でも必ず逃れて見せると彼女は思いました。

西へ西へと彼女は進み町はどんどん遠ざかっていきました。どのくら経ったでしょうか背後のほうからパタパタと足音が聞こえてまいました。闇の中に人の走る音。

振り向くと彼女は警戒し剣に手をやりました。

「まってー」小さく声がしました。

（追っ手ではないのか？）

彼女は警戒を少し緩めるとその足音の主を確かめようとその場に立ち止まりました。

足音はどんどん大きくなり、やがて闇の中に白い人の姿が現れてきました。

「グレーティア待つて！」

聞き覚えのある声でした。

その声の主を確かめようと月明かりに映しだされた姿を凝視していたところ走るその姿はお昼に見たものとそっくりでした。

まさか！ 彼女は思いました。

走って来た人物は彼女の所まで追いつくと、地面にへたばってしまいました。

肩で息をし動けない様子でした。

「プエラ。どうしたのこんな所で？」

こんな夜道に少女が追いかけてくるとは予想しませんでした。

プエラは立ち上がると噛みついたように言いました。

「だめぢやないの！ さっさと旅立つちゃったら。私にも準備というものがあるのですからね」

もの凄く怒っています。

「ご免、ご免。お別れしなくて。挨拶に来たんだよね」

あの時、直ぐに店から去ったのは一度家に帰り、改めて別れの挨拶に来ようとしたので すると彼女は思いました。確かにさよならも言わずに去っていくのは失礼なことでした。

「何言っているの。さよならする訳ないでしょう。ついて行くのよワ・タ・シも」

彼女は飛び上がらんばかりに驚きました。本当に恐ろしい娘でした。

「本気なの？」

「当たり前でしょう。私はあなたの守り人ですもの」

「ピクニツクじゃないんだよ。危険が一杯。女の子がついて行く様な旅じゃないんだから」　するとプエラは鼻を鳴らしました。

「あら、私が娘と言うなら、私の目の前にいるの娘はなんなのかしら」

プエラが意地悪く言うとな彼女は言葉に詰まってしまいました。

「なりたての新米女には十五年の女性としての経験をもつ先輩が必要でしょう」

「好きで成っていません！」

よく見てみるとプエラの衣装は軽装ではありませんでした。背中には背嚢を背負い夜の寒さに耐えられるように外套を羽織っていました。挨拶だけなら、初夏のこの季節には不要なものでした。しかしスカート姿なので女性が旅をしているのが一目瞭然でした。

「旅の支度は十分よ。替えの服や食糧にお金準備したから」

「お金ってどうしたの」

「こつそりくすねて来ちゃった」

プエラは舌を出しました。

「駄目だよそれは。それに、ご両親はご存じなの？」

「知らないけど大丈夫」

「どうして」

「書き置きしてきたの」

「君はあまり字書けなかったよね？」

「だから簡単にグレーティアについていきますと書いておいたわ」
少女はあっけらかんとしています。

「それ駆け落ちと勘違いされない？」

焦った様に彼女は言いました。

「そうかしら、それでもいいわ」

「よくありません」

彼女はプエラに町に帰るように説得しますが少女はがんとして受け入れません。これは一度町に連れて帰らなければならないのかと頭を抱えていた時でした。二人の前に規則的に点滅し光る青い玉が現れて来たのでした。

一変して彼女の顔が真剣なものに変わりました。

「追ってが来たようだ」

彼女は先生を埋葬した後にその場所に罾を仕掛けていました。ここに誰かが侵入したら知らせるものでした。この青く点滅する玉は何者かが訪れことを知らせているのです。このような夜の時間に森を訪れる訪問者は敵としか考えられません。多分仲間の帰りが遅いので調べにきたのでしよう。そしてこの仕掛けた罾に敵も気がついてたはずです。早く逃れなくてはと彼女は思いましたがプエラを家に帰さなくてはなりません。

「なにしているの！ 逃げるのよ」

無理矢理プエラは彼女の手をとると早足でひっぱって行きました。こうして彼女はプエラを平和な町に帰す機会を失い、二人の少女の旅は始まったのでした。

随分西に進みました。この道は岡を海岸沿いに走り隣町まで続いていましたが、二人はここで右の逸れ山道に向かつて畑中の道を進みます。プエラは本当は帰るべき者でしたが一緒にいてくれることによつて彼女は心なしか安心感をありました。一人で暗闇を歩むのと二人して進むのとは雲泥の差がありました。それは身勝手な考え方だと分かっていました。二人して旅が出来ることに感謝の念が湧いてきたのでした。この娘はどうしてこんなに尽くしてくれるのだろう。危険な旅だと分かっているはずだし、住み慣れた町をいとも簡単に離れ、しかも轉身した身であるから恋愛の対象にもならないはずなのに。

この北西へと向かう道は山へと向かう道でした。アグラチオ山は

この近辺では高い山でした。山向こうの町からマールに最短で向かうときこの山道を使うと大変近いのです。しかし二人の目的地はその町ではなくアデベニオでしたので方向としては間違っており遠回りになってしまします。途中で右に進路を変えビダ街道に出なくてはなりません。マールの主要道を使い北に一直線で向かった方が早く目的地に到着するのは分かっていたましたが敵に発見されてはそれで万事休すとなるのであえて探査の網にからぬようこの道を選んだのでした。彼女はこの山越えの道を辿ってマールより脱出しようとしたのでした。

しかし初めてなもので道を見失う危険性も高く、あるいは道そのものが消えて無くなっているかもしれないのです。しかも山道で険しく労力の割には前進いたしません。運が悪いと踏み外し転落の危険性もあります。

この様な悪条件に加えて逃避行のため夜通しで歩くのでなにが起こってもおかしくありませんでした。

畑中の道を抜けましたここから山路と進むのですが、うつそうと繁った森は二人の前にはありませんでした。通常畑の外側は森で覆われているのですがここには木々がありません。と申しますのこの一帯は牧草地帯でなだらかな斜面一杯に牛が放牧してあったからでした。そのため斜面には草が生い茂りところどころ大きな岩がその姿をあちらこちらに顔を覗かせていました。この一帯の斜面は自然にこの様な姿になっているのでなく人の手によって牧草地として作られたものであり、年に一度野焼きにてこの状態を維持しているのです。大規模な野焼きに火が広くこの辺りを焼き尽くすのです。ところどころその様子を思い描けるように木々が黒い姿で立っています。

二人は整備された牧草地の道をどんどん登っていきます。ここまでは周囲の見晴らしが良く遠出で訪れたことがある道でした。しかし牧草地の端に差し掛かると草は伸び放題で行く手を阻まれたよう

になつてきました。いよいよ本当に山道になつてきました。

二人は背丈ほどに延びた草をかき分け山道を登り始めました。踏みしめる足が砂の音に変わり、地面が小石ででこぼこになりました。しかしここはまだ草地であつて二人は助かりました。もしここが森の中であれば月の光も遮られ真つ暗になるはずですが、草地なのでその葉を通し明るさを得ることができました。さらに小高い場所に立てば周囲が見渡せ道を見失うことも少なくなります。

一生懸命歩きました。追つてから出来るだけ遠くに逃れなくてはならないのです。しかしその気持ちと裏腹になかなか先には進めませんでした。というのも旅の道具を背負っているのに加えて果てしなく続く山道が次第に二人の体力を奪つていったからです。以前であればグレイティアが荷物を引き受け鍛えられた足で先を急ぐこともできたはずなのですが今は二人とも女性なので限界がありました。時々休みながら体力の回復をはかり先に進みましたがその間隔もどんどん狭まり少し休んではまた歩くといった調子になりました。

山の中腹まで登つてまいりました。昼間であれば広い大地に青い海の鮮やかな眺望ができたところでしたが、夜中のこと西にある上弦の月に照らされてぼんやりとその輪郭をなぞるだけでした。この中腹には遺跡がありました。伝えられるところによると聖ピルスがこの場所で修行をし天使の言葉を聞いたと言われ。熱心な信者の聖地の一つとなっていました。といっても有名な巡礼地ではないのでうち捨てられた聖地というべきものかもしれません。もちろんこの伝説そのものが地元のもものが聖者の名前を勝手に当てはめこのような言い伝えを作つたというのが実状でこの遺跡そのものはその形が異質でしかもすいぶん昔から存在したようなのです。二人はこの遺跡の夜露を凌げそうなところを探すと疲れ果てて壁にもたれて座り込んでしまいました。

プエラはほとほと疲れきってしまったようでした。もちろんグレイティアも同様でした。落ち着いた旅であつたらゆっくり歩んだでしょうが、出来るだけ遠くにと焦つたためかなりの無理をしたよう

でした。これ以上体力を消耗してはこの先は進めなくなってしまう恐れもありましたのでここで体力の回復をはかるとしました。東にあつた月ももう西にあり山陰に隠れていました。夜明けまでそう遠くないことでしょう。外套に包まれ肩を寄せ合つて二人は眠りにはいりました。

目覚めたとき東の空が明るくなっていました。東の山々からお日様が登つてまいりました。さわやかな朝の光を浴びて二人は大きく背伸びをいたしました。眼下には草原と大きく広がる森が見え、こんな高いところまで登つたのだと二人を感激させました。北に目やると三の岳と四の岳の間の峠が間近に迫り、あれをこれから越えていくのだ胸躍りました。

ここで二人は朝食を摂りました。それぞれ食糧は持参でしたが、プエラがパン屋だったためか長旅用の日持ちのいいものを持ってきたいたので、そうでないグレーティアのから食することとしました。空腹も癒えると自分たちが一夜の宿としたこの遺跡のことが気になりました。今までこんな遠くに來たことがなかったので白い石で積み上げられた遺跡がもの珍しかったのです。

二人が一夜を過ごし場所は遺跡入り口の隅洞窟状に窪んだ所でした。広くなつたところは建物の土台らしき四角い礎と大半崩れてしまった壁、さらには円柱が残る程度でした。かつては見事な建物が立っていたのでしようが今は草を覆われています。プエラが遺跡の奥を見上げてみると、夜には気がつきませんでした。階段がさらに続き、突きだした岩肌になりやらあるのが分かりました。二人は面白がつてその階段を駆け上がってみると、そこには岩山をくり抜いて立つ寺院らしきものがあつたのです。岩で作られた建物は自分たちの知る様式ではなく異国のものに様に思えました。

引き寄せるられるようにその建物に進んで行きくり抜かれた入り口を入ってみると、その中は不思議な文様のレリーフで一杯でした。そして東から登つた太陽から放される光が入り口を通つて一直線に

延び遺跡の奥の何かを照らしたのでした。洞窟のなかに繰り広げられる光の遊技といえましょう。光の先にあるものは大きなレリーフの石版でした。

「なにかしらこれ」

プエラは石版に触れてみました。ざらざらとした砂が指に付きましました。

「いたずら者の被害を受けないなんて運がいいね」

レリーフは汚れていましたものの破壊されたり傷が入ったところもありませんでした。

「これ何かしら」

指し示す先には七つの頭を持つ竜の絵。そしてその反対側には相對するように双頭の鳥の絵がありました。

「ここを光が照らすように建てられるところをみると、なにか重要な意味があるんだろうね」

でも二人にはレリーフの意味は分からないのでした。他にこの遺跡では珍しいものは見つからなかったので再び山越えの道を歩み初めました。

峠を越えました。二人の前に北の大地が広がっていました。道は緩やかに下って森の中に消えていました。そのさきは大小さまざまな山が立ち上がり何処までも続きます。巨大なマグヌス山脈はここかれでは小さく雪を頂く姿がかほかの山々と区別が出来るくらいです。目的地はここからは見定めすることは出来ません。幾重にも連なる山々の向こうにその地はあり、とてつもなく遠いということが分かりました。まだほんの手前の山を越えただけでした。

二人は転がるように山の坂を下りました。それは登りと違って随分らくちんでした。勝手に足が動きどんどん先に進むのです。道はでこばこし左右に蛇行を繰り返して、あまりふざけしすぎると足が止まらなく転げ落ちそうになるので必死に速度を殺さなければなりませんでした。止める度に伝わる振動。楽な筈の件が意外と疲れる

事に気が付いたときは足がもつれそうになっていました。二人は足を止めて休むことにしました。しかしその疲れと引き替えに随分先まで進んだようでした。

二人は休んでいると下の方から登ってくる人の姿がありました。

彼女はこの山道で人に会わないことを願っていましたが、およそ道である以上無理な願いでした。男の人を通じて二人の情報が敵に知れることを恐れたのでした。しかしここで避けては余計に目立つので知らないふりをしようと思いました。その男の人は二人に気が付くと挨拶をしてきました。

「あれ？あんたたち二人だけかね」

「はいそうです」

プエラが答えました。

「嬢ちゃんと坊ちゃんの二人だけでこの山道を旅しているのかね」

「そうですけど」

男の人はグレイティアがフードで顔を隠していたので男の子と思っただけでした。

「危ないなあ。途中追い剥ぎなんかも出てくるかもしれないよ。それで何処に行っているんだい」

「ベトーです」

とつさに目的の方向とは別の町を言いました。

「遠いねえ。確かにマーレからこの道を使ったほうが早いけど平地を行くべきだったな」

「おじさんはどちらへ」

「どちらといっても、この先マーレの町しかないし俺は親戚を訪ねにいくところさ。そうそうこのずーと先二つ向こうの村での話だけど怪物の話で持ちきりだぜ」

「怪物？」

「ああ。でっかい狼みたいにな奴らしくて。おっと。安心しなよ西の道じゃなくて東の道の話なんで、面白いから村で旅の話題として聞

いてくるんだね」

そう言つと男の人は道を登って行きました。

「聞いた？ 怪物て」

心配そうな顔をプエラはしました。

「分からない。でもあの魔法使いよりましかもしれない」

「怪物なのよ。保証ないじゃないの」

「とにかくその村で話を聞いてみよう」

下りの山道は随分楽でした。登らなくてもいいというのはありましたが、なによりも昼なので辺りが見渡せたというの一番に理由でした。それに歩き詰めの体には森の木陰は気持ちがいいのでした。もうだいぶ平坦地まで降りてまいりました。山間の村が見えてまいりました。この村は一本道。夕暮れ時までには次の村まで行けそうです。

山間の道を二人で歩いていたらところ左手の崖の上から2、3人の男が此方を眺めているのが分かりました。村の男でしょうか。やがてその男達は森の中に消えて再び斜面を駆け下りてこちらに近づいて来ました。

肩を振りながらにやけた顔をして二人の前に立ちました。

「君たち、こんな山の中で子供だけで危ないな。」

一人が笑い顔を近づけました。

「坊主が、嬢ちゃんの護衛というわけか」

男はフードの中を覗き込もうとしたので彼女は深く被りました。

「ちよいと俺達嬢ちゃん借りるからよ。お前静かにしてなよ」

男達の狙いはプエラでした。

男はプエラに詰め寄ろうとしたのですがフードを深く被った連れに邪魔されて思うようにいきません。男に怒りの顔が浮き出しました。

「この餓鬼、顔をみせやがれ」

と男は彼女のフードを跳ね上げました。

出てきた顔に一瞬男はハッとしました。

「お前も女だったのか！しかもべっぴんときた。なるほどだから男の形をしていたのか」

「こりゃ俺達ついていけるぜ。その上玉俺にくれ」

後ろから仲間が口を挟みます。

「ぬかせこんな上物、都でしかお目にかかれないうぜ。おまえらはそちの女で我慢しろ」

「それはないだろう。おいらにも拝ませてくれよ」

男達は誰が獲るかでもめ始めました。

「どうでもいいが、先を急ぐので道を開けてくれないか」

そう彼女が言くと男たちは獲物ほうを振り向きにたにた笑いしました。

「馬鹿言え。逃すわけないじゃねえの」

男達は一斉に襲いかかりました。

その瞬間男達は彼女の姿を見失いました。一瞬にして彼女は横に回り込み剣の握りで一人目を打ち、反転して剣の鞘の先で二人目を打ち込み、三人目は手首を逆手にとって地面にしこたま叩きつけました。

男達は痛みには耐えかねて地面に転がり呻いています。

「さすが、グレイテアかつこいい」

プエラははしゃいでいます。

「さあ先を急ごう」

プエラは苦しんでいる男達にこっさり恨みを込めて言いました。

「あんた達、よくも品定めしたわね。私だったら殺してたわよ。彼女に感謝しなさい」

夕方近く二つ目の村に到着しました。山間の村で、僅かばかりの平野部分に二十棟ばかりの家が建っていました。山から下りる道はその村の建物の集中したところに向かっておりその建物群の周囲には作物畑がありました。耕作をしている人の姿が見受けられ、村の家々では夕飯の準備でしょうか煙が立ち上っていました。そしてその

周囲を見渡せばうつそうとした山林が村を囲んでいました。村を向ける道はそのまま先に延び畑の切れる辺りから左右の分かれているようでした。それが問題の別れ道でした。

この様な小さな村に宿泊するところなどありません。二人は何処かの軒先を借りれないか道を歩みながら村の人に声をかけようと思いました。が誰もなかなか表に出てきません。遠くで子供達のはしゃぎながら土を蹴って走っていききました。道からは家の庭の様子が手を取るようにわかります。鶏が地面をつつきながらあちこちと向きをせわしなく歩んでいます。逆に猫たちはじっとして固まった背筋をおもいつきり延ばすと、今日のお勤めは終わりましたと言わんばかりに家の中に消えていきました。

二人が家々の様子をきよきよと窺っていると、ある一件の家から干からびた感じのお爺さんが出てきて自分の家を見ている二人に気が付きました。

「そこのお若いの二人だけかね」

お爺さんは庭の垣の所までやってくると二人に話しかけました。

「はい二人だけです」

「こりや驚いた。大人はいないのかい？」

「はい、二人だけで山を越えて来ました」

「たいした者だね。子供達だけでここまでやって来るとは」

二人が軒先についてどう切り出して良いか悩んでいたところお爺さんは、二人がなにを言いたにのかわかりました。

「その納屋だったら泊まっていさ。そこから入んな」

二人の顔が明るくなりました。

「有り難うございます！」

二人はお爺さんの後についてまいりました。お爺さんは納屋の中を紹介するといろんな農具の隅に横になって休める場所を指し示しました。

「寒かったら藁を被るといい。煮炊きできるように竈もある。燃やす奴はそこの柴を使いな」

納屋の隣には家畜小屋がありました。この家では母屋の中に牛を飼ってはいないようでした。お隣の牛を覗き込んでみると、大きな牛の顔が飛び込んできて口から涎を垂らしながらむしゃむや藁を食んでいました。少し怖い感じがしました。時々出す声は低い音がとても響き、辺りにいる鶏の声と重なって騒がしいかぎりです。

「お前達はこれから何処にいくのかな」

「ベトーです」

「おうそうか、それはよかった」

「なにが良かったんですか？」

「いやなに、これからカーボの町を目指しているのなら止めようと思つてな」

山で出逢つたおじさんが言っていた話のようです。こんなに早く聞けるとは有り難いことでした。

「実はなここから右への道がカーボに行く道なんだが三つばかり村を過ぎた辺りに怪物が出没し、村人や旅人が襲われているらしい」

「どんな怪物なんですか？」

「牛みたいにでっかい狼らしい。耳がびんと立ち鼻が真っ直ぐで長くて太い牙がある頭で、全身は赤毛で覆われ黒い縞模様があるらしい。襲われた人は頭を食いちぎられていたらしい。怪物の名前はジエヴォーとか言っていたな」

聞き覚えのある名前でした。その怪物はビタ街道西部の北に広がる広大な森「シルバ」に生息する怪物でした。この様な南の地まで南下しているとは思議でした。群に何かがおこりこの地まで逃れて来たのでしょうか。しかしこれから行く方向にその怪物がいるとなるとよく考えて行動しなくてはなりません。

二人が心配そうな顔をしたのでお爺さんはにっこり笑つて

「なーに、お前さん達とは関係ない。それにあちらでは獵師や武芸者が怪物退治に乗りだしたらしい。銀弓の男だったかな。もうじき退治されるさ」

と彼女等を安心させようとした。

夜になりました。ランプのない小屋で二人の顔は薪木の火に照らされていました。明暗をハッキリ分ける光は二人の正面だけが明るく背中中は真つ暗で、壁に二人の影をくつくりと映しだしていました。赤く燃える木々から立ち上がった炎はゆらゆらと揺らめき二人の影も揺らしました。時折燃えさかる火の中からパチリと弾けるような音がします。

「ねえ、どうする」

プエラは訊ねました。

怪物のことでした。このままカーボに向かえば怪物に出くわします。魔法があるとはいえこれまで怪物相手に技をつかった事もなくどの程度太刀打ちできるのか全く分かりません。魔法使い相手には通用しませんでしたので威力はそれほど期待は出来ないことでしょう。なにからなにまで未知の経験でした。かといって西に進んでは遠回りになってしまいます。今成すべき事は早くアデベ二オに到着することです。一旦西に進路をとりそれから東に戻っては追ってに待ち受けられてしまいます。しかも途中出逢ったものに行き先をベトーと伝えてきたので追っ手がその情報を得ればそちらに注意がいくのでベトーに向かうのは避けた方がいと分かっていました。

しかし一番肝心な、敵はどの程度情報を得ているのが全く読めませんでした。先生が全員の魔法使いを倒しているのであれば誰も彼女がそれだと分かることもないはずですし、あの場所に他にいたとは考えにくく未だ人物を特定出来ないと考えた方がいいのかもしれないかもしれません。しかし一方で魔法使い達が何らかの方法で追跡する手段をもっている可能性を否定できませんでした。というのも先生は早くこの町から逃れよと言われましたとするならば敵は対象を特定できるということです。この様な思いの中やはり最短で目的地を目指さなくてはならないと彼女は思いました。

「カーボに向かうよ」

彼女は揺らぐ炎をみて言いました。

「自信あるのね」

すこし間が空きました。

「倒せると思う」

「ならいいけど」

「そうそうこの間先生に返しに行つた魔法の本の話してくれない？」

プエラがなんでそんなことを言い始めたの少し戸惑いました。自分も魔法について知るべきと思ったからでしょうか。確かに今度の怪物は魔法で倒さなくてはならない相手ではありませんでした。

「理論書だから面白くないから。分かりやすく説明するね」

「いいわ、真面目に聴くから」

「魔法については世界の誕生から理解しなくてはならなんだよ」

「世界の誕生？」

プエラは昔話を連想しました。

「そう、創世の秘密」

「私聞いたことがある」

「多分、知らないと思うよ。これは魔法使いの創世の神話。いわば秘密の部分だからね」

「ふーん。そんななの」

「もちろん、普通の民話にもその秘密は隠されているけど、普通の人に意味を理解はできないんだよ」

「秘密でことね」

「正確にはあまりにもはつきりしすぎて気が付かないと言った方がいいのかもしれない」

「でどういう創世なの」

姿勢を正して彼女は語り始めました。

「簡単に説明するね。」

「世界の前、永遠のなか智慧高く慈悲深い神の御心がありました。神は世界を創造しようとして決心なされて文字と数と境によって印を刻み世界の創造が始まったのでした。空気が興り水で覆われ炎の御

坐が配置され聖なる寺院は完成しました。神はその舌をもって空気を震わせ文字と数と境界で空間を創造し世界を定められました。これらのものから世界が細微にわたり創造され今見る世界となりました」

プエラはなんと说不い表情をしました。あまりに簡略化した表現をしたためでしょう全く飲み込めていないようでした。

「もう少し具体的にいこうか」

「魔法使いの技はこの天地創造の技を用いてなされるんだ。但し神のは無からだけど、魔法使いは既にある法則を用いてなされる。これを喚起するのが言葉なんだ。天地が創造されたように言葉を通じて技が発動される。これを見てご覧」

彼女が何事か呟くと、小さな氷の粒のように青白く輝くものがプエラの目の前に現れました。それはきらきら輝いて宝石のようでした。プエラは小さな光にうつとり見とれてしまします。

「今魔法の言葉によってこれ呼び出した。光が粒子と波の二つの性質を持つように言葉というものは数という性質も持つのだよ。天地創造の神話の如くにね。今呼び出したものは言葉によってあるわけなんだ。一方数字でも表せる。この数字を変えてみよう」

光る物体の中から言葉らしき文字が帯状に流れ出てきて、それはいつの間にか数の帯に変化しゆっくり渦を画きました。

彼女がなにか呟くと光る物体は右に静かに移動いたしました。

「いまこの光るものの数字を書き換えて移動させたのだけど、もっと複雑な動きをさせてみよう」

すると光る物体は静かに左に移動し、上に登り、下に降り蝶が舞うかのような優美な動きをしました。プエラの瞳に小さな光が写り込み少女は大はしゃぎでした。

「この様に魔法は言葉と数字によってなされる訳で数字を少し変えただけでもこの様な変化をみせる。但し言葉といっても肉声の言葉じゃなくてね。魂の言葉なんだよ。もちろん意識を統一させるため肉の言葉を発しはするんものあまり関係ない。だから肉の言葉を

聞いてまねしても無駄という訳なんだ。この魂の言葉にはレベルがある。レベルが高いほど天地創造つまり神の力に近くなるんだけど、低レベル者は高いレベルの者の魂の言葉は聞き取れない。言葉はレベルに応じて違うんだよ。たとえばビルトス先生の魔法の言葉は僕には聞き取れない。上に行くに従って言葉は違うんだよ。まだまだ魔法使いとしては未熟者ということだね。また魂の空間の座標位置は意識の有りようによって決定される。東西南北どちらを肉体が見ても東を見ているかのようにね。だから魔法使いの世界は肉の目では捉えることの出来ない世界なんだ」

「この輝いているの綺麗。もつと出せないの？」

プエラの瞳は光る物体に釘付けで、魔法の原理など関係ないようでした。仕方なく彼女は赤や緑や黄色様々な色合いを放す小さく光るものを登場させ空中を踊らせました。魔法の原理よりこちらの方がずつと楽しいようで、プエラの瞳はキラキラしていました。

朝です、屋根のある所で藁に包まれ安心して寝ていたために少し寝坊致しました。本当に疲れていたみたいでした。お爺さんは随分早くからお仕事を初めていたらしく全く気が付きませんでした。追っ手の事を考えたらいつまでもここにのんびりは出来ませんでした。急いで支度を整えるとお爺さんにお礼を申し述べてから二人は先を急ぎました。

村のはずれの分かれ道に立ちました。左に行けばベトー方面へ右に行けばガーポの怪物が出没するところに行きます。二人は右側の少し上りになった山道を選択いたしました。

幾重にも蛇行を繰り返し道は山間を抜けていきます。あまりにも果てしなく同じ事の繰り返しに道が同じ所を何度も繰り返し走っているような錯覚を覚えました。そのようなことは無いのですがあまりにも単調な繰り返しに精神的にまいっていくのです。旅は思い描くと簡単で、いざ実践すると辛く苦しく、その状況から抜けだす

には自らの二本の足に頼らざるをえないのでした。プエラが足の痛みを訴えてきました。その場にとまり靴を脱ぎ調べてみると豆ができていました。これまで長旅はしたことが無くこすられてこの様になったのでした。それは彼女も同様でした。はき慣れた靴でもなく足にもう少して豆が出来そうでした。手当をすると再び二人は道を急ぎました。豆もそのうち硬い皮膚ができると思まされることもないでしょう。それまでの我慢でした。

小さい岡を上ったり下ったり道は続いています、二人は自分たちがどちらに向かつてあるのか分からなくなってきました。初めての道に森の中、目印のなるものは何もなくどちらを見ても同じような景色ばかりです。開けた土地に出ないものと期待いたしましたが全くその気配ありません。随分歩いたというのに人と全く出会いません。やはり怪物騒ぎでこの道を通る旅人はいなくなっているせいなのでしょう。村人がひょっこり現れでもしようなら感激で二人は抱きついたかも知れません。それにても次の村までのくらいあるでしょう。まだまだ日は高いのですがどんどん不安になってしまいます。

森を歩いていると小高い丘の上からこちらと間隔を維持し付いてくるものに遭遇しました。それは狼の群でした。こちらにやって来てもないし去ってしまうでもなく誠に気になる存在でした。此方が立ち止まり様子を窺うと、あちらも遠目から様子を窺っています。何頭かの群が森の中を葉音をたてながら付いてくるのは気持ちよいものではありません。犬の様にしっぽを振ってクンクン言ってくれどと気も休まるというものですが、歓迎しているようでもありません。

「ねえねえ、狼がずっとついてくるわ」

森の中を移動する幾頭かの狼を指して気味悪そうにプエラはしました。

「襲ってくることはないよ」

「そうなの。人を襲うお話を聞いたことがあるのだけど」

「それは人肉の味を覚えた狼のことだね」

「いるってことじゃない」

嫌そうに少女はしました。

「それは狼に限らず、犬や熊だって同じさ。何かの機会に味を覚えて狩りの対象とするんだよ」

「おっかない」

「でもそれは特殊なことだよ。戦争なんかで死体が放置され味を覚えてしまったとかね。大半はそうなった動物は猟師が殺しに行くのではないけどね」

「じゃあれはなにしているの」

「あれはだね。自分たちの縄張りによそ者が侵入したので警戒して監視しているんだよ。縄張りを通過すると消えていなくなるさ」

「そうなんだ。この辺は狼の住処なんだ」

「そう言う面では人間のほうがたちが悪いけど」

昨日の男達のことを指しているようでした。

夕暮れを過ぎて少し暗くなったところ二人はやつと次の村に到着いたしました。隣の村とは随分離れていたようでした。まだまだここは山間の村であつたので月明かりも期待できず洋灯で道を照らしながら二人は村に辿りついたのです。真っ暗の中に家々の明かりが漏れています。もうこの時間では誰も外を出歩く人などいません。二人は勇気を振り絞って一件の家を訊ねました。中から出てきたのは恰幅のよい小母さんでした。小母さんは戸を叩く音がしたので何事かと戸口を開けてみると二人の子供が立っていたので吃驚しました。事情を知って小母さんは彼女等を中心に招き入れました。知らない旅人が母屋に入ってほんとに良いのであろうかと彼女は躊躇しました。中にはいると夕餉の香りがあたりに立ちこめています。なかでは家族の方が何事かと此方を覗いています。二人は荷物を降ろしてご家族に挨拶しました。この時小母さんはさらに驚きました。若

い女の子が二人して旅をしていたのですから。年頃の娘がこんな山道をやってくるだなんて信じられないことでした。すると小母さんは世話好きの奥さんなんでしょう二人にお説教を始めたのでした。それを聞いたお父さんは奥さんを押しとどめ二人を夕食に招待したのでした。

「二人はどちらに行くのかな」

優しくおじさんは訊ねました。

「カーボの親戚を訊ねて行く予定です」

小父さんは困った顔をしました。

「残念だけどここから引き返したほうがいいよ」

「どうしてですか？」

「二つ向こうの村の先に怪物が出るようになったんだ。儂等もあちらに行けずに困っているんだよ」

「それなら隣村で聞きました。でも獵師たちが退治している話でしたが」

彼女は探りをいれました。

「そう簡単にいかないさ。あいては怪物、しかも一頭ではないんだ」

「何頭かいるのですか！」

「そうとも、獵師も恐れてなかなか上手くいかないらしい。今は腕に自信あるものが売名行為で退治に乗りだしたところだ。賞金も出ているらしい。そういういえば大斧の使い手でソシウスという男が退治を買って出たらしい。」

彼女は初めから魔法の力で撃退するつもりだったのでそのような捕り物はどうでも良かったのですがここでは話を合わせました。

「では、もうすぐ通れるようになるんですね」

「それはどうか。先のことになるのではないかな」

すると奥さが口を挟んできました。

「あなた達、女の子二人でどうするの怪物がいるのよ。怖いのは怪物だけでなく道中には人攫いとかいっぱいいるのよ」

「最近の娘は強くなつたものだ。そっぴや強い女がいるな。」

小父さんは思い出したように言いました。

「なんですよそれ」

小母さんは自分のことを暗示しているのではないかと眉をつり上げました。

「首都フローレオの北にカプットて町がある。ここに女盗賊が出没するらしい。たいそう身軽な女らしくどんな所にも入り込み盗みを働くらしい。こいつは剣の腕もたいしたものので輸送車を襲い何十人の男達をなぎ倒しはずこかへ去っていったらしい」

「まあ、とんでもない女性ね。でもそのうち捕まるでしょう」

「ところでお前さんたちはどうする。まだ先にいくのかい」

小父さんは心配そうに言いました。

「はい、私たちは先に行ってみようと思います。もしかしたら退治されて安全な道になっているかもしれせんし。そうでなかったら手前の村で待ちます」

「そうだなあ。同じ道に戻って変なのに出逢わないとは限らないしなあ」

小父さんは納得したようでした。

その日は二人はちゃんとして一室に泊めて頂き、翌日になると二人はそこを旅立ちました。別れ際小母さんは先の村で怪物が退治されてなく通れないようだったらこの家まで戻って来てくるようにと言いました。本当に親切な小母さんでした。

教え頂いたところによると二つ向こうの村までは夕方までは着けるということでした。今度は先の見えない旅と違っておおよその村の位置がわかって彷徨っているという感じがしませんでした。しかし森の中なのでやはり似たような景色が延々と続いていることに変わりはありませんでした。

昼頃一つ目の村に到着しました。この村の周囲はこれまでの村より開墾されていて、森が迫ってくるという感じではありませんでした。道の横には小川が流れていて涼やかなせせらぎが聞こえてまいりま

す。道は何本かの丸木で作られた丈夫そうな橋を渡って村の中へと続いていた。村の中はどの村とさほど代わり映えのいいものではないが、とある家に荷馬車を止めて話している人々を発見しました。家財道具を載せているようで引越してもしているのではと思えました。二人がその横を通り過ぎようとした時呼び止める声がありました。

「あんた達、隣村に行くのかね？」

呼び止められて二人は立ち止まりました。

「そうですか」

離れた人に返事をしました。すると血相変えて小父さんがやってきたのでした。

「行っちゃ駄目だ」

小父さんの顔は真剣でした。

「この先の村に怪物が出るんだ」

「そのことでしたら存じています。でも獵師さんたちが退治しているとか」

小父さんはため息をつきました。

「獵師なんかで退治出来るものかね。相手は牛みたいにでっかい怪物なんだ。軍隊も出てきて捕り物になっているんだよ」

「そんな大がかりなんですか」

「そりゃそうさ、なんたってジェヴオーで怪物は大きいくせに素早いときだ。しかも5頭もいるんだ」

「まだ随分さきに出没しているとの話を聞きましたが」

「それは以前の話。奴ら五頭もいるもんでここの鹿程度では腹が満たされないのだろうな、村を襲い始めたんだ。軍隊は町の方から圧力をかけるので山の方に怪物は追い込まれていると言う訳だ」

「では次の村にもう」

「ああ、俺達は危なくなつたので逃げてきたという訳さ。すこし前までは森の中が捕り物の場だったが今では村が舞台さ。残った連中はどうなったことやら」

彼女は話を聞いて別のことが気になり始めました。怪物はもちろん最初から撃退するつもりだったのでなんの危機感の持つてはいなかったのですが、村が舞台となると話は別です。その村で公然と怪物を退治しようと噂になってしまい逃避行の障害となってしまうます。怪物よりもっと恐ろしい魔法使い達に気づかれてしまう可能性がありました。ここは出来れば密かに通過したいところでした。「ソシウスという大男が村で陣取って軍隊ともに頑張っていたが」彼女はそこで閃きました。その男の影に隠れて倒そうと。

「小父さん有り難う、そのソシウスさんに会いに行ってください」
明るく微笑み会釈をすると彼女たちは足早に去っていきました。
残された小父さんはせつかく忠告したのに聞き分けのない子供だと怒りました。

第3回 旅立ち（後書き）

やっと物語の始まりです。

主人公は日常の世界が破られ混沌とした世界に投げ出され彷徨い歩きます。

内容は一応の全体の設計はあるものの、かなり行き当たりばったりとなっていました、

特に書けば書くほど長くなるのは何故？

頭の中に描いたのはスターヴォーズのルークが平和な日常を奪い去られ宇宙に旅立つシーンでした。これどうも神話の王道らしいですね。

ウラジミール・プロツプ「昔話の形態学」をしつかり読んで構成を考えるとというのがいいでしょうが、そんな時間はないのが現状です。物語が破綻しないで最後までいけるのでしょうか。ラストはあっても終盤の始め当たりが形になっていませんです。

今回最初に人物の解説をいれてみました。

人の名前で覚えるてのは大変ですからね。

ただし全部の名前は公開しません。

第4回 旋風とともに（前書き）

<登場人物>

ビルトス 主人公の師

グノー 主人公の兄弟子

グレーティア 主人公

プエラ 主人公の幼なじみの娘

ソシウス 斧使いの大男（旋風のソシウス）

ホステイス ヘテロ国魔法宰相

セラペンス ビルトスと死闘した魔法使い

ペコー セラペンス配下

第4回 旋風とともに

二人は戦場となる隣村に急ぎました。あまりゆっくりして村への到着が夜になつては不味いからでした。森が今までとは違うように感じられました。やはり張りつめた緊張感からでしょうか森の小動物のたてる音に敏感になりました。夕方近くなって村ももうすぐのはずです。ここで彼女は立ち止まりなにやら呪文を唱えました。

「どうしたの？」

不思議そうにプエラは訊きました。

「ビルトス先生のお墓に仕掛けたのと同じもの。僕を中心に二百歩以内に大きな生物が侵入しようとしたら報せてくれるようにした」

「それなら不意打ちなしね」

これで安全でした怪物とはいえ相手は狩りをしているのです。正面から姿を現すより、警戒していないところを背後から襲うのは当然のことでした。もちろん相手は大きいので葉を踏む音とか鳥が逃げ飛び立つ様子で敵の侵入を察知出来はしますが魔法による探查は確実でした。

暫く歩くと青い小さな光が彼女の前で点滅しました。

「来たよ！ 左後ろ、密かに背後から機会を狙っている」

「えっ」

思わず振り向きそうになりました。

「動かないで。雷撃の一撃で倒すから。」

「分かったわ」

「君が前を行って。振り向きざま技を放すから」

少しずつ二人は入れ替わりました。二人は沈黙し足音が高まる緊張を押し上げました。鳥のさえずりも聞こえません。

突然背後から小枝が一斉に折られる音がし、地面に地響きがしました。待ちかまえたように彼女は振り向き、怪物の姿をその眼にと

らえました。それは大きな狼でした。鋭い牙に凶暴な目、赤色い体は中に舞い此方に飛びかかっていました。獲物を恐怖で動けなくするような低い心臓をえぐるような咆哮が襲いかかりました。

彼女は印を結び技を放すと稲光が空気を引き裂き真っ直ぐに怪物を貫きました。怪物は飛びかかった姿のまま彼女らの傍らに地響きを立てて落ちました。土埃が舞い、肉を焼いたような焦げ臭い匂いが怪物から漂ってまいりました。

「仕留めたと思うけど」

注意深く警戒して彼女は怪物の様子を窺います。じつと彼女は怪物を見つめました。

「プエラ大丈夫みたいだ」

戦いは一瞬にして勝負がついたようでした。

「すごい。すごい」

プエラは興奮気味でした。

怪物の横たわる姿を見て、こんな大きな生き物が今さっきまで動いていたかと思うと不思議でした。ふとプエラは振り返ると彼女はじつと自分の手を見ています。倒した怪物でなく自分の手を見ているなどとは変でした。どうしたのだろうと少女は訊ねました。

「どうしたの？」

「魔法の威力が増している」

彼女は驚いているようでした。

「そうなの」

「魔法の言葉が変化したんだ。一つ上に上がった感じだ」

「それはよかった」

「もうひとつ変わったことが、直に技を出せるようになった。」

「どういう事？」

「今までは技をかけると何か目の前に障壁があるような感じだったんだ。語られた言葉がいちいち翻訳されて伝えられるような。ビルトス先生を助けようと放った時もそうだった。けれども今は障害がなにも無くなつたみたいに言葉がそのまま技となっている。今の方

が身が軽い感じなんだよ。これはどうしてなんだろう」

「成長したて事なんじゃない」

「成長？」

「旅をして成長しているのよアナタは」

そうかもしれないと彼女は思いました。

これで怪物は残り四頭です。その前にこの怪物はソシウスという男が倒したという事にしなくてはなりません。かれは大きな斧をもっていたという記憶があったので魔法を使って額に一撃、首の頸動脈に一撃を与え、あたかも斧で斬り殺されてようにみせかけました。そして素知らぬ顔をして村に向かったのです。

二人が村に到着してみると、そこは異様な雰囲気にも包まれていました。村を囲むように柵が作られまるで戦場のようです。その柵は慌ただしく作られたようで木の一本一本が不規則で大小さまざまな木によって作られていました。しかもまだ枝までついた木があるのでいかに慌ただしく作成したのかわかります。柵の外には先を尖らした木が斜めに埋め込まれ外敵の侵入から村を守っていました。村の入り口には警備の兵隊が門を守っています。

二人は砦化した村の門の守衛にソシウスに面会に来たと伝えるところ、このような危険な所に娘が二人危険を顧みずやってきたことに驚いた様子でした。直ぐに報せに行くと村の奥から一人の軍服姿の男がやってきました。

「ソシウスを娘が訊ねてきたと聞いたがお前達のことか」

厳めしい顔の人でした。

「はい、ソシウスさんにお話があつてやって来ました」

男に人は迷惑そうな顔をしました。

「ここは危険なんだ。女子供の来るところじゃない。とつとと帰れ」

「帰えろと言われてももうすぐ日が暮れてしまします」

無慈悲なことを言ってしまうと男は反省しました。

「まあ、村に入れ」

「有り難うございます」

「僕はこの村の守備を任されている軍の指揮官だ。ソシウスは僕の甥にあたる。お前達の顔は初めて見るが・・・」

「伝言を頼まれました」

「伝言？ まあよかるう。ソシウスに会わせてやる、ついてこい」
ぶつきらばうにいうと男はどんな村の奥に進んでいきました。
見失っては大変と二人は後を慌てて追っかけました。

村の中はあちこちらが壊されていました。このなかで怪物との戦闘が行われていたようです。よくみると壁に黒いシミのようなものが見えます。血の跡です。民家に村人らしき姿を発見いたしました。彼等は疲れ切って怯えたかのように建物の隅でうずくまっていました。村の中は兵隊達だけが村の往来を忙しく動き回っており、子供達が無邪気に遊ぶ姿などは見受けられませんでした。

司令官は町の中央にある一件の家へと二人を連れてきました。ここには軍の旗や槍がたち、どうやら作戦本部の様でした。マーレという平和な町に育ったせいかこの様な軍隊の姿は見たことがなかったので二人には大変珍しかったです。二人を残して男は建物の奥に入って行き、暫くまっていると中から別の男の人が出てきました。

歳は十八歳くらい、背丈が高く大男でした。眉は太く目はぎよろつとして顎は頑丈そうでした。引き締まった筋肉に斧を余裕で振り回せそうな太い腕をもっていました。

「俺に会いに来たてのは、あんた達かい」

彼は気さくに話しかけました。

「初めまして、私共はあなたに内密なお話がありましてお伺いいたしました。お話を聞き頂ければ大変光栄ですが」

「俺に秘密の話か。ははは面白い」

彼はかわいい闖入者に大いに気に入ったみたいでした。早速、庭の片隅に設けられた席に案内すると向かい合わせに着席しました。

「この度の怪物退治。なかなか苦勞なされているご様子」

「まあ、素早い奴でなかなか捕らえられない。なあにもう少しだ」

嫌なこと言う娘だと彼は思いました。

「あなたは軍の者でないのに何故この捕り物にご参加されているのです」

「あの指揮官は叔父でな。俺は腕には自信があるので手伝いに来たのさ」

「お手伝いですか？」

そうではないでしょうと娘は言いたげでした。

「本当のところは売名行為かな。化け物を倒せば有名になると思ってたな。俺は本当は木こりでな勇者のソシウスになりたかったのさ」

「ならば、その夢叶えて差し上げましょう」

面白いことを言う娘だと男は思いました。

「子供に何が出来るんだ」

「私は魔法使いです」

男は意外そうな顔をしました。魔法使いはほとんどが男です。特殊なエリートみたいなものです。もちろん女のそれがいないわけでもないのですが珍しいことでした。しかもこの様な若い娘が魔法使いだなんて信じられませんでした。でも仮にそうだとしても女の魔法使いはもっぱら治療術なので、けが人の手当に便利であるとは思えました。

「信じられんな。仮にそうだとしても俺が怪我したら助けてくれるというわけか」

「いいえ違います一緒に怪物を退治するのです」

「一緒にか。まさかおまえ戦えるのか？」

「はい攻撃魔法が専門です」

娘から意外な言葉が返ってきました。

「俺が信じられる証拠がないか」

「御座います。今来る途中怪物の一頭と遭遇し魔法にて撃退しました。村の直ぐそこですから確認に行かれたらどうでしょう。それを見てお考え下さい」

男は跳ね上がりました。あんなに軍隊が苦勞してなんの成果の上

げられないのに、こんな娘が容易く怪物を仕留めたなど信じられませんでした。

「怪物はあなたが斧で斬り殺したように細工しておきましたから他の者には私のことは秘密にしあなたが仕留めたと伝えてください」

「よし分かった。見てきてやる。嘘だったら怪物の餌食にしてやるぞ。ここで待っている」

そう言うとは彼は馬小屋から馬を引き出し娘の言った所まで馬を走らせました。

話の場所に着いてみると確かに怪物が一頭地面に横たわり死んでいました。証拠を突きつけられても、あの娘が殺ったとはにわかには信じられませんでした。死体はまだ暖かく娘たちがやって来た時と符合します。あの娘本当に魔法使いなのだとは彼は思いました。

「いかがでしたか。信じますか？」

娘の落ち着いた問いに、あれだけの戦いをして平然としているとはなんとという娘なのかと空恐ろしくなりました。

「信じよう」

「では、あれはあなたが殺ったことになさいましたね」

「約束通り、お前達の名前は出していない」

しかしここで彼は疑念が湧いてくるので訊ねます。

「どうして俺を助ける。軍の指揮官でもいいだろう」

「私が魔法使いである事を多くの人に知られたくないだけです。これは私達とあなたの秘密です」

「分かった。それで俺は得するだけだが。お前達は何の得がある？」

「人知られずここを通過するという得があります。名誉はあなたに。私たちは霧の中に」

この魔法使いの娘は人知れず旅をしたいのだと理解いたしました。その理由は分かりませんが取引は成立したようでした。

「今夜、怪物を退治いたしましょう」

彼女は提案しました。

「では指揮官に報告、準備しよう」

「お待ち下さい。これは二人で密に行います」

「二人でだと！正気か」

四頭を相手にたった二人とは驚きました。大胆な事をいう娘です。奴等は何処にいるのか分からないのだぞ。どうやって探す」

「大丈夫です。第一に仲間を殺されたことで向こうから復讐にやってくるでしょう。それに私には彼等の居所がわかります」

「そんな事も出来るのか」

怪物は嗅覚と聴覚に優れなかなか捕まえることが出来なかったのですが、それが本当であれば対等に戦えるかもしれませんでした。

夜、上弦の月に照らされていましたが森は真っ暗でした。梟の鳴く声が森に響き渡ります。村は陣内のかがり火によって一晩中明るさを保っていました。今宵も怪物の襲撃を恐れて警戒しています。指揮官は今夜の作戦を練っていました。彼の甥が一頭を仕留めたのでこの死体を利用し一網打尽にしようと考えていたのです。それにしても甥がこのような働きを見せるとは以外でした。口では勇ましいことを言うが実がないと思っていたのですが見直しました。これも美しい娘にそそのかされて危険なことをしたのであるうと思えたのでした。

「仲間が殺された事を怪物達はもう分かっているはずです。私の倒した怪物は多分彼等の斥候でしょう。怪物は今夜この村近くにやってきます。死体はこの村に運んでいますので指揮官はこの村の周囲に罠を巡らし捕獲するつもりでしょう。この罠に私たちが引つかかっつては笑い者です。罠の位置はご存じですか」

「それは全部把握している」

「結構です」

「それより奴らの居場所が分かるというには本当か？」

するとかの彼女は小さく呪文をと唱えると小さく青く輝くものが現れました。

「探査して見ましょう」

すと小さな光は八方に飛び去りました。初めてみる物に男は興味深くその様子を眺めていました。

「北東の方向に彼等はいます。まだ遠いようです」

男は驚きました、この場でいながら敵の様子を探ることが出来るだなんて全く信じられませんでした。この娘何者なんだ。男には優美な容姿を持つ娘が外見に反して人並み外れた能力をもつことが理解できませんでした。

「風はこの時間はどちらから吹いていますか？」

「確か、東からだ」

「では私たちは風下の西側から迎え撃つとしましょう」

「そうだな」

「その前に、あなたは正面入り口から守衛の前を通って外に出られますが、私が外に出る為のくぐれる位の柵の隙間はありませんか」

「それだったら、あの建物の裏に丁度よく開いている」

「では外で落ち合いましたよう」

男は支度に出ていきました。

「グレーティア大丈夫？」

プエラが口を開きました。

「心配しないで。本当は一人でも退治できるんだけどね。彼に倒してもらわないといけないだよ」

「そうならいいけど」

「君はここで待ってて」

「私も行きたい」

「だめだめ。君には此处にいて、僕が外に出たと気がづかれない様にして欲しいんだ」

「自信があるならそれで良いけど」

プエラは不満そうでした。

二人は村の柵の外で合流しました。男は肩に長い棒に大きな斧付いた武器を担いでいました。このような大きな武器であれば怪物も十分倒せそうでした。守備隊に見つからないように注意深く村の畑

を横切ると森に逃げ込みました。辺りは暗く洋灯を照らして森の奥へと進みました。

森の中探査の目は走ります。

「敵を補足しました。直ぐ近くです。照明は消しましょう。あの斜面にて様子を窺うとしましょう」

敵の進路方向からいつてこの位置に待ちかまえるのは有利でした。不意を襲われて怪物達は混乱することでしょう。男の斧を持つ手が強くなりました。

「なかなか抜け目ないようです。敵は進路を南に変えました此処では離れてしまいます。追いかけましょう」

怪物の突然の進路変更。その前に一瞬移動が止まっていたことがありました。この瞬間、敵は行く手に罠が待ちかまえていることに気が付いたのです。なかなか抜け目ない敵です。

二人は怪物達の背後に回りました。じりじりと敵に近づいていきます。

「攻撃の瞬間、魔法の照明を照らします。くれぐれも同士討ちが無いように」

「そんなヘマはしないさ」

二人が顔を見合わせた時、彼女は顔色を変えました。

「敵は密かに一頭を我々の背後に回らせました。完全に此方に気が付いたようです」

「けっ。なかなかやるじゃないか」

「では私達は敵の罠にかかってあげましょう」

「おいおい降参か？」

「敵は我々に追跡させこの先のすり鉢状の窪みに誘い込み逃げられないようにし、前の敵に警戒したところを背後から襲わせ混乱させてから全員で殺すつもりです」

「畜生のくせになんて賢いんだ。これまで手も足も出なかったはずだ」

男は悔しがりました。これでは人間が優秀という誇りが傷つけら

れてしまいます。

「それを逆手にとります。あえてそのすり鉢状の地形を利用し怪物を逃げにくくし、一網打尽にするのです」

「恐ろしいなあんたは」

男は智慧深い娘にまったく参ってしまいました。

「すり鉢の底に降りたら敵はすぐ背後から襲うでしょう。背後の敵は私が倒します。あなたは前面の敵を相手してください。背後から地面を蹴る足音がしたら一気にかたづけます」

「良し分かった」

「あなたが失敗したときは、すり鉢の地形ごと吹き飛ばします」

彼女は一言付け加えました。

「おいおい恐ろしい事を言ってくれるな。俺を信じろ」

前方に枝の折れる音がします。敵は間近です。

怪物達は気づかぬふりをしてどんどん南へと向かって行きます。

もうすぐ村の近くです。怪物は斜面を下って底に降りると再び反対側に上っていきました。ここがすり鉢の地形。決戦の場です。男に武者震いが起きました。

二人は意を決して谷に降りました。

男は正面の敵にカツと目を見開きました。その時です背後から地面を蹴る足音。その瞬間魔法の明かりが点され、辺りを昼のように明るくしました。

背後には口を大きく開き飛びかかる獣の姿がありました。待ち構えたように彼女は転身すると稲光をその怪物に放出したのでした。

獣は一撃をくらい一瞬で命を奪われ音を立てて転げ落ちました。前方では獣たちは魔法の強い光に目がくらみ男を一瞬見失っていました。男はその短い敵の隙について一瞬のうちに目の前まで詰め寄りました。彼女は後ろの敵を始末した後、前面の敵を相手にしようと振り返ると、男が三頭を相手に戦っている姿が目にはいりました。三頭の動きは激しく、狭いすり鉢の中の土地に旋風が起きているかのようにでした。でもそれより驚いたのが男の素早でした。男は大き

な体をしていましたがその動きは敏捷で大きな斧を持っているというのに三匹の獣を相手に早さでは負けてはいなかったのです。男の意外な姿でした。彼女は他の獣も自分が仕留めようと考えていたのですが両者に動きについていけず、技を放しても味方に当たる恐れがあり手出しが出来ませんでした。

男の動きに付いけず一頭が背後を取られました。斧の煌めきが空気を切りました。獣は背骨を断ち切れその場に倒れ込みました。側方から別の一頭が襲いかかるのを低く身を落とすと一気に後ろ足をなぎ落とし、大きく翻ると飛びかかって来た敵の額をうち砕き地面に切り落としました。そのあと足を切りとられ前足で這いながら逃げる獣の首をたたき落とすと。最初に背中を断ち切った敵に留めを指しました。

返り血を浴びて男は肩で息をし、やがて地面にへたりこみました。「おみごとでした。わたしの手は不要だったようです」

彼女は手を差し伸べると、男はよろよろと立ち上がりました。

「いや、これはあんたのおかげさ」

この激闘の場面に平静に立つ少女に男は崇敬の念を持ちました。

「私の倒した敵もあなたの斧の傷を付けてください。それでこの戦いは完了です」

男は血まみれになって村に帰ってくると陣内は大騒ぎ、指揮官はなにごとがあつたのかと甥に問いたしました。彼が怪物四頭を始末したとことを告げると、全員信じられないような顔をしました。甥の言葉がにわかには信じられない指揮官でしたが、日頃から嘘という甥でないことを知っていたので早速怪物の遺体を検分に出かけました。連絡の様にたしかに獣の死体が四つありました。甥はよく一人で怪我もなく退治できたものであると指揮官は感心しました。その夜は緊張から解き放されてか村人も兵隊もお酒を交わし大騒ぎ。新しい英雄に話題がもちきりでした。

「魔法使いのお嬢さん失礼するよ」

プエラと彼女が部屋で話していると男がやってきました。すこし酔っぱらっているようでした。今日は彼が主役ですから当然でした。

「あんたの助けがなかったら退治できなかった。礼を言う」

「いえいえ、あなたの働きは鬼神の如くでしたよ。私の手など必要ありませんでした」

「本当は今日はあんたと俺の手柄だ。なのに俺だけがお祝いされては気が引ける。あちらには美味しい料理も出ているし喜びを分かち合って欲しいのだ」

「しかし」

彼女は人前にでるのが恥ずかしいようでした。

「いいじゃないの。いきましようよ」

プエラは待つてましたとばかりに彼女の手をとります。彼女はしぶしぶ御輿を上げました。

宴席では村中総出で大騒ぎしていました。彼は彼女を連れてくると主賓の席に座らせました。

「ちよいと席を外したと思ったら美人の娘を連れてきたか、さては酒の酌でもさせる気だな。英雄色を好むかな」

叔父ほろよいかげんで甥をからかいました。

「まったく何言っているんだ。お客さんに失礼な。俺がこの娘に酌をするんだ」

「なに、それは奇妙な。主役のお前がなんで世話をする」

「俺がしたいから、するんだ」

彼はぶっきら棒に言いました。

「なるほど、その娘に気に入られようと。危ない橋を渡ったか」

「なに言っているんだ」

「そういう意味では。その娘のお手柄と言うわけだ。その席でもおかしくない」

指揮官は大笑いします。

その夜は遅くまで人の笑い声がしていました。
村に平和が戻りました。

村に静かな朝が訪れました。昨日のお祭り騒ぎでみんな朝寝坊でしたが明るく陽気な一日が始まりました。村人総出で村を囲んだ柵が壊されていきます。朝餉に準備に女たちは大わらわ家々のあちらこちらから竈の煙が立ち上ります。村の広場には獣の大きな体が五体集められていました。村の男は自分たちを恐怖の陥れた張本物をまじまじよみました。それは本当に大きな生き物で間近で見たら凍り付きそうなるものでした。

でもそれより感激させたのはこの怪物をたった一人で退治した英雄でした。彼の偉業はこの村では代々語り継がれることでしょう。村の男達だけでなく女や子供の畏敬の念で英雄を見ていました。子供達は勇者を囲むと我先に抱きつきました。一夜にして彼は人気者になってしまいました。

この様子を傍らで彼女はほほえましそうに見つめると、旅の支度を始めました。

「計画通りね。私たち英雄を作り出しちゃったわね」

プエラがささやきました。

「おかげでこちらに誰も気が付いていない」

「で、彼強かったの彼？」

「強かったよ。敵の位置さえ掴めたらもっと早く倒してたろうね」
「そうなんだ」

プエラはやばったい男だと思っていたのですが、実はなかなかの腕前であることを知りました。

二人はお世話になった村人に簡単な別れの挨拶をすると兵隊さんやソシウスに会わずに村を発ちました。この村の出来事は旅の思いでに過ぎず、何時までも名残惜しく滞在するものではなかったのです。目的はあくまでも逃避行なのですから。

ソシウスは眠い目を擦り陣屋に戻ってきました。昨日の夜は夜更かしして、子供達相手に大はしゃぎをする元気はあったもののどうも頭がすっきりしません。少々飲み過ぎたようでした。柄杓で水をすくい一飲みすると幾分か気分がすっきりしました。外では兵士達が片付けをしており、叔父の指揮官はあれやこれや指示に忙しいようでした。酒に強いお人だと彼は思いました。

「なかなか人気者になったようだな」

叔父さんが近づいてきました。

「あんなに喜んでもらうと嬉しいね」

「一族にお前のような強い奴がいると鼻が高い」

叔父さんは満足げでした。

「討伐に参加して正解だったよ。叔父貴感謝する」

「なあに。儂も御陰で任務完了だ」

「報告は？」

「もう馬を走らせている。お前の事をちゃんと報告しておいた。賞金はお前の物だ」

「俺の物か・・・」

この時彼は一緒に戦った娘の事を考えていました。（俺だけの力でないのだが）

「ついでに旋風のソシウスという大層なあだ名もつけておいた」

「勝手に命名しないでくれ」

「どうだお前軍隊に志願しないか」

「軍隊？ 駄目駄目おれは堅苦しいのが苦手だ」

「なんだ、じゃ木こりか」

叔父さんは不服そうにしました。

「俺びつたりの仕事を思いついたんだ」

「どんな仕事だ？」

興味深そうに叔父さんは訊ねました。すると話を聞かなかったように彼は辺りを見渡しました。

「見あたらないな。あの娘」

彼は一人呟きます。

「なんだ、あの娘捕まえて女郎屋でもやるのか」

「英雄に相応しい仕事だよ」

彼は言葉を荒らげました。

「あの娘なら先ほど村を出ていくのを見かけたぞ」

「なに、本当か！」

彼の狼狽えた様子に叔父さんは戸惑いました。甥が慌ただしく荷物をまとめて走り出したので、道に飛び出ると駆け抜ける甥に後ろから呼びかけました。

「そんなあわてて何をしに行く。賞金はどうするんだ！」

すると一目散に走っていた甥は後ろを振り返ると返事をいたしました。

「あの娘を捕まえに行くんだよ。賞金は叔父貴にやるよ！」

どんどん小さくなる甥の姿をみて叔父さんは呟きました。

「け、あの娘にいれこみやがったか。賞金はお前の婚礼の資金にしてやるさ」

逃亡の旅で先を急がなくてはならなのに、とんだ事件に遭遇しました。こんな時に限って皮肉なことに障害となることはおきるものです。しかし自分たちの住む世界について初めて実感いたしました。マーレの町からは一山隔てただけなのに反対側ではこの様な大騒ぎが起こっていたのです。まだあの町に住んでいたら、この事件は風の噂に聞く程度で終わり、相も変わらず平穏な日々を過ごしていたでしょう。プエラが平和で退屈しそうだといったことももったことでした。投げ出され世界の有りようを初めて知ったようでした。出来ることなら身の危険が迫っている旅でなく、しっかり社会について見聞を広めるのもであつたら良かったのですが、今はそのような事でなく身を守ることが大事でした。相手が強ければ逃げる、これは正しい選択でした。自分の命を守るとは単に自分自身のためでなく、命を守ってくれた先生への恩返しでした。怪物騒ぎでは

このような手段を用いず密かによる村を通過してみてもよかつたのかもしれません。でも問題なのが怪物と遭遇した場合それを倒したのは誰かとか、次の村でこの騒ぎで人が通るはずもないのに旅人が平気な顔をして入ってきたら怪しむのは道理でした。追っ手がこの道も何れ探索の手を延ばし逃走方向を割り出すということも十分考えられることでした。計画は思惑通りに進みこれ以上の好結果はないでしょう。

もちろんこれで安心仕切つてはいけません、これまでは追っ手がマーレから辿つて此方に迫ってくることを前提に考えていたのですが、もう一つの可能性について考えなくてはならないでしょう。すなわちこれから行く先に既に捕り手が待ち受けていることを。

彼女等二人が次の村目指して歩んでいると、後ろから呼び止める声がありました。小さく背後から聞こえる声に振り返つてみると大きな斧を背中に背負つた男がこちらに駆けてくるのが分かりました。ソシウスでした。昨日彼は英雄になり、今日の朝は村人に囲まれ人気者でした。人々の興奮冷めやらぬ間にこんな所を走っているとは奇妙なことでした。なにか急ぐ用事でもあつたのでしょうか。

二人は何事かとその場に立ち止まり男がだんだん近づくさまを眺めていました。

「やつと捕まえた」

男はやれやれとばかりに斧を降ろすと、それをつつかえ棒のようにして自分の体を支えました。大きな斧は袋に包まれて冷たい金属の部分は見るのが出来ませんが、多分怪物の血糊が残つて鈍く輝いていることでしょう。良くこの様な物を抱えて走つて来られたものだと感じました。どうやら彼女達が目当てであることは明白でした。

「私達に何か用なの？」

プエラが迷惑そうに言いました。

「呼び止めて申し訳ない。まさか直ぐ発つとは思わなかったもので」
「質問の答えてないじゃないの」

「そちらの娘と話がしたかったのだけど」

男はなにその体に似合わずもじもじしました。

「この人あなたに用があるらしいわ。私黙っているから」

プエラは呆れたようにすこし離れました。

彼は外套のフードで顔を隠している彼女の前に来て頭を搔ながら申し訳なさそうに口を開きました。

「俺は、あんたの技に惚れちまったんだ」

彼女は無言で返事をしませんでした。

「俺と一緒に仕事しないか」

続けて彼は直に自分の気持ちを伝えました。求愛の言葉で無かつたので助かりましたが、仕事のお誘いとはこれもはた迷惑な話です。「残念ですが。私の技は未熟ですしあなたのお役にたてません。それに先を急ぎますのご期待に添えかねます」

丁重なお断りの文句が帰ってきました。

「そんなことはない、あの怪物をなかなか仕留められなかったんだ。あんたの力によるところが大きい」

「それは少し早まっただけで、放っていても貴方が退治したことでしょう」

「そんなことねえ。俺はあんたの指示のまま動いただけだ」

「村では貴方を皆が讃えているではないですか」

ソシウスは少しだけ睨みました。

「あんたは俺を英雄に仕立ててそれで去ってゆくのか」

「それはお約束でしたでしょう？」

「俺をちゃんとした英雄にして欲しい」

「そこから先は自分の力で切り開いてください。その能力は御座います」

それでも男は食い下がります。

「あんたの技と俺の力があればどんな怪物が出ても怖くない。ここ

最近パテリアでは怪物騒ぎが頻発している。シルバの森やムルティ山脈など限られた範囲でしか生息でていないはずの化け物が村や町で見かけるようになった。パテリアになんらかの異変が起こっているようだ。ここみたいに怪物に襲われて村では困っているんだ。そこで俺達の出番というわけさ怪物退治の専門家として」

彼がしたがっている仕事についておぼろげながら分かってきました。

「では他の方を探して見てはいかがです」

「他の奴といってもアテはないし。それにあんたは實力ははっきりしている」

「申し訳有りませんがお誘いはお断り致します」

彼女は背中を向けると歩き始めました。慌ててプエラも後を追いかけます。彼は拒絶されて意気消沈したしまいました、直ぐに気を取り直しました。

「怪物退治は世の中の役に立つ仕事だぜ。あんたの魔法はなんの為にあるんだい」

男も後を追いかけてきました。プエラは振り返り二人のやり取りを交互に追いかけてました。

「自分の身を守るため」

少し間が空いて彼女は答えました。

「そんな優れた技を守るためだって！　もったいない。もっと社会の役に立てようや」

何も返事は返ってきませんでした。

「あんたが男装で旅をしているものそれなのかい。まあ、女二人旅はぶっそうだしな。俺を仲間に加えると変なのは寄ってこないぜどうだい。それに初夏で熱いのに無理してずきを被るのはしんどいだろう」

「私に着いてくると、災難に巻き込まれますよ」

彼女は厳しい口調で警告いたしました。

「面白いや。それじゃその災難をやつを、このソシウス様が撃退し

たら仲間として認めてくれるな」

「好きにきなさい。私は忠告致しました」

彼女たちはほとんど道を急いで行きました。男はフンを鼻を鳴らすと勝手に彼女たちの後に付いていきました。

「ねえ、あの人が付いてくるわよ大丈夫なの？」

プエラは心配そうに囁きました。

「悪い男でないことは確かなんだけど。どこかで引き離そう」

そのチャンスは必ず訪れると彼女は二人を伴って逃走の旅を続けたのでした。強敵の魔法使い達がやってくれば、この男も太刀打ちできないでしょうから隠れるように旅をしなくてはならないのは変わりませんでした。

ペコーは浮かない顔をして道を歩んでいました。背後に五人部下達を引き連れて道を急いでいたのですが、今回の仕事については大きな不満をもっていました。自分ほどの魔法使いがこんな田舎のしかも怪物退治に派遣されるなど心外なことなのでした。たかがジエヴォーごときに自分が行かなくてはならないとは信じられないことでした。彼の實力では100頭を一気に皆殺しにしてもよい位だったのです。彼は怒りを込めて現地に到着しだい早々とかたをつけて引き返そうと思っていました。

この国一の噂に名高い魔法使いがマールに潜んでいるとの情報もたらされ是非ともその捕り物に加わり敵の技をこの目で見たいと願っていました。セラペンスは彼を非常に馬鹿にしていたようで、ペコーを退けていました。俺の魔法の技がそんなに彼奴等より劣るのかと、彼奴等殺されてしまえば良いのと思っていたところ、セラペンス達が相打ちになったとの情報を得ました。そらみると嗤笑したものの、悔しさで一杯でした。次に魔法使い等に命じられたのは、「マールより十五、六の娘の魔法使いが逃げたので殺害せよ」との指令でした。おそらくはセラペンスの事件と関係した娘であるうことは察しられ、普通女の魔法使いは若くして成り難くあの魔法

使いの弟子であるという可能性が高いということは分かりました。

その娘、俺の手で始末してやると意気込んでいたところ、またもやジェヴォー退治という命令を受けてしまい彼の望みはうち砕かれたのでした。早くこの件を片付け復帰しないと他の仲間が娘を始末しそうです。焦りの心が彼の中に渦巻きました。かくしてペコーは五人の戦士を引き連れ強行軍をして、怪物の出る村にもう少しのところまでやってきたのでした。

夜通し歩いて仲間も少し疲れているようでしたが、程なくして村に到着すればゆっくり休ませその間自分一人でジェヴォーを始末しようと考えていました。森をどんどん奥に進んでいくと、反対側から人がこちらに歩いてくるのに出くわしました。

彼は意外そうな顔をしてその旅人を見つめました。

（ここは既に村近く、怪物が襲ってくる危険性もあるのに何故人が往来しているのだ）

見れば軍隊でも無いようであるし、しかも三人と少人数でした。ほどなくその姿ははつきりとし一人は少年、一人は娘、一人は大きな青年で有ることがわかりました。

（怪物は何処かに移動したのか？そうでなければ彼等の行動は無謀すぎる）

ペコー等六人は西へ、旅の三人は東へ、道の反対側からやって来た集団は出逢いました。

「そこの方、お尋ねいたす」

ペコーは立ち止まり三人を呼び止めました。

「なにか用か」

大きな体の男が前に出ました。

「ここに怪物が出るという話を聞いたが今はいないのか」

「ああ、退治されたんだよ」

ペコーは苦い顔をしました。

「村に行ってみれば分かる」

そう言う三人は去っていつてしまいました。

まったくなんと自分はいっていないのだろうとペコーは思いました。強行軍でやっと辿り着いたかと思いきや用無しなのですから。あのような旅人が往来するくらいだからその情報は本当であろうと彼はとらえました。どんどん遠くに去った行く後ろ姿を彼は恨めしそうに見つめました。その歩く姿をて彼は思いました。先ほどは気が付かなかったがあの子は少年は男装の娘だなど。

半信半疑で村に辿り着いてみると、そこは後かたづけの真っ最中でした。村の人々は怪物など何処にもいないような 陽気さに満ちていました。子供達が英雄ごっこで堀の上に上り上がり飛び降ります。一行は軍に司令官に面会に行きました。

「怪物退治にこられたと」

指揮官は気の毒そうな顔をいたしました。

「我々の到着するまえに全て終わつたと聞き及んでいます」

ペコーは煮える感情を殺して静かに挨拶しました。

「実はそうなんです。昨晚怪物は退治されました。せっかく救援にお出まし頂いたというのに申し訳ない」

「いや、それは喜ばしいことです。貴殿の勝利をお祝いたします」
儀礼的な賛辞を述べると指揮官は苦笑いをいたしました。

「我々が退治したのではないのだよ」

意外な言葉にペコーは何事が起こったのか興味が起こりました。

「僕には甥がいて、怪物五頭を一気に昨日仕留めたのだ」

「ご親族の方が全部ですと」

「しかもたった一人でだ。狡猾な化け物のなかなか捕まえられなかったのだが、一匹を仕留めたので他の仲間が復讐にきたところと平らげたといったところだ」

普通の者が五頭を相手に完全勝利とは考えられませんでした。

「その怪物の死体を検分したいだが。宜しいだろうか」

「それはかまわん。案内しよう」

連れら行ったのは村の広場でした。その一角に幕で覆われたと

ころがありそこに死体がありました。赤毛の毛に覆われた獣が五頭大きな体を横たえていました。それは動くことなく目を閉じ肉の塊と化していました。

指揮官の述べたことは本当でした。それでもたった一人で仕留めたとはいわかに信じられませんが。魔法使いの自分であれば十分可能あるいは引き連れてきた剣士五人が相手ならこれでも達成は出来るがこちらは無傷とはいかないのが正直なところでした。

ジェヴォーの死体を見ると大きな傷跡。肉が切り裂かれ骨が絶たれていました。かなり大きな得物で切断されているのがわかります。赤毛に吹き出した血がこびりついてさらに死体を赤く染めていました。一頭は首が無く、その隣に口を上にもつけ置かれていました。背中を断ち切られた一頭は白い背骨が外にはみ出ており、その近くのもは足が切り取られ別々に置かれていました。頭をうち砕かれ死んだ怪物の顔は一瞬のうちに殺されたかのように此方に目を見開いて死んでいました。

同様に頭を割られて死んだ獣の遺体を見ました。この死体は何処かほかのものと違ってどこかしら綺麗なような気がいたしました。ペコーは食い入るようにその死体を検分いたしました。

（これは雷撃の後。しかも技を押さえて心臓を確実に狙っている。多分即死だ。この額の傷はその後につけられたものである。すると魔法使いがいたのか？）

彼は自分の推理を確かめるべく最後の死体を調べてみました。

（この死体にはあちら此方に雷撃の傷跡が残っている。先ほどと違って技を押さえることもなく放ったものだ。しかもこの額と首の切り傷が刃物に偽装した魔法の傷跡）

ペコーはこの戦いに魔法使いが関与したことを確信いたしました。

「昨晚魔法使いはここにいましたか」

「魔法使い？ それはいいないが」

指揮官は本当に知らないようでした。

「では、あなたの甥御さんに会わせてもらえませんか」

指揮官はまた気の毒そうな顔を致しました。

「残念ながらもうこの村にはいない。此処に来る途中に出逢いませんでしたか体の大きい男に」

確かに旅の三人と出逢い、一人は何かを背負った大男でした。あれがこの怪物を倒して男だったのかと記憶の中の姿を捉えました。では魔法使いは何処に？

「甥の奴、昨晚訪れた娘にぞっこんでな。その娘の後を追いかけていつてしまったのだ。紹介したかったのだが」

指揮官は口惜しそうでした。

「その娘は昨晚この村にやって来たと」

「おおそうだが。娘が二人連れで甥を訪ねてきた。どういう知り合いか分からぬが、甥はその片方の男装の美しい娘にぞっこんでな勝利の祝賀に娘を引っ張り出すと自分の座っていた主賓の席に座らせてもてなしておった。」

男装の娘と聞いて道で出逢った一行の中にいたフードで顔を隠した少年らしき人物の姿を思い描きました。

（勝利の席で娘を上座に座らせたのだ。これほどの武者男。娘を好きなのではない、勝利者として礼を尽くしたのだ。魔法使いはその娘に違いない。そう考えれば辻褄があう。雷撃の後がハッキリ残った死体は娘一人で倒したものだ。しかも傷跡の小細工をして。そのあと男と共同で四頭を退治したのであろう。こんどは確実に雷撃を押さえ男が殺したように見せかけた。それまで彼は怪物を退治出来なかったところに娘がやってき、途端に解決してしまった。あの娘以外考えようがない）

ペコーにはこの怪物退治の裏側が見渡せるようになりました。この戦いは勇者と魔法使いの共同作業によってなされたものであることを。そこで再び疑念が沸き起りましたこの娘何故、正体を隠す？男の活躍劇に仕立てる必要があるのであらうかと考えました。

（この娘、まさか十五、六なのか。我々が仕留めようとしているのはこの歳の魔法使い。世の中に若い女の魔法使いはいないことはな

いのだが、技の傾向が違ふし仮にそうだとしても貧弱なはず。ところがこの娘の雷撃は若い青年の様な戦気に満ちている。そういえばこの道はマーレより山越えして北に向かう道。十分その可能性はある)

自分の出した結論にペコーは興奮気味になりました。

「その娘歳はいくつぐらいでした」

奇妙な質問をするものだと思指揮官は首を傾けましたが

「十五、六ぐらいですか。自信はないが」

と答えました。

ペコーの眼が輝きました。

不運続きでこんな田舎の雑用を命じられ腐つていたところに、転がり込んだ幸運。このチャンス逃すまいと彼は思いました。あのいつも見下した眼差しのセラペンスが成し得なかったことを自分が果たせるかと思うと興奮を抑えられませんでした。これでセラペンスという抑圧された石から解放されると分かるといてもたつてもおられませんでした。彼は心の中で誓いました。この得物は俺が仕留めると。

「ねえグレーティア。彼て本当に仕事仲間なんて探しているのかしら」

プエラは彼女に肩を寄せると囁きました。

「そうじゃないのかなあ。本人がそう言っているし」

「信じ過ぎじゃない」

「そう?」

「あんだ、自分が女の子である事を忘れているでしょう」

「どうして」

「女としての先輩から言わせると無防備すぎるのよ」

彼女には大男が直に仕事仲間誘っているとは思えないのでした。

「ちょっとシャクだけど。あんたは美人の娘なの。変な男なんてわ

んさか寄ってくるものよ」

「それで、彼がそれてこと？」

「その可能性ありよ」

プエラは厳しく言いました。

彼女はあまり気にはなりませんでしたが。それらは払っても払ってもやって来る蠅のようなもので、鬱陶しいことはあっても悩まされるものではなかったのです。むしろ彼女の一番の気になるものは命を奪いに来る魔法使い達でした。このまま見つからずに目的地まで到着出来ないものかと切に願っていました。むしろ何処までも後ろを歩いてくる彼の心配をしていました。彼に關係ないことで危険に巻き込まれては不憫です。どうしたものであるかと彼女は思案いたしました。

第4回 旋風とともに（後書き）

師ビルトスの最後の言葉の「仲間が守ってくれよう」と言った最初の仲間が登場です。彼の斧は特大でこれで怪物をばっさりします。

そもそも現実でも巨大な武器は馬の足を切り落とすとか鎧ごと力技で粉碎するのに考案されたものです。

かなりの破壊値力があるものの体力がないとだめですね。

怪物のジェヴォーはもののけ姫に登場する狼をイメージして頂ければよいでしょう。この翡翠記では魔法が何でもかんでも出来る様には設定してありません。例えば主人公がワープして逃げるとか変化の術を使うとかです。（ただし終盤の真の敵はこのような敵が登場しますが）

従いましてかなり地味な魔法になっており、アクション優先と言えるでしょう。

第5回 追跡者との遭遇（前書き）

<登場人物>

ビルトス 主人公の師

グノー 主人公の兄弟子

グレーティア 主人公

プエラ 主人公の幼なじみの娘

ソシウス 斧使いの大男（旋風のソシウス）

ホステイス ヘテロ国魔法宰相

セラペンス ビルトスと死闘した魔法使い

ペコー セラペンス配下

第5回 追跡者との遭遇

もう次の村が近くなったところでした、怪物騒ぎでこの道ですれ違ふ人はなく、前に通過した6人の旅人以外は出逢いませんでした。曲がりくねった森の道を進むと突然森は終わり開けた場所が目の前に広がっていました。森は遙か彼方に遠ざかり草地が見渡せ、道はこの草むらを緩やかに上下し消えていました。この草地はマーレの牧草地を連想させましたが、牧畜が放し飼いになっただけでもなくあちらこちらと草が生い茂り深いところでは人の背丈ぐらいになっただけではありません。この草地は放牧の為にあるのではなく森の火災によってもたらされた土地のようでした。その証拠に草地になった平地に黒く焼けた姿を残した木々がまばらに残されていたのでした。そしてそれと入れ替わるように若い木々があちら此方と草むらに立ち枝を広げていたのです。大地は草で覆われていましたがその姿は草むらから顔を現した多くの灰色の巨石によって伺い知る事が出来ませんでした。表面は木々や草花に覆われていましたが、この土地は石が多く耕作には向いていないのがなんとなく分かりました。森を抜けたせいでしょうか、天井から降り注ぐ光が幾分強くなったようでした。三人の蔭が地面に蔭を鮮明に落としました。

開けた場所のためか背後から幾人かの集団が追いついてくるのが分かりました。随分急いでいるようです。度々後ろを振り返ると、その人の姿は大きくなっていくのです。その装束は見覚えのあるものでした。村を発つて暫くしてすれ違った一行に大変よく似ており多分その人々に間違いないでしょう。彼等は役目が終了し次の目的のため道を急いでいるのでしょう。大変な早足でした。もちろん此方は女の足の旅であり先に進まなかったという理由もあるでしょうが、この調子でしたら程なく追い越されてしまうのは確かでした。

「そこの旅の方待たれい」

後ろから呼び止める声がしました。

一同が振り返るとそこには朝会った一行が横一門になって整列し立っていました。その指揮官らしき男が進み出ると両手を腰にやり、こちらに挑むようなそぶりをみせました。

「なんの用だ」

ソシウスが彼女等の前に立ち男をにらみ返しました。

「なるほど、おぬしがジェヴォーを三頭しとめた男だな」

「そうだ。俺に文句を言いに来たのか」

「お前に用はない。その男装の娘に用がある」

男は冷たく言い放しました。

「俺は彼女等のボディガードだ。それは駄目だな」

「なら仕方ない」

と言うやいなやペコーが意を込めると。ソシウスの大きな体は風に飛ばされる布の如く一瞬にして草むらの中に吹き飛ばされてしまったのでした。この技に彼女等は驚き、目の前にいるのが魔法使いであることを悟ったのでした。

ついに恐れていた魔法使いが目の前にいたのでした。その自信に満ちた姿は幾重にも恐怖を彼女に呼び起こしていました。このまま戦えば完全に破れてしまうのは目に見えています。かといって戦いを避ける方法などありませんでした。この場で出来ることといえば会話をもつてこの状態を回避することだけでした。

「娘。お前に尋ねる。ジェヴォーを二頭殺したのはお前だな？」

恐喝めいた言葉が投げかけられました。

「その通りです」

「どちらから来た？」

「ベナールからです」

「確かあそこの門には石像があつたが1体だつたかな2体だつたかな？」

「そのようなものは有りません」

ペコーはフツと笑うと娘をしげしげと見ました。

「なかなか賢いな。ひつかからなかったか」

男はどうやって口を割らせようか考えている様子でした。

「魔法は誰に教わった？」

「ガツリアのサスマンスという方に教わりました」

「知らないな。女に攻撃魔法は修得困難。それは情緒不安定で力を制御出来ないからだ。その技を若い娘に教えたとなると相当の術者のはず。名を知られていて当然ではないか」

「師匠は隠者でしたので」

男は失笑しました。

「お前の歳は幾つだ？」

これは何かあると察した彼女は逆に問い返しました。

「何歳と思われまっすか？」

ああいえばこう答える。この娘に会話は不要とペコーは判断しました。男は火炎の技をいきなり繰り出してきました。

彼女はとつさに反応し技に数字を当てて相殺しようとしたが、相手が強く適わず外套を炎に巻き取られてしまいました。男の繰り出した技は殺傷目的でなく外套を剥ごうとしたもののようでした。

「やっと。顔を見せたか。なるほど年の頃は十五六だな」

「少し強引ですね」

「目的を達成するためにはな。我らの目的は十五六の魔法使いの娘を殺すことだ！」

もう会話で逃れるのは不可能でした。敵は完全に攻撃体勢に入っていました。

「何故その年の魔法使いを標的にする？」

「知らんな。そう命令が来た」

ペコーが首を振ると背後に控えていた男たちが進み出て剣を抜きました。

彼女は引きつったように立ちすくむペエラに声をかけました。

「君はその大きな岩の後ろに隠れて、早く！」

ペエラは心配そうにしましたが、足手まといになることを分かつ

てか足早に岩陰に隠れました。

男達の一人がプエラを追いかけてしようとしましたが、ペコーがそれを制止し列に戻させました。彼等の目的は彼女一人のようでした。彼女は背負った背嚢を静かに降ろすと腰に下げていた剣を抜きました。小手試しに一人の男が挑み掛かってきました。両者一定の間合いをとって牽制仕合ます。剣先と剣先は接触し軽く反応します。お互いになかなか踏み込めません。彼女はビルトスにより剣の技を習得し敵の間合いをとる技術に優れていたものの、敵の男はかなりの使い手で用意に隙を作りません。一人剣で倒すには大変な労力が必要そうでした。これは敵の指揮官のペコーにしても少々以外な展開でした。彼が連れていれているのは剣の腕に自慢がある者達なはずでしたが、彼等を相手にして若い娘が互角の戦いをしているのでなんという娘だと舌を巻いていました。

彼女がバネのある飛び込みをみせ、男との間合いを詰めました。剣と剣がシャーッシャーッと擦れ会いお互いに剣を流し合いました。お互いに剣先が相手を貫こうと刃が突き出されますが、剣と剣が粘り着いたように離れず攻防が繰り返されました。やがて男が心臓を狙って踏み込みこむと彼女は身を引きながら流れにそって相手の手首を切りました。男の手から剣が地面に落ちました。男達は仲間が傷つけられたことで娘に対し警戒を強めました。娘一人と侮っていたのが間違いであることに気が付いた男達は4人一度に挑みかかってまいりました。

これには彼女も防戦一方。一人でもやつとのことなのに4人一度に挑まれては囲まれられないようにするだけでも精一杯でした。苦しくなった彼女は魔法の技をもって彼等を撃退するしかありませんでした。男達が魔法攻撃のラインに並んだとき雷撃を加えようと魔法の言葉を発しようとしたところ、その言葉はことごとく相殺され技はその手前で消失してしまっていました。彼女は目前におこった現象に目を疑いました。自分の放った魔法の言葉の数字にことごとく補数がぶつけられ無力化させられていたのです。これはペコーの放

した魔法数字の変換技でした。彼は娘の捕り物で部下を失っては仲間の笑いにされてしまうので魔法の技を奪い去ったのでした。魔法が封じられては勝算の見込みがありません。彼女は身を翻すと草むら目がけて走り出しました。草むらは隠れるには最適ですが逃げるには不利でした。彼女は草をかき分け逃げますが、その分けられた後を辿って男達は追いついてまいります。背後の敵を迎えての逃避は困難でした。もう少し手捕まりそうになったところで草むらの中から大きな男が飛び出してきました。それは先ほど魔法によって飛ばされていたソシウスでした。彼が斧を振ると先頭の男は袈裟切りにあって地面に倒れました。

すると草むらのなかから炎が燃えあがりました。炎は勢いをつけて男達の行く手を阻みます。背後で指揮をしていたペコーは異変に気が付き火炎を封じると炎の壁は消えて黒く焼け残った大地が姿を現しました。男達は娘の姿を見失っていました。

ペコーは巨岩の頂に立つと辺りを見渡しました。黒焦げた大地に立ち上る煙以外動くものの姿は見いだせませんでした。逃げているのならば草が揺れるはずですが、そういった様子もありませんでした。標的はまだ近くにいると察した彼は部下に逃げた方向に広く展開するように指示いたしました。

彼女とソシウスは草むらに潜み追つての様子を窺いました。

「あなたは怪我をしてませんか？」

「不意打ちでもいっきり魔法をくらったが、この通り大丈夫だ」

「それはよかった」

「言っていた災難でこいつのことかい？命を狙われているとはな」

「だから忠告したはず」

「勘違いするな。ここから俺の出番でことさ」

彼女は呆れたような笑い顔をいたしました。

青い光るものが彼女の回りに生じると四方に飛び去りました。探查の目です。

「この辺りは草がかき分けられた道が出ています」

「あの村の前がこの草地で怪物退治をしたからだ。縦横無尽に出来ているだろう」

「敵の魔法使いは岩の上にいます。他のものは 横一文に並び散会して此方に迫っています」

「俺達の居場所が分からないということか」

「彼等は魔法使いの援護を受けています。多分あの魔法使いは私たちの背後に火炎を起こし仲間の前に追い込むことでしょう。剣士たちに我々が接触すると魔法使いがやってきます。そこで追い込まれる前に剣士に近づき各個撃破を致します。倒した後草地に出来た道を使って魔法使いがやって来るまえに急ぎ離脱します」

「よし。再びチーム結成というわけだな」

「ここから一番近い敵が二本の道の合流点に近づきます。私は正面の道から相手に姿を見せますが、貴方は側面の道から侵入し背後を襲ってください」

二人が移動をしようとしたところ背後から地面を叩くような大きな音がしてきました。これまで聞いたこともないような音でした。それがなんなのかは分かりませんが、魔法使いの追い込む技が始まったのだと理解できました。

追つての男は警戒し草むらを分け入って行きました。背丈ほどに延びた草は周囲を隠してしまします。まったく前が見えない状態で進んでいくと切り開かれた道らしきものに出ました。そこで見たものは背を向けて潜んでいる娘の姿でした。音を立てないよう近づいて一気に仕留めようとしたとき背後から草を折る音がして、振り向くと宙に舞って斧を振り落とす男の姿が目にはいりました。

頭を割られ横たわった男を確認するまもなく二人はその場を離れました。異変に魔法使いも気が付くはずですが、相手が対応するよりも早く移動すれば、草地という隠蔽生を最大限に生かして優位な戦いをする事も出来るはずですが。

「今の異変に気が付き二人が進路を変え、魔法使いが急速に移動しています。一名離れてしまった敵を二人同時に襲いかたづけましょ

う」

ペコーと二人の剣士が着いてみると、そこには頭を割られた仲間が横たわっていました。彼は二名も仲間を失ったので怒り心頭いたしました。まったくいい娘でした。こんなことなら、つまらぬ会話で遊ばず殺しておけば良かったのだと甘くみた自分を許せませんでした。そんな思いを巡らしていたところが、またしても叫び声がしてきました。反対の方向、多分仲間が殺られたのだと分かりました。

配下を一枚また一枚と剥がされて残り二人しか残っていないことに、作戦に甘さを痛感しました。これまで魔法においては娘を遙かに凌駕している自身がありました。それを使わなかったのも配下に露払いをさせ留めは自分が刺すという形式にこだわったところがありました。さらに配下を敵に近づけさせていたので、自分の技に仲間仲間が巻き込まれてしまうのを恐れていたのです。残った部下二名は自分の傍らに控えているので、自らが全力をもって敵を屠る時が来たと判断したのでした。

ペコーは近くにある俵積みのように組上がった岩に登ると仲間の断末の方向を向き大地に火炎を放しました。魔法の火炎は爆発したかのように勢いよく燃え広がり瞬く間に辺りを火の海にしました。彼のねらいは背丈ほどの生い茂った低地の草むらから彼等を追い立て、見通しのよい足首ほどの草が広がる小高い丘に走らせることでした。

「どうやら、魔法使いが本腰をあげたようです。この火の手で岡に走らせるつもりです」

「あんたの力で火は消せないのか？」

「魔法の言葉のレベルが高く聞き取れません。逃げるしかないですよ」

「ならしょうがないな。全力で逃げるぜ」

岩の上から眺めていたペコーは岡のすそ野の草地が大きく動くのを認めました。やがて二人の走る姿が現れその位置を捉えることがで

きました。するとペコーは呪文を唱えると、地面に転がっていた小石が沢山浮かび上がり天空に舞うと勢いをつけて雨のように二人に落ちて来たのでした。

逃げていた二人は突然背中を叩かれ思わず地面に倒れました。周囲に小石が無数に落ちる音がして、地面に辺り跳ね返った石は岡を転がりました。ここで彼等は石を操る魔法が使われたのを知りました。幸い当たった石は小さく打撲程度でした、しかしこれが頭を直撃していたら死んでいたかもしれません。まだ魔法使いとの距離があったので攻撃に甘さがあるのでしょう。その技は広範囲に行われたので石の密度が薄くなったことが軽傷で済んだ理由です。しかし音もなく飛んでくる石は脅威でした。魔法使いで近づけばもっと正確に威力をました石の攻撃が行われるはずです。

二人が痛さを堪えて立ち上がると。二手目の攻撃が無数に宙を舞っていました。彼女はその術の数値を書き換え軌道を逸らそうとしましたが、理解出来ない数式でした。再び地面を石が叩きます。今度は不意を突かれるたのでなく待ちかまえていたので何とか避けることが出来ましたが、石の落ちる範囲は狭まり避ける空間が少なくなっていました。しかも前より威力を少し増したようです。魔法使いは追い始めているようです。

このまま遮るもののない場所には何時頭を碎かれても不思議ではありませんでした。二人は近くにある灰色の岩がいくつも飛び出している所を目指して走りました。走る背後や両脇に石の雨が音を立てて落ちてきました。そして二人はやつとの事で巨石群まで走り抜け辿り着いたのでした。気が付けば疲れ切っていて肩で息をしていました。逃げ込んだその場所は飛び出した岩が天井のようになって上空からの石の攻撃から不防いでくれそうです。石の攻撃はこの場で防げそうでしたが、魔法使いに追いつかれてしまうのは問題でした。石の攻撃が幾度となく繰り返され二人はこの場から離れることが出来ませんでした。石を受け止める盾の様なものがあれば良いのですが都合良く落ちていることなどないのです。彼女は状

況を打開するため放される魔法使いの呪文に挑戦してみました。しかしそれは難解で理解できません。魔法使いがやってくるという現実を目の前に焦る気持ちを静めながら彼女は呪文に集中します。するとその言葉の末尾になんらかの閃きを感じたのでした。

繰り返される攻撃に慣れてきたころ石の攻撃に変化が現れました。いままで上空から降るように落ちてきた石が投げつけられたかのように横から飛んで来るようになったのです。岩陰から辺りを見渡すと魔法使い達が直ぐここまで迫ってました。急ぎその場を去ろうとしましたが横殴りの石の雨が襲いか掛かり二人を逃しません。隠れた岩に石と石が当たる鈍い音が響き渡ります。石の威力は随分増したようでした。

こうなつては接近戦を挑むしか無いようでした。離れていては石の餌食になってしまいます。二人は意を決して魔法使いを待ちかまえました。岩陰から飛び出すと彼女は渾身の雷撃を放しました。魔法使いはそれに動じることなく、それを軽く受け流しました。その間ソシウスが俊敏な動きを見せ魔法使いを捉え斧で切り裂こうとしましたが、敵の剣士二人に遮られ強襲は失敗いたしました。そのまま二人の剣士をあいてにソシウスは果敢な戦闘を繰り広げたのでした。一方彼女は魔法技で攻撃しましたが効果がなく剣技によって多戦おうとしましたが、石の攻撃を四方八方から受け避けるのに必死でした。今までの石の動きは放された石のようでしたが、間近では石が空中で自由自在の変化をして襲い掛かってきたのでした。魔法使いはその必死に交わす姿をみて楽しんでるようでした。彼女が苦し紛れに雷撃を放すと、魔法使いは呆れたような顔をしました。

「これが得意なようだ。では見せてやろう上位者の魔法を」
ペコーはそう勝ち誇ったようにいうと技を放しました。太い閃光を伴った雷撃は悲鳴をあげ彼女の横を抜け背後にある大きな岩を粉碎しました。それは中を電導するのみならず意識を乗せて破壊するものでした。魔法使いは勝ち誇っていました。

一方ソシウスは二人の剣士を相手に戦っていました。彼は大きな体をもち重い斧を持つにも関わらずその動きは俊敏でした。二人を相手にして動き回り敵の一人を中心に對極に動き常に一対一を保っていました。敵の背後の者は前の者が邪魔で攻撃参加が出来ないのでした。ワザと隙を作ると敵はそこを突いてきました。上手く交わすと右手を切り落としその円運動のなかで首を切り落としました。残った敵は仲間の首が吹き飛んだので一瞬動きを止め棒立ち状態になった所を回転力を伴ったソシウスの斧を腰にうけ上下に切り落とされたのでした。

魔法使いは背後に起こったうめき声に驚き振り向くと二人の部下が倒され返り血を浴び鬨志の眼差しを此方に向ける大男に気が付きしました。娘に夢中になって只の男を忘れていました。背後でこそこそ悪さしていた男に怒りが爆発しました。今まで娘を襲っていた石は方向を変え勢いよくソシウスを襲いました。魔法使いばかりに気を取られた彼はそのことに気が付かず攻め込もうとしたところ突然石が空間を埋めたので驚きました。とっさに斧で顔を守ったものの全身に石を受けて意識を失い地面に音を立てて倒れたのでした。邪魔者がいなくなつて魔法使いは気を取り直し、五人の配下を失った礼をこの娘にどうやって償わせるか考えていました。地面から無数の小石が宙に舞い勢いをつけて回転しました。石の唸る音が響き渡ります。

かの彼女は空気を操り石の動きに歪みを生じさせようとしていましたが、それも魔法使いによつていとも簡単にうち消されてしまいました。隠れる岩まで少し離れています。このまま切っ先が届くほど魔法使いの懷に飛び込めるか疑問でもありました。得物を仕留めようという目とそれから逃れようという目がにらみ合ったまま時が過ぎました。

空気の唸る音がして右の方から石が襲つて来ました。彼女はその方向に両手を向けると必死に耐えようとしていました。すると勢いよく飛んできた石は何個かは当たりはしたものの多くの石は素通りして

草地を叩いたのです。この様子に魔法使いは驚きました。

「貴様。俺の技の数を書き換えたな！」

娘の魔法は未熟で自分の呪文が読みとれぬはずなのに、明らかに書き換えたのは事実でした。遭遇してわずか数分というのに技を帰してくるとは恐ろしい限りでした。この娘脅威の速度で成長しているとペコーは実感しました。なるほど上の者がこんな娘を恐れるのもこれが理由なのかもしれないと彼は思いました。

ペコーは試しに火炎を軽く放してみました。すると以前の実力では火だるまになるはずが服を焦がした程度で終わってしまいました。渾身の一撃ではなかったものの確実に技を交わし初めていました。

再び石を飛ばして石を正面と左手より襲うと娘は正面の石は全て軌道を逸らさせ、左手の攻撃は半数は防いでいました。娘は痛さに耐えかね膝をついていました。休む暇もなく三度目の攻撃を四方から仕掛けると、二方は完全に軌道を変え残りの二方は半数が地面を叩きました。娘は苦しみ地面に倒れました。

次第に自分の技が交わされ始めたので魔法使いは、戦い慣れしてしまうまえに勝敗を決しなくては思い至りました。このまま火炎にて焼き尽くしてもよかったのですが、自分を技を破った礼はしなくてはなりません。視点を娘の背後にやると先ほどまで石の攻撃を必死に耐えて潜んでいた辺りの大きな岩が目にとまりました。人が五人縦に並んだような大きさの片方に平たい面をもつ灰色の岩でした。この娘の墓標に丁度良い。この岩の下敷きにしそのまま葬ってやろうと妙案を考えたのです。

魔法使いは手をかざすと大きな岩は音をたてて地面から抜き取られ、宙に舞い上がりました。まるで重さが無いように漂っていました。だが、その岩肌から受ける印象はとてつもなく重いものでした。巨石は魔法使いのところまで引き寄せられると彼の頭上で止まりました。

彼女は石の攻撃を受けて打撲で体が痺れて動けませんでした。伏した状態から魔法使いを見上げると勝ち誇った姿にその上には大き

な岩が宙に舞っているのが分かりました。多分この男はこの巨石を地面に叩きつけるつもりであることが分かりました。あれを避けるだけの能力はありませんでした。諦めのような気持ちが起こると最後に男に確かめたいことがありました。

「どうして命を狙う？」

喘ぎながら彼女は言葉を発しました。

魔法使いはセラペンスをもうすぐ越えられることに狂喜し答えました。

「お前が災いの種だからだ。このパテリアが滅ぶんだよ。俺達だけでなくお前の両親や兄弟を道連れにしてな」

魔法使いの笑いが高らかにしました。

彼女は帰された答えに沈黙しこのまま自分が消え去ることを覚悟しました。

巨石が振り落とされようとしていました。彼女はじつと目を閉じ死の到来を待ちました。

空を引き裂く音がして彼女は思わず瞼を開きました。目の前に映っていたのは刃物で切られた様に真つ二つになった巨石とその延長線上、頭から左右二つに切り裂かれた魔法使いの姿でした。一瞬の出来事でしょうか二つに分かれた顔は喜びに満ちたもののままで、当人にも状況判断をするいとまもなく切り捨てられたようでした。

主を亡くした岩は大地に二つになって地面を揺さぶり土煙りを立てて落ちました。と同時に魔法使いも血しぶきをあげ地面に倒れ右と左は分かれて転がりました。何が起こったのか彼女には理解できませんでした。新たな敵というのでしょうか。暫く体を横たえて痛みを堪えていると痺れは治まり起きあがるようになりました。彼女は魔法使いの遺体に近づきました。屈強な魔法使いが撫防備に殺られてしまうのだろうかと恐怖にも似たものを感じました。戦いが始まってから仕掛けていた探查魔法には誰もこの場に近づいた痕跡がありませんでした。この探查網をかくぐり魔法使いに全く気づかれず魔法を技を繰り出しているのです。しかも巨石が果実を切る

かのように鏡の様な面を作って切り落とされこれほどの鋭い大業は相当な使い手です。しかしそれらしい魔法使いは姿を現すことがなく静まった大地に鳥のさえずりと日の光が降り注いでいるだけでした。

彼女はソシウス助け起こすとやつと彼は意識を戻しました。石が随分からだを直撃していてまだ体が痺れています。

「あんたは大丈夫だったかい」

ソシウスは彼女の事を心配しました。

「大丈夫。魔法で急所は外したから」

「そりゃ良かった」

彼は辺りを見渡し魔法使いが倒されたのに驚きました。

「あれ、あんたが殺ったのか？」

「いいえ、高位の魔法使いがしたようです」

「顔を見たのか」

「見ていません。私たち全てに気配を消して近づくほどの恐るべき使い手のようです」

自分は何故助けられたのだろうと彼女は思いました。密かに自分を救ってくれる魔法使いがいるのであろうか、その人はどんな人なのであろうか。今思い当たるのが兄弟子のグノーの存在でしたが彼は遠くにあつて此処にはいないはずでした。今はどこかの誰かに助けられました。しかし彼女を追跡する魔法使いは一人だけではありません。急いで旅を続けなくてはなりません。二人は岡を下り生い茂る草むらに分け入り程なくして道にでました。脱ぎ捨てた背囊が地面に転がり焼けこげた外套が傍らの草地に落ちていました。これはもう着れそうにもありませんでした。

プエラの姿を探し求め岩の側に近づくと、その蔭で小さくなって怯えている姿を発見しました。彼女は元気な姿を見せるとプエラは涙を流してしっかりと抱きつきついてきました。あまりにも怖かったのでしょうか。なかなか泣きやみませんでした。これにはソシウスも同情し敵は全部やつけたから心配ないとなだめたのでした。

プエラは暫くすると気も治まり、ふたりが傷だらけなことに気が付きました。特にソシウスの服は血糊がついていたので気持ち悪そうにしました。そこで彼は近くの小川で服を洗うことにいたしました。

二人は傷を負い手当が必要でした。ソシウスは次の村を過ぎると町になり、そこに自分の家があるので頑張つてそこまで歩み治療することを提案致しました。彼女も打撲が激しく何らかの手を講じる必要性があつたので同意いたしました。

かくして、一行は激戦の傷を負つたまま長い道のりを歩んだのでした。

ソシウスの町は緑の屋根にクリーム色の壁をもつ家々が立ち並ぶ町でした。マールは海が見える港町でしたが、この町は森の緑深い森に囲まれていました。背後にはアグラチオの一つの岳が青くそびえ立ち、朝には町全体を霞が覆いつくすので森の中にひっそりと隠れ住むようでした。ソシウスが案内したのは外れにある一件の家でした。夜に到着したために家並みや町行く人々に出逢うこともなくただ導かれるまま、今宵の宿に到着したのでした。

玄関に立ちソシウスが戸を叩くと中から女性が出て参りました。

「無事に帰って来たのね」

女性は嬉しそうに彼に抱きつくの家の方に向かって叫びました。

「お母さん。ソシウスが帰ってきたわ」

すると年輩の夫人が現れ抱擁いたしました。二人の女性はソシウスの様に大きくはなかったものの、随分背の高い人達でした。何処となく親子であることが分かりました。

「お前が怪物退治に出かけたので随分心配したのだよ。もう終わったのよね」

「もちろんだ。そうじゃなかったらここにはいない」

「ならいいわ。もう危険なことは止めて頂戴」

お母さんらしき人から厳しい言葉が発せられました。ソシウスは

困った顔をして返事が出来ませんでした。

するとお母さんはやっと彼の後ろに二人の人が立っていることに気が付きました。夜のこともあり闇にとけ込んでいたので、お客さんの事など思いもよらなかったのです。

「あの方たちは？」

「彼女達は俺の仲間さ」

お母さんには暗くてよく分かりませんでした。一人は女性の服装でしたが、もう一人少年のように見えました。すると二人が玄関に近づいて挨拶をしてきたのでした。よく見ると二人とも若い娘で男装の方は服装に反し綺麗な顔立ちをしていました。まったく女つ気ない息子が二人もの女性を連れて来たのでお母さんは慌てて笑顔で迎え入れました。

「突然の訪問でなのでおもてなしもできないけど、お入りなさい」

「有り難う御座います」

二人が招かれるまま奥に行くところにはソシウスに似た男の人がくつろいで椅子にもたれかかっていました。突然に訪問者に驚いた様子で夫人が合図するまで口が開いたままでした。年輩の女性がソシウスのお母さん、椅子にもたれかかっていたのは長男の方で最初に出迎えた若い女性は三女でソシウスの姉でした。父親は病気で何年前かに亡くなっておりその姿はありません。皆背が高く一家であることは良くわかりました。

「傷の治療に帰ってきた」

ソシウスはぶっきらぼうに言いました。

「なんだ治療だ。家は病院じゃないぞ。唾でもつけておけ」

お兄さんは煙たそうに言葉を返しました。

「酷い言いぐさだぜ。あの娘も怪我しているんだ」

「なに。何故それを早く言わない。それは大変なことだ」

兄はニコニコ顔になって薬箱を探しに行っていました。お母さんは息子が怪我をしたことを知り大変心配いたしました。よく見ると息子の体には大きな痣が沢山出来ており腫れ上がっていました。

同様に娘さんにも白い体にいっぱい痣が出来ていました。お母さんは二人揃って崖から落ちたのではないか思いました。怪物から食べられてしまうことを考えたなら傷は軽いともいえましたが素人目にはよく分かりません。まだまだ二人には痛みを耐えている様子が見受けられました。尋ねてみると怪我をしたまま町まで歩いてきことが分かりました。それでは腫れが治まるはずありません。

お母さんは筋挫傷や酷いときには内挫傷の心配もあるので二人を医者の中へ連れていったのでした。見立て結果どうやら打撲以外の心配はなく医者は二人を安静にさせ、患部を冷やしました。そして二人は湿布を張られ、包帯で圧迫固定をうけたのでした。2、3週間て治りそうなので一安心して一同は家へと帰ってたのでした。

三日が経ちました。この間安静にしていたのでソシウスの腫れも治まり動き安くなっていました。でもまだ痣だらけでした。

「まったく怪物退治の英雄がだらしねえなあ」

小馬鹿にしたように兄はせせら笑いました。これはこの人の癖のようでした。

「なんだ俺の噂広がっているようだな」

自慢そうに弟は鼻を弾きました。

「一人で五頭を相手だってな。それはそんな時の傷か？」

「いや違う。もっと恐ろしい敵との戦いの傷さ」

「なんだ、他にも喧嘩してたのか」

お兄さんはあちらこちらに手を出す弟に呆れました。

「もう少しで殺されるところだった」

ソシウスは戯けました。

「その殺されそうになったのは。あの娘が関係しているのだろう？」
間髪を入れずに兄は訊いてきました。

「そうなんだが」

「あの娘何者だ？」

真顔のお兄さんの顔がありました。

「俺も知らない」

怖くなってソシウスは正直に白状しました。

「あの娘。わずか三日で傷が完治してしまったているぞ普通じゃない」
「それは本当か」

「痣もすっかり消えて信じられないとお袋が驚いていた」
ソシウスは黙り込みました。

「お前あの娘とともに旅をしようと思っているだろう？」
「それは・・・」

「凶星のようだな。だが止めておけ。災いに巻き込まれるぞ。あの娘にはなにかある」
厳しく戒める兄の忠告でした。

プエラは上機嫌でソシウスの家の門をくぐって庭を躍り出てまいりました。庭には花壇がこしらえてあって色とりどりの草花が花を咲かせていました。蜜蜂が羽音を立てて飛び交い蝶ははひらひらと舞い賑やかでした。

町を出てから急ぎの旅で歩き詰めで疲れ切っていました。足には豆ができるし膝を痛くなっていつて、もうこれ以上歩けないと思っていたのでした。ところが旅は三日間のお休みとなりゆつくりのんびりと過ごすことがせて本当に幸せなのでした。三日目には元氣も出てきたのでプエラは町を散策に出かけていたのでした。初めて見る町は新鮮でした。海に見える町しか知らない娘にとって山間の町は落ち着いた趣の町に感じました。

「どうしたのですか？」

悩ましそうに首を傾げるソシウスのお姉さんを見かけたのでプエラは声をかけました。

「あら、プエラさんね」

「服のお片付けですか」

プエラが近づいてみるとしまい込まれた服を整理しているように見えました。

「貴方のお連れの娘。服が焼けこげていて可哀想でしょう。調度い

「私のお古はないかと思つてね探していたの」

「それは有り難う御座います」

「でもねえ。私ノッポでしょう。合いそうなのないの」

「そうですか」

「だつたら私に良い考えがあります。お手伝いお願いできます？」

グレーティアはベッドに横たわり天井にむき出しになった太い梁を眺めていました。それは木の曲がりくねって姿そのままに加工されており四角い建物なのに中は面白いつなぎ合わせをしていました。追われている身を忘れられるような落ち着き感が何故か得られました。それにしてもあの医者の治療はたいしたものでした。わずか三日で傷が癒えてしまったのですから。痣も全く消え信じられないことでした。その時彼女はふと思いました。それともこれは医者以外のものなのか……。師匠が亡くなってからいろんな事が起きるものだと思います。

彼女は魔法使いとの戦いを思い起こしました。あの男はこれといった手がかりもなく自分を襲ってきました。かれらが特定した理由というのが十五、六の魔法使いであるということでした。確かにビルトス先生のご自宅での戦いで変身の術をかけられ娘の姿になつてしまったのは事実でした。しかしこの事を知るのは自分とプエラの二人だけの筈です。誰も知るはずもないことなのです。それでも魔法使いたちは状況が分かっているのです。それともあの場所に誰か他の人物が潜んでいて事の全てを見ていたというのでしょうか。それは信じられないことでした。あるいは死ぬ間際の男のかけた技が他の魔術師が承知のものだったというのでしょうか。これで逃れられないと一言を残して魔法使いは命は果てました。それは仲間が捕まえやすいようにしたという意味でしょう。これも十分考え得ることでした。さいわい人間だからよかったものの獣だったらもつと悲惨な状況になっていたことでしょう。もう一つ考えられるのは自分たちの事件とは別に女魔法使いが追われているという出来事が起

きており偶然に結びついてしまっているということでした。とするなら女の魔法使いはどちらにしても狙われるということでした。

石を自由に動かす魔法使いは死ぬ間際にある言葉を残しました。それは何故自分が命を狙われなくてはならないのかの理由でした。勝ち誇った魔法使いの言葉は真実を語っていたはずです。彼の残した事実は自分の存在が災いをもたらす者であるということでした。しかも全ての人を巻き込んでこの国を滅ぼすという恐ろしいものでした。

しかし、何故女魔法使いがいることが災いになるのかまったく理解できませんでした。それは女魔法使いがそういう惨事をもたらすということなのでしょうが、それとも自分自体が災いをもたらすということなのでしょう。自分は意識して世界の破滅を志したわけでもなく、ましてや、親兄弟を不幸に陥れようなどと思っても寄らぬことなのでした。自分は追つてを恐れていました。しかし彼等はもつとこちらを恐れていたのです。正体不明のものたちはいつたい何に危機を抱いているのかまるで分かりません。しかし一方先生は自分に何らかの期待を抱いてらしたのも事実。命を捨てて自分を守って下さったからには世の役に立つと思われたからに違いないのでした。

片方からは忌み嫌われ恐れられ、もう片方からは希望を抱かされるものとはいったいどんな存在なのだろうかと彼女は空気をつかみ取るように思弁を繰り返していました。

空回りする思いに疲れはて部屋を出ると明るい庭先に向かいました。庭には椅子にもたれた未だに体を包帯で巻き付けたソシウスの姿がありました。

「大丈夫ですか」

「あんたも大丈夫か？」

声に気が付くと彼は体を起こしました。

「随分酷かったようですね」

「なあに。腫れも引いたしもう大丈夫だ。それより其方は完治のよ

うだな」

「おかげさまで、医者の治療のおかげです」

「そうとも思えないが。まあ、そこに座らないか」

促されて彼女は椅子に腰掛けました。

「あんたは不思議な人だ。その年で魔法が使えるし。傷の治りも早い。普通の人には思えないが」

「いたって普通ですよ」

「ところで、俺を相棒と認めてくれたかな」

「仕事の話ですね」

「それでしたら、魔法使いから狙われたことでも分かるでしょう。

私の近くには危険です。」

「此方を心配してくれるのは有り難いねえ。なら代わりにこれまでどんなことが起こったのか話してもらえないかな」

「それは・・・」

彼女は躊躇し口をつぐんでしまいました。

「それも叶わないというのかい。それだけの働きはしていると思うが」

不機嫌そうな顔をソシウスはしました。

命を懸けて守ってもらった恩義もあり、彼の願いに背くことは礼を失するようでした。意を決したように彼女はこれまでのことを説明いたしました。それはソシウスにしてもまだ謎だらけの出来事でした。

「なるほど難儀なことだ。女に変えられ上に命を狙われているとは感嘆しソシウスは呟きました。

「ですから私と共にいるのは危険なのです」

「となると、いつまでもここに逗留するのは問題だな」

「私は明日には旅立ちます。プエラはここに残していきますので宜しく願います」

「なに言っているんだ。俺も行くんだよ。アデベニオのトゥーリス寺院に」

ソシウスは本気のようにでした。

「話を聞いていたんですか」

彼女は椅子から立ち上がり何故という仕草をしました。

「実は女が相棒ではちと無理があると内心思っていたんだけど、その心配もなくなつたし本気であんと組みたくなつてね」

「それは他を探しなさい。とにかく明日は私一人で行きます」

彼女は声をあらげていると近寄ってくる人の姿がありました。

「私を置いて行くだなんて、なによそれ」

プエラが彼女の後ろに立っていました。すごく怒っているようです。

「服が焼け焦げてみつともないから、お姉さんにお店を紹介してもらつて買つて帰ってきたというのになに、その裏切り」

不意打ち彼女は返す言葉が見つからずおろおろするばかりでした。「バツとして今日からあなたはこれを着なさい」

プエラは抱いていた包みを彼女に胸に投げつけました。

「さあさあ着換える！」

「まあ、かわいい」

お姉さんははしゃいだように言いました。

「お似合いよその服」

お母さんは感心したように頷きました。

「ちよいと男心くすぐるな」

お兄さんはニヤニヤしていました。

「これが私の見立てた服なの。どう似合うでしょう」

プエラの前に引き立てられたのは無理矢理綺麗に着飾られたグレイティアでした。やたら目立つ服装なので果たしてこれでいいのか非常に悩ましいことでした。プエラの感覚は実用より綺麗さ優先なものでした。

「その服だったら髪はこうね」

お姉さんも加わっていじり回します。彼女は硬直したまま動けま

せんでした。

やっとお披露目が終わると、ソシウスはそつと肩に手を置くといいました。

「同情する」

翌日彼女らは旅の支度をしていました。

怪我をしていたとはいえ長くこの地にいてしまいました。町では魔法使い達の遺体が発見され話題になっていました。巨石が真つ二つにされ、その傍らには何人かの切り裂かれた死体が転がっており魔法使い通しの戦いがあったのだということのようでした。

このことは追っ手にも既に知れ渡ってしまう事でしょう。そうすれば追跡の輪が狭まってしまいます。一刻も早くこの地を離れるのが良いようでした。

彼女たちは背嚢を背負って庭先に出てみるとソシウスが一頭の口バに鞍を付けているところでした。鞍は乗るためというより荷物を背負わせる為のようで旅の荷物が地面に置かれてありました。

ソシウスは二人に気が付くと陽気に語りかけました。

「旅の準備は出来たようだな」

「それはなんなの？」

プエラが尋ねます。

「旅の支度に決まっているだろう」

「もしかして、一緒に来る気？」

来て欲しくないというそぶりの言葉でした。

「そうだけど」

「あなた、次は助けてもらえないわよ。確実に死ぬわよ」

プエラに眉がつり上がりました。

「そう言うなよ。こんな俺でも役にたつから。さあさあ背中に背負った荷物こいつに担がせようや」

プエラは彼女と目を合わせどうしたものかと思案し連れて行くことにいたしました。三人の荷物は口バの背中に乗せられ、身軽な旅

が出来そうでした。グレーティアは背囊から解放されたので腰に提げていた剣を背中に背負いました。

ロバの背中にはいろんなものが袋に入ってくくりつけられていましたが、ソシウスの獲物の斧はいつでも取り出せるように剥き出しでした。

三人が旅の支度をしているとソシウスの家族がそのことに気づき引き留めました。しかしソシウスは意志を貫き家族は諦めたのでした。こうして僅かばかりの休息の日々は終わり逃亡の旅は続いたのです。

「ここら辺の地理については俺に任せておけ」

自慢げにソシウスは胸を張りました。

「大丈夫かしら」

皮肉っぽくプエラは返しました。

「魔法使いが殺されたので敵はこの一帯に捕り手を集めるはずだ。このまま東に進んではその網にかかってしまう。そこでだ、一旦北東のカーボまで歩を進め西北に進路をとり山越えの道を進む」

「また山越えなの。迷子になったらどうするの」

もう満腹ですとプエラは言いたげでした。

「俺の本職は木こりだぜ。山のことなら任せときな。誰も知らない山道を行ってみせるからな」

彼の言うとおりでした。このまま主要道を進んではみすみす捕まるようなものです。敵を振り切る道があればそれにこしたことはありません。ソシウスの提案に従って山越えの道を目指すことに致しました。

第5回 追跡者との遭遇（後書き）

やっと敵との遭遇です。逃げているくらいなので当然その实力には差がある訳で

ここで物語は終わってしまうところですが、謎の者に助けられちゃいました。

主人公達は果たして目的地までたどり着くことが出来るのでしょうか。

ところで、この魔法ものの物語を書いていて疑問に思ったのが「魔法」と

「超能力」の違いです。これってどう違うんでしょうか。

特にこの物語は魔法の技に制約を加えているので超能力と違いがないのです。

例えば主人公は好んで雷撃を使用しますが「とある科学の超電磁砲」の御坂美琴の

技とどんな違いが有るのでしょうか。

科学用語を使用したのが超能力で、呪術用語を使用して描いたのが魔法でことなんでしょうか。

主人公が雷撃を使用しているのは、作者がRPGで雷攻撃を好んで使用するからでももちろん低レベルながら他の技も使用は出来ます。

第6回 過去からの伝言（前書き）

<登場人物>

ビルトス 主人公の師

グノー 主人公の兄弟子

グレーティア 主人公

プエラ 主人公の幼なじみの娘

ソシウス 斧使いの大男（旋風のソシウス）

ホステイス ヘテロ国魔法宰相

センド公 元領主

アビエス センド公に仕える豊穡の魔法使い

第6回 過去からの伝言

三人がカーボに向かって町の通りを進んでいたところ傍らに項垂れて石の腰掛けている男に出逢いました。

その男はじつと動かず、なにか気が抜けたように川の流れを見ていました。

「よお。元気にしているか」

ソシウスが気になったのか声を掛けましたが、男はその声に反応せずに目をうつすばんやりと開いたままでした。

「おい！聞こえているのか」

ソシウスは声を荒げました。

やがて男は虚ろな目で彼を一瞥するとため息をしたのでした。

「なに、この人？」

プエラがかみ合わない二人の間にはいつて来ました。

「近所に住む絵描きさ」

「ふーん芸術家なんだ」

興味深そうにプエラは見つめました。

「しっかりしろよ。そんなことだから女房に逃げられるんだろうが」
すると今まで自分の世界に浸りきっていた男が、突然大きく目を見開きソシウスに顔を向けたのでした。

「違う、違う逃げたんじゃない」

男の必死の聲が飛んでまいりました。

大人しそうな男が食いつかんばかりに大声を張り上げたので一同は戸惑い顔を見合わせました。

「ちよつとあんた。可哀想じゃないの慰めてやんなさいよ」

責めるようプエラはソシウスの脇を肘でつつくと、馬鹿馬鹿しいといった表情でソシウスは優しく語りかけました。

「そう落ち込むなよ。奥さんちよつと用事で留守にしているだけだから。直ぐに帰ってくるさ」

「それは無理です」

ぽつりと男は言いました。

「そう否定されるとなあ。なんで無理なんだ」

男は悔しさで堪えきれない表情を致しました。

「妻はさらわれたんです」

「人攫いですって。本当なの」

プエラが顔を見合わせるとソシウスは小さく首を振りしました。

「ねえ、絵描さん。どうしてそう思うのかしら」

しかし返事がありません。

「だから、さらわれたじゃないんだって」

いい加減にしてくれとばかりにソシウスは頭ごなしに言いました。

「目撃をされたのですか？」

大人しく様子を窺っていたグレーティアが優しく問うと男は顔を見上げました。

「見たんだ。領主の息子が町にやって来るのを。そのあと妻はいなくなっただ」

しかし彼女にはその意味がよく分かりませんでした。

「なるほどな。そう考えるのも無理はない」

反対にソシウスは納得したように頷きました。

「どういうこのなのよ。私さっぱり分からないわ」

不満そうにプエラは詰め寄るとソシウスは事情を説明したのでした。

「ここの領主の息子でのが、簡単にいうと女たらしなんだ。さらったというか財力をみせつかせ女をころりと落としてしまっただ。噂では何人もの女がついていってしまったらしい。」

「そうなんだ」

「でもな、こいつの女房はそんな女じゃねえ。誠実で働き者だった。そんな領主の息子についていくような軽薄な人物じゃねえ」

「となると、なにが起こったのかしら」

プエラは風采の上がない男を見やり、捨てられたのかしらと思

いました。

ソシウスは男の肩を軽く叩くと

「俺達は今からその領主の息子が居るカーボに行くところだ。もし奥さんを見かけたら、あんたが心配していると伝えておこう」

そついうとロバの手綱を掴んで道を歩み始めました。

彼女等も近寄りがたい男の雰囲気にとつとその場を離れていきました。

道を少し歩み始めたときブエラが後ろを振り返ると、男は以前と同じように俯き川を静かに眺めているのでした。

ソシウスの町を出て北に向かう道は畑中を突き抜けていました。

森は遠くに遠ざかり広い平野に並木道が走っていました。遠くには農作業に従事する農民が見受けられ、犁を引つ張る馬が畑を行ったり来たりしており、そのところの地面がどんどん耕されていくのでした。背後から荷馬車が追い越して行きました。前に去り行く農業資材を積み込んだ荷台には子供等が揺れる車体と過ぎゆく景色にはしやぎながら座っています。

子供達は彼女等を見つけると荷台から身を乗りだして一生懸命手を振りました。見知らぬ旅人に嬉しくなったのか無邪気です。やがて荷馬車は本道から右に曲がり畑道に進んでまいりました。あの大地の先にあの家族の畑があるのでしよう。

森の中の道と違って開墾された土地は周囲が見渡せます。道の遠くから人が近づいてくるのもよく分かります。山から下る緩やかな斜面が広がり、先に行くに従って平坦地になっているのでした。

昼をだいぶ過ぎ夕方も間近い頃一行はカーボの町にたどり着きました。

カーボはマーレと比べれば遙かに大きい町でした。町全体が城壁で囲まれ人の往来も多いのでした。畑道を辿って並木に導かれるようにやって来ると眼前に灰色の城壁が立ちふさがるように横たわって見えるのです。マーレの町にはこの様なものなどどこからでも

侵入可能の節操のない町並みなのですが、ここは重要な町であり人の災禍をうけこのような強固な姿をもった都市になったのが分かりました。

城門に近づくと、ますます城壁は見上げるほどに高くなっていました。よくこれほどのものを積み上げたものです。壁の上には旗がはためき、上から見下ろす人の姿がありました。城門には兵士が待ちかまえ不審者がいないか見張っています。

変化のない退屈な日常の仕事にやや機械的に処理していた二人の守衛は、見知らぬ旅の二人の娘を見つけると陽気にしつこいくらい語りかけたのでした。

特にグレーティアは質問の集中砲火を浴びて返答に困ってしまいました。話の内容は詰問といった任務によったものというより、女性にお誘いの声を掛けるといったものでした。

それは放っておいたら何処までも続くようで、彼女らの背後からソシウスは大きく咳きをしなかったら止まることを知らないものでした。

二人の守衛は女性の連れが大きな男で不愉快そうに此方を見ていたので、仕事の顔に立ち戻り三人を通したのでした。しかし去り際にまたここおいでと誘いの言葉は忘れませんでした。

ここで彼女等は邪魔だと思っていたソシウスの意外な効果を見いだしたのでした。

城門をくぐって中にはいると家々が立ち並ぶ町並みがありました。碁盤の目状に町の中を通路がはしり計画的に整備されたものでした。マーレの田舎町に比べれば人の数といい建物の数はもちろん上回っているのは当然としても整然と整えられた町並みは美的なものを感じさせました。

町の中央部にある広場はゆったりとして優美な作りがされていました。あちらこちらにある彫像も優れた芸術家の手によるもので、それらが宮殿でなく広場や通りに立ち並ぶのは為政者の美へのこだわりを感じさせるものでした。町行く人も厳しい顔のものは見受けら

れずどこかのんびりとした空気を漂わせる町でした。

「さーて。カーボに到着したが。今夜一夜を過ごしたら明日早朝こを立つとしよう」

ソシウスは辺りを見渡し警戒しました。

「こんなに人がいるんじゃ。誰が追っ手が分からないわね」

プエラは困ったように指を頬に置きました。

「まあ、そうだがここはマーレと繋がる町の近くに位置する。用心にこしたことはない。それに敵の魔法使いも殺していることで。この町に目が向けられているはずだ」

「この町はマーレとどんな位置にあるの」

「この町は盆地になったこの辺一帯の中心の町だ。主要道は西に行く道が2本、そのうち一本が一旦南に向かいアグラチオの山々の北を西に向かいベナルへ向かう道。つまりお前達がやって来た道というわけだ。東に向かう道はホーレンの町に至る。この町には南北に道は走り北はビタ街道に繋がり南は南下し途中左右の分離し東はコメの港町へと向かい、西はの道はアグラチオ山系の南を西に走りマーレに達しさらに西に向かう。こんな感じかな。敵の探索網はマーレを東西に走る道路づたい、さらにホーレンの南北に向かう道筋、さらにコメから東へ向かう道筋に張り巡らされたはずだ。お前達の山越えの選択は正しかったといえる。しかし運悪く魔法使いと遭遇してしまったので、探査の目はこの一帯に張り巡らされたはずだ」

「私たちは、あなたの町で長居をしてしまったという訳ですね」

グレーティアは反省しているようでした。

「あれは仕方ないだろう。打撲や火傷を負い旅は不可能だった。とにかく宿に姿を隠すでしょう」

促すようにソシウスは手綱をとり一同を宿に導こうとしました。しかしいつの間によら3人の若い男が近寄ってきて、彼の横を素早く通り過ぎると彼女等に語りかけたのでした。

「見ない顔だね。町の娘じゃないんだろう。どこから来たの？」

追っ手ではと少し緊張が走りましたが、彼等の様子を観察してみ

るとなにも考えてなさそうなただの軽薄な若者にしか思えませんでした。そうなるとなれなれしい態度が少しうつとおしくなるもので彼女等は無視して歩き始めました。

「変なことしないよ。この町初めてなら案内しようと思ってさ。どうかな」

彼等はなお食い下がります。

「結構です」

グレーティアが返事すると、男は絶望したかのような大げさによりけてして見せました。

「あんたたち、邪魔なの」

プエラが厳しく言う

「あ、俺達この娘が目当てなんで」若者等が返事したものだからプエラの怒りの炎が燃え上がりました。プライドをずたずだにされて若者の首を絞めかねない様子にあわててソシウスが割り込んできました。

「おい、俺達になにか用か」

しかし若者達はそれには気にも留めずに彼女を腕を掴むと無理矢理、美味しい店を知っているからとひっぱり回そうとしました。その時です。男達が驚くような仕草をして手を放しました。彼等は何が起こったのか分からず豆鉄砲を食らったような表情をし硬直いたしました。あまりにも驚くことが起きたのでしょう若者達はすごすごとその場を離れて行ったのでした。

「相棒、魔法使ったろう？」

ソシウスがそつと囁きました。

「弱い雷撃をね」

「そりゃー痺れたろうなあ。にしてもこの町は平和というかなんというか。さかりのついた奴が多いな」

彼は苦笑しました。

一方プエラは魔法で焼き殺せばよかったのと叫いていました。

彼女も蠅のようにつきまとう男に碧碧していましたし、どうした

ものかと考えました。

ふと周囲を見渡すと少し離れたところに女性が佇み此方を食い入るように見ているのに気が付きました。不思議がつているのか、日常の出来事として眺めているのか定かではありませんでした。しかし今の事件の一部始終を知っていたとしても魔法が用いられたとは分らないでしょうから案ずることもあるまいと彼女は思いました。広場に何時までもいるとまた誰かと関わり会わなくてはなりません。早々にこの場を立ち去ろうとしました。しかしその期待に反して、どこから呼び止める声がありました。

「ソシウスじゃねえか！」

声が出た方向を振り向くとかつぶくの良い軍服姿の男が陽気な顔をして立って居ました。

「不味いな」

ソシウスは呟きました。

「元気だったか」

その隊長の記章をつけた男はがっちり抱き合つと高らかに笑いしました。

隣町の事です。ソシウスの知り合いに出逢つても当然でした。

「英雄のお出ましたな。話は聞いて居るぞ。怪物を一人で仕留めたんだなつてな。お前は一族の誇りだな」

どうやらソシウスの親戚のようでした。するとプエラはそつと彼女に耳打ちしました。「彼と一緒にいるとかえって目立つんじゃない？」

「のようだけど、彼の土地勘がなければ包囲網から逃れることも難しいし。このまま様子を見よう」

親戚らしき男は初めて二人の連れに気が付きニヤニヤしました。

「おいおい可愛娘二人も連れてくるのか。いいとこ見せようてわけだな。よし賞金の受け渡し場所に案内してやる。ついて来な」

そつという男は部下とともに嫌がるソシウスを引っ張って庁舎に連れて行きました。庁舎は神殿でも有るかのように荘厳な作りに

なっていました。

神話をモチーフのレリーフが壁一面に施されており、石柱は綺麗なラインをたもって起立していました。

通された部屋は行政長官の部屋でした。

細工の人形のように横に奇妙に張り出した鼻鬚に顎髭をもった人物は中心に据えられた机からゆっくりと歩み寄ると親しげに語りかけました。

「ジェヴォーを倒したとはそなたのことか。なるほど英雄に相応しい風貌だのう。旋風のソシウスと呼ばれているとか。報告が誤りでないことは会ってみて分かるぞ」

「それは恐縮いたします」

「なんであんな怪物が現れたのか、まったくわからない事だらけだなあ。怪物の生息地から離れたこの町では対抗策を準備していなかったのだ。今回はお主の力で解決できたので一安心したという訳だ。今後は攻撃魔法を使える者を雇わなくてはならないと思っているよ。そうだ、腕を見込んでだがこの町に仕えぬか。その力量眠らせるには惜しい」

「ご厚意には感謝致します。只今請け負った仕事がありまして、お受けできません」

「そうか、残念だ。では賞金にてその礼とさせてもらう」

賞金が運ばれ長官はそれを差し出しとソシウスは恭しく受け取るとこれで無事に終わりやっと思宿に帰れそうだと彼は胸を撫で下ろしました。

これ以上目立つては逃避行が失敗してしまいます。

「おおそうだ。大切なことを忘れていた」

早々に立ち去ろうとする彼等を長官は引き留めました。まだなにかあるというのだろうかと思っているとそんなことはお構いなしに長官は高笑いをしながら皆を招き別の部屋に連れて行きました。

そこには禿げ頭に大きく広がった赤い鬚つけた人物がソファに座り茶を楽しんでいました。

長官は親しげにその人物に話しかけ、噂の人物を連れてきたことを伝えました。

禿げの男は訪問者に驚き立ち上がると一行のもとまで近づいてきました。

「貴方が一人で何頭ものジェイヴオーを退治にした猛者か。会えて嬉しいぞ」

溢れんばかりの笑顔で手を取って挨拶するので、半ば強制的に連れて来られたというものの親しみを覚えたのでした。

「この領主だったセンド公だ、郷土に勇気ある男がいるというので感激されてな。賞金を受け取りに来さい紹介してほしい申されてな」

元領主とはいえその地位は高く、本当であれば椅子に腰掛け顎で動かすようなのですがこの人物は謙虚なる人のようでした。

「物珍しいことがあるとつい気になり怪物退治の話直に聞きたくてなあ。どうだろうか儂の屋敷来てももらえんか」

ソシウスにとっては身分が上の人物から慇懃に声を掛けられ恐縮してしまい、返事に迷い彼女等のを振り返りました。

「いやいや、其方のお嬢さんたちも大歓迎だ。どうかな？」

選択権がソシウスではなく彼女等にあると読んだ元領主は優しく語りかけました。

彼女らは急な申し出に躊躇いたしましたが、お互いに頷き会って受けたのでした。

センド公の屋敷は町の中にはありませでした。町より少し西に行った所がありました。

屋敷というより城で、しかもカーボみたいな城塞都市というものでなく支城といったものでした。軍事のための建物で厳めしい形をしていましたが、城に近づくにつれその様相は柔らしいものとなりました。というのも草木があちら此方に植えられ城の灰色の肌を覆いつくし、みずみずしい緑に赤や黄色青などの花々が咲き乱れていた

からでした。どこから引き込んだのか、城内に水路が走っており水面が鏡のように空を映しだし睡蓮の花が白く咲いていたのでした。夕方になり城全体は赤みを帯び始めていましたが、日の高い時間に訪れると鮮やかな色彩を放っていることでしょう。

城の中も同様に無機質な壁に装飾のない明かりとりなど優美さはまったく無縁な建物であったことが一目でわかりました。しかし今はあちら此方に彫像など珍しい美術品が据えられ華やかさに満ちたものとなっていました。

元領主は庭をたいそう自慢をし、どんな味気ないものでも素晴らしいものに変えてみせれると、いかにこの庭を造るのが大変であったとか時々自らが剪定をするのだとか話してみせた。あまりにも気さくなので本当にこの人物は領主だったのだろうかと一同疑念が浮かばないことはありませんでした。もつともだからこそここに付いて来てしまったのです。

しかし家族の反応は少し違っていました。特に領主夫人は身分の違いについてこだわりが強く、旅の彼等を蔑視の眼差しを向けていました。夫が愉快そうにしているので表面は笑ってみせてはいましたが目が笑っていませんでした。それは領主の息子も同様でその妻とともに闖入者に不満で、元領主である父親の酔狂に怒りの念をもっているようでした。それと違ったのが一番下の息子でした。かれが一番父親に似たのでしょうか、陽気ににこにこしていました。特にグレーティアに夢中でいろいろ話しかけてきます。食卓の場が明るくなるのはいいことですが、ここにきても質問責めにあうのだろうかと彼女は苦笑いいたしました。この息子が噂に登場する女好きの領主の子なのでしょう。

少し席を離れて女性が席についていました。領主の家族の様ではありませんでした。少し知的な趣の女性で、服装からしてなにか重要な職務にある人のようでした。

酒が酌み交わされていくと、酒の潤滑油により領主の口は饒舌になりソシウスも緊張から解き放されてきたのかさかんに語るように

なりました。特に怪物を倒した件では領主も大はしゃぎ。ソシウスの斧を見てはこんな大きなものを振り回せるとは信じられんと自ら持ち上げては感嘆しました。酒が入り領主とソシウスの馬鹿騒ぎの場となった食卓に夫人は愛想をつかして席を立ち、同様に息子夫婦も自室に去ってしまいました。

下の息子は残ってはいましたが、酒にめっばう弱いようでテーブルにとろけたように崩れ、それでも必死にグレーティアを口説いていました。ろれつが回らなくなり寝入ってしまうと寝室に運ばれていてしまいました。

「私、あんまりしつこいので貴方が昼間みたいに雷撃をお見舞いしはないかと心配したのよ」

運ばれたのを見届けると微笑みながら女性は意外なことを語りました。

「まさか」

「そう、町で見たのよ」

あの時彼女等を凝視していたのはこの女性なのです。

「誰にも分からないはずなのにどうしてですか？」

「やあねえ、私も魔法使いなのよ。分かるに決まっていますよ」

「女性の魔法使いと会つのは初めてで、気が付きませんでした」

「アビエスというのよろしくね」

「グレーティアです」

二人は自己紹介をしたところ、それを見ていた領主が陽気に語りかけました。

「紹介しよう。彼女は我が家専属の魔法使い。儂の所の宝なんだ。豊饒の魔法が得意で我が領地に実りをもたらしてくれる。この豪勢な暮らしも彼女のおかげなんじゃ」

領主は自慢げに言うと、気分をさらに良くしたのか杯の酒を飲み上げました。

「そんな訳で、領地の農作物の生長を助けるのが仕事なの。結構地

味なのよ」

「でもそれは大切なことなのは。でなかったら領主からこんなにも優遇されませんし」

「時々思っの。こう火炎とか出してはでに怪物退治もいいかなって」

「それは危険と隣り合わせですよ」

彼女がたしなめるとアビエスは確かにと相づちを打ちました。

「でも私は攻撃魔法が仕える娘がいるのが信じられないわ。今回貴女が初めて。どんな訓練をしたの」

「どんなと言われても普通です」

「資質なのかしら」

アビエスは腕を抱えました。まったく理解できないといった様子です。

「攻撃魔法でそんなに珍しいのですか？」

「それはそうでしょう。現に女性でその魔法を使う人誰がいるの。危険なのよ私たちには」

「危険でどうなるんですか」

「発狂してしまうの。私の友人で攻撃魔法を修行した仲間がいたの。本当にしっかりした意志の強い娘だったわ。でも次第に感情面の起伏が激しくなり奇行をとるようになったわ。最後は自殺してしまっ
た」

「そうでしたか」

グレーティアは攻撃魔法が使えるのは本来自分が男性だからである
らうと思ひ至りました。だとすれば当然のことでアビエスが考えて
いるほど意外なことではなかったのです。

ここで領主の話に聞き入っていたプエラが話に加わってきました。

「ねえ、元領主でどういう事？」

「領主の地位を追われたということでしょうね」

アビエスがセンド公に聞こえないように囁きました。

「今この国の支配者はクーデターによってその地位を強奪したのよ。」

彼等は強力な軍隊によつて封建支配から中央集権支配に仕組みを組み替えていったの。逆らう領主は領地ごと取り上げ廃棄し、従う領主には地位は奪つたもののある一定の領地の所有を認めたというわけ。見てのとおり当地の領主は早めに服従の意を示したので多くの領地と城の所有を認められたというわけ。カーボ庁舎も出入り自由なのも信頼されているということね」

「順風満帆のようであつて以外と苦労しているのね」

同情するようにプエラは呟きました。

「領主は見かけによらず流れを読む力があるようですね」

「あつてつるつる頭のおじさんが？」

意外そうにプエラは大笑いしている領主を眺めました。

「まだ支配力があるうちにそれを手放し、財を守れたのは相当の決断力と判断して良いのでは」

「貴女ただの魔法使いには思えないわね。普通の娘の言葉とは違うわよ。いったい何者なの？」

二人の話を聞いていたアビエスは疑念を向けました。

何者それはグレイティア自身が訪ねたい事でした。いまはつきりしていることは港町から一步も出た事のない田舎者だということでした。

「見ての通りです」

やむなく拒否したと捉えかねない返事をいたしました。

「見ての通りというと、何処か知性的なのよね。良いところの家でしょう？」

「それはどうでしょうか」

「まあいいわ」

これ以上詮索はしないとアビエスは素っ気ない返事をしました。
「すまんな僕はこれでおいとまする、世話係りは残して行くのでゆつくりくつろいでくれ」

それまで英雄談義に花を咲かせていたセンド公も酔いがだいぶ回つてきてよろよろと立ち上がると執事に助けられて足取りもおぼし

く立ち去ってしまいました。

領主につき合っていたソシウスもだらなく椅子にもたれかかっていきます。

「連れも出来上がったみたいです。ここもお開きですね」

そうグレーティアが言うと

「それじゃお部屋を案内するわ」とアビエスも応じました。

用意された部屋は上等の部屋でした。ふかふかのベッドにプエラは大はしゃぎ。羽毛入りというのがたいそう気に入って何度も抱きしめていました。

ソシウスはというと寝室に辿り着くと崩れるように眠ってしまいました。今の彼には床でも寝具の上でも同じでしょう。

「まだ少し早いので庭でも散策しませんか」

アビエスがグレーティアを誘いました。しかしこの様な夜更けに庭にでて暗いだけです。いったいなにがあるのでしょうか。彼女が心配そうな顔をしたのでアビエスは魔法の明かりを点しました。

「これなら大丈夫でしょう。見せたいものがあるの、ついてらっしゃい」

この方が魔法使いであることを忘れていた自分に愚かであったと少々恥かしい気持ちになりました。

アビエスに導かれるまま夜の庭に出ると石像や木々に照明が点されていました。一番綺麗なのは彫像から流れ落ちる水に照明があたりきらきら輝いているところでした。太陽に照らされた庭とは違い暗闇に浮かぶ光の数々は落ち着いた感じの静寂を作り出していました。

「なかなか綺麗ですね。夜に見る町の灯りのようです。私たちの為に準備されたのですか？」

「来客が有った時はね。でも私が貴方に見せたいものはこんなものじゃないわ」

そういつとアビエスは彼女をさらに奥に連れていきました。そこは庭というより整備以前の城の空き地といえるものでした。これから整備をしようとしているのか資材があちら此方に置かれていました。まるで庭の裏方見学にでも来たかのようです。

空き地の先は城の作りがどんどん荒くなっていくのが分かりました。手前の煉瓦は形も整い洗練された作りになっていましたが、奥のものは表面も荒く形も歪になっていました。先には過去の城の一部が待ちかまえているでしょう。

「ここよ。城の古い建物は地面の下に埋もれてしまっているのだけれども、ここの部分だけが表に現れているの」

示された先をみると煉瓦で組み上げたというより小ささまざまな石を組み合わせ積み上げたものであることがわかりました。きつと古い時代なのは確かと思いましたがそれがどれくらい昔なのかが分かりませんでした。

「煉瓦前の盛り土でなく石積みの城だけだね。この反対側見て欲しいの」

この反対側になにがあるというのだろうか、回り込んでみると奇妙にねじ曲がった石がありました。近づいてよく確かめると石が溶けて流れているのが分かりました。それは石で有ることを放棄し水になって何条の流れをつくりそのま冷えて固まってしまったことを示していました。

「それなんだか分かる？」

「いいえ。何故この様な」

彼女は何が原因が分かりませんでした。

「それはね魔法で溶かされたの」

「魔法ですか」

「それは多分火炎の魔法によって溶かされたものよ。信じられない高温の魔法がこの城めがけて放されたといつていいわ」

岩を溶かすほどの高温の魔法があるのだろうか彼女は思いました。「それはね、はるか昔この国の黎明期に起きた瓊筵戦争の爪痕なの」

その戦争については学んでいました、まだこの地方が沢山の都市国家だったとき弱小国家に過ぎなかったものが辺りを併合し巨大な一国家を誕生させたということを。その時の戦いを瓊筵と言いました。しかしそんな遙か昔に起こった戦争の遺物を目の当たりにするとは驚きでした。しかも現在の自分たちの魔法を遙かに越えた技がなされていたことに驚愕しました。

「いい、その魔法、女魔法使いが放った技よ」

「そんな、攻撃魔法は女性に無理と貴女は言われましたよ」

アビエスは少々頭を掻きました。

「そうなのよね。そこところがよく分からないの。この地方の伝説によるとこの技を使ったのは芙蓉姫。つまり後のこの国の初代女王「炎王」なのよ。彼女の一撃によって城は溶け落ちたようなの」「しかしそれは伝説でしょう」

「でも事実がここにはあるわ。誰か放ったのよ、とてつもない技を」確かにこの証拠は消し去ることはできませんでした。はるか古代の出来事を伝える貴重な資料なのは間違いない事実です。

「それで、私は貴女に興味があるの。あなたも攻撃魔法の使える女魔法使いでしょう」

「かいかぶりです。こんな人間業ではありません」

彼女が強く否定したのでアビエスはそれ以上言えませんでした。

「まあ、それは良いわ。庭に戻りましょう」

庭の奥から戻るとき二人は押し黙ったままでした。アビエスは若い娘さんを混乱させてしまった事に反省しました。

グレイティアが寝室に戻るとふかふかのベッドで気持ちよさそうにプエラが寝入っていました。ソシウスの家は何日か逗留していたもののやはり疲れのためか深く寝入っているようでした。彼女も横になり今日の出来事を思い起こしました。

黎明期の芙蓉姫は本当にあのような技を使えたのか、師ビルトスの技を遙かに越えて計り知れない力をもつそんなことがあるのか。本当に信じがたいことでした。

それに女性の魔法使いは困難が伴うと伝えられているのに一方ではまったく反対の事があるのでその矛盾に当惑してしまいます。自分の場合は術をかけられこの様な姿になっているだけなのでこれとは全く関係はありません。しかしそこまで技は到達出来るのだと気づかされました。そして追っ手の魔法使いから逃れるだけでなく早く強くならなくてはと彼女は心に決めるのでした。

翌朝グレーティアは庭に行ってみるとアビエスは木々や草花に向かって手を差し伸べています。静かに近寄っていくと、足音に気が付いたのかアビエスは此方を振り向きしました。

「あら、お早いのね」

「おはようございます」

二人は互いに軽く会釈すると仲良く並びました。

「なのをしておいでなのです？」

「これ？これは豊饒の魔法の一つ、草木と会話しているの」

「会話ですか」

「そう、お体は元気？問題はない？と尋ねているのよ」

「そんな会話ができるのですか」

「そうなの、凄いでしょ」

「其方の方が実用的ですね」

「お褒めの言葉有り難う。嬉しいわ」

技が終了するとアビエスは懐からあるものを取り出すと彼女に手渡したのでした。

「これはなんなんですか」

「アデベニオのトゥーリス寺院のクリスタルよ」

「クリスタル？」

「貴方のお仲間の旋風の勇者は怪我だらけね。随分戦いをしてきたという感じ。これは瀕死の状態の者でも治すことができる秘術が込められているの。私は平和な生活だから必要ないし、むしろあなた達旅の者に役に立つものと思うの。もちろん一回だけの使用だけど

ね」

「アデベニオのトゥーリス寺院はどんなところですか」

「あらそれに興味あるの？あそこは精神や肉体を治療する秘術があるところよ。女性の魔法使いなら一度は訪れるわ。山全体に靈氣は満ちみちているの」

グレーティアはもつと寺院について尋ねたかったのですが、不審を買ってはいけなと自制し、クリスタルを有り難く頂戴いたしました。

するとアビエズは思い出したかのように語りかけたのです。

「この庭には昨晚の美しい照明だけでなく、不思議な音色を出すものがあるの。行ってみない？多分気に入ると思うのだけど」

「そうですね」

昨日少々感情的になったのをグレーティアは反省していました。

二人は池の周りに木々が立ち並ぶ場所を抜けて別の庭へと出ました。ここは地面に緑の芝生が広がっていて回りを白い石が囲んでいました。朝の光に照らされて木々が鮮やかに映ります。朝の涼やかな風が木々を通り抜け二人の間を駆け抜けて行き、その先では小鳥たちが地面に降り立ち忙しそうなのはね回っていました。敷石には人らしき形の影が落ちており、その影の元を追かけると人の背丈ほど石群にありました。それは庭の左右に向かい合って八体の白い彫像が立っておりどこか荘厳な感じがいたしました。

「では演奏会とまいりましょう」

アビエズは演技たつぷりに申し述べました。そして彫像めがけて手を打ったのです。すると音は彫像に反響し複雑な音となって帰ってきました。

「どう面白いでしょう。ではこれはどうかしら」

この度は立て続けに手を打つと音は奇妙な変化を作って音の高低を作り出しました。

「一緒にやってみましょう。きつともつと変化が起きて綺麗な音色になるから」

言われるまま彼女は二人して手を叩いてみると、音は石像に反響しシャボンの泡を思い起こさせるような透き通った音色の返してきました。二人は嬉しくなつてリズムを付けて叩いてみると今度は風が流れさるような金管の音が響きわたりました。叩けば叩くほど音はどんどん複雑になつていろんな音色を出すようです。

「これはなんなのですか？」

「私も分からないの。ただ黎明期の建物から発見された石像らしいわ。音楽でも楽しんでいたのかしら」

グレーティアは古い時代の遺物になにか不安を覚えました。

二人は宝石箱のような音色に楽しくなつてきましたが、彼女は別の音の変化に気が付きました。それは反響した音が止まらなくなつていたことでした。しかも音は反響する度どんどん高音になつて行き耳障りなものとなつてきました。金属と金属がこすれるような音がしたかと思うと耳をふさがないと立つていられない位のものになりました。

この時、これは音を楽しむものでないと二人には分かりました。しかしその時は既に遅く反響はどんどん拡大し押しとどめるには間に合わないものとなつていました。

暫くすると石像自体が白く光り始め唸り初めました。

「どうしたのかしら、今までこんな事なかったのに」

苦痛に耐えながらアビエスは止める方法を探していました。するとなにやら地面を叩く音がだんだん近づいてまいります。その音は敷石に少しずつ傷をつけて次第に力を増しているのが分かりました。頭を割るような音になんとか耐えていたところを地面を揺るがすような見えないものが迫つてきて二人はなんとかかわしたのです。音はそのまま通過し背後の大きな木を粉碎してしまい、幹が小さく砕けて辺りに散らばりました。

この彫像の正体がわかりました。それは兵器でした。知らないとはいえとんでもないものを呼び起こしたようです。

又再び地面を叩く音が響いて他の木々悲鳴をあげて砕け散りました。
「早く止めないと、あれは危険だわ」

焦りの言葉はアビエスからこぼれます。

そしている間にも庭のものは彫像を残して次々に粉碎されていきます。

「私がやってみます」

グレーティアは進み出ると雷撃の一撃を放しました。稲光と空気を裂く音が響き、彫像の一体が閃光を受けて砕け、あたりに小石となつて散らばりました。

「あなたの技、人を麻痺させる程度と置いていたら稲妻に威力をつけることが出来るのね」

アビエスはその技に感心したようでした。確かにこの間までは稲妻を体内に通すレベルだったのは確かです。あの魔法使いとの激戦の後、魔法の言葉に変化が生じていたのです。

「その若さで、中級レベルの技が出せるだなんてどういうことよ」

「ほかの彫像を早く壊さないと」

彼女は厳しく言葉を遮りました。

再び放った雷撃は彫像にはじき出されました。

「もう効果なくなつたの」

悲鳴にも似た言葉が漏れました。

「先ほどは不意打ちだったので成功しましたが、あちらも防御態勢にはいったようです」

複数の雷撃が彫像を襲いましたが外されてしまいます。

「打つ手なしね」

「いいえ、攻撃された以外の彫像が協力し合つて防いでいるようです」

「ということはどうするの」

「協力させないだけのことです」

彼女はきっぱり言いました。

少し間があつて放された技は七本の稲妻でした。閃光が散らばっ

たかと思うと一瞬にし七体の石像は粉々に砕け散ったのでした。

石像が作り出していた耳障な音は消えうせ辺りに静けさが戻っていました。アビエスは塞いでいた手を戻すと喜びのあまり抱きつきました。

周囲を見渡すと庭が見る影もなく戦場のあとでもあるかのようにいろんなものが変わり果てた姿で転がっていました。二人はとんでもなく庭を壊してしまったことに、どう申し開きすればいいのだろうかと困ってしまいました。やがて城に響き渡った轟音を聞きつけたも者たちが駆けつけて来ました。最初は警備の兵士でしたが、庭師や掃除婦やら城内の者が集まってきました。もちろんプエラやソシウスも駆けつけたのですが、明らかに魔法の戦いがあったと言わんばかりの惨事に隠密行動どころかこんな公衆の面前にさらけだしてはいかがしたものと痛いところをつきました。

そうこうするうちに城主、こと前領主がやって来ると、変わり果てた庭に渋い顔をしていたのですが二人の前になると高笑いをしたのでした。

「酷い目にあったようだな」

領主の顔は笑みを浮かべていました。

アビエスはどう説明したらいいか戸惑い言葉が出ません。

「これは古の兵器なんじゃ。あまりにも彫像が古風でよかったので忠告を無視して、この庭に運び入れたものなのだが、やはりまずかったようじゃのう」

どうやら元領主は彫像の正体を知っていたようです。

「あの彫像は兵器なのですか？」

「その通り、黎明期のころ昔この地を治めていた王は迫り来る芙蓉姫の軍団から自国を守るべく罾を仕掛けた。占領された地に彫像を残し、姫が近づいたところを暗殺するといったものだったのだ。しかし王のもくろみは甘く、彼女は過ぎ去った後には溶けた岩が転がっているといったものだったんだ。儂がかろうじて残ったものをコレクションにしたのだが危険すぎたようだな」

二人は領主の收拾趣味に呆れるばかりでした。しかし壊した責任を追及される様子もなく胸を撫で下ろしたのでした。

三人は旅の支度を始めました。

プエラはふかふかのベッドとさよならするので寂しそうですし、ソシウスは昨日の酒が少し残っているのかおとなしめでした。

「あの石像を雷撃で壊したのか。以前より威力が増したみたいだな」「あらそんなもんじゃないのよね。もっとすごくなるのよね、グレーティア」

二人は魔法の力が強くなった事を喜んでいるようでした。

威力は増しましたしかし以前戦った魔法使いの火炎に比べればそれは弱々しいものでした。あの兵器は年代が経ち力を失ったのでなんとか壊すことも出来たのでしたが、作られた時代であればそれは多分不可能だったでしょう。魔法についてはまだまだ未熟と言わざるをえません。追つての魔法使いが現れれば退けることは出来ないでしょう。相変わらず逃げることにしか出来ないのが現状でした。

「実は先ほどの騒ぎである人物を見かけたんだ」

ソシウスは少し真剣そうな顔をしました。

「なによ、またあんたの親戚？」

「おまえたちも知っているだろ、しょぼくれ画家の探していた女房さ」

「ということは、さらわれたって本当だったの？」

「そうなのかは分からないが、ここに居るのは確かだ」

城内を探索という訳にもいかなないのでアビエスを訪ね相談することになりました。

意外なことに彼女は全てを知っているようでした。ご亭主が領主の息子にさらわれたと心配してる告げると、彼女は笑いました。

説明によると若様は好色家というより無邪気なのだとか、若い女性を見かけると大はしゃぎで一生懸命話しかけるのも子供みたいな行為の現れであることでした。最近、領地の畑を視察に行き帰りに

行き倒れの女性を発見し城に連れ帰ってきたとのこと。拾った女性
は十分な食事をとっておらず栄養が足りず、また病のため衰弱して
いていたので城に留めおいたというわけでした。

「それが事実とするなら人攫いどころか命の恩人となるな」

ソシウスが考え込みました。

「そのご亭主がどれほどの画家が見てみるとしましょう。城主はご
覧なようにたいそうな美術趣味。才能が有れば仕事を得ることが出
来るでしょう。もっとも今回はとんでもない作品をお持ちと分かり
ましたが」

「奴は貧乏でそれは願ってもない機会だ。女房殿には大変苦勞をか
けたようだし、そろそろ本領発揮させなくてはな」

「頃合いをみて使いを送りましょう。そうそう若様は絵描きの奥さ
んにもう興味はありませんから。ご安心を。最近旅の魔法を使え
る娘に御執心ですから」

意地悪く彼女は微笑みました。

もうここに長居は無用です。三人は手短に元領主に分かれを告げ
ると早々に旅立って行きました。領主は物好きで城の門まで見送る
とその消えゆく姿を観ていました。

そしてアビエスに静かに語りかけたのでした。

「どう思う？あの娘が、奴らが殺害しようとしている者なのか」

「多分間違いないでしょう。魔法が使える娘はそういませんから」

「我々は雛鳥を見たというわけだな」

領主センド公は感慨深そうにいました。

「連絡をしないのですか」

「なにを馬鹿な。何故我々が奴らに協力する。」

「追求されませんか」

「隠居者に興味はあるまい。それに僕は天下、国家だのに振り回さ
れるのは嫌いだ」

第6回 過去からの伝言（後書き）

はるか昔に起こった出来事が語られました。現代は過去と繋がってそこにあるものですから、この物語も過去ので過去の出来事が重要になってきます。

ここまで来てやっと旅らしくなってきました。はたしてこの先そんな事件が待っているのでしょうか。

ですます調の文章いかがでしょうか。読みにくい！かつ文章が下手くそというのが持たれた感想でしょう。

でもこの作品は童話であるという設定から、ゆるくてのったりとした表現でこの先も書いて行きます。ご容赦ください。

さていよいよ次回は二人目の仲間の登場となります。

第7回 狙撃者（前書き）

<登場人物>

ビルトス 主人公の師

グノー 主人公の兄弟子

グレーティア 主人公

プエラ 主人公の幼なじみの娘

レピダス 黒虎騎士団（銀弓のレピダス）

ソシウス 斧使いの大男（旋風のソシウス）

コンジュレティオ 軍総司令

ホステイス ヘテロ国魔法宰相

第7回 狙撃者

元領主の居城を旅立った一行はそのまま西に向かいました。カーボに向けて北上したときと同様の農地の風景がありました。真つ直ぐ続く道平坦なので歩いてても歩いてもないような錯覚をさせます。ただ違うのは近くに見える山々はアグラチオ山でなくサンダピラ山が周囲を囲んでいることでした。ソシウスはその山を越えると言っていたのでした。

途中本道から右に折れ山へと続く一本道に入りました。本道から折れた道は静かで人の通りがさっぱりない様子で奥にある村人がたまに通るだけのものでした。これがサンダピラ山を越えて行く道とはとても思えず、この先は行き止まりではないかと疑わせるような道でした。しかしこれが追つても目をくらませるには最高のものであるのは確かでした。その道は程なく森の道となり次第にサンダピア山がどんどん目の前に近づいてきます。

北に向かっているせいか山々の上に登ったお日様が右から光を投げかけています。

村を過ぎたあたりから道はどんどん狭くなり曲がりくねり初めました。そして次第に上り坂になっていったのでした。いよいよ二度目の山越えの始まりです。

息を切らせ三人はどんどん登っていき、だいぶ経ったとき背後を振り返ると広い盆地が見渡せました。遠くに小さく見えるのはガーポの城壁。それより右に小さく白く輝いているのは元領主の城のようです。ガーポから延びる真つ直ぐな線は街道です。街道の周囲にはPATCHワークのように畑が地面に升目を画いていました。低地で見る景色と高台から見下ろす景色はこの様に違うものかと一同見とれていました。

お昼になり一行は木陰に体を休めると軽い食事を摂りました。随分登りが続いたので体は熱気を帯び木陰に腰掛け山を流れる風に当た

るとことのほか涼しく感じるのです。

しばし休息の後再び旅を継続いたしましたが、いつまで経っても峠には辿りつかずやがて夜になりました。

「もう夜になってしまったわよ。何時になったら山越えるのよ」

不満たらたらでプエラは案内人のソシウスに食ってかかりました。

「そう慌てるな。そんな簡単に越えられるかよ。このサンダピア山はアグラチオ山と違って胸元が厚いんだよ」

「どういうこと？」

「アグラチオ山は一層の山だったけどサンダピア山は多くの山々が集まって何層にもなっている。つまり横に長いとわけだ」

「長いって。このまま山の中が続くことなの」

「まあ。そういう事だな」

プエラはへたり込みました。

ソシウスはかまわずロバから荷物を降ろすとキャンプの準備を始めました。手慣れた手つきで寝床に小さな石で組み合わされた竈が出来ました。それから近くの林に入り柴を探してくると火をおこしたのです。山の中周囲に光はなく薪から放される赤い光が周囲を照らしました。ぱちぱちと小さな音を立て薪は燃え、その上では鍋が暖められぐつぐつと晩ご飯を仕上げていたのです。芳しい香りとともに料理は出来上がり、山歩きでお腹ぺこぺこの身にとっては極上の品となりました。

空腹も癒え一同には笑いも登場し冗談のかけ合いが始まりました。

「元領主の話によると、東の方キャンプ近くでヘテロ騎馬軍との戦闘が行われたらしい」

「それでそれはどうなったのですか」

グレーティアが興味を示すとソシウスは話を続けました。

「ムルティ山脈のふもとまで押し返したようなのだが」

「怪しいですねえ」

「ヘテロがそう簡単に退却するというのもな。本当はユンクタス河東岸を狙っているのではないかと考えられるんだな」

「陽動行動というわけですね」

「兵を分散しては此方に分が悪い」

ソシウスが悩ましげな仕草を見るとプエラが興味深く尋ねてきました。

「ヘテロてそんなに強いのか？」

「まあね。ヘテロは人口ではパテリアより劣るけど、それを補うように騎兵が強く、機動力にはなかなか悩まされているんだ」

「あら、こちらには凄い人いなかったかしら」

「猛将コンジュレティオのことだろう。彼は軍総司令官だ。確かに鬼神の如く強いがヘテロには魔法宰相ホステイスがいる」

「魔法宰相なの。強そうじゃないわ」

「ところが、ヘテロに組織的騎馬戦術をもたらしたのが宰相様なんだな」

「じゃ、何でもできちゃうという凄い人？」

「コンジュレティオは反乱軍を全て鎮圧し国を統一したほどの名将だがマルチ山脈を越えてヘテロ領内に侵入することは叶わなかった。それはあの国にはホステイスがいるからなのさ」

「魔法の本を書いている学者さんじゃなかったのね」

「魔法の本？」

ソシウスは小首を傾げました。

「ヘテロの軍事行動が活発化したのは何故でしょうか」

「グレーティアは疑問を投げかけてきました」

「それが分からない。理由ならヘテロの宰相に聞くしかないだろうな。分からないと言えば最近怪物の活動が活発化していることもだ。生息地以外でも出没しているからな。なにか関係でもあるのかな」

「エリア内の頭数が増加し、余剰分が流出しているか。食糧減少によつて移動が始まったといったところではないでしょうか」

「いまさら人様の土地に來られてもな」

するとプエラが何を思い出したのかあたりの暗闇をきよろきよろ眺めました。周囲には暗い森が広がっているだけでした。

「ねえ、私たち何で逃げているのかしら」

「そりゃー追っかけている奴がいるからだろう」

ソシウスは呆れたように眉を下げました。

「グレーティアの命を狙っている人達で何者かしら」

真剣な問いかけに僅かの沈黙が訪れました。

「分かることは金持ちでことだな。領主クラスでなかったら魔法使い何人も雇えないってことだな。それが一人なのか組織なのかは全く不明だが」

ソシウスの的を射た判断でした。

「私が行ってお灸でも据えてこようかしら」

「勇ましいことだな。どこの誰かもわからないのにどうする」

ソシウスは笑いました。

「その転性の魔法を解く方法てのはないのかな」

グレーティアの方に顔が向けられたので彼女は返事に困りました。

「奴らは女魔法使いということで追っかけている。元に戻れば誰か分からないだろうが」

「アデベニオのトゥーリス寺院に行けばもしかしたら。あそは治療術が発達していると聞きます」

「しかし、そこで治るといふ保証はないし」

「いいのよ、それは、このままで」

プエラはグレーティアを庇いました。

「そうそう、もう一つ謎があるぞ。プエラはなんで逃亡の旅に付いてきたんだ」

ソシウスは意地悪そうな顔をしました。

「な、なによ。どうでもいいことでしょう」

プエラの頬がふくれました。

「お主、グレーティアに惚れてるな」

「なによいきなり。違ったら。なんで私が女の子に惚れなくちゃならないの」

「でもね」

プエラが半狂乱になりそうだったのでソシウスは茶化すのを止めました。

翌日目を覚ますと堅い地面の上でした。床はあるもののお城のふわふわのベッドとは大違いでした。僅かの日でこのような違いがあることにプエラはため息をつきました。

再び旅は始まり、延々と続く山道を歩き始めました。アグラチオ山を越えた時と違って荷物は口バに預けていたので、身は軽かったのですが悪路続きの山道で足は疲れてていきました。山を越えたかと思うとすぐ次の山が控えていてソシウスが何層も続くと言ったのよく分かりました。もう背後に盆地の光景は有りませんでした。ただ周囲には小高い嶺嶺が広がり人が訪れることもない山奥であることがよくわかりました。ここで人に出くわそうものなら追ってだったとしても、思わず親愛の情を表してしまいそうでした。

ソシウスは休息の場所としてこの近くで見かけたという祠を探していました。あたりには草が生い茂りその建物の所在を確認は出来ませんでした。

するとグレーティアは誘われるように山の斜面に目をやると白い石積みの建造物を発見したのでした。少し山道から外れていましたが祠目指して一同歩きました。

祠までの道は有りませんでした。ソシウスが行く手の草をかき分けその後を彼女等と口バが付いてきました。

やっと着いてみるとあちこち石積みが壊れているものの立派な建物でした。石と石の間には草が生い茂り建物全体を緑で覆っているものの白い建物の肌が表れていました。

ほとんどの遺跡は聖者に関連したものとして語り継がれているのですが、この祠はなんの伝承もないようです。その証拠に誰も訪れたこともないような自然の中に埋もれたよう存在となっていました。

何本も立つ石柱群、円形状の広間、建物は幾何学的に整えられた

設計になっており一同は物珍しげに眺めました。

建物の奥に進むと足音が反響してきます。通路はさらに奥に進み、薄暗くなっていました。

ここまで来たときプエラは先に進むことを拒みました。

ソシウスはなんとか説得しようとしたが無駄で、仕方なく口バの番をプエラにお願いすると二人でさらに奥に進んでまいりました。

奥に行くと扉が二人の行く手を遮りました。グレーティアが調べると魔法の呪文によって閉ざされているということでした。高度な呪文で彼女にも手に負えないことが分かり諦めて戻ろうとしたところ扉は自分から開いたのです。全ての人の侵入を許さないはずである扉が開いたことに警戒はしたものの好奇心がそれを上回り二人は奥へと歩を進めたのでした。

奥の扉を二度ほど開いたところで不思議なことに周囲が明るくなりました。グレーティアが点していた魔法の灯りも閉じて進むと荘厳な間に出了ました。どうやらここが最深部のようでした。誰も訪れたこともないはずなのにこの空間は光り輝くように美しく整えられました。間の中心には磨き上げられたような石の台がありその上には赤い布が敷かれていました。二人がその石台に近づいて布の上に置かれたものを確かめると一振りの剣がありました。

「これは？」

それは剣の握りの部分が置かれていたのです。その剣先はなく二度と使えるようなものではありませんでした。ソシウスは興味深く剣を掴むとそこにあつたであろう刃を想像いたしました。

「この剣はよっぽど大切な剣だだろうな」

「のようです。この剣の為にこの祠があるのでしょう」

「この剣の為の廟といったところだな」

そつとソシウスが剣を元の位置に戻すと、彼は興味を失ったのか立ち去ろうとしました。

その後を追いかけようとグレーティアも体を返したものの、ふと剣のことが気にかかり立ち戻るとそつと手にしてみました。すると彼

女の脳裏に映像が浮かび上がってきたのでした。

それは黄金色に輝く甲冑に身を固め赤と青に輝く二本の剣で何者かと戦っている女性の映像でした。彼女がなにを叫んでいるのか、どういう状況なのかは分かりませんでした。異次元空間の様な混沌とした中で秘術をもって戦っているのは分かりました。やがて女性の一方の剣が敵をとらえ貫くと、苦しむ悲鳴とともに暗闇は消失し同時に剣が砕け散りました。握りのみを残して剣は息絶えてしまっただようでした。

グレイティアがその場で動かず剣を見たまま硬直しているのです。シウスは心配になって戻ってまいりました。揺り動かされて彼女は正気に戻り今見た映像はこの剣によってもたらされたものであることに気がつきました。そしてこのことを彼に伝えたのでした。

「その女性がこの剣の持ち主というわけか。どういう剣だったんだろうな」

感慨深くシウスは剣を眺めました。

「閉ざされた扉が開き、何故あの映像が表れたのか」グレイティアは奇妙な出来事に困惑していました。なにもかもが分からないことだらけでした。再び剣を元の場所に安置し、二人はその間を出ていきました。

三人の旅は続きました。最初は不満を沢山こぼしていたプエラでしたが、ながい山道に疲れ切って口を開く元気も失せてきたようでした。何度も山の中でキャンプをしたためか野宿にも慣れ初めていたものの次第に歩みも遅くなっていました。これはグレイティアにしても同様で女の足では山歩きは困難を伴っていました。度々休息を入れては先を急ぎました。幾度かの山を越え最後の嶺を通過すると突然前が開けました。サンダピア山を越えたのでした。眼下に見下ろすのは広がる平地緩やかな丘陵を道が下っているのが分かります。遠くに見えるのは村でしょうか。微かに煙りの立ち上る様子がわかりました。後は山を下るだけです。

途端にプエラの顔が明るくなり、それまでの疲れ切った表情はどこかに消し飛んでいました。

「さあみんな行くよ」

プエラはそう言うと言気揚々と歩み始めました。

何処にあんな元気があつたのだらうとソシウスとグレーティアは顔を見合わせました。

下りは早く中腹までそうかかりませんでした。人の往来が極端に少ないのでしよう、途中にすれ違う人は一人もいませんでした。ふもとまで降りて来たところ少し開けた所に草花が繁っていました。緑の葉に鮮やかな赤を持った花が一杯咲いており。花畑のようでした。自然に群生している花なのでしよう。ところどころ白い花をもつた植物が混じって咲いておりプエラはその中に飛び込むと盛んに花を集めてました。なにやら一所懸命しているのでソシウスは口バをその場に停め呆れたようにしばしの休息をとりました。

やがてプエラは花の中から戻ってくるとその帽子には綺麗に花の輪が取り付けられていたのです。盛んにプエラは自慢ており、嫌がるグレーティアの帽子を取り上げると手に持った花輪を取り付けお似合いよと強引に喜ばせようしました。彼女は照れくささも手伝って黙って頂垂れるだけでした。これを見ていて女二人でなくて良かったとソシウスは心に呟きました。その後道すがらプエラは蔓に咲いた淡い紫の花みては摘み取り帽子に刺し、やがて頭の上は花畑のようになりました。

その後もプエラは周囲を見渡し珍しい花がないか物色いたしました。何かもの凄く感激したものが見つかったのかプエラは遠くの花を指し示すと強引にグレーティアの手を思い切り引っ張りました。いきなり強く引っ張られバランスを失った彼女はよろめきプエラの横に倒れかかりました。

「あら、ご免なさい」とプエラが声を上げそうになった時、一条の矢がグレーティアが居たところを走り抜け地面に刺さりました。地面に刺さる音を聞いてグレーティアとソシウスに緊張が走りまし

た。慌てて振り返ると二筋の矢が飛んでくるのが分かりました。雷撃が空気を切り裂き矢は空中で粉々に飛び散りました。

「くそつ。敵は山越えすることを読んでいたか」

口惜しそうにソシウスは声を上げました。

どうやら離れた崖の上から何者かが狙ったようでした。しかしその距離は遠く、あのように離れた距離から正確に矢を放すとは信じられないことでした。

「敵の矢は正確だぞ。ここいては狙われる。岩陰に隠れるんだ」

三人は岩陰に隠れ様子を窺いました。

「どうやら敵は一人のようです」

グレーティアは敵の様子を伝えました。

「探査の目を放ったのか。それで敵はどうしている」

「崖の上から降り移動しています。仕留めそこなったので別の場所で狙うでしょう」

「魔法使いの一行様の後にはヒットマンかい」

「敵は私たちが正確に位置を把握しているとは気がつかないでしょう。逆に追い込み捕らえましょう」

「でどうする」

「敵は崖を降り立ったので私たちが移動しても気がつきません。敵の背後には崖があり逃げる方向は限定されています。私が魔法で追いついてますのでその行き先で逃げるのを防いでください。私が加わって二人で捕らえましょう」

こうしてプエラを残すと二人は敵の方向に向かって走りしました。

ソシウスは左に、彼女は右に進み。ころあいを見計らって。魔法の攻撃が狙撃者に向けて放されました。聞き覚えのある地面を叩く音に何が起きているのだとソシウスは遠くを窺いました。空に飛ぶ無数の石に彼はにやりとしました。

「もうあの技を覚えたのか。あれには散々な目にあったが、今としては心強いな」

ソシウスが待ちかまえていると、一人の男がこちらに逃げて来る

のがわかりました。

背中には弓と矢を背負い片手には両端に刃をもった双頭槍を提げていました。男は慌てふためいたように帽子を押さえ石の攻撃から逃れています。

男が走り抜けようとした瞬間、ソシウスは茂みから飛び出すと大斧の一撃をお見舞いしました。するとどうでしょう奇襲をかけたにもかかわらず男はこれをかわしたのでした。

驚いたのはソシウスのほうで、男が弓だけでなく体術においても優れているのが感じ取れました。

「お前やるな」

斧を構えてソシウスは敵を賞賛しました。

「異様な気配を感じたので飛びよけたが。大男が待ちかまえてたか」
そう言つと男は槍を構えました。

お互いににらみ合つて用意に技を繰り出せません。斧に太陽の光が当たり金属面がギラギラと輝き、一方の槍も赤い房の先の刃の部分が光を反射していました。お互いに冷たく光る金属が動かずならみ合い、お互いの隙を狙っていました。

動いたのはソシウスで誘いの一撃を振り下ろすと戦いの火蓋は切られて、旋風にも似た激しい攻撃が繰り返されたのでした。

「こいつできる」

ソシウスは舌打ちしました。

同様に男も強敵に出くわしたとを悟りました。

「大男のくせになんて素早いだ」

両者決め手を欠いたところでグレイティアが到着し形勢はソシウス側に有利になったように思えたのですが、突然男は彼女目掛けて駆け寄り猛然と技を放したのでした。

標的の魔法使いに接近戦を挑むのは正解でした。魔法をかけるいとも長くグレイティアは剣で立ち向かざるを得ませんでした。しかも長いスカートが足に絡んで思うように動けず、かわすのがやっとでした。槍の両端から放される技は長短入り乱れ多彩で息つ間もな

く果敢に攻め込まれあつという間に中門が破られたのでした。この後喉元に向かつて真つ直ぐ穂先が伸びてくるであろうことは感じました。刹那、グレーティアは敗北を知ったのでしたが不思議なことに男は素早く身を転じると大きく飛び離れたのでした。優位なのに何故退いたのか男になにが起こったというのでしょうか。彼女は何故仕留めないのか男の真意が分からず佇むばかりでした。僅かに遅く彼女の危機を見て猛然とソシウスが遅れて男に攻撃を仕掛けました。

しかし両者の実力は伯仲し決着がつきません。そこでグレーティアが魔法の技を掛けようとすると男はソシウスを振り払い森の向こうに逃げていきました。慌てて二人は後を追いかけて行くと男は沼地に足を取られ次第にその身を沈めているところでした。

「俺達が片付けなくてもいいようだな」

ソシウスは男の慌てる様子を他人事のように見つめました。殺そうとした相手なので当然でしたが、グレーティアは先ほどの戦いで男が取った行動が何故か胸に支えていました。

「お前は何者だ。それにお前に命令したのは誰だ」

容赦なくソシウスは攻め立てます。

それを見つめていたグレーティアはソシウスをそつと止めました。どうしたのだろうと見つめていると彼女は沼地に指を添えると凍らせたのでした。そして男の近くまで歩み寄ると男の持っていた槍を掴み氷の上に彼を引き上げようとしたのでした。槍を掴まれ男は我が目を疑うように彼女を見つめたのでしたが優しい眼差しに直に信じて体を預けたのでした。男は命からがら氷の上にはい上がり、標的だった彼女を見上げると険しい顔をしました。「何故俺を助ける？」

すると彼女は柔和な顔で「貴方はためらったのでは？」と問い返しました。

「違うなそれは」

そう答えると男は顔を背けるとよろよろと立ち上がり泥で重くな

った服を引きずり森の中に消えていきました。

その去りゆく姿を見つめる彼女にソシウスは詰め寄りました。

「せっかくのチャンスを逃してどうする。彼奴が再び襲わない保証はないんだぜ」

「殺してはいけない気がした」

彼女は短く語りました。

「それが理由か。直感を信じろと」

ソシウスは不満げでした。

「それにあの時優位でありながら何故攻撃を止めたのか知りたい」

「なんだ、それでは奴がお情けで許したというのか。馬鹿馬鹿しいそれは勘違いだ。今度襲ってきたら容赦なく俺が仕留めるからな」

そう吐き捨てるとプエラが待つ所に戻って行きました。

彼女は凍り付いた沼地を元に戻すと後を追いかけたのでした。

プエラは二人が戻ってから押し黙っているの、いつものように陽気に振る舞えませんでした。黙々と歩む道は長く労働を強いられるかのようでした。休んでどこぞかの木陰で体を横たえてのんびりしたい気分でした。

しかしその様な状態であっても歩みは止まることはありませんでした。丘陵地帯をほとんど何日も北に進み時が経つと次第にわだかまりも解け初め、普段通りの仲に戻っていったのでした。

「今度こそ仕留めてやる」とソシウスは闘志満々で引き分けたことを大後悔しそうにしていました。

森も退き辺りには草原が広がっていました。丘陵を緩やかに蛇行をしながら延びる道。風に草がさわさわと揺れていました。プエラは草の葉を摘み取ると口に運ぶと草笛を吹きました。虫の羽音にも似た素朴な音色はあたりに広がり陽気な気分をもたらしました。ソシウスも真似をして鳴らそうとしましたが、いつこうに音が出ずプエラに馬鹿にされます。

これに気分を良くしたのかプエラは詩を歌い始めまるで郊外にピク

ニツクにでも行っているかのようでした。プエラはグレイティアにも一緒に歌うことを勧め、やむなく彼女も歌い始めました。二人の合唱が白い花が咲き乱れる草原に響き渡り、野ウサギが何事かと聞き耳を立てていました。

こうした陽気な気分も終わりを告げました。一行が向かう目の前に一騎の武者を見たからです。草原に馬に乗りこちらを見定めている一人の男。まだ随分遠くでありましたが、以前遭遇した人物に違いありません。前回は隠れたところから狙っていましたが、今回は姿を現し堂々と勝負を挑むようです。

「現れやがったな。俺が相手だ」

ソシウスはそう意気込んでみたものの敵が離れすぎて徒歩の自分では相手が近づいてくれなくてはとうしようもないことに気がつきました。グレイティアはプエラから出来るだけ離れると草原の中に一人立ちました。するとそれに合わせるかのように騎馬の男は馬を走り初めさせどんどん近づいてまいりました。あわててソシウスも彼女の横に位置し迎え撃とうとしましたが、騎馬は全速力で迫ってきたものの途中で横に走り始めました。

意外な展開に驚いた二人でしたが、やがて敵の意図を知るのでした。騎馬の男は疾走する馬の上から矢をつがえると彼女目がけて放ってきたのでした。雷撃にて矢は粉碎されましたが、立て続けに何条もの矢が飛んでまいります。どうやら敵は彼女を中心として円周上を疾走し離れた距離から仕留めようとしていました。こんなに離れては疾走する馬の上から放された矢があたることは少ないのですが、相手は相当な弓の使い手で確実に狙ってきます。くわえて常に距離をとり高速で移動するために、静止しても威力ある魔法がやっと届く距離でしかも相手は移動するので的を絞ることが出来ないのです。普通に戦っては勝てないと判断した男の選んだ作戦でした。

飛んでくる矢を砕き、直ぐさま雷撃を放すしますが騎馬の後ろを通過しいっこうに当たりません。ソシウスは男を追っかけて草原を走り回りますが騎馬相手に徒歩の戦いは厳しく容易につかまえるこ

とはできず。疲れて肩で息をする始末でした。

矢は魔法を放ったあと次の魔法を出すまでの空白の時間を狙い初めていました。立て続けに矢が放されて神業的素早さでした。これはこちらが馬の走りの変化を読み切るか、あちらが魔法の切れ目を捕らえるかの勝負であると彼女は理解しました。

彼女が覚悟を決めたときこの戦いは突然終わりを告げたのでした。騎馬の男は此方方向かず遠くを見定めると突然走りはじめたのでした。再び危機的状況から取り残された彼女は何事が起こったのか男が走り去った方法を目で追いました。

草原に響き渡る無数の足音。地面の震動は空気を振るわせ周囲に不気味な音を響かせます。腹の底に響き渡る低音は土煙とともにその存在を暗示させていました。

「あれはケドルスの群じゃないか」

ソシウスは彼女の所に駆け寄ると同意を求めるように言いました。遠くから見ても家畜の群には見えません。のんびり草を食むでいるというより集団でどこぞかに獲物がいないか探し回っているといった肉食の飢えを感じさせるものでした。

ケドルスは怪物の一種で本来この地区にはいないものです。ジューヴォーの様な大きさはなく羊ほどの小ささですが牙と爪は鋭く人間などであつたら容易に肉を食いちぎります。特徴は集団で行動し辺りを食いつぶすことです。食糧が少ない時期はいきり立っており、戦闘ともなると終わることを知らず最後の一匹になるまで止むことがないといった、少々厄介な怪物です。

「彼奴がケドルスに向かったのは、あの怪物を俺達にぶつけるつもりだな」

ソシウスは吐き捨てる様に言いました。

暫くの間、怪物に向かった騎馬の男の様子を窺っていました。

男は草原を疾走するとケドルスの群に追いつきました。群は一塊りとなつて砂煙を立てながら移動しており、その数200頭。その群めがけて男は矢を放ったのでした。矢はケドルスの額を居抜き音

を立てて崩れ落ちます。群から一定間隔をもって馬上から放される矢は次から次に見事に怪物を射止め、雨が降るようでした。

「どうやら、怪物を誘い私たちに向けるつもりではないようです」

「そうか、この先に町があるので、あの群を近づけさせないつもりか」

少し不愉快そうにソシウスはしかめ面をしました。

騎馬の男は矢で射抜いているものの、その数はいつこうにも減っているように見えませんでした。それはケドルスの数が多いことが上げられるのでした。

「このままいけば、矢を使い切ってしまう。私たちも向かいましょう」

「彼奴は敵だぞ。正気か？」

「私たちは怪物ハンターでは？」

逆に彼女は問い返しました。

「けっ、相棒にそう言われちゃ仕方ない。ケドルス相手に予行練習だ」

二人は怪物の群めがけ走りました。

男は確実にケドルスを仕留め、何頭もの怪物を地面に横たわせていましたが弓を放す毎に焦りみたいなものがふつふつと沸き上がってくるのを感じました。矢は次第にその数を減らし、ついに底をつきました。

離れた位置から優位な立場で倒していたのですが、もうそうはいきません。

弓を収め双頭槍を手に持つと猛然と群の中に飛び込んだのでした。次々に怪物は頭を刺され倒れていきます。しかし彼の乗った馬が襲われ、驚いた馬は彼を振り落とすと怪物のい群から逃げたのでした。男は勢いよく落ちると素早く起きあがり双頭槍を構えました。怪物達の真ん中に取り残され、周囲はケドルスだらけでした。

怪物が一斉に襲いかかると、男は縦横無尽に動き回り槍に双方に付いた刃が八方に煌めき次々に倒しました。一気に周囲に怪物が倒れ

無敵の強さを誇っていました。それでもまだ150頭も残っており疲労が徐々に男の能力を奪っていました。

次第に怪物達の攻撃が男を捉える初め、鋭い爪が服を切り裂き咆哮が耳元で響き始めました。

（このままでは殺られてしまう）そう男が思った時でした怪物の囲みが雷鳴とともにものうち砕かれました。閃光はケドルスの中を突き抜け20頭のばかりの数が肉片となって辺りに飛び散りました。その閃光から僅かに外れた怪物は全身に焦げ目を作って倒れ、地面に一条の軌跡を残していました。

飛び散る肉片を浴びて男がその雷撃の元を見ると、魔法使いの娘が此方に迫っているのが分かりました。しかしそれをゆっくり確認するいとまなくケドルスは襲いかかり、その一部は新たな獲物めがけ走り始めました。

彼女は弓使いの男追いかけてやっとな魔法が届くところまで追いつきました。かろうじて男を救うことが出来ましたが、怪物の群は此方に襲いかかり。地響きはどんどん迫ってまいります。十分ケドルスを引きつけたあと近距離から雷撃をお見舞いすると50頭ほどが一瞬にして消え去り地面を肉片が覆いました。しかし10頭ばかりが横を抜け背後から襲いかかるとこれにはソシウスは立ちほだかり、大斧の空を切る旋風とともにこれを始末したのでした。

続いて彼女は男の周囲に雷撃を放すと30頭が消え怪物は40頭の小集団になっていました。男の動きは落ちていましたが次々に残りを刺し殺していると、そこにソシウスが到着すると辺りに怪物はずたずたに切り裂かれ、後には二人の男が息を切らして立っている姿があるだけででした。

男は槍を杖にやっとな立っているようで、随分傷を受けていました。しかしソシウスを警戒してか目を放さないでいました。ソシウスも少し身構えいつでも対戦できるようにしていました。

怪物の危険は去ったものの両者はにらみ合ったまま動こうとはしません。

「ソシウス止めるんだ！」

男がその声の方向を見ると、娘がこちらに走り寄ってくるのが分かりました。ここでやっと男は警戒を解き大男が襲ってこないことを確認しました。

「いいのか、これで」

ソシウスは不満そうに渋い顔をしました。

彼女は手を挙げると彼を押しとどめました。そして男に語りかけたのでした。

「貴方は何故、勝てたであろう戦いを止め怪物を退治に向かったのですか？」

男は静かに答えました。

「まだお前が世の災いである確信がもてなかった。それに対しケドルスは明確な災だ。それだけの差だ」

災いと言われて彼女は問い返すことが出来ませんでした。

「礼は言わない」

そう男は言うとも馬が消えた方向に向かって歩み始めました。

ソシウスはため息をつくとも周囲に横たわる群の残骸を見渡ししました。

「こんなところに怪物が表れるようになっては野宿も危険だな。もしかしたらもつと怪物の移動が行われていて、こいつらはそのほんの一部にすぎないのかもな。あいつが怪物優先てのもわからんではない」

なだらかな丘陵の中を流れる川の右岸に町がありました。

緑の屋根に乳白色の壁が広がる町は周囲にピンクの花を咲かせた草地が広がっていたせいか、どことも暖かい感じの町でした。道は轍の跡がくつくりと残ってでこぼこしてあまり上等の道ではありませんでしたがそれでも主要道でした。その道は斜面を下って町の真ん中に延びていました。田舎町のこともあるし人々は家の中にい

たりや畑に出かけて多くの人を見かけないのではないかと思えたのでしたが、一行が到着したとき町は慌ただしく人が行き交っていました。町のものが男のみならず女子供までが必死に土嚢を積み上げているのでした。この町には城壁が存在せず。町の周囲にあるものといえ、家々の庭を囲む塀程度のものでした。それを強化しているようででした。

荷車には土嚢が積みれ人が何人もかかって運んでおり、その先には男達が汗だくになって高く積み上げていました。まるで戦争でも起こりそうな様子でした。

作業の指揮をしていると思われる男が大声で叱咤し、それに逆らうどころか聞こえないかのようににどンドン作業を進めており真剣でした。

普段であればよそ者の旅人には興味津々に様子を見るはずである人々はだれも興味も示すことなく、それどころかいけないかのよう

に脇を駆け抜けていきます。町の周囲は人でごったがえしの状態でしたが中心部にいくと逆に人の姿はなく閑散としていました。道の脇で煙管を吹かした老人を見かけたので彼女らは語りかけました。

「ほう、お前さん達は旅人のようだの。えらいところにやって来たものだ」

老人は愉快そうに頬をひくひくさせました。

「町の周囲を補強しているようですが。なにか起こったのですか」

「まあ、嬢ちゃんたちは知らないだろうが。ケドルスで怪物がこの町めがけてやってきているじゃよ。分かるかな羊みたいな大きさの凶暴なやつだ」

名前を聞いて一同は顔を見合わせます。どうやら怪物はあれだけではなかったようです。

前に遭遇したときに嫌な予感があったのですが、再びあの騒ぎの真ん中になることはあきれるばかりです。かといって怪物が出る場所で野宿というわけにもいかず、やはり多少なりとも障壁が

ある町中に居た方が安全なような気がしました。

「おまえさんはこの娘達の護衛かい。若い娘二人も連れて大変なことだ。この奥まったところに宿屋がある。あそこなら怪物に遭まなくても済むかもしれん」

そう言うのと老人は満足そうに吹くと、煙管から灰をを落としました。教えられたまま今夜の宿を探しに町の中を歩んでいたところ、確かに奥まったところに宿屋を発見しました。この宿屋なら騒ぎからの逃れることが出来そうです。宿を借りて暫くくつろいでいると宿の主人が訪問者を報せにきました。このような所で誰が訪ねてくのか思いも寄らぬことに、興味が湧いてロビーにいつてみるとそこにいたのは命を狙ったあの男でした。

ソシウスは素早く移動すると拳を上げて身構えました。男はそれを無視するかのように暫く眺めたあと、気楽に近づいてきたのでした。

「貴様、なんのつもりだ」

ソシウスは警戒を解きません。

男はソシウスを一瞥すると立ち止まりグレーティアの方を向きました。

「力を貸して欲しい」

命を狙った男から、思いもよらぬ要請でした。一同が驚き怪しんでいると男は語り初めました。

「三千頭のケドルスがこちらに向かっている。何故突如怪物が出現したのかは不明だが、確実にこの町に被害をもたらすだろう。この地域は怪物とは無縁で魔法使いがおらず、今から救援を求めても間に合わない。そこで俺はお前なら使えと判断したわけだ」

「二度も命を狙って、何事も無かったかのように協力しろだ」と

ソシウスが声をあげました。

「このままでは、この町が戦場となる。当然住人は怪物と戦うことになるし死傷者がでるだろう。しかし魔法使いがいれば郊外で迎え撃つ事が出来る」

男が言っていることは嘘ではありませんでした。それはこの町の喧噪が証明しています。しかし待ち伏せをして命を狙った男が一転、町を救おうとしていることには違和感を抱きましたが、先の戦いの最中に勝負を投げ出し単身怪物退治に向かったことから町を守ろうという志を持った人物であることがよく分かっていました。この人物ははたして何者であろうかと思い巡らしました。

「分かりました協力致しましょう」

グレーティアは返事をしました。

「さてよ、そんな派手なことをしては逃亡にならんだろう」
慌ててソシウスが制します。

「その追っ手が目の前にいるのだけど」

「それもそうだが」

そこでソシウスは男に問いました。

「俺達は怪物ハンターだ報酬はあるんだろうな」

男は暫くの沈黙のあとに答えました。

「報酬は命でどうだ」

「どういう意味だ」

「俺はお前達に手を出さないという報酬だ」

意外な申し出にどう対応して良いのか迷ったソシウスは少々詰ま
つてしまいました。

「いいだろう。約束は破るな」

「これから町から北に進んだ平原に陣を敷く、お前が女魔法使いで
あると分かると不味いからこの法衣を上に着てついてきてくれ」

そう言うのと包みを地面に放り投げました。

中には上から全てを覆い隠すような灰色の法衣が入っていました。
男はきびすを返すと店から出て行き、馬に乗り彼等を待ちました。
「それじゃ、商売道具の斧でもかかえてくるとしよう」

ソシウスは部屋に戻り獲物を背中に担ぐと宿屋から飛び出してきました。グレーティアは法衣を上から纏うと剣を背中に掛け出て行きました。プエラも遅れてはと慌てて後を追いかけようとしたので

すが彼女に止められてしまいました。

「なんで、どうしてなの？」

不満が爆発しそうにプエラはほっぺを脹らませました。

「危ないから」

「怪物倒しているところ見たい」

プエラはだだをこねます。

「物見遊山でないのだから」

彼女は困ってしまうとソシウスが助け舟をよこしました。

「これはだなあ。男の戦いでやつだ。女の子はここで待つてな」

「だったらこの女の子が行くてどうということよ。不公平だわ」

ああ言えばこう言うでソシウスもすごと退散すると、彼女は
拝むようにいました。

「どうかここで待つて。プエラがなにかあったら心配だから」

プエラはぶつぶつ呟きながら二人を見送り背後から声を浴びせま
した。

「私はここでやけ食いつてるから。なーんもあげなから」

恨みの言葉が背後から二人に投げかけられました。

二人は怪物より此方の方が手におえないと思いました。

第7回 狙撃者（後書き）

こんな調子で書いていたらアデベニオという天竺行きの物語と勘違いされそうです。

目的地に到着してからいろんな事が起こるはずなのですが。

ところで童話童話と主張しながら残酷シーンがあるのは変と思われる方の為に。

「舌切り雀」では雀の舌を見たら糊がついていたので舌を切って放した。

「花咲か爺」では欲張り爺さん怒って犬を殺して埋めて柳の枝をさした。

「猿蟹合戦」では猿は屋根から落ちた臼につぶされて死んだ。

「シンデレラ」お姉さんは目を潰されたり足を切られるなど災難。

「ピーターパン」成長した子供はピーターパンが殺します。

「ヘンゼルとグレーテル」親に捨てられ、魔女を焼き殺す。

子供のためという話がこんな具合なのでこの小説が童話から外れているとは思いません。

次回は動物の愛護および管理に関する法律に反するお話です。

第8回 町の防衛線（前書き）

<登場人物>

ビルトス 主人公の師

グノー 主人公の兄弟子

グレーティア 主人公

プエラ 主人公の幼なじみの娘

レピダス 黒虎騎士団（銀弓のレピダス）

ソシウス 斧使いの大男（旋風のソシウス）

コンジュレティオ 軍総司令

ホステイス ヘテロ国魔法宰相

第8回 町の防衛線

町を少し北にいった所に陣がありました。丘陵地の段差が発生しているところの高台に柵をもうけ迎え撃ちさらにここを突破されると町にて防衛する計画のようでした。平坦地が多く守りにくい地形でもそれなりに防衛に手だてを立てられるというものでした。

200人もの兵士が陣地を強固なものに作り上げていました。幾重にも張り巡らされた柵は怪物とはいえど簡単には突破できないでしょう。兵士達は来るべき戦いに備えて調練を繰り返していました。指揮とともに一斉に空を覆うほどの矢が放され地面に突き刺さり、逃れる場所などないように見えました。

しかし強固に見える陣も弱点だらけでした。その第一が防衛陣の外側に回って突破されてしまうことです。平時の備えであれば長い防衛網を築くことが出来るのですが、その時間的余裕もなくやもう得ない事でした。

「そう言えば名前を聞いてなかったな」

ソシウスは馬から下りた男に話しかけました。

「こちらもな」

男は切り返しました。

「なるほど、それはそうだ。俺はソシウス。そして相棒のグレーテ
イアだ」

「グレーテイアというのか」

男は標的だった者の名前を知り、そこで自分のことを語る気になりました。

「俺はレピダス」

「なにか聞いたような名前だな」

ソシウスは記憶の奥からなにかを取り出せなく不満そうな顔をしました。

「銀弓のレピダスと呼ばれている」

「なに！まさか」

思わず斧を落としそうになりましたが、興奮気味にソシウスは叫びました。

「どうしてだ。黒虎騎士であるお前がここにいる。というより何故命を狙った」

しかしそれには男は答えず陣内の一角を指しました。

「そこにいるのがこの町の軍務官だ。紹介するから大人しくしていろ」

そう言う二人を軍務官の前に連れてきた。

軍務官は険しそうな顔で兵の配置について思索している真つ最中でした。人の命が彼の腕にかかっており、作戦のミスは多くの命を奪うことになるのでした。しかも一瞬で勝負は決しやり直しは利かないのです。町まで平坦地が続くなかでこの場所は岡が張り出し怪物の群を集中させやすい所にありました。怪物が一点集中すれば少ない兵でも倒すことは可能でした。しかし陣の幅は狭くそこに集まってくれるのか心配でした。だからといって広げて兵を分散させては意味がありません。陣の両先端から通過されてはこの陣そのものが無かったも同然になってしまう危惧もありました。（騎兵による追い込みも必要か）そう考えていたところレピダスが戻ってきたことに気が付いたのでした。

「その分では、だいぶお悩みのように」

「その通り。頭がくらくらする。魔法使いでもいればいいのだが人間だけで怪物退治はしんどい」

「特効薬を持ってまいりました」

軍務官は愉快そうにレピダスに顔を向けました。すると彼の後ろに大男と法衣を纏った子供が控えていることに気が付きました。

「それが秘伝の薬というわけか」

「お待ちかねの魔法使いです」

「その子供がか？」

軍務官は悦ばしい気持ちと不安な思いが混じり合って、どう言っ

ていい言葉が出ませんでした。

「歳は若いですが、中級レベルの魔法が使えます」

「それは本当か？ だったら使えるが。歳は10才を少し越えたくらいだろう？ 恐がりはいないか」

「大丈夫です。以外と肝が据わっていて少々の事では動じません」

「しかし大軍を見ては怖じ気づく」

「既にケドルス200頭と戦い殲滅しています」

「まことか！」

軍務官の顔が真剣なものに変わりました。

「このもの達は自らを怪物ハンターと称しています」

「怪物退治を生業としているとはな。しかしそうなると報酬だが」

「それは大丈夫です。私との間に契約が成立しています」

軍務官はしばし目をつむり思索したあと、足早に作戦図に前に向かって、黄色い駒を一つ取り上げ真ん中に力強く置いたのです。この時作戦は魔法使いを中心に据えたものに変更となったのです。

陣が敷かれている丘陵の高台に三人はいました。陣より前は急激落ち込み、その先は平地で遠方まで続いています。その低くなった平地の中に狭い高台が孤島のようにあり、ここに魔法使いを置き怪物を迎え撃つ作戦でした。魔法の攻撃の巻き添えを兵士が食らっては馬鹿げたことでもあるし、そのほうが魔法使いも技が心配なく出せるからでした。兵士の役目は魔法使いが取りこぼした怪物を弓矢で殲滅することでした。この作戦は魔法使いの負担が大きく危険なため、それを想定して兵士による作戦にいつでも切り替わるようにされていました。ケドルスとの戦いにおいては相手が戦意喪失し八方に逃げてしまうことがないのが利点でした。それは怪物の性格が最後の一頭まで戦いを挑んでくるほど好戦的だからで、四散した敵を追跡したり陣地を大きく迂回して移動する心配を幾分しなくていいのです。その代わりとして、集団での攻撃はすさまじく息を付く暇もなく戦わなくてはならないのです。

「ここが我々の持ち場だ。ご覧の通り孤立無援、周囲は怪物の群一色になるという寸法だ」

草原の中に島のように盛り上がった山に立ちレピダスは案内をしました。

「本陣から放されこんな前に配置されるとはな。まるで生け贄じゃないか」

疑いの眼差しをソシウスは向けました。

「特等席だと言ってほしいな。安心しろ俺も此処にいる」

「それでもこの島には3人しかいないんだぞ。大丈夫か」

「だから魔法使いがいるんだろ」

レピダスは周囲を確かめていたグレーティアを顎で指しました。

彼女は真剣な眼差しで周囲を見渡し、その距離を測っていました。「ご覧の通り、窪地とはいえかなり広い。敵に散開されては魔法の技が届かないはずだ」

心配していた事を男は指摘しました。

「中級の下位レベルでは遠くに技を放せないのは仕方ないことだ。だが安心しろ幸いにもケドルスは仕掛けると逃げるどころか凶暴になって集まってくる。だから届かない心配は無用だ」

「馬鹿野郎、それじゃ俺達がますます危険でことじゃないか」

「怖いのか？」

レピダスが嘲るように笑うとソシウス挑むように睨み付けました。「問題なのは、そんなことじゃない。俺から弓で射られそうになったことでも分かるだろが魔法を使って次の魔法を出すまでの時間が長いということが最大の問題だ。一部の怪物を消し去っても、その間他のケドルスは距離を縮めてやがて間近に迫ってくるだろう」

彼女は先の戦いで危機に陥り怪物の出現で救われた事を思い起こしました。たしかに男に言うように、単発的にしか技が出せず文を生成するのに時間がかかるのも事実でした。ビルトス先生は大勢の魔法使いを相手に並列的に技を繰り出すことが出来ましたが、そのようなことはまずは出来ません。上級魔法使いであれば遠くから広

範囲に怪物を倒すことが出来ることでしょうが今の自分にはとても真似ができるものではありませんでした。

「この岡の周囲には壕と柵があり、ある程度のまとまった時間防いでくれるだろう。この間出来るだけ倒すんだ」

グレーティアは小山の一番高い部分に立ち、それより一段低い所に右にソシウス左にレピダスが位置をとりました。

背後を見渡すと幾重にも張り巡らされた柵の向こうには弓を持ち構えた兵士が並んでたっていました。全ての人の目が前方岡の裾を此方に向かっているであろうケドルスの姿に集中いたしました。彼方から一頭の馬が陣に疾走し怪物が間近に迫っていることを報告しました。

そこにいる全ての者に緊張が走り、だれもが唾を飲み込みました。

いよいよ怪物達の戦いが始まるうとしていました。

この戦いの場所の小高い丘の上に少女は立っていました。心地よい風が髪とスカートをなびかせます。帽子を飛ばされないように右手で押さえると少女は屈託のない顔で満足そうに下界を見下ろしました。眼下にあるのは幾重にも柵で囲まれた陣地でした。その先端には離れ小島のように陣がありました。捜し物でも見つけたように軽く指さすと、敷布を広げて座りました。左手に提げたバスケットを地面に置くと中から飲み物やら食べ物を取り出しむしゃむしゃと食べ始めました。

（私を置いていったバツよ）

そうプエラは呟くと眼下の緊迫した空気とちがって暢気な様子で鼻歌だのを歌ったのでした。

「あ、来た来た」

演劇が始まるかのように、舞台に登場した無数の群にプエラはではしゃぎました。ケドルスが蟻の群のように繋がって移動しており、遠くで見かぎり羊の群となんらかわりなく牧歌的な風景のなかに取り込まれていました。

「グレーティアがんばって」

少女は豆粒の様に小さく見える姿に盛んに手を振りました。

岡の上でこれから起こることに胸躍らせはしゃいでいるプエラとちがいが、陣地の三人はまだ見えぬ敵に鼓動が高鳴っていました。

「いいか、岡に挟まれ奴らは密集した状態でこの草地に出てくる。町までの間には結構森があるのでなんとしてもこの開けた場所で仕留めてしまいたい。戦いはさほど時間を取らずに決着するだろう。すなわちケドルスの消滅か我々の滅亡のどちらかだ」

レピダスの言葉が余計に緊張を引き起こします。この人も必死なのだ。グレーティアは思いました。

そうこうするうちに岡のふもと付近の林からケドルスが姿を現しました。開けた草地に一頭が迷い羊のようでしたが、そうこうするうち森の中からどんどん湧き出てきてあたりはケドルスの灰色の姿で覆われてしまいました。

群は押し合いへし合いし狭くなった所を抜けると広い草原に広がっていきました。

「お出ましのようだぜ。半端な数じゃないな」

ソシウスは背中に身震いのようなものを感じました。

次第に近づいてくるケドルスの群。草地は灰色に塗り替えられます。

「たった三千頭だ。気にするな」

レピダスが軽く言っただけでした。

「200頭に手こずっていたのは誰だった」

皮肉をこめてソシウスは言葉を返します。

「なにこの魔法使いのお嬢さんが残り2700頭退治してくれるから大丈夫だ」

到底信じていると思えない、不安を楽しんでいるかのようでした。当のグレーティアは何も語らず、増えつつある怪物の群を凝視したまま動こうとはしませんでした。まだ、怪物は魔法の射程からだい

ぶ離れているようでした。

「慌てるな、十分引きつけろ。最初の一撃が最大の戦果をもたらす。ここで出来るだけ仕留めるんだ。攻撃を受けた途端あいらはこちら目がけて疾走してくるはずだ」

怪物は放っていたら何処までも増えそうに黙って見ていることは、衝動を抑えることに必死にならざるを得ませんでした。

暫く沈黙は続き、遠くでケドルスの鳴き声が塊になって響いてまいります。

その静寂が破れて草原に一条の雷光が突き抜けると群の真ん中が消し飛びました。グレイティアの放った最初の一撃でした。

ケドルスの群の中、肉片が飛び散り他の怪物の体に降り注ぎます。それにより群は狂喜に満ちたものと変身しケドルスのけたたましい声が響きわたりました。小石を投げ込まれた魚の如く、群は一斉に動き出し地響きとともに激しい勢いで迫ってまいりました。

静から動への一瞬の群の変化でした。

「よし、今ので500頭は仕留めた。一気に倒すぞ」

レピダスは興奮気味に叫びました。

戦いの火蓋を切られました。迫り来る怪物の群に幾度と無くグレイティアは攻撃を仕掛け群の数を削り取って行きました。しかし、最初の一撃と違って怪物は散開しており一回に倒せる数も減っていました。しかも怪物は仲間が次々に碎け散って行くというのにお構いなく闘争心は衰えることもなく、むしろどんどん凶暴になっていくかのようでした。血の匂が怪物を刺激しているようでした。

拡散し迫りつつある敵に彼女は雷撃を拡散して放しました。小さく散らばった雷撃は多くの怪物を捕らえましたが、明らかに威力は落ちていました。雷撃は骨を砕く事もなく激しい勢いで怪物を貫き、体から煙を吐き出させました。焦げるような匂いが辺り充滿し、ケドルスは疾走姿勢のまま地面に転がり落ちました。そして周囲の怪物は体が痺れたようになり緩慢動きをしていました。

此処までの戦いでケドルスは千頭は姿を消していました。しかし

残り三分の二を残して陣地まで到達させてしまい1千はグレイティア達の陣を目指し、もう一千はその背後の兵士達の陣目出して突入しました。

ケドルスは陣地にとりつくやいなやレピダスは弓をもってこれを迎え撃ちました。彼の背後には沢山の矢が揃えてあり、限界まで放すことができたのでした。

レピダスの矢は驚きべき早さで放されました。矢を放した瞬間次の矢がつかえられ途切れることなどなかったのです。しかもその放された矢はケドルスの眉間を的確にとらえ勢いよく走り込んだ怪物は目を見開いたまま次々に崩れ落ちたのでした。

「突破されるぞ。背後の陣に向かった奴を何とかしてくれ」

レピダスが弓矢を一瞬止めて指示をいたしました。

通り過ぎたケドルスは兵士200人が守る陣地を強襲しはじめて、ほどなく到達するところでした。そこを守る兵は総数200といても半数が臨時の兵で修練度は極端に劣るものでした。柵がある程度防いでくれますが、兵士が恐怖心によって崩壊しはしないか心配でした。弓は一斉掃射で何頭怪物をとらえるかまったく読めません。

この問いにグレイティアが出した答えが弱い雷撃でした。

ただし一群を全てを捉える極端に拡散した雷撃でした。

ケドルスの群は勢いを落とし体を痙攣させながらヨタヨタと歩きました。先鋒の一団が速度を落とすと背後からきたものは行く手をふさがれ極端な密集状態が出来ました。

このことが分っていたのか、一斉に陣内から矢は放され空を埋め尽くしたかと思うと落ちて群れの中に雨の様に降り注いだのでした。

「これで半数は倒したはずだ」

その言葉は僅かな希望をもたらしましたが、陣の柵を破壊しながら怪物達は鼻息も荒く次々の押し寄せて来たのでした。

壊された柵を伝って怪物は高台に登ってきました。それを待ち受けたかのようにソシウスは仁王立ちで待ちかまえていました。

柵を飛び越えて侵入してきた三頭の怪物は旋風が走ったかと思うと首と胴体に分かれて地面に落ちました。

しかしこれで終わりではありません。次から次へと新手は登場してくるのです。それでもソシウスは息もつかぜずケドルスを切り伏せ辺りには怪物の屍が累々と積み上がり、返り血であたりを真っ赤に染めたのでした。血が幾層にも降りかかり彼の服は血糊でべたつきしたたり落ちていました。

一方弓を使つて倒していたレピダスも敵が柵を壊し目前にせまってくるど獲物を双頭槍に持ち替えました。この獲物は接近戦を得意とした槍です。怪物が侵入してくると縦横無尽の動きにて次々刺し殺して行きました。

鬼神のごとくの二人の働きでしたが、かれらはあくまでも魔法使いの護衛が主たる明務であり、怪物退治の全ては頂上にたつグレイティアにかかっていました。

彼女も持てる力の全てをだして魔法の呪文を唱えたのですが、怪物の動きは早く想像通りになりに追いつめられていました。やむなく初めての試みで呪文を並列して放つことに試みました。不完全に放されたいた魔法は次第に形を整え少しずつケドルスを押し返し始めました。四方八方に放された魔法は怪物のみならず地面に後を刻みながら、辺りを粉々にうち砕きました。地面には魔法の爪痕と砕け散った肉片が散乱していました。

ケドルスは次第にその頭数を減らし残るは300頭。

動きが鈍くなつた怪物めがけ200人の兵士からの一斉掃射がありました。

ここに魔法使いは一撃を与え全てのケドルスを消滅させたのでした。

兵士から歓喜の声があがり、嬉しさのあまり飛び跳ねてました。

ソシウスとレピダスは限界まで戦い、全てが終わったことを知るとその場に崩れ落ちました。短い時間の戦いのはずが何時間も戦い続けたような疲労感が体に襲います。

グレイティアはというと短い間に極度の緊張と精神の集中力を強い

られ、それから解放されたかと安堵の表情を浮かべ地面にへたり込みました。

周囲を見渡せば緑の草地だったところは、陣地を中心として放射状に地面がめくれ上がり地肌を覗かせ、怪物の粉々になった肉片があちら此方に散らばっていました。背後の陣地の前にはケドルスの死体が帯状に横たわり無数の矢が突き刺さっており兵士が死にものぐるいで戦ったことがわかりました。グレーティアのいる陣地の回りには切り刻まれバラバラになった死体が転がりそこから流れ出た血は合流しあい小さな流れを作って下手に流れていました。

辺りに静けさが戻り兵士達がまだ息があるケドルス留めを刺そうと陣から出ようとしたときでした。

岡の麓より響き渡る怪しい足音。

空気を振るわして響いてくる低い音は危険なものが近づいてきたことを予感させました。再び陣内の緊張が走り兵士達はその音の方向を凝視いたしました。やがて林の中から現れてきたのは馬二頭を横並びにしたような大きさの怪物でした。

この突如の出現に中央で指揮をとっていた軍務官は指揮棒を落としてしまいました。

「あれは、カタではないか。報告は受けておらんぞ」

軍務官は自体の急変に狼狽えいらだちを隠せませんでした。

「先の偵察では、そのようなものは警戒エリアにはいませんでした。まさに今ここに出現したとは思えません」

「そのようなことがあるものか。我々は対ケドルス用の防御陣を構築したのだぞ。それがあれに通用すると思うか」

「弓の一斉攻撃を加えれば」

「カタは表面を堅い皮膚で覆われている。矢など通用しない。しかも重量があるので柵など踏み倒していくであろう」

「ならば槍で」

ここで軍務官は何かを思いだしたように、明るい表情を取り戻しました。

「儂としたことが魔法使いの存在を失念していた。あの魔法使いの小僧は無事か？」

「はっ。レピダス殿が守りきられたようです」

「よし、作戦の継続を旗で報せる。我々は投げ槍にて応戦だ」

「偵察部隊は他に怪物の存在がないか調べよ。それから早馬にて町にカッタの出現を報せるのだ」

矢継ぎ早に軍務官は指令を出すと自らが槍を手にしたのでした。

林からその後怪物は姿を表しその数20頭あまり、ケドルスと比べその数は少ないのでした。

「今度のは数が少ないな」

ソシウスは安堵の声をあげました。

「カッタはケドルスを食用としているんだ。甘く見ると殺られるぞ」
レピダスは厳しく戒めました。

「すると、この死体の匂いを嗅ぎつけ集まったということか？」
「のようだな」

「だったら死体の後始末お願いしたらどうなんだ」

「お前その後どうする」

「何処かにこいつら消えるんじゃないのか」

「次に近い餌場は町だろうが！」

レピダスはソシウスの安易な考えに怒りを覚えました。

「もう一度戦わなくてはならないようですね」

二人の会話を聞いていたグレーティアは決意を固め立ち上がりました。

彼女が見つめる先には地面を叩き、低い地響きをさせ迫り来る力ツタの姿がありました。その姿は平原を疾走する岩のようでした。

「こん度の奴は散開する恐れがある。俺は馬で彼奴と戦う。お前達はここで戦え」

そついうとレピダスは足早にグレーティアのいる陣地を離れていききました。

「大丈夫だグレイティア。今度の奴は数が少ないから俺達で十分さ」
全身血で真っ赤なソシウスは陽気に笑いました。

砂煙を上げて20頭は草原を走り抜けます。やがてケドルスの死体に辿り着くと貪るようにそれを食らいました。大きな顎に鋭い牙で噛みつかれた死体は骨の碎ける音とともに食いちぎられ形を変えていきました。カッタ達の食欲旺盛な姿に兵士は恐怖心で固まってしまいました。

陣近くで重なって倒れたケドルス食らっていたカッタは周囲に人の大きな叫ぶ声がして顔を上にあげると無数の槍が飛んでき、体を突き刺したのでした。

二頭は苦痛の叫びをあげると、夢中で食らいついていた仲間は動きを止め仲間の異変に気が付いたのでした。18頭が呼応するように雄叫びをあげ怪物達は仲間を傷つけたものに対しに怒りの炎を燃やしました。

カッタの動きはそれまでとは一変し素早い動きで陣にせまり一気に柵を破壊したのでした。恐怖のあまりに逃げ出す兵士たち。

兵士は怪物に踏みつぶされ 槍は牙でへし折られてしまいました。

グレイティアは敵意なく分散し死体をあさっている怪物をどう倒したらいいか悩んでいました。襲ってくるわけでもないし食事をしているだけの存在に争いを仕掛けるといことは後ろめたい感じがしたのでした。でもその迷いをうち消すかのように突然人間側から戦いの火蓋は切られ、カッタののんびりとした様子は一変し怒り狂った猛獣と化していました。その巨体に反して動きは早く柵は軽く粉碎され陣内に簡単に侵入されたのでした。兵士が襲われる姿をみた彼女は雷撃を放すとカッタは上半身を碎かれ大きな音を立てて崩れ落ちました。さらに一頭が陣内に侵入を試みたので技を放すとそれは体を碎かれの前後の一部を残して坂に転げ落ちました。

しかし雷撃も兵士達を叩きそうで陣地に向けて放すのは躊躇されま

した。怪物に陣内に侵入されては手の施しようがありません。

そのとき陣に集まったカツタの近くを走りぬける姿がありました。レピダスでした。

疾走する馬の上からレピダスが矢をつがえ放すと、怪物の体突き刺さりました。

通常では堅い革に阻まれ矢は通じないはずなのですが、正確な腕を持つレピダスは可動部分の僅かな隙間を狙って当てることができたのです。

自分たちの回りを走り回るレピダスに怒りを顕わにした怪物は陣内の兵士を忘れ彼を追いかけ始めました。草原を疾走するレピダス。彼の背後には十数頭のカツタが全速で追いかけています。レピダスは背後に向けて矢を放すと、それは目を射抜き一頭が脱落しました。さらに放すと鼻先を射抜き怪物は逃れていきました。

円周を画きながらレピダスは走り抜けると怪物は一つの集団となつてきました。ここでグレイアはレピダスの意図を悟りこの一団に雷撃を放しました。5頭あたりが粉々に吹き飛び残りは追うことを止め四散しました。

レピダスは反転し馬上から怪物の目を狙って射抜いていきました。動きの鈍った怪物めがけ雷撃を放し一頭ずつ倒していくと残りは四頭ほどとなっていました。

しかしこの三頭のむかつた先は陣地の翼の先でここに防御陣はありません。慌ててグレイアが遠目ながら技を放すと一頭は仕留めたものの二頭は逃がしてしまいました。

さらに一頭は逆に陣地に突っ込み柵を壊し兵士を薙ぎ倒し混乱を巻き起こして去ってしまいました。

三頭が逃れた方向が町だったのでレピダスはあわてて後を追いかけてきました。

「どうやら三頭逃がしちまったな」

今回は傍観するだけだったソシウスは言いました。

「町の方に逃げたようです。プエラが心配です。直ぐ追いかけてま

しょう」

「さてまで、ここは俺の出番だ。お前が人前に出ちゃまずいぜ。倒して置くからゆっくり帰ってこい」

そう言うソシウスは足早に去ると馬にまたがりレピダスを追いかけてました。

レピダスは馬を疾走させ逃げたカッタ追いかけてました。怪物にとって魔法使いは天敵みたいなものです。そこから離れるのは自然の理ともいえました。しかしよりによって逃げた方向が町の方向とはいささかいただけませんでした。町までの道にはいくつもの林はあり視界が開けてきません。このまま見失ってしまうのではと危惧していたところ林を抜けて田畑の広がる地帯に出ました。左をみるとあまり遠くない位置にカッタを発見しました。

しかし同時に町は目の前で緩やかな斜面を下っていくと到着してしまします。急ぎ追いつき行く手を阻み侵入を防がなくてはなりません。町の防御もケドルスを想定して弓主体であったので町の戦力を期待は出来ません。しかも兵士や屈強な男は前戦にいて町には戦闘に不慣れな者やら老人や女子供といったものばかりなのでした。

しかしカッタの速度は早く、追いつき攻撃を加えるには十分な時間はありません。もう町まで間近です。やもうえず背後から矢を放したものの怪物の皮膚に弾かれ効果はありませんでした。こうなると接近し双頭槍で直接頭に突き刺して殺すしかありません。

カッタの一頭に狙いを定め接近すると怪物も疾走しながら鋭い牙で襲いかかってきます。それをかわし力一杯槍を振り下ろすと頭部の硬質の皮膚をうち破り見事に突き刺さりました。カッタは前足を崩し巨体が地面を転がりました。

レピダスは一頭を始末し次の二頭を狙おうとしたところ、敵は門の中にはいり一歩及びませんでした。

その瞬間、地面が崩れレピダスは勢いのついたまま馬から放りださ

れたのでした。馬が足をとられたのはケドルス用の罠でした。町の周囲にはトラップが施されておりこれにかかってしまったのでした。レピダスの体は宙を舞い穴に落ち、そこに仕込まれた尖った杭によって体を貫かれたのでした。そのままレピダスは杭に刺さったまま宙ぶりのまま動けなくなつたのでした。

町の門の上からこの様子を見ていた者が慌て助けようとしたが、町に侵入した二頭によって守備隊は混乱にいたり彼は忘れ去れました。

ソシウスが町に到着したときは町から逃れる人々の姿がありました。手に何も提げている訳でもなく身一つで郊外に移動しているのが、町の中に怪物が侵入したのだと悟りました。門の直ぐ近くには怪物が横たわつたおりまづは一頭いなくなつたことは確実でした。門を走り抜け町の中に入ると、家々が破壊され食い殺された人の一部が転がっていました。レピダスの姿がないので不審に思つたのですが、家々から火の手が上がっていたので事態は急を要すると判断し怪物の姿を追い求めました。人が逃れる方向に逆らつてさらに馬を進め町の中心部の広場に辿り着くとそこを徘徊する二頭を発見しました。

（残つたのは二頭か。すると彼奴は食われちまつたのか）

馬から降りて大斧を肩に担ぎ広場の反対の端から大腿で堂々と怪物めがけ歩を進めると、カッタもケドルスの血で真っ赤になつた男の存在に気が付きました。二頭の怪物は獲物の匂いに首を起こすとうなり声を上げました。

二頭は起きあがると左右に別れゆつくりと間合いをつめてきます。（なるほど大きさとしてはジェヴォーの二倍といったところか。その堅い皮膚がご自慢だというわけだな）

ソシウスは不敵な笑いを浮かべて大地を踏みしめ闘気を燃やしました。誰もいない広場には二頭と一人がにらみ合い、戦いの始まりを待っていました。

一陣の風が吹き洗濯物らしき布が広場を舞うと戦いの火蓋は切られました。

二頭が一斉に左右から挟むように疾走します。公園の敷石は重い重量に変形し、怪物び足跡を残しました。怪物は大きな体をぶつけてきました。ソシウスはそれをかわし斧をすくい上げると怪物の腹は裂けはらわたが外にあふれ出ました。一頭の動きが止まり威嚇の行動をしました。かまわずソシウス突進し牙をむいた顔に跳躍すると怪物の額を真つ二つに切り裂きました。怪物の重いからだが崩れるように地面に倒れました。残った一頭は強靱な顎で何度もソシウスを襲い彼を近づけさせませんでした。出した顎を少しずつつ斧で切り刻みでいったので嫌がって前足で踏みつけようしました。するとソシウスが素早く懐深く侵入すると、右前足可動部分を振り抜くと革を残して足が断ち切られてしまいました。前足を無くし怪物は前に倒れると、待ちかまえたようにソシウスは首を断ち切ったのです。カッタの首から吹き出す血によってソシウスの体はさらに真つ赤に染められました。

戦いは終わりました。ここで彼は戦いに継ぐ戦いでかなり疲労していることに気が付きました。戦いの緊張により忘れ去っていたものが一気に甦ったようです。

顔を濡らしているのは汗ではなく血でした。体がべたべたして気持ちがよくありません。

ソシウスは噴水までやてくると思いっきり池に飛び込み体をごしごし洗い始めました。気持ちよく浸かっていると家の窓がおそろおそろ開かれるのがわかりました。怪物に声がしなくなったので怪しみ様子を窺っているのでしょうか。やがて家の入り口から人々が外に出てまいりました。ずぶ濡れの服を着たままソシウスはその場を立ち去りました。背後では人々が動かなくなった怪物をおそろおそろ確かめていました。

宿屋に行ってみるとプエラの姿がありません。まさか逃げ遅れた

のではと狼狽えソシウスは町のあちらこちらを探したのですが見あたりませんでした。もしや郊外に逃げたのではと慌てて門のところに行き、それらしい姿を追い求めたのですが見いだすことは出来ませんでした。どうしたものかと頭を抱えていると罨の穴が目にはいりました。

使われたような後があつたので、怪しみ近づいて覗き込んでみると無惨なレピダスの姿がありました。

遺体でも引き取るか、と穴に降りてみると微かに息を感じることが出来たのでした。杭に貫かれこれでは助からぬであろうと分かつていましたが医者を求め町を訪ね歩きやつのことで医者探し当て罨のところまで連れて来たのでした。

しかし杭が背中から貫通しまだ生きている事自体が不思議なことである医者は残念そうに言い、杭から抜き取って助けてみたものの出血は酷く手の施しようがありませんでした。

医者はまだ助かる希望のあるものを求めてその場を去り、ソシウスはせめて木陰の涼しいところで最後を迎えさせようとレピダスを運んでいったのでした。

水を求めるレピダスに腕に水を汲み与えると、この男を自分は殺そうとしたのだなと思ひ起こしました。憎むべき敵ではあつたものの人のため無謀な戦いを挑む心には畏敬の念が起りました。

ソシウスがレピダスの死を看取っていると遠くから彼の名前を呼ぶ声がしました。盛んに手を振っている陽気なプエラの姿がありました。まったく怪物騒ぎはなんのその、もしや郊外に花摘みでも出かけていたのではと疑わせるほどの脳天気さです。その近くにはグレーティアと一緒にいて何故かバスケットを持っています。何処かで合流したのでしょうか。二人を捜す手間が省かれたようなものです。しかしこのまま見たら少女達が郊外にピクニックに行った帰りみたに見えます。グレーティアがあれだけの活躍をしながらお礼の言葉一つもらえないのはなにか不憫に思えました。もっともその方が此方とは好都合。怪物を倒した魔法使いが、この娘であつたと気が

付くものは誰もいないというものです。

周囲を見渡せば怪物が退治された情報は伝わり、町から逃れた人々が舞の戻って来ていました。この人の流れにのれば、逃亡者は姿を隠せるというものです。それにこの事を知る人物は虫の息にありました。

グレーティアは無惨な姿のレピダスに驚きの顔を隠せませんでした。命を狙っていた男に真から心配するとはソシウスにとって馬鹿げたことでしたが、救う手だてについて相談する彼女に真顔で説明するしかありませんでした。既に医者連れてきており匙を投げられたことを告げると彼女は次第に色を失っていくレピダスを哀れそうに見つめていました。

その沈み込んだ表情にソシウスは暫くなにも言えないでいましたが、気を取り直そうと声をかけようと思いました。その時グレーティアは何かを思いだしたようにポケットを探るとクリスタルを取り出したのでした。

それは女魔法使いのアビエスからもらったクリスタルでした。今がこれを使うときであると彼女は思いました。

「それは滅多に手に入らないものだぞ。いいのか？助けたことが仇になって帰ってくるかもしれないぞ」

ソシウスは念を押します。でも彼女の決心は変わらず、それを使うことになんのためらいもない様子でした。

レピダスの胸にクリスタルを当てると、彼女は解放の呪文を唱え封じ込まれた力を呼び起こしました。クリスタルから放された光がレピダスを覆うと大きく開いた傷口にどんどん光の粒子が入り込み形をなしてきました。それに従って彼の顔色も赤みを帯びたものと変わって行きました。三人はその光景に見とれ、攻撃魔法とは対極にある技のすばらしさを実感しました。やがてレピダスを覆っていた煌めきは数を少なくしていきやがて消失いたしました。それと同時に胸にあったクリスタルは役目を終え砕け砂粒のようになって大

地に帰っていきました。

レピダスの杭に貫かれた傷跡は何処にも見あたらず、つい先ほど死の淵にあった者であるとは到底思えないものでした。やがてレピダスは眠りから覚めたように起きあがると複雑な顔をして彼女を見つめたのでした。

「俺は敵の筈」

レピダスは言いました。

「のようですネ」

そっけなく彼女は答えました。

「これで三度目だぞ」

どうして良いのか分からないように、レピダスは首を振ると立ち上がりました。少しよろめいて右手を木に添えて体を支えると背を向け歩き始めました。

「礼は言わない」

そう背中越しに言う顔と顔を合わせないまま林の方に去っていきます。その背後からソシウスは呼びかけたのでした。

「約束の報酬は忘れるなよ」

男は背中を向けたまま右手を挙げると笑って林に消えていきました。

第8回 町の防衛線（後書き）

漫画を描く時の脳と小説を書く時の脳の使う場所というものは違うようです。

小説を書くときは元気な時でないとはたばってしまいますが、漫画の場合小説で疲れた後でも案外描けます。やはり小説と言うものはお手軽なようでかなり難しいものではないかと思えます。

小説と漫画どちらがお手軽に書けるかといったら「漫画」ですかね。

漫画では最初にネームという下書きがあって、この時点で漫画の全てが決まってしまうのですが（その後のペン入れは清書みたいなもの）同様に小説の場合も推敲して完成させていくというのがまとまな書き方というものでしょう。しかし、この翡翠記は全ての過程をはぶいていきなり完成となっているのでかなり荒い作りといえます。

読み直して、書き換えれば少しだけ良い作品になるものなんですよが、文章力がないのでこの訂正が出来ないので結局そのまま投稿しちゃってます。

さて次回は敵のボスが一寸だけ登場します。

第9回 生殺与奪権を持って（前書き）

<登場人物>

ビルトス 主人公の師（本名ダーナ）

グノー 主人公の兄弟子

グレーティア 主人公

プエラ 主人公の幼なじみの娘

レピダス 黒虎騎士団（銀弓のレピダス）

ソシウス 斧使いの大男（旋風のソシウス）

フィディア 祖母の家へ帰る少女（譚詩曲のフィディア）

デスペロ 魔法宰相

コンジュレティオ 軍総司令

ホステイス ヘテロ国魔法宰相

ウーマー デスペロ配下上級魔法使い

ウレパス デスペロ配下上級魔法使い

セラペンス ビルトスと死闘した上級魔法使い

ウルマ 麻薬組織の防御女魔法使い

第9回 生殺与奪權を持つて

宿屋に戻ってみると主人が明るく出迎えてくれました。部屋の荷物も異常はなく口バも無事でした。怪物騒ぎで盗みどころではなかったのでしょうか。三人は安堵して部屋にくつろぎました。グレーティアとソシウスは疲れからかベッドに寝そべっていたらにそのまま寝てしまい、残されたプエラはつまらなそうに二人を眺めていました。

翌日三人は早々と宿を発ちました。大騒動になった町は早く去り、目立たないように旅を続けなくてはなりません。町は来たときのように朝から慌ただしい様子でした。建物のあちらこちらが破壊されその修理におおわらわなのでした。

このまま北に向かつて行くと、林の向こうに戦場がありました。多分今頃粉々になった怪物の残骸を拾い集めていることでしょう。多くの兵士がいるとはいえ全てを集めて土の中に埋めてしまうには随分と時間がかかるはずです。

素知らぬ顔をしてはたして兵隊達の横を通り過ぎることが出来るかソシウスは心配でした。グレーティアとプエラはその心配は有りませんでしたが、別の意味で注目を集めることでしょうか。大きく迂回してやり過ごすことに話がついて一同は道を辿って北を目指しました。

いくつかの林を抜けていよいよ陣地近くになったとき、道の傍ら二本の木の下で待ちかまえている人の姿を発見しました。レピダスです。

彼はじつとこちらを見つめて動こうとしていませんでした。やがて一同が目前に差ししかかった時、馬に跨ると高い位置から見下ろしました。

「元氣そうじゃないか」

ソシウスは話しかけました。

「まあな」

そっけない返事でした。

「報酬はもらっぜ」

「好きにしろ」

短い会話が終わると三人はそのまま道なりに北に進もうとしましたが、その行く手をレピダスは遮ったのでした。

「お前達このまま北に向かうつもりか？」

彼の意外な行動にしばし動けませんでした。その行為を怪しみに逆問い返したのでした。

「そうだが、問題でもあるのか？」

「北には反乱者の探索が行われている。その網に引っかかってしまっぞ」

「それはちと不味いな」

ソシウスは渋い顔をしました。

「本来此方が俺の任務だ」

「俺達はオマケの仕事だったという訳か」

呆れたようにソシウスは眉を下げました。

「反乱軍探索には多くの人数が当てられている。簡単に網にかかってしまっぞ」

「それでどうすればいいの？」

プエラが口を挟みソシウスの前に出ました。

「西に向かい山越えをする」

「また、山道なの」

うんざりといった表情でプエラは頭を下げました。

「俺が教えてやる、ついてこい」

そう言つとレピダスは道のない草地を西に向かい始めました。

「どうする相棒」

ソシウスの問いに彼女は

「信じてみましょう」

と西に進路をとりました。

こうして一同はレピダスの引率のもと西に向かったのです。

西に向かうとなると寄り道となります。出来れば北に進みたかったのですが追つてを振り切るには仕方ないことでした。でもこの道を提案したのがその追っ手とはなかなか滑稽な話でした。追っ手から逃れる為追っ手に道を教れてもらうなどそう起こることではないでしょう。レピダスに連れられて進んだ道はあまり人の通らない様子で途中すれ違う人と出会うこともありませんでした。山道は何処までも続き一日で町まで出るなどとはとても期待できませんでした。

プエラも度重なる山道に疲れ果てていました。普段は文句を沢山並べ立てるものですが今回は黙々と歩んでいます。それはグレートイアも同じで足取りが重くなっていました。プエラが列から取り残されそうになり、その度に歩みは止まりなかなか先に進みませんでした。するとレピダスはプエラを抱え上げると馬に乗せ「これならよからうと」先を急がせました。途端にプエラは馬に乗れたことに大はしゃぎ。盛んにレピダスに話しかけるのですが彼は相手にしてくれませんでした。でもそんなことでひるむプエラではなく後ろをついてくるソシウスに乗り心地を一生懸命説明するのです。

「ここでよからう」

夕暮れ近くになってレピダスは馬を止めました。どうやらここで一夜を過ごすことになりそうです。見上げれば空に鳥の群。高く舞い上がって人の手が届かないところにいました。彼女は風景の一部としてその姿をとらえていました。レピダスの目は違っていました。彼は馬より弓を取り出すと矢をつがえ、引き放ったのです。一条の矢が空に向かったかと思うと鳥を射抜き群から一羽を落としたのです。その技に一同は感嘆し、かつて手こずったことを思い起こしました。

夜の闇にたき火の赤い光が周囲を照らします。旅の質素な食事に今回は鳥の丸焼きが加わりました。

「飲むか？」

差し出された酒瓶に躊躇しながらソシウスは相づちを打ちました。まだ彼の心の中にはレピダスへの不審は消えていないようで、その証拠に彼の大斧がすぐ手元にあったのでした。酒が喉を通過するとソシウスはその刺激に思わず咳き込んでしまいました。随分強い酒なのでしょう。その様子を見たレピダスは軽く笑っていました。

「あんたが銀弓のレピダスというのは本当らしいな。あんな高いところの鳥を射落とすなんて普通の奴では出来ない」

ソシウスは話を切り出しました。

「この人有名人なの？」

プエラが興味深げに訊いてきました。

「この国の弓大会で連続で優勝している使い手だ。武芸の世界ではその名を知らない者はいないだろう。まさりやそうだろうな。王家直属の黒虎騎士団だから選りすぐったものしかないだろうよ」

「まあ、そんな人が何で私たち狙ったの？」

「そこだよな。仕事の合間にでも副業でもしてたのか」

レピダスは問いに答えずに酒をあおりました。皆の視線が集中するとレピダスはしぶしぶ返事をしたのでした。

「俺は副業はしない」

ソシウスは皿を落とし、驚きに声を上げました。

「お前が仕事で俺達を狙ったというなら。とんでもないことだぞ！」
「どうしたのよ。まったく」

プエラはやかましい声に非難の顔を向けました。

「これが驚かないでいられるか。こいつは王家の騎士で俺達を狙っている。つまりグレイティアは王家から追われているということになるだろうが」

「そうか」

「大きな組織だとは思っていたがまさか国家とはなあ」
ソシウスは頭を掻きむしりました。

重い空気が立ちこめて皆だまり、たき火だけが元気に燃えていま

した。

「私の命を狙っているのは王家ですか？」

恐る恐るグレイティアはレピダスに訊ねました。

「そうだ。国家が命を亡きものとしてしようとしている。俺は宰相からその命を受けてこの地にやって来た」

死刑宣告を受けたような心に突き刺さる言葉でした。

「何故、国家は私の命を亡きものにしたいのですか？」

レピダスは少々困ったような表情を見せ、正直に答えました。

「俺にも意味が分からないのだが、お前の存在がこの国に災いをもたらし焦土にしてしまうらしい」

「焦土ですか」

以前魔法使いが言い残した言葉と同じでした。自分が願わぬことが起こってしまうのでしょうか。

「馬鹿な。こいつがそんなことするもんか。それはなにかの間違いだろう」

「年を追う毎に怪物の発生件数が増えている。しかもだ生息地から離れた場所に出現している」

「それは俺も感じていたことだが」

「我々はこれを何かが現れる予兆であると捉えている」

「何が現れるてんだ」

「さあな。だがその中心にあるのが彼女だ。現に生息地からかなり離れているはずなのに怪物たちが出現する」

「それは偶然だ。出現した後にこいつ等は来たんだ」

「そうかな」

言い争っていたところにグレイティアは素朴な質問を投げかけました。

「私は何者なんでしょうか？」

レピダスは真剣な眼差しにしばらく考えました。

「素性うんぬんより、特殊なんだろうな。女魔法使いはめずらしいし」

「おいおい一寸待ってくれ。こいつは本当は男で転身の術を掛けられているんだぜ」

「それはどういう事だ？」

「私は師匠の戦いに遭遇し、その魔法使いに転身の術を受けてしまったのです」

「それは上級魔法使いセラペンスが殺られた戦いだな。しかしそんな術奴が使えたのか・・・」

「それは確かでしょう。ご覧の通りですから」

「王宮では魔法使いと俺達騎士はあまり接触はない。俺が知らなくて当然か。そうすると女魔法使いだからという理由は捨てた方がよさそうだな」

「私の顔は知られているのですか」

「いいや。16才の女魔法使いを殺せということだけだ。きわめて曖昧だが。分かりやすい」

「年齢まで特定されているでということかしら」

「プエラが不思議がりました」

「まあいいじゃねえあか。要するに転身の術を解いて元の男に戻ればなんの問題もないってことだな」

首都フロレオの王城の執務室で魔法宰相デスぺロは隣国ヘテロの戦況についての報告を受けていました。ヘテロの軍はムルティ山脈に南部に陣を構えたままで動かず、両陣営とも様子見の状態で戦況は変化がありませんでした。今回のヘテロのキャンプス侵攻はとうとつで無駄に軍費を食いつぶすだけのようには思えたのです。しかし万全の体制で迎え撃たなくてはならず、相当数の兵士に魔法使いを送り込んでいたのです。

又地方には支配体制に逆らう反乱軍が密かに蜂起の機会を窺っており、彼を悩ませました。

書類の決裁をしていたところそこに入ってきたのは配下の一級魔

法使いであるウーマーでした。彼は音もなく近づきよく人々を驚かさせるのでしたが、デスペロは気づかないことはありませんでした。
「西の捕り物はすんだか」

書類にサインをしながら、顔を見ることもなく前にいる気配に問いました。

「いいえ、未だ」

「やはり魔法使いの数が少なすぎたか。東の戦場にほとんど投入してしまっただけだから」

「はい」

「しかし、ダーナの所在を突き止めたのはお前のお手柄だった。あれだけの情報で特定するとは大した者だ」

「お褒め頂、有り難う御座います」

「ダーナの奴名前をビルトスと変え潜んでいたというので、さっそくセラペンスに命じて災いの種を取り除こうとしたが返り討ちにあってしまっただけ。その後の娘の行方はどうなった」

「マーレにおける１６才の者を調べましたがそれらしいものはおらず、また近隣の村にも居ないようでした」

「行方不明者はいないか？」

「１５のパン屋の娘と１６の靴屋の息子は行方知れず。パン屋の母親が二人は駆け落ちしたのだとのこと」

「駆け落ちとな。パン屋の娘は１５か」

「はい」

魔法宰相デスペロはしばし考えていました。

「では違うな」

「閣下、娘の足取りですがカーボの南でジェヴォーが出現し、これを退治にペコーを向かわせたところ何者かによって殺害されました。おそらく彼は娘を発見し殺害されたものと思われます」

「それはありえんな。まだ娘は覚醒していないはず。ペコーは軽く見られていたとはいえ我々のメンバーになるほど魔法には優れていないはず。娘に倒されたなど」

「ではダーナの愛弟子グノーではいかがです」

「あの天才魔法使いか。儂の技をかわしたことがある彼奴なら一撃で粉砕したであろう」

「ペコーの亡骸から察するに一瞬にして葬り去られたようなのです」
「誠か。しかしそれをグノーの仕業と考えるのは胆略的すぎる。」

「カーボで二人の娘を見かけたとの報告があります。ただし魔法使いかどうかは分かりません。コメでも一人これは盗人のようです」

「やはり人相書きが必要か」

呆れたように宰相は声を上げました。

「攻撃魔法を使う娘では特定は難しいでしょう。見逃している可能性は大きいと思われます」

「しかし情報がないのだ。その年で攻撃魔法を使う娘など他にはおるまい」

「それがそうとも言えないのです。実はウンダ河下流ルースにて16才ぐらいの女魔法使いによって配下のものが殺されました」

「女魔法使いとな。ありえん一人のはずだ。事実か」

「間違いありません」

「少し離れているが偶然と考えるべきか」

「多分そうでしょう。マーレーから逃れたにしては無理があります。それにその娘アデベニオに向かっているようです」

「あそこの寺の巡礼か。しかしまさか女魔法使いが他にいるとはな信じられん。儂の自信が揺らいでしまうわい」

「殺されたのはウレペス配下の魔法使いですが、その娘が条件が当て当てはまったので攻撃を仕掛けたところ逆に返り討ちにあったようです」

「無様だな。娘は手強そうだな」

「それで。特徴は？」

「黒髪の綺麗な娘だったようです」

「おそらくこの娘は我々の目標としている娘であるまい。あれはダーナの近くに居たはずだ。無駄な被害を出してもいかん。黒髪の娘

については誤って攻撃を仕掛けぬように通達せよ」

「閣下、災いの種がダーナの近くに居たと断定していいものでしょうか」

「それは儂も考えた。しかし奴の性格からして遠くに置いておくとは考えられんだ」

「しかし万が一のことを考えられた方がよろしいのでは」

暫く沈黙のあと宰相は言いました。

「その黒髪の娘については監視せよ」

幾日か行動を共にしてレピダスは何故このような娘を殺害しなくてはならないのか分からなくなっていました。顔を合わせることなく過ごしてしまえば単なる獲物として終わったはずなのですが人となりを知ってしまうと簡単に殺害してしまう事が出来なくなってしまうのです。この娘は知性に満ち礼儀も正しい。協調性があり思いやりも深い。一見したところ他人に害を及ぼす人物とは思えませんでした。その証拠に怪物退治についても自分が命を狙った敵であるにもかかわらず快く協力してくれました。申し出がかなり自分勝手なものであるにもかかわらずでした。

そもそも機械的に命令を執行していた暗殺行為が変わり始めたのが娘の誤解によるものなのは明白なものでした。最初の遭遇の時、彼等の挟み撃ちにし対し彼は魔法使いとの一对一の戦いに持ち込んだのでした。娘に一気に襲いかかり喉を突き刺そうとしたとき、危険な殺気を感じました。これは娘から感じた殺気でなく別のものでした。第一娘は完全に彼の技を受けきれずにスキを突かれたと状態であり行動不能に陥っていたはずなのは確かでした。こういう優位な状態のあるものかかわらず、ここでもし彼が娘を突き刺そうと行動したら逆に切り殺されかねない恐るべき気配を感じたのでした。その感覚は闇の中から切れ味の良い怪しい輝きを帯びた刀にて一刀両断されるようなものでした。

冷たいものを背中に流されたような悪寒が走り、野生の本能的なものがとつさに身を回避させたのでした。なにも根拠があるものではないのですが感なるものが踏み込んではないと教えてくれたのでした。この行為は自分の為にした行動であり、けして人を哀れんできたことではありませんでした。ところが娘はこの行動が理解できずに彼が憐憫の情を起こしたものと思いこんでいるようなのでした。ここまででは良かったのですが、その後底なし沼に落ちた時、娘はその恩返しということで彼を助けのでした。これで不覚にも敵に貸しを作り恥ずかしいというより屈辱めいたものが心を捉えましました。

獲物に助けられたという汚辱をうち消そうと再び対戦となったのですが、ここでもケドルスの群に押しつぶされそうになり娘に助けられ自尊心は完全に傷ついてしまったのでした。二度も獲物に助けられこの任務を降りようかと思っていた矢先ケドルスの大群が町に迫っているとの情報を得ました。魔法使いのいない状態でこれほどの大群を人間の力で撃退するのは至難の業でした。この時何故か浮かんだのは娘の顔でした。

彼のプライドが許しませんでした。それと相反するように心の中ではあの優しい娘なら助けてくれると期待が膨らみました。獲物に助けを求めるべきか否か心の中で葛藤しながら娘に問いかけると彼の予想通り承諾を得たのでした。娘は私への好意として単に了解したようでもなく、世のためこの危険な勤めを果たそうとしていることが分かりました。この時この娘の存在が本当に世の災いなのであるうかと疑問に思うようになったのです。

ケドルスの群は途方もなく多く、娘の力無くして退治は無理でした。迫り来る怪物丘の上に登り魔法で退治する娘。その下でケドルスから娘を必死でまもるのは大斧の男と彼でした。迫り来る恐怖と戦いの中で自然とあつてはならない一体感が芽生えたのでした。

カッタの時は彼自身が囿になって怪物を引き寄せ娘に魔法をかえさせたのは信頼というものだったのでしょうか。しかしまだ彼は後

戻り出来る位置にあり敵に立ち返ることが出来たのです。しかしそれが止めを刺されたのは、町の罠に誤って落ちてしまい命を落としそうになったところを娘に救われたことでした。三度救われて彼は完全に娘の命を奪うことなど出来ない結論つけました。そして不思議なもので今は一緒に旅をしているのです。

仰向けに寝て見上げる空には星々が煌めき、辺りには夜風に吹かれて草木がさらさらと音を立てていました。考えているようでも思い浮かばないままに時は過ぎ、木々の間から見えていた星座は少しずつ西に移動していました。やがて彼は考えることをやめ眠りにはいったのでした。

長い山越えを終わると平坦地にでました。こんどこそ山道は終わりとばかりプエラは大はしゃぎ。あまりのも元気なので、馬から落ちそうになり皆を慌てさせました。この辺り一帯には五つ手の様な形をした葉を持つ木々が群生し、プエラは馬に乗ったままその葉を道すがらちぎっては帽子に刺していました。しかし一枚の形は面白いのですがそれが緑一色なので大変失望し、怒ったように馬上から撒き散らしました。

葉っぱはソシウスとグレーティアに降り注ぎ、何枚かが帽子ひっかかり鳥の足跡のように残りました。

森の道は涼しく強い日差しを緑の葉が遮り旅を楽なものにしました。暫くいくと開墾された土地に出て人里に近づいたことが感じられました。このまま行けば町にたどり着きゆつくり休めそうでした。

その山間の開けた道を進んでいたところ、レピダスは道に落ちた一本の草花を拾い怪訝な顔をしました。プエラは馬を止めて草を見つめるレピダスに何事が起こったのか首を傾げ、ソシウスとグレーティアは近寄ってまいりました。

「その草がどうかしたのか？」
ソシウスが問いかけました。

「インサニオ草だ」

レピダスが草を差し出すとグレーティアは手に取りよく観察しました。確かに、以前ビルトス先生が教授された麻薬の原料となる草でした。この球根は毒性が強く口にいれるとたちまち死にいたらしめ、粉末状にしたものを焼いて煙りにして吸わせると幻覚を生じさせるといったものでした。一般的にこの幻覚の方が重宝され恍惚状態になるので服用する者が多く、愛好者が多いのでした。しかし最終的に人格破綻に陥ってしまうので国家で禁止されていました。

本来はこの国には存在しない植物で東の国からもたらされたらしく、以前は密輸に頼っていたものの、栽培法の確立に従って国内でも密かに栽培されているのでした。

「間違いないようです」

「こいつがそれか」

ソシウスの言葉は興味本位の憧れとも聞こえるようなものでした。「インサニオが落ちていたとすると、この近くに栽培している畑がありそうだな」

レピダスは辺りを見渡します。

「行くのかい？ちょっと失敬しに」

「馬鹿いうな。逃げているんだろ。お前達は」

「まあ、お前からだけだな」

決まり悪そうにソシウスは肩をすくめました。

「こいつを栽培させている悪党共がいるのはわかった、関わり合いにならないように通過しよう」

「知らんぷりか」

「そいつ等の始末は国がやる。通報だけで十分だろう」

確かにこの旅は気ままなものではありません、逃亡の旅なのです。悪を懲らしめるなど正義漢ぶつてもしょうがないのでした。

「以前俺は栽培者集団を捕縛に向かった事があった。一部の犯罪者を取り逃がしたものの、そこは壊滅させた。しかしまた別の場所この様に直ぐに再開してしまうのだから切りがない」

レピダスの語りを聞いて彼女は彼がお飾りの騎士でなく反乱者、麻薬栽培者と国家の安寧に動き回っていることに知らされました。そして自分の存在がそれら犯罪者と同列であることに複雑な思いが起りました。

だいぶ町に近づいたところで重い籠を持って道を歩んでいる少女に出くわしました。少女は籠を少し持ち上げたかと思うと何歩か歩み、直ぐに地面に荷物を降ろしちつとも前に進まない様子でした。後ろにひっくり返るくらい精一杯引つ張り上げないと籠は地面を離れず、汗だくになりながら少女は頑張っていました。籠の中身が有りすぎて小さな体では到底家まで運ぶことは不可能な量なのでした。荷馬車で本来運ぶ量といつていいのでしょうか。

ふーと少女は力つきて地面にへたり込みどうしたものかと頭を抱えました。

その様子に一同は興味深く観ていると少女は初めて気がつき照れくさそうな仕草をしました。

「どうしたの？そんなに一杯」

馬から飛び降りたプエラはにつこり笑いながら少女に語りかけました。

「あ、はい値段につられて買いすぎたみたいで」

少女は自分のそそっかしさに恥じていました。縮れ髪の下の額には汗をいっぱいいていました。

「家は近いの？」

「あの、林の向こうです」

指し示す林は少し離れていましたが寄り道になるほどでもありませんでした。

「まあ近いわね。手伝ってあげるわ」

「本当ですか？あ、でも」

「いいのよ。うちには力をもてあましている男がいるから」

どうやらプエラは自分では持つ気がないようです。そして振り返

ると何事かと突っ立っている彼にウィンクをしました。

「ソシウスあんたの出番よ！」

指名されてソシウスは人使いの荒い奴だと呆れながら、少女の荷物を軽々と抱え上げました。

「私の名前はプエラ。あなたは？」

「フィディアです」

「良い名前ね。年はいくつ？」

「14です」

「あら私の一つ下ね」

新しい友達でも見つけたようにプエラは嬉しくて次々に訊ねます。

「お手伝い？」

「いえ、お仕事です」

少女はサ寂しくうつむきました。

詳しく事情を尋ねてみると、少女のご両親は小さい頃になくなり、親戚伯父さんに引き取られていました。それは伯父さん夫婦に大変可愛がられ、その家で娘として育っていったのでした。しかし一年半前養母が亡くなり後妻がやってくると状況は一変、邪魔者として奥さんに疎んじられることになりました。伯父さんは以前と変わらず優しいのですが、小母さんは影で手荒い仕打ちをするようになり、やがて伯父さんは原因不明の急な病にかかって亡くなってしまいました。こうなると後妻の小母さんの家も同然で雑用を命じては彼女を怒鳴り散らす毎日となったそうです。

そうこうするうちに、小母さんはどこからか男の人達を連れてきて住まわせるようになり、そのお世話で少女は忙しい毎日を過ごさなくてはならなくなったそうでした。

今回も沢山の食材を仕入れなくてはならないので、この様なことになってしまったということでした。

「あなたも苦労しているのね」

プエラはため息をつきました。

「本当はこんな生活から逃れたいのですが。小母さんのご機嫌を損

ねて鞭で打たれるのが怖いのです」

「なんなの、それじゃ奴隷じゃないの」

プエラの正義感に火が点りました。

これを見て少女は始めて逢った人に話すべき事ではなかったのだと反省いたしました。逃れたい気持ちがつい口に出てしまうぐらい嫌な生活だったのです。

林を過ぎその向こうの木々に囲まれた中に屋敷がありました。農家の家といったもので母屋の隣には納屋小屋がありました。屋敷の回りには不揃いな幹を組み合わせ柵が設けられており、この横を道は走っていました。やがて屋敷の門のまえに辿り着くと少女はお礼の言葉を述べました。

「有り難う御座いました。本来でしたら屋敷にてお茶など振る舞い、お礼などを申し上げるべきなのですが逆に怒られそうなのでお許し下さい」

「いいの、気にしないで。これで私たち去るから」

少女は何度も礼を述べながら、籠を重そうに抱え母屋と向かったのです。

一同は今来た道を町のほうへ引き返そうとしましたが、そこでプエラは立ち止まったのでした。

「どうしたんだ置いていくぞ」

ソシウスがめんどくさそうに言いました。

「あのさ、あの娘の様子覗いてみない？」

「なんだ、さっきの話で同情したってのか」

彼は呆れました。

「小母さんに虐められているって本当か知りたくて」

「気になるのは分かるが、どうするか決めるのはあの娘の問題だ」

「それはそうだけど」

プエラは未練があるようです。

「ちよっと様子を窺ってみるのもいいかもしれません」

グレーティアは助け船をよこしました。

「そうか、じゃ俺達は此処で待つからちよいと見てきな」

諦めたようにソシウスは柵にもたれかかりました。

「レピダス。用心の為同行お願い出来る？」

レピダスは気楽に指名する娘に、礼儀知らずの奴だと笑い付き従うことにしました。

屋敷の表には誰もいない事を確信すると、二人は足早に母屋に接近しました。そっと台所らしい中を覗き込んでみると誰もいませんでした。ただ少女が運んだ食材が床に置いてあり、今し方まで此処にいたのは確かでした。よく見てみると納屋へと通じると思われるドアが少し開いた状態だったので、其方の方に行った事が分かりました。二人は背を低くして周囲を見渡すと納屋小屋のほうへ移動してみました。

納屋は農機具が一杯でまるでがらくた市場のようでした。小屋に一角には収穫されたであろう作物が箱に入って並べられており、大量に出荷しているようでした。ただ何の為だか布で覆っていたために出荷品目までは分かりません。

鶏たちが騒いでいる方に向かって、音を立てずに近づいてみると大きな声を上げている女性がいました。

「このろま！いつまでかかって買い物してんだよ」

「お許し下さい」

女性は鞭でこれでもかと少女を叩きました。フィディアは顔を腕で覆い震えながら何度でも謝っていました。すると女性は少女の髪を鷲掴みにしそのまま左右に振るとおもいつき彼女を小屋の壁に叩きつけたのでした。フィディアが痛みに耐えかねて大声を上げて泣き出すと、憂さが晴れたのか女性は愉快そう笑いました。

「まあ、なんて酷いこと」

プエラが思わず飛びだそうとしたところレピダスがこれを止めました。

「待て。行ってはいけない」

「どうして、可哀想じゃない。あの小母さんに注意しなくちゃ」

二人は納屋の隅で声を潜めて口論しました。

「あの女を知っているんだ」

「え？」

意外な事実にはプエラは言葉を失いました。

「こつちにこい。いいものを見せてやる」

レピダスに導かれるまま、先ほどの箱に入った収穫物の山のところに戻ってみると被せてあった布をはぎ取ったのでした。箱の中には球根らしきものが沢山収められており、それはなんなのかプエラには分かりません。

「この球根はインサニオだ」

「それって今日拾った草の」

「その通り麻薬の原料だ。あの女はウルマという名前で、昔取り逃がした犯罪者だ。今度はここで商売を始めたようだ」

「するとフィディアの伯父さん夫婦は」

「毒殺されたんだろうな」

ここでプエラは自分たちが犯罪者集団に遭遇してしまったことに気がついたのでした。

「これは我々が片付ける問題でない」

レピダスが元のように布を被せプエラを連れてその場を去ろうとしたとき、背後から声がしました。

「おーい。誰か中にいるぜ！」

一人の男が二人の姿に気がつき大きな声で周囲に注意を促しました。渋い顔をしながらレピダスは振り返ると逆に落ち着き払って堂々と表に出てきました。男はレピダスが屈託ない表情で自分に近づいてきたので、どうしていいか分からず躊躇しました。

周囲を見渡せば5、6人の男が集まってくるのが分かりました。普通であればこのような5人の男どもなどはレピダスは簡単に片付けられるところですが、今回はそうはならないことが分かりました。あの女がいたからです。

「よう、いい天気だな」

レピダスはなれなれしく男に話しかけました。

「お前なに者だ」

男は驚き怪しみながら訊ねました。

「探してたぜ。誰もいないかと思った」

「お前、小屋の中のものを見たらう」

「ああ、何の花の球根だ。栽培して町にでも出荷するのか」

とぼけた顔をレピダスはしました。

その知らない様子に安心したのか男は途端に笑顔になって語りかけました。

「ああ、これから植え付けなんだ。ところで何の用なんだ」

「カルパて奴をたずねて来たんだが、知らないか」

「知らないな。此処にはいないぜ」

調度その時他の男たちもやって来て話しに加わりました。

「親子ではなさそうだな、兄妹か？」

困むように男達は並び質問を浴びせました。

「ああそうだ。このうるさいのは妹だ」

プエラの眉間に皺が寄りました。

「もっと町の方に訪ねていったらどうだ。ここから先には誰もいないぜ」

「のようだな。それじゃ失敬するでしょう」

ソシウスはプエラの手をとると堂々と男達の前を歩き去ろうとしました。これで全て何事も無かったように事は終わるはずでした。

しかし納屋の端から呼び止める声がしました。

「ちよつと待った！行かせるんじゃないよ」

すこし気をゆるませた男達はこの声に反応するように軽く身構えました。やがて不敵な笑いを浮かべながら女が近づいてきました。

「あら黒虎騎士団の人ね。お久しぶりだわね」

女の瞳はこやかな表情とは裏腹に冷たく輝いていました。

「こんなところで知り合いに逢えるとは奇遇だな」

正体を知られたというのに相変わらずレピダスとぼけたそぶりをみせました。

「今度は魔法使いと同伴じゃないようね。その娘なんなの召使い？」
邪魔者みたいな目で見られてプエラは大激怒。

「無用の用てやつだ。結構楽しませてくれる」

いきり立つプエラをレピダスは止めました。

「それじゃ、今度は私を楽しませてもらうかしら」

女は男達に指示を出すと彼等は一斉に囲もうとしましたが、それより早くレピダスは一人に体当たりを仕掛けると、女に向かってぐるぐる吠えようとしているプエラを無理矢理引っ張って逃れようとなりました。

「仲間の所まで走れ！」

少女を連れて戦うことは困難と判断したレピダスはプエラを走らせると反転し男達を迎え撃ちました。レピダスの双頭槍が縦横無尽に繰り出されます。

敷地の外で待っていたグレーティアとソシウスは屋敷の方から騒がしい声がしてやがて二人が男達に追われている光景を見ました。そのうちプエラだけが此方に駆けてきてレピダスが单身五人を相手に戦っているので安心していましたが、レピダスの動きに対し男達が無傷なのが気になりました。ソシウスは自分と互角の戦いをしたレピダスがあんな男共に手こずっているなどと信じられないことでした。このままでは危ないと判断したソシウスは大斧を取り出すとレピダスの加勢に飛び出したのでした。入れ替わるようにプエラがグレーティアの所まで辿り着き積まれた資材の裏に隠れました。

彼女たちは戦いの様子を眺めていると、戦いの場所にたどり着いたソシウスは俊敏な動きで男達の背後に回り込み斧の一撃を与えているようでしたが、外れでもしているのかのようにいつこうに敵は倒れることがないのです。その二人対五人の戦いは何処までも続きそうでした。ここでやっとグレーティアは事の異変に気がつき慌てて援護に向かったのです。

ソシウスはそこであり得ない事に出くわしていました。敵は弱く簡単に背後に回り込み余裕で切りきざめる程度の相手だったのですが、自分の放った技が相手の体に鎧でもあるかのようにことごとく跳ね返さるのでした。レピダスの救援のはずだったのですが、対戦してみても手こずっている理由を知ったのでした。これはとんでもない化け物と戦っているのだと実感しました。

「こいつら俺の斧が通じないぞ」

戦いの最中ソシウスはレピダスに問いかけました。

「魔法だ！あそこの女がかけている」

「なに。魔法だと」

指し示された方を見ると女がいて、此方にゆっくりと近づいていました。どうやら男達が倒れないのは女の魔法により保護されているからの様でした。

「そうなるよ、相棒の出番だな」

ソシウスは味方の方を振り返るとすぐそこまでグレーティアが走り寄っていました。

「グレーティアあの女は魔法使いだ。倒してくれ」

魔法は魔法で取り除くしかありません。それまでソシウス達は守勢一方の戦いを強いられるのでした。

事情が分かったグレーティアは男達の戦いから離れ女魔法使いの方へ向かいました。これで二人目の女魔法使いと逢うことになりました。アビエスは豊饒の魔法使いで作物の育成の技でした。攻撃魔法より遙かに役に立つ魔法で独特のものでした。いま目の前に立つ女性の魔法はどのようなものだろうかとグレーティアは思索しました。攻撃魔法を使う女魔法使いは少ないと聞きます。この女性はその数少ない使い手なのでしょうか。しかしもし攻撃魔法ならば直接レピダスを仕留めたはずですよ。どうもそうとは思えませんでした。

変わっているのが男達を使って攻撃させていることでしょうか。なにか他人を保護するような魔法で離れたところから援護しているのだと理解できました。この女性が攻撃魔法の使い手ならば雷撃を

放しても相殺を試みるであろうし、深手を負うことはあっても死ぬことはないでしょう。しかし援護のみの魔法であった場合は激しい雷撃の前に粉みじんに吹き飛びかねません。仲間が危険な状態であることは分かりましたが争いの理由も分からない状態で人の命を奪うことにグレイティアは躊躇いを感じていました。これまでの戦った魔法使い達は強敵で必死に戦わなくては殺されました。そこに選択の余地などありませんでした。しかし今度は状況が違います。一人に命を奪うかどうかの選択権がこちらにあるのです。自分が決意すれば相手の命は消えてしまうのです。重い責任が彼女にのしかかってまいります。

敵の男達を見ると呪文にて全身が保護されており、その出所は女性からでした。呪文そのものを妨害するという手段もありましたが、初めてみる術式でした。そこで彼女が選択したのは弱い通電にみによる雷撃でした。これにより痺れて動けなくなればそれで十分なはずです。

意を決してグレイティアは女性めがけて雷撃を放したのでした。

ウルマは政府の犬共を早く片付けなくてはここの商売も駄目になると仲間のもとに向かっていました。自分が仲間にも近づく魔法の力は増し防御は完全なものとなります。男達は切られる恐れはないものの大男の攻撃が力強いので受けるのに苦労しているのがわかりました。ところが向かいから男達を助けるように少女が飛び出して来たので意外な展開に興味深くその光景を眺めました。娘がなんの救いになるというのか、足手まといになるだけではないかと女はせせら笑いました。しかし一方でこの娘が飛び出てきたのは何か勝算があつてのことではないかと疑念が湧いていました。現に敵の男の一人が娘に声を掛けていました。この娘も魔法使いなのか？十分考えられることでした。でもこんな若い娘がなが出来るのでしょうか。魔法と簡単にいっても苦しい修練の末やっと身につけられるものだからです。それを身につけているというのでし

ようか。

この場合一番考えられるケースは娘が何らかの方法で仲間の男を補助する技を習得しているというこでした。そうすると十分警戒はしなくてはなりません。魔法なしの男達の戦いでは敵の方が遙かに技に優れていることは一目瞭然なのでした。女は勝負はどちらが男達を強化できるかということになるであろうと考えました。そういう魔法の勝負も面白いとウルマは愉快になっていました。

そう頭の中で推察していたところ娘が直接此方に向きを変えたので女は驚きました。男達の援護でないのかこの娘。

魔法使いと魔法使いの一对一の戦いなのか？

ウルマが状況の変化に気がついたとき雷撃が彼女を襲いました。

十分威力を抑えた攻撃でしたが、閃光とともに空気を叩くような音があたりに響きました。戦っていた男達は動きを止め音のする方向を振り返りました。

あたりの草が千切られたように舞い、なにかが突き抜けていったことが分かりました。少女の前からなにかが走りウルマまで向かったようでした。

ウルマのスカートがはためき彼女は両手で顔を覆っていました。周囲には土煙が舞い上がり桶がバラバラになって飛び散りました。十分威力を抑えて放したつもりが周囲に威力のほどが現れたのでグレーティアはやりすぎてしまったと後悔しました。しかしその思いはうち消されました。女の周囲は確かに攻撃の爪痕が残りましたが、肝心のウルマは無傷だったのでした。雷撃が通じなかったようでした。よく女を見てみると何らかの術式によって、彼女を中心として円形状に防御陣の魔法が敷かれているのがわかりました。この形を見たときグレーティアはこれに近い技を思い出しました。それは師のビルトスが使った防御陣でした。あのとき魔法使いは手出しができませんでした。その陣ほどでないもののそれに似たものが目の前にあるのでした。

ウルマは少女の変化に気がついた途端、雷撃を受けたので驚き硬直してしまいました。

「まさか、この娘。攻撃魔法が使えるというの」

幸いにも防御魔法陣を発動させていたので事なきを得たのですが、まったく不意をつかれた格好でした。攻撃魔法が使えることは十分考慮に入れるべきでした。女性に特に娘に攻撃魔法が使えないという絶対的な事実ではないのです。そう二年前のこと、この娘と同年代の黒髪の娘が同じように攻撃魔法を使うのを目撃したことがあったのです。そのような者は彼女だけであろうと勝手な思いこみをしていたのが間違いでした。彼の娘は今でも気が狂わず有り続けていくかは分かりませんが、同様に能力を発揮する娘がいても不思議はないはずでした。それにまだ娘の術は未熟なためか自分の防御魔法でも十分防げるものでした。自分の技に自信をもったウルマは生意気な技を使った娘にどうお仕置きしようか考えました。

「見事な雷撃だわ。でもまだまだだね。でも私は攻撃魔法が使える娘は他にイブセで見たことがあるの。彼女の方が強そうだったわ」

女はグレーティアをからかっていました。

「私の魔法はどう。これアデベ二オの老師メディカス直伝なの。この魔法防御は貴方には崩せないわ」

勝ち誇った様にウルマは威勢の良い声をあげました。

その名前を聞いてグレーティアは驚きの色を隠せませんでした。

何故目の前の女性からその名前が出てきたのでしょうか。目の前の敵はこれから訪ねていこうとしている人の弟子なのでしょうか。彼女は戸惑ってしまいました。

師の見せた防御魔法は精妙で推し量ることが出来ない代物でしたが女性の防御魔法は非常にきめが荒く魔法の原理の雛形をそのものをよく見て取れました。その魔法は循環を基礎として往復し周期をもった円運動をえがく式でした。その式が基礎となつて波形を産み

だしそれが触手のように攻撃を絡め取っているのです。全体として球体をもった陣となっていました。この女性には雷撃の未熟さを嘲てはいましたが、実は自らの技の脆弱さが一番分かっているのであらうとグレーティアは思いました。ここで渾身の雷撃を見舞うと彼女の技では防ぎきれないのは明白でした。程良く制御して雷撃を放すという手段もあるのですが、防御陣を壊し術者の安全を確保するとなるとなかなか難しい問題でした。

「どうしたグレーティア」

ソシウスは一撃を放ったあとグレーティアが躊躇しているのにいらだちを隠せませんでした。激しい戦いは続いておりそう何時までも守勢のみの状態を維持は出来ないのです。 「さあ、もう終わりなの。もう一度技を放しなさい」

ウルマは勝ち誇ったようにグレーティアをけしかけます。

その時でした納屋の方から火の手が上がりました。奥から火の赤々と燃え上がる姿が見え、黒い煙が建物から吹き出てきて天に登っていきました。

「しまった。まんまと誘き出されてしまった」

異変に気がついたウルマは目の前の娘が陽動であったと判断しました。技を返し勝ち誇った気になっていましたが敵は背後でとんでもないことをしているようでした。納屋には納品間近の麻薬が収められています。ここで失っては信用にかかります。いまいまいそくなな仕草を見せると女は男達に退却の命令を出し納屋に向かうように指示いたしました。急な展開に呆気にとられたグレーティア達もこの場を離れるチャンスととらえ敵を警戒しつつ逃れていきました。

第9回 生殺与奪権を持って（後書き）

今回は追っ手の正体が分かりました。平凡すぎて面白みに欠けるかもしれませんがご容赦のほどを。

物語の中盤が戦争の話になってしまつので、国家てものが登場してくる訳なんですネ。

タイトルに「生殺与奪権」とあるように、主人公は弱者相手に戦うことになります。追いかける強敵に必死に戦うのと違い、今回は余裕です。

しかしこんな時、人の命を奪うかどうかの選択を迫られるのですネ。殺人は正義の行為かどうか主人公は迷ってしまいました。その結末は次回で。

第10回 平穩と栄光（前書き）

<登場人物>

ビルトス 主人公の師（本名ダーナ）

グノー 主人公の兄弟子

グレーティア 主人公

プエラ 主人公の幼なじみの娘

レピダス 黒虎騎士団（銀弓のレピダス）

ソシウス 斧使いの大男（旋風のソシウス）

フィディア 祖母の家へ帰る少女（譚詩曲のフィディア）

デスペロ 魔法宰相

コンジュレティオ 軍総司令

ホステイス ヘテロ国魔法宰相

ウーマー デスペロ配下上級魔法使い

ウレペス デスペロ配下上級魔法使い

セラペンス ビルトスと死闘した上級魔法使い

ウルマ 麻薬組織の防御女魔法使い

アウダック 反乱軍首領（鎮圧される）

アクイロ 元政府所属魔法使い

モリウス アクイロの息子

第10回 平穩と栄光

通りまで逃れた一同は疲れた様子で木陰に重い腰を下ろしました。軽い善意が大きな災いとして返ってきました。たまたま火の手がさがり救われたものの、魔法使いを倒せなかったことは敗北に等しいものでした。

「倒せない相手には見えなかったが」

ソシウスが木にもたれかけ、不満そうに言いました。グレーティアは返事出来なくてうつむいたままでした。

「事情も分らず、殺せと言われても殺せまい」

レピダスは諦めたかのように静かに言いました。

「倒せたんだよな？」

しつこくソシウスは問いだします。防戦一方で逃げ帰ったことがそうとシャクなようでした。こくりとグレーティアは相づちを打つと満足したようにソシウスはそれ以上追求はしませんでした。

「どうやら人を殺したことが無いようだな。それではこの先生き残りは難しいぞ」

冷めたようにレピダスは言いました。

「メデイカスの弟子と名乗っていました」

「その名前は、これから行く先の・・・」

ここでソシウスはしまったという顔をしました。

「なんだお前達アデベニオに向かっていたのか」

レピダスのせせら笑う声がありました。

「ばれちゃしょうなねえ。その通りだ」

「先は長いな」

レピダスは遙か北を見ました。

「それにしても俺達運が良かったな。あんな風に突然ばや騒ぎがおこるなんてな」

それは本当にそうでした。あまりに出来すぎて不自然なほどでした。

「だがそれも事実。なんらかの火の不始末があったと考えるべきか」
「あの女が娘を叩きつけたさい、何らかのものから引火したに違いない」

「まったくあのムチャクチャよ。そしてメデイカスの弟子なんて名乗っていたのよね」

「あの女はメデイカスの弟子と名乗っているが、おそらく関係は浅いだろう。一応の修行はしただろうが途中で逃げ帰っているはずだ。本当の姿は犯罪者で悪事を重ねている女さ。」

二年前俺は麻薬栽培現場を抑え仲間とともに捕縛に向かったが、感づかれ犯人の一部を取り逃がしてしまった。その逃げたというのがあの女と言っわけだ。生かしていても世の中の害になるばかりで殺してもらってよかったのだが」

「なるほど、それで男共がぞろぞろいたと言う訳か。未亡人の家にしちや賑やかなことだ」

「麻薬の巢窟なのだが。どうする正義漢ぶって退治でもするのか」
レピダスは選択を迫りましたが、二人は決断出来ませんでした。

ソシウスは正義というよりは手も足もなくて、良いように遊ばれたことがカンに触っていました。でも逃亡の旅のことを考えるとあまり事件に巻き込まれたくもなかったのです。グレイティアにしても再びあの魔法使いと戦うとなると殺してしまうことになることに避けたい気持ちが起こっていました。

二人はお互いに顔を見合わせ、自分たちには関わりのないことであると幕引きを図ろうとしました。

「駄目よ。そんなの」

プエラが叱咤しました。

「フィディアの事お忘れみたいね。あの娘は悪党達の仲間にさせられているのよ放っておいていいの。だいたいあの娘の家にどこか無断で踏み込んでいたのはあの悪党共なんじゃない。伯父さんは殺

され今でははした女じゃないの。こんな横暴許されていいの？力が
あるなら元の自由な生活に戻らせてもいいはずじゃない」

一本取られたとソシウスは頭を叩きます。

「どうするグレーティア。俺は奴らに借りを返したいが魔法使いを
倒すのはお前だ」

「あの防御魔法だけを壊す方法はまだ」

グレーティアの返答は気のないものでした。

「みんな幸せになんていかないさ」

「おそらくあのアジトは我々に知られてしまったので早速整理には
いるだろう。問題はフィディアという娘だが。利用価値はないと見
なしたら多分始末して去ってしまうだろう。通報して警備隊がやつ
てくるまで生きているどうか」

「だったら決まりだわ。グレーティアやるのよほら」

人を助ける為に人の命を奪わなくてはならないとは世の中とはな
んと上手くいかにことかとため息が漏れました。人と人話し合えば
分かり合えるのではないのか。相手をはなから悪人と決めつけるの
はあまりにも短絡的すぎないのでは。と思いが駆けめぐり頭が混乱
します。人一人の命を奪うことに簡単に結論を出して良いものか彼
女悩みました。しかし解決策が浮かばず暫く考えたあとやっと立ち
上がりました。

「やってみます」

ウルマは突然起こったばや騒ぎで怪しい連中を仕留めそこなった
ことに苛立ちを感じていました。小屋には火の気などなかったはず
なのに、奴らの追いつめられた時いきなり発火したのです。怪し
ぎると言えば怪しすぎます。他に人が隠れていて仲間を助けるため
火を放ったのでしょうか思えませんでした。今度来たときは手下を納屋に
潜ませておこうと決めました。しかし商品は守れ無事引き渡しが出
来そうなのでほっと肩の荷を降ろしたのでした。

今日出逢った連中はとても政府の犬には見えませんでした。レピダスは完全に素性は分かっているので政府の者であることは確実ですが他の者が皆目見当がつきませんでした。特に娘は諜報員のようににはとても見えず、どこかピクニツクに洒落込んだ帰りのように感じられました。娘の中に魔法使いがいたのも、レピダスとの関係でなく偶然居合わせたといったところが本当のところでは事件は計画的なものではないように思えました。

冷静に考えてみるとフィディアが帰ったと同時刻に現れており、娘が彼の連中を呼び込んだ可能性が大きいのでした。早速このことをフィディアに問いたですと、彼女は肩を震わせ事の次第を白状しました。

招き入れた原因がフィディアと分かるとウルマは怒りを爆発させ鞭で散々打ち据えこの娘をどうしたものかと考えました。

以前インサニオ草を大々的に栽培していたところは規模が大きかったので政府に察知され強襲を受けて解体されましたが、今回は規模も小さく田舎町に隠れ潜んで栽培先をしていたのであればるはずもないものでした。アジトに相応しい屋敷に目をつけるとそこに入り込んで夫婦ふたりを亡き者にし、周囲からは未亡人の屋敷であり畑作業のため男衆を雇っているという形をとったのでした。

インサニオ草は栽培が難しく、原産地ではおそらく群生している全てに毒素をもつものなのでしょうがパテリアではその数は少なくほとんどが単なる球根で終わってしまします。この地は球根が毒素をもつものが発生する確率が高く好条件でした。そのため1年半もかけて慎重に事を進めや々と軌道に乗り始めた矢先、発覚してしまうなどとまったく運がないことでした。そしてその原因が役立たずのフィディアかと思うと怒が治まりませんでした。

レピダスが知った以上ここでの栽培は断念しなくてはなりません。彼の男は必ず捕り手を送ってきます。ともかく今回の契約分の麻薬を持ったら早々にアジトを引き払うのが懸命なのでした。足手まとの娘などこの場で始末しようとウルマは決心しました。

女は男共に合図を送るとフィディアを紐でぐるぐる巻きにしました。彼女は泣きながら許しを請いましたがウルマは怖い顔のまま表情を変えませんでした。あまりに鳴き叫ぶので煩くなった女は口を布をくわえさせ紐で結び声が出なくなりました。彼女の目だけが哀願するようにウルマを見つめていました。

そこで女は男達に命じ母屋の梁に丸い輪を作った紐を下げさせその下に台を据えたのでした。フィディアは自分の身に何が起ころうとしているのか悟り必死に逃れようとしたが、男達に捕まり無理矢理台の上に立たされたのでした。

出ない声を上げて彼女は抵抗しましたが、男達が体を強く押さえまつたく身動きが出来ませんでした。紐がフィディアの顔に押し当てられいよいよ首に通されようとなりました。彼女は大粒の涙をこぼし自分の命が消えていくことに諦めの気持ちを抱いたのでした。

その時でした男が飛び込んでくるとウルマに報告したのでした。

「さっきの奴らが戻って来やした！」

ウルマは持っていた鞭を二つにへし折るとそれを地面に叩きつけました。

「この娘は生かしておきな。保険にとっておくんだ」

そう指示すると大股で母屋の外に出ていきました。

門の方向をみると確かに取り逃がした連中が舞い戻っていました。再び会えるとは喜ばしいことだとウルマはほくそ笑みしました。何をしに戻ってきたのか興味津々に眺めていると問題のレピダスでなく攻撃魔法を使った娘が前に進み出てきたのでした。

「おやおや、魔法使いのお嬢さんがお相手なのかしら」

ウルマは娘が自分に勝負を挑んできていることを察し面白おかしくなりました。

女も同様に歩み寄ると二人は正面から向かい合いました。後ろから五人の男達が駆け寄ると同様にソシウスとレピダスが前

に出ました。

「あなた、この前命からがら逃れたのに舞い戻って来たの？あなたの攻撃私には通用しないでわかっていいるでしょう。それともなにか良い手だてでも見つかった」

ウルマは自信満々です。

「あなたを救うという良い手だてが見つかりませんでした。」

「なに言っているのあなた」

女は小馬鹿にしました。

両者は無言で向かい合ったままにらみ合いを続けていましたが自然に闘いは始まりました。男達が全速力で走り出し、ソシウスとレピダスも迎え撃ちました。両者をぶつかり合おうとしたとき、ウルマの防御魔法は最大に発動し、男達と女の周囲を覆い、同時にグレーティアの魔法も放されたのでした。

勝敗は一瞬にして決まりました。

グレーティアの前に轟音とともに空を引き裂く閃光が走りウルマの体を粉々にうち砕くと納屋を粉碎しその背後の木々をへし折ったのでした。

爆風を受けて舞い上がった母屋の瓦がぱらぱらと地面に落ちました。

男達はその衝撃を受けウルマを慌てて振り向くと焦げた大地の上に二つの足首が残り残されて転がっているのを見ました。

女の姿はもうどこにも存在しないのでした。

次の瞬間男はソシウスに頭を割られ、もう一人は首を切り落とされました。

残り三人は女が殺られた事を知ると一目散に逃げだし一人は背後から背中を断ち切られてしまいました。彼は残り二人も切り裂こうとしましたが必死に逃げる男共は仲間が切られている間に遠くに逃れており林の中に消えようとしてました。ソシウスが二人を逃がし悔しがっているとレピダスが弓を取り出し矢を放したのでした。矢は

逃れた一人の心臓射抜き男はその場に倒れ込みました。もう一人は林の中に逃れ取り逃がしたかのような思えましたが木々の間を矢は走り抜けみごとに男の首に突き刺さったのでした。

グレーティアは沈んだ様子でうつむいてみると、ソシウスが近づいてきました。

「気にすることはないさ、あの女いつか誰かに殺されたはずだ。それがたまたまお前さんだったただけのことさ」

そう勇気付けると、血糊のついた斧を死体が纏っていた服でふき取りました。

「娘が無事が探して見よう」

レピダスはプエラを誘うと母屋の方に向かって歩み始め、グレーティアはソシウスに促されてその後を一緒に追いかけました。

母屋に行くとファイディアは床に転がっており、周囲の状況から判断すると本当に危険な状態であった事が察せられました。口を解放し急ぎ巻き付けられた紐を解くと彼女は助けられた安堵からかプエラに抱きつくと言き出してしまいました。

暫く泣いていると感情も治まってきたのか、おもむろに顔をあげ足早に窓から外の様子を恐る恐る窺いました。

「大丈夫。私たちが退治してしまったわ」

プエラがそう説明すると驚いた様子で外に飛び出すと周囲を見渡しました。地面を走る一条の線それは納屋に向かって走り、その先では納屋が半壊していました。雷鳴の音の正体はこれだったのです。足下に煌めくものがあつたので拾い上げてみるとウルマと言う女がしていたネックレスの一部のようでした。何故これがここに？不思議に思いながら遠くを見渡してみると男達の横たわる姿がありました。

ファイディアは恐ろしさのあまり目を覆ってしまいました。

「さて、かたづけるとするか」

ソシウスが斧をスコップに持ち替え遺体の傍らを掘り始めようと

すると、彼女は本当に解放されたんだと実感したのでした。

「今日からここはあなたの家よ。ちよつと納屋は壊してしまつてけど。許してね」

陽気に話しかけるプエラをみてフィディアはこの人はどんな人なのかしらと思いました。もう一人のきれいな娘は浮かない表情のまま傷付いた地面を眺め語りかけるのははばかれる様子でした。

母屋の奥に消えていたレピダスがなにやら袋を片手に掴ん表に出てまいりました。彼はフィディアの前にやってくると、その袋をそつと彼女に持たせたのでした。袋は小さいわりに重く中身が詰まっているようでした。いったい何を手渡ししてくれたのだろうか、中身を確かめると金貨や銀貨が詰まつてました。

「あいつらの遺産だ。おまえの養父母の財産を奪つた連中なんで、そいつはまあ慰謝料といったところだな。一人でも当分生活はできるだろう」

レピダスは小さく微笑みました。

「よかったね。フィディアこれで幸せに暮らせるわ」

「でもこれ受け取っていいのかしら、それにあなた達になんのお礼もしてないし」

「いいの、私たち急ぐ旅なの」

「そうですか」

「あの大きいのがお墓作つたら私たち出発するから」

「あ、今晚はここに泊まつていただけませんか」

フィディアは慌てた様子で引き留め、言葉を繋ぎました。

「急に一人になるは怖いです」

「そうね、恐ろしい目に遭つたことだしそう思うのは当然よね。いわ今日だけここにいろわ」

「本当ですか。ありがとう」

フィディアは嬉しそうにプエラに抱きつきました。

「グレーティアいいでしょう」

プエラがグレーティアに向かい語りかけると彼女は頷きました。

夕暮れ時、竈に火が点され煙が立ち上ります。プエラとグレーティアは夕飯の手伝いをしましたが、手慣れた手つきで料理するフィディアに呆気にとられました。荒くれ者に注文の細かい女を相手にしていたためか、早い手つきで的確にこなしていくのです。これでは自分たちが足手まといになると感じた彼女たちはテーブルの配置や料理を運ぶだけにしました。

「店で食っているみたいだ。美味しいなこれ」

ソシウスは上機嫌で貪り食っています。

彼に場合は量が問題なので、そんな上品な味わいなどわかるはずもないので信用におけませんでしたが、レピダスが味わって食しているので料理は本物と言えました。

「まあ美味しい。どこで憶えたの？」

その歳でちゃんとした料理が出来るのに驚いたプエラは興味深く訊きました。

「亡くなった養母から教わりました。義母さんはもっと上手でしたよ」

「そうなの。でもねパンを焼くのは私絶対負けないわよ」

「そうなんですか？」

「プエラはパン屋の娘なんです」

グレーティアは説明しました。

「私の家のパンは表面さくさくで中はもっちりしているの。今度焼いてあげる」

「楽しみだわ」

「だが、あす旅立つんだよな」

レピダスは少し可笑しそうにしました。

「あ、そうだった」

照れくさそうにプエラは頭を掻きました。

するとそれまでかぶりついていたソシウスが腕をとめ、頭をこりこりしました。

「そっかー。これもう食えないだつたっけ」

残念そうにソシウスはむしゃむしゃ食べました。

「私が作り方教わっておくから、気落ちしない」

「しかし、プエラが作ると別物になるし」

そうソシウスが呟きプエラの方を見ると怖い顔をした彼女がいま
した。

「料理が下手だなんて言っていないから」

慌てて言葉をつけたしましたが、帰ってきた返事は

「次は、頭真つ二つよ。覚悟しなさい」でした。

「なにか面白い話知らないか」

酒を呷ってスシウスは上機嫌でした。一味の残したものは男連中
が多かったためか酒もたつぷり残していました。

「そうだな、ラセオ河のガツシリア国側の関所で大暴れした男の話
は聞いているか？」

「ああ、知っている。軽々と突破したとかな」

「そいつが賞金首のアウトダックをしとめたらしい」

「あいつがか、殺されたって。信じられん」

「やつの蛮勇は我々も手を余していたところだ、反乱軍の猛将とし
て各地荒らし回っていたからな。賞金首をつけてもいつも返り討ち
にあつてそこにうち誰も手を出さなくなつたが」「俺も噂で聞してい
るが黒虎騎士団のみならずコンジュレタイオ配下の赤鬼騎士団も倒
しているらしいな」

「奴は南からの流れ者でパテリアに居着いてしまったのだが、その
腕一本で人気を集め不満分子の支持を受けながら組織化し始めてい
たというわけだ。奴の掃討作戦が行われようとしたところヘテロが
進軍してきたので中止となり、替わって黒虎騎士団がその任に就い
た。そこまでは良かったがこれがなかなか手強い相手でなかなかう
ち倒せない。そこに西から来た例の奴が現れ一騎で敵地に乗り込む
と決闘を挑み槍の一撃でうち倒したんだ。敵のあまりにもあつけな

い最後ににわかには信じがたいことだったが、反乱軍が指揮者がいなくなり自然に解体していくと慌てて追い打ちをかけ鎮圧したというわけだ」

「その西から来た男はどうしたんだ」

「賞金を受け取ると東に消えたという話だ」

「そりや第二のアウトダックになりはしないか」

「可能性はある。そうなると奴以上にやっかいだ」

「それで引き留めなかったのか」

「その心配はなかつとようだ。男はこの国に娘を捜しに来たらしい」
「娘ねえ。生き別れの娘か妹かな」

「それは分かんが」

そこで話は切れました。

「ねえ。アデベニオてまだ遠いの？」

プエラは話を切り出しました。

「おい、気軽にその地名を口にしていいのか」

ソシウスは慌て制しました。

「だって。レピダスには分かっているし、他といったらフィディアだけじゃないの」

すると申し訳なさそうにフィディアは席を立とうとしました。

「おじゃまなようなので、少し外に涼んでまいります」

「いいの、気にしないでそんな秘密てほどの事じゃないんだから」
「続けましょう」

グレーティアは言いました。

ソシウスは納得しない様子ですが今後について語り始めました。

「あといくつかの町を通過するとビタ街道に出る。普通の旅なら街道を東に向かいウンダ河近辺で川沿いに北上してアデベニオに到着するのが一番だ。しかしこいつはパテリアの中心道だから追っ手に気づかれやすい。なら最短距離でこのまま北に進み山沿いを北東に真っ直ぐ行きたいところだがここは怪物の巣窟だ。広大なシルバの森と山岳地帯は怪物の生息地であるとともに広大な迷路だ。はいっ

たら最後出られない。そこでシルバの森の外周を辿って北上する道を進みたいと思うがどうだろう」

「賛成だな。ビダ街道は避けたほうがいい。かといってシルバの森を突っ切るのは無謀すぎる。外周を辿るのが最善だろう」

「なら決まりだわ。で今まで歩いた何倍の距離あるの」

「そうだな7倍くらいかな」

プエラが息が抜けたようにへたりこみました。

「距離だけでない。シルバの森の近くなので怪物の出現の可能性が高く、今まで以上に手強い奴がうようよいる。これは獣だけでないシルバの森近辺は人の寄りつかない土地なので無法者が流れ込んでいる。国家の力が弱いので無法地帯となっておりかなり危険な一帯だ」

レピダスは皆の覚悟のほどを糾しました。

「しかし追っ手の魔法使いよりましです」

グレーティアはきっぱり言いました。

「すみませんがその旅に私も同行させてもらえないでしょうか」

フィディアは恐る恐る申し出ました。

「同行ですって」

プエラは声をひっくり返しました。

もじもじするフィディアに対しグレーティアは優しく言いました。

「これは危険な旅なんですよ。あなたはここにいた方がいいのです」

「私、一人は嫌なんです」

弾くように言葉が返ってきました。

一同はどうしたものかと目を合わせました。

「ここに誰も知り合いはいないの？」

グレーティアが訪ねると彼女は頷きました。

「ウンダ河沿いの町におばあさんがいるんです。ここに来る前はそこにいました」

「なるほどそこに帰りたいという訳だ」

納得したようにソシウスが呟くとレピダスが口を挟みました。

「こいつ等が捕まったら、俺がその町に連れてってやろう」

「なんだとお前、俺達がどうなってもいいか」

「そもそもそういう関係だろう」

レピダスは冷たく突きはなします。

「まあまあ、二人とも。良いわそのおばあさんのところまで一緒と
いうことで」

「プエラ勝手に決めるな。相棒どうする？」

ソシウスが判断を迫ると暫く考えて彼女は言いました。

「彼女がそれを望んでいるのならそうしましょう。一人にしま
った原因の一つでしょうから私たちは」

朝になり朝食を済ませた一同は旅の支度をしました。東の山々か
ら射してくる朝日は眩しく眠気を吹き飛ばします。グレーティア達
は旅の途中なので支度といっても簡単なもので、フィディアが出て
くるのを待っているのです。レピダスが馬の毛並みを整えてやっ
ていると彼女が出て参りました。背中に背囊を背負って帽子を抱え
ていました。

「準備できたか」

「は、はい」

彼女は明るく返事します。

「ねえ、背中のものはなんなの？」

プエラは背囊に提げられたものを訪ねました。

「豎琴ですけど」

自信なさそうに答えました。

「邪魔にならないこれ」

「でも伯父さんの形見なんです」

もじもじ彼女はしました。

「こちらに持って来な、荷物なんて口バに背負わせればいいだろ

う。楽器は自分で持ついけ、壊れても保証できないからな」

めんどくさそうにソシウスが言うと彼女は荷物を預けました。

「あんだ、美味しい飯が食えると内心喜んでいよう」

こつそり嫌みたらしくプエラはソシウスに言いました。ソシウスは内心を言い当てられたのでぶきつちよ面をして返事をしませんでした。

「ほんじゃみんな行くよ」

プエラの元気な声が響きました。

かくしてフィディアを仲間に加えた一行は朝その家を出立したのです。

「父ちゃん籠一杯になったよ」

少年は籠から溢れんばかりになった収穫物を指して言いました。

「よし次は隣の列だ。お前は低いとかろの奴を採れ、お父さんは高いところの奴を収穫する」

「じゃどっちが早いか競争だね」

「そうきたか、いいだろう」

親子は農作物の収穫で競う合っていました。

その様子を眺めていたお母さんは子供相手にはしゃいでいる夫と元氣いっぱいの子息の二人の様子にほほえましく感じていました。彼女の傍らにはまだ幼い娘がいて、畝に腰掛け一生懸命風で小さく揺れる花をもつと揺らそうとふうふうしていました。彼女も近くで娘を遊ばせながら収穫作業をしていました。

畝が幾重にも続く畑には高く延びた茎に大きな葉っぱが立ち並び、その緑の垣に深紅の実が沢山なっていました。この実は甘くその色あいから様々な料理にて好まれて使用されるもので、この地方の代表的な農作物でした。遠くに出荷する時はジャムなどに加工され出荷されますがやはり取れたての実が一番でした。

夕暮れ時、一家は今日の収穫をやめ荷馬車に収穫した作物がいっ

ぱいつまっ た籠を積み込みました。お父さんの力は強く息子とお母さん二人でやっと持ち上げた籠をいとも軽々と荷馬車に積み込んだのでした。夕暮れ時雲も少なく西のそらがオレンジ色に染まりそのまま深い青に取り込まれていました。ところどころ取り残されたような雲が寂しそくにそらに浮かんでいました。

一家は荷馬車にのると家路をたどっていったのでした。少年は変わり行く景色に大喜び、荷馬車の軋む音も手伝ってか冒険のまっただ中にいるという感じでした。その少年の大はしゃぎにお父さんとお母さんの間にちょこんと座っていた妹は一緒に嬉しくなっ てここにこしてました。

「ねね、父ちゃん。あれやってよ」

少年は何かをねだります。

「モリウス。父ちゃん疲れているのよ」

お母さんは息子をたしなめます。

しかしお父さんは息子の期待を裏切るつもりは毛頭ないようでした。息子にいいところを見せようと待ちかまえているかのようにでした。

お父さんは被っていた麦藁帽子を空に投げ上げると不思議な言葉を放しました。すると落ちてきた帽子が再び舞い上げられ、それを幾度となく繰り返したのでした。離れたところからみるとまるで帽子が宙で踊っているかのようにでした。

帽子は荷馬車を中心として右に左に、前に後ろにと縦横無尽に飛び回りやがてゆっくりとお父さんの頭に舞い降りてきたのでした。

「魔法ですごな」

憧れにいた言葉が少年の口からもれました。

「どうだ凄いだろう」

自慢げにお父さんはむねを張りました。でもお母さんは違いました。

「それより洗濯したり、お料理してくれる魔法があったらいいのに」
「全く、女てのは夢がないねえ。一見なんの役にも立たないところ

が魅力なのさ」

「あんたの、魔法は壊し屋魔法でしょう。なんの生産もないわ」

「おいおいおい。奥方殿。暑い夏心地よい風を運んでくれるのはどこの魔法使いかな」

「まあ、団扇くらしいの役には立つのは確かね」

二人の会話をぜんぜん聞いていない息子は馬車の上で手を空一杯に広げると一生懸命魔法のまねごとをしてました。息子にとってお父さんは憧れの魔法使いだったのです。

一家の家は町はずれにありました。この近辺には4戸の家があり林を挟んで点在していました。馬車で林の中の道を走らせていると柵の向こうで農作業をしていた近所が声をかけきます。籠の作物のできばえについてあれやこれや話して、今年は天候も安定していて野菜のみならず穀類も期待できそうだと明るい笑顔でした。

我が家には平屋の小さな母屋に納屋がありました。納屋は家畜小屋といっしょになっており母屋より大きいのでした。お母さんは洗濯物を取り込むと娘を連れて台所で夕飯の準備にとりかかり、お父さんと息子は収穫物を市場に出荷しに行きました。あす出荷した作物がどんな値段で取り引きされるのか楽しみでした。そのあと壊れた柵の修理をして今日の仕事は終わりでした。

辺りが暗くなり母屋に入ろうとしたとき馬で敷地内を此方に向かってくる人の姿がありました。警戒し待ちかまえると男は馬から降り帽子を脱ぎ挨拶してきました。

「夜分すまない。ここはアクイ口殿のお宅か」

「そうだが」

この者は何者であろうかと疑念を抱きながら応対します。

「書状を預かってまいった」

「それは、どうぞ中へ」

「いやいや、先を急ぐのでご遠慮いたす。それよりより宜しかったら読み上げようか」

「ご心配無用。読み書きはできます」

「おお、農夫なのにそれは。ご立派でござるな」

「恐縮致します」

男は懷から手紙を取り出すとアクイロに手渡し、直ぐさま馬にのりどこかに消えていった。

アクイロは差出人を調べてみると、なんと元上司のウレペスからでした。彼は逸る気持ちを抑えながら手紙を広げました。

マーレを中心点とした作戦が進行中である。

魔法の技を解禁とし

汝はその地にて15、6才の攻撃魔法を使う女魔法使いを待ち受け、これを殺害せよ。

かの娘、世界を暗黒に導く者なり。

貢献があれば汝の罪を許し、組織への復帰を認める。

彼が待ちに待った赦免のチャンスでした。

血が沸き立つのを感じました。

国家に帰属する魔法使いの数は多く、その種類も多種多様に満ちています。

アクイロは中央所属のウレペス配下の魔法使いで、この一団は攻撃魔法を主としており隣国ヘテロとの戦いや反乱軍掃討などに働きの場がありました。今から五年前ヘテロが深く領内に侵攻しこれを押し戻した戦いがありこの時アクイロも魔法使いの一団として出撃したのです。戦いは一進一退の興亡を繰り返しなかなか決着がつかせでした。

ここでヘテロは策を用いてパテリア軍を誘き出し一角を崩そうといたしました。これに対し策を見抜いたいたウレペスは動かず守備を固めるように指示を出しました。ところが若く勝ち気に満ちたアクイロは好機を逃してはならぬと飛び出し、つられてほかの魔法使いも勝手に動きヘテロの罠に陥つてのでした。このため魔法使と

将兵を失うこととなり、さらに救援に駆け付けてきたウーマー配下の魔法使いに助けられる不始末。

命令違反のみならず面目を失ったウレペスは激怒しアクイロを軍律に則って処刑しようとしたがウーマーの取りなしもあり魔法の生業を禁止の上追放の処分を下したのでした。

元上司の手紙を受け取ったアクイロは心が躍るのを抑えきれずに母屋の妻の元に飛んでいきました。夕食の準備をしていた妻は夫が駆け込んだので驚き何事が起きたのかと主人の様子を窺いました。

「魔法の使用が許されたんだ」

「まあ」

「それに、職場復帰も夢じゃない」

舞い上がっている夫に対し妻は暗い表情をしました。

「あの仕事に戻るといの」

「なにを言っているんだ？」

「このままじゃ駄目なの」

「農夫なんかより魔法使いが何倍も尊敬されるだろう」

妻は怒ったように鍋を食卓に置きました。

「尊敬されると言っただって、使い捨てなんでしょう」

「それは酷いな」

「ヘテロの魔法使いとパテリアの魔法使いが戦いでどんどん死んでいっているわ。追放されてなかったらあなた生きていないわよ」

「俺の魔法を見くびるなよ。そんなに簡単に殺られはしない！」

「そういつても貴方の魔法は中の下くらいじゃないの！」

大きな声に小さな娘が泣き出しました。息子はというと普段は大人しいお母さんがお父さんにひどい剣幕なので近寄れないでいました。

お母さんは娘を抱きかかえると、よしよしとあやしました。お父さんはというとお母さんの反対にあって不機嫌そうに椅子に腰掛けま

した。

その日の夕飯は静かなものでした。子供達は早めに寢床につかれ夫婦は不満を残したまま部屋にいました。お母さんは一生懸命服の繕いで丁寧な針を通しており、お父さんはというと何度も手紙を読んではなにやら考えている様子でした。

暫くするとお父さんは外にでるとため息をつき近くにあったベンチに腰掛け、家庭を持つとまなならぬものだと嘆きました。するとそれを心配したのかお母さんが後を追いかけるように外にやって来て、お父さんの横に座りました。

「空が綺麗だわ。本当に素晴らしい夜ね」

言われて空を見上げると降るような星々が空に瞬いているのです。小さい星大きく明るい星様々な光を放った星々が大空を覆い、その中を乳をこぼしたような淡白いものが横切っていました。その星々の一角からは流星群が幾度となく白い線を描いていました。

「私ね。魔法使いに憧れていたの。人の出来ないことやってしまうそんな不思議な人達が好きだったのよね。これは私がなんにも出来ないことの裏返しなのかもしれない。

あなたといっしょになったのもそんな理由なのでしょうね。でもいっしょになつて魔法使いがそんな自由で何でも出来る存在でないということが分かったの。特殊な技術を持つ人というだけのことだったの。人の世に有る魔法使いは人との交わりの中にあつてそこからは逃れられない。誰かの思いのまま使い捨てられる、魔法使いも道具に過ぎないの。

貴方が戦場に行つていたとき幼いモリウスを抱えて私本当に不安だったわ。このまま貴方が戻つてこないんじゃないかって思ったの。でもね。貴方が追放処分になった時嬉しかったの、一人になる心配もこれで終わりで。ここは田舎でなんにもないけど自由があるわ。家族がいっしょだし。綺麗な服はないけど、のびのびとした我が家はあるし、輝く宝石はないけど、煌めく星々はあるわ。これって贅沢なことだと思わない？」

お父さんはお母さんの肩に手をやり優しく引き寄せました。

「初めて君を見たのはこんな風な夜だったな。通りかかった家のベランダに空を見上げている人を見かけ、なんて綺麗な人だ思ったものだ。それで風を起こして君のスカーフを飛ばしたんだっけ」

「そう、そしてあなたはそれを私の元に届けた」

「悪い奴だな本当に」

「あら紳士でしたよ」

二人は微笑み、お父さんは思い出したかのように胸のポケットから手紙を取り出すと、そのまま破り捨てました。

翌日、昨日の手紙のことはなかったように平安な日々は訪れました。一家はいつもの通り畑から帰ってくると柵越しにお隣が声をかけてきました。

「今日も豊作だな」

お父さんは荷馬車を停めると荷台の上から話し返しました。

「いや、あまり豊作すぎると値が下がってね。うちだけが豊作なら大歓迎だがね」

「ま、そりゃそうだ」

「あんたところは新しい品種を試しているそうだが、それはどうだね」

「あいつは、栽培方法に癖があつてなかなか難儀しているよ。今年は見込めないね」

お隣さんは諦めたような仕草をしました。

「どうだ、今晚町で一杯やらないか」

誘いを受けてお父さんは返事に困ってお母さんのほうを振り向くと、彼女は静かに頷きました。

「ああ、こいつを片付けたらそつちに来る」

こうして今日だけは家族団らんでなく男達の夜の世界が待っていたのでした。

日も落ちた頃、アクイロとお隣さんの二人は夜道を町の方へむかつ

て歩いていったのでした。夜ともなると町といえど暗く、灯りといったら家々から漏れてくる灯りぐらいなものです。このころになると女子供は外に出ることはなく、男衆や犬が徘徊しているだけでした。大きな町ともなると街灯なるものが存在してはいましたが、田舎町となると暗いのが当たり前なのです。そんな暗い町ですが、一カ所だけは夜も明るさを放っていました。飲屋街というもので、店の入り口に設置されたランプによって路地が照らされて、なんとも言えぬ雰囲気を作り出していたのでした。二人がここに着いたとき既にふらふらになって歩いていた人の姿を見かけたのでした。早くから飲んでいたのでしよう足取りもおぼしく立ち止まっては隅に置かれた空の酒樽に向かって喧嘩をふっかけていました。

馴染みの店に入るとマスターが声をかけてきました。二人は歩き疲れた様子でどつかと椅子に腰掛けると酒を注文し、乾杯の声をあげると立て続けに二杯の飲み干したのでした。

「労働の後の一杯は美味しいな」

「家での飲むのより店でのむのは最高じゃないか」

「まあ、家では怖い監視つきだからな」

「なんだ、お前ん所もそうか」

二人は大笑いしました。

「噂では、山を越えた東では反乱軍が追っかけられているらしいな」

「一時期は勢力をもっていたようだが、リーダーのアウトクがいなくなつて解散したようなものだ」

「まったく分からないものだ、反乱軍の勢力がこの地まで拡大してくるのではと思ったがこうも弱くなるとはな」

「国軍は隣国との戦い兵力を向けているので、背後にスキが出来るそこに反乱軍が旗揚げできる条件となるわけさ。いずれは滅ぼされたはずさ」

「そんなもんなのか」

「そついやずーっと北の山のほうじゃ前宰相の息子が反乱軍を起こしているらしいがな」

「前の生き残りかい」

「反乱軍といても数十名で、山奥に逃れた避難者といったところだ。なんの脅威でもない」

「俺はでっかいと思っちまったよ」

「国内には反乱軍と称する不満分子の集まりが無数にある。そんな中の一つに過ぎないという訳さ」

二人が世間話に夢中になっていたところ、三人の男達が店に入ってきて隣のテーブルに陣取ったのでした。アクイロは気にもせずにお隣さんと愚痴のこぼし合いをしたいたのでしたが、ふと隣の会話が耳にはいったのでした。

「そいつは、小娘の魔法使いだったんですぜ」

そんな風に確かに聞き取れました。驚き隣を見てみると汚い格好の男が仲間らしき二人の男に必死に話しているようでした。

娘の魔法使いその言葉がアクイロを捕らえてしまいました。かれはお隣さんに小さく謝ると隣の会話に聞き耳を立てました。

「隣町で一生懸命商売していたのによう」

男は悔し涙を流しているようでした。

「姉御はいい人だったよなあ。あんな仲間思いの優しい人はいなげ。俺達は荷の渡し期限で急いでいたんだが、そこに悪魔のような彼奴等がやって来たんだ。娘二人に男二人。そして俺達の商売の邪魔をしやがったんだ。一度は姉御が得意の魔法で俺達を守ってくれたんで俺達は撃退したんだ。でもよう彼奴等納屋に火を放しやがって、危うく商品を駄目にするとところだった。これで終わりかと思いきや彼奴等また襲ってきたんだ。姉御は再び火を付けられては大変と俺を納屋の見張りにつけさせ、自分は仲間の男五人を引き連れて退治に向かったんだ。」

あいつらどうするかと見てみると、15、6才位の娘が前に出てきたんだよ。恐ろしく大胆で挑戦的な娘で、見てくれは美しいけどありや地獄からやって来た女だな。仲間の男が走り始めた途端、娘が動いたんだ。すると稲光と雷鳴が轟き辺りを吹き飛ばし納屋を碎

いちまったんだ。納屋の近くで待機していた俺はなんとか難を逃れたけど、地面に転がった俺に目の前に細い変なものが降って来たんだ。よく見るとそれは長い髪の毛で先端に皮膚が着いていた。俺はその時これは姉御のものだとわかったね。姉御はあの小娘に跡形もないほど木っ端微塵に砕かれちゃったんだよ。それを手に持ち震えていると仲間の五人は次々に殺されていつて。でっかい男が狂喜しているように三人は斧で殺し、もう一人の男は必死で逃れる仲間を冷酷に次々と射殺してしまっただ。魔法使いの娘は動かずじっとしてやがって、姉御を殺したことなんてななかったように平然としてやがった。あいつらは俺については全く気がつかない様子で隠れるようにして逃げたと言うわけさ。

彼の娘の顔は忘れない。あいつには復讐してやるんだ。俺はこのことを兄貴に報せようと北に向かっているんだ。このことを誰かに話したいと思っていたんだよ。隣町のお前等が聞いてきれて嬉しいぜ。兄貴ならあの小娘達を何とかしてくれるに違いない。お前達は見かけても手を出すな、彼奴等は人間の心を持ち合わせていないぞ」まくし立てられる会話にアクイロの目が輝き出しました。それは平穏な日々の農夫のそれではなく戦場に赴く魔法使いのギラギラとした目でした。

第10回 平穩と栄光（後書き）

弱者との戦いは終わりましたが、このことが争いを後に生み出します。

本人の意思と関係なく運命は戦いに導くのです。

今回登場は農夫の人、主人公を中心としてませんが何故戦うのかの説明に

なるのでしょうか。今回の登場人物も平穩な道を歩めない人です。

ところで翡翠記は毎週発表してまいりましたが、書き上げるのと発表のサイクルは同様でなく、発表が書くのを追い越してしまいました。

従いまして貯金もなくなり毎週発表は不可能となりました。

今後は完成次第発表することとしますので、よろしければ次回作品は気長にお待ちください。

次回作品では三顧の礼が行われます。

第11回 向かい風（前書き）

ビルトス	主人公の師（本名ダーナ）
グノー	主人公の兄弟子
グレーティア	主人公
プエラ	主人公の幼なじみの娘
レピダス	黒虎騎士団（銀弓のレピダス）
ソシウス	斧使いの大男（旋風のソシウス）
フィディア	祖母の家へ帰る少女（譚詩曲のフィディア）

デスペロ	魔法宰相
コンジュレティオ	軍総司令
ホステイス	ヘテロ国魔法宰相

ウーマー	デスペロ配下上級魔法使い
ウレペス	デスペロ配下上級魔法使い
セラペンス	ビルトスと死闘した上級魔法使い
ペコー	セラペンス配下

アクイロ	元政府所属魔法使い
モリウス	アクイロの息子

第11回 向かい風

アクイロは荒れ地にいました。ここは町の郊外であり人が訪れることのない所です。彼は地面を踏みしめると大きく気を吸いました。闘志が満ちてくるのが分かりました。

彼の意志に合わせて空気が激しく流れ始め、草が小刻みに揺れ砂埃が舞い上がりました。

昨日酒場で聞いた娘というのが指令にあつた娘に違い有りませんでした。話を聞く限り娘だからと侮つてはいけない感じがいたしました。彼が意識をこめると空気は渦を巻いて竜巻となり周囲の物を吸い込み空に舞い上がらせました。一本の木に狙いを定めると、木は碎けバラバラになって宙に散つてしまいました。五年のブランクは彼の技を衰えさせていませんでした。これなら戦えるとアクイロは思いました。

しかしまだ迷いがありました。妻はこの生活を望んでおり戦いに赴くことを許してくれないでしょう。彼女はこの田舎で家族で生活することを望んでいるのです。それで彼は一度は魔法使い復帰の夢を諦めました。それは許されたといつても組織復帰の夢が保証されたものでもなく、遭うことがあり得るのか全く霧の中の状態だったからです。まったくそれは空絵ごのようなもので淡い夢に過ぎないのでした。

ところがそれは現実のものとなりそうで、女魔法使いがまもなくこの町にやってくるのとなると話は別です。このまま農業をやるのか魔法使いに復帰するのか判断を迫られていうようなものでした。妻の喜ぶままに農夫として一生を過ごすか、再び栄光ある魔法使いに復帰するかなかなか決断出来ませんでした。

そもそもが見ず知らずの娘を殺害するのになにか抵抗らしきものもありました。その娘何人の人を殺め、災いを人に及ぼしたのか。昨日飲み屋でしゃべっていた男の証言通りに血も涙もない娘であつ

たらよいのですが、無垢の娘だった場合は容赦なく殺めるというのは気が引けました。しかし、手紙によれば世を混乱に陥れる人物とされているので、やはり問題がある娘なのでしょう。国家の判断に誤りなしとそうやって動いてきたのであり今回も例外ではないのです。娘は倒すべき存在なので自分と言いかせました。

知り合いの門番には若い娘二人と男二人の者達が来たら、家に届け物という形で連絡をするということで話はついていました。そのまま町を通過したとするならば直ぐ後を追いかけて、町に逗留するとするなら程良いところで待ち伏せしようしました。揺れ動く心を静めながら今日はまだ良き夫であろうと彼は思いました。

モリウスは珍しくお父さんが用事で何処かにいったので、お手伝いもなくのんびりしていました。しかし自由ということはそう楽しいものでなく近所の友達は何処に行っちゃって遊び相手などいませんでした。しかたなくモリウスは午前中は自宅で遊んでいたものの流石に退屈してお昼から久しぶりに町に行ってみることにしました。

市場にお父さんといっしょに作物を出荷したりするのでおなじみの道でした。子供の足で歩いても町はすぐ近くでした。町の入り口では守衛のおじさん達がちらりと此方を見て何事もなかったかのようには視線を戻しました。門の上には教訓めいたものが書かれているそうなのですが、文字を読めない少年にとってそれは落書きのようなものでした。

いつものように駄菓子屋にいくと、お母さんからせがんでもらったおこずかいを使って甘いあめ玉を買い、大事に咬まないように注意しながら口の中で転がしました。少年は幸福感に満ち満ちていました。

この町の広場には真ん中に浅い川が流れていました。なぜこんな町の中に川が流れているのかはよく分かりません。小川など郊外にはいっぱいありめずらしいものでもないのですが、お父さんにこの

分けを訪ねると人間という奴は嘘が大好きで欺瞞の川に心惹かれるということらしいのです。そんなわけで靴を脱いで嘘つき川の中をじゃばじゃばと走っていると気がつけば濡れになっていました。重たくなったズボンに動きづらくなった足を持ち上げ広場の敷石の上に立つと、周囲は大水で溢れ返ってように水浸しになりました。近くを三人のお姉さんと二人の男連れの旅人がこの姿を珍しそうに眺めて去っていきました。一人で遊ぶということはつまらないことです。動き疲れたモリウスはベンチに転がり空をみつめました。空は青くてなにもありません。白い雲があるもののあまりに遠く大きさがよく分かりません、そのまま仰向けになつて寝そべっていら臉が重くなり彼は知らないうちに寝てしまいました。

次に目を覚ましたのは近くを見知らぬ子がはしゃぎ回っていたときでした。目を覚ました時モリウスは影の傾き具合からあまり先ほどから時間が経っていないことに気がつき、今日大事に持ってきた玩具を取り出しました。それは平たくくの字に曲がつてものでした。お父さんが自分の為に作ってくれたもので、誰も持っていない不思議なものでした。投げると戻ってくるしるもので魔法でもかかっているようでした。お父さんから誰もいない広いところで遊ぶようにと約束させられているのですが、どうしても町の人が空を飛ぶ不思議な玩具に驚く様をみたくしょうがなくって持つてきたものでした。

それに向けて勢いよく投げるとそれは空をくるくる回転しながら飛んでいき先の方で次第に進路を変え一回りして此方に戻ってきたのでした。何事かと周囲の人が空を見上げています。人々の驚く様子に心躍ったモリウスは何度も何度も空に向けて投げました。

ところが最後に投げたものは力が弱かったのか少年の所まで返つてこず、ゆっくり楕円を描きながらとんでもない方に飛んでいきました。

これに不味いと思つた少年はあわてて玩具を追っかけましたが、間に合わずベンチに腰掛けていた老人めがけて突進したのでした。

「しまった！」と思わずモリウスは声をあげると、不思議なことに玩具は再び上昇すると空を舞ってくる回る回りながら飛んでいったのです。その先には三人の女性がいて、そのうち一人が手を挙げるとその玩具は吸い寄せられるようにその手に収まったのでした。

意外な出来事に怪しみながら近づいてみるとお姉さん達はこちらを見つめていました。

栗色の髪のお姉さんは怖い顔をして此方に話しかけてきたのでした。

「僕。こんなもの投げたら危険でしょう」

モリウスはお姉さんの雷にびくつきながら、申し訳なさそうに近づきました。

「人に当たらなかったから良かったけど。私たちが通りかからなかったらご老人に当たっていたわよ」

「ごめんなさい。俺そんなつもりじゃ」

「いいこと。もうここで投げちゃだめ」

お姉さんの言葉はお説教に満ちたものでした。

一方金色の髪のお姉さんは珍しそうに玩具を見つめていました。

「僕が作ったものなの？」

お姉さんは優しく訊ねてきました。

「父ちゃんが作ったんだ」

少年は自慢げに答えました。

「これはね遠い国のもので、噂では聞いていたんだけど不思議な形をしているね」

「魔法の道具ですか？」

「そうではないですよ」

グレーティアはその玩具を上か横からと測るかのように凝視していました。

「ほらほら、玩具はその子の返して買い物に行くわよ」

プエラはグレーティアがあまりにも熱心に玩具に見とれているので呆れたような声を出しました。それでも彼女はその声に耳を傾けるでなく玩具を手に投げるそぶりを見せました。

「駄目じゃない。あなたまでそんなことしたら」

「ちよつとだけ」

かまわず彼女は玩具を空に投げました。それはくるくる回りながら空に飛んでいき戻ってきました。

「なんで言うこと聞かないのかしら」

プエラは怒って彼女の詰め寄りました。

「どうして戻ってくるのか分からなくて・・・」

「こんな玩具に夢中になるってどういうこと。子供じゃないんだから」

「でも不思議じゃない。へんてこに曲がっているものが戻ってくるなんて」

「あなたは昔から変なものに夢中になるてのは変わらないわ。見てくれは違っても中身は同じね」

プエラはぷいと背中を向けるとフィディアの手をとりました。

「買い物は私たちだけで行きましょう」

「でもいいんですか？」

「女の子だけで行くのよ」

「だけって。あの・・・」

フィディアの戸惑いをよそにプエラは無理矢理手を引っ張って連れて行ってしまいました。

プエラの剣幕に退いていたモリウスはグレーティアの元に近づいて来ました。

「お姉ちゃん。お友達怒って行っちゃったよ」

「まあ、しょうがないよ」

グレーティアは一寸寂しい気持ちもしましたが、退屈な買い物から解放されたので半ば嬉しい気持ちでした。

「これ小さくても同じように戻ってくるのかなあ」

彼女は玩具をなぞりながらふくらみの部分を確かめていました。

「おいらは大きいからなるんだと思うな」

「実験といきましょうか」

そう言うと彼女は小刀を取り出すと近くにあった枝を拾い削り始めました。モリウスが物珍しそうにその様子をわくわくしながら見つめていると、ほどなくして小さな玩具ができました。見てくれは全く同じでそれがそのまま小さくなって手のひらに乗ったというものでした。

「そっくりそのままだね」

少年は彼女の器用さに感心していました。

「これが戻ってくるなら安心して何処でも飛ばせるはずだよ」

「本当だね。お姉ちゃん」

早速手のひらに乗った玩具を指で弾いてみるよってくる回りながらそれは返ってきたのでした。

「大成功！」

小さい玩具は何度でも戻ってきて、これに気を良くしたのか彼女はもう一つこしらえて二人で何処まで遠くに飛ばして戻ってくるか競争をしました。

これに飽きるとグレーティアは手の中に玩具を置き軽く弾くと、それは手の中を飛び出し宙に舞うと何度も円を描きやがて手のひらの戻って来ました。これまでと違った玩具の動きにモリウスは興奮しどうやって飛ばしたのかせがみました。それはお父さんの帽子飛ばしとなにか似たような匂いがしたのでした。

「これは、その人の素質が必要なんだ」

「なにそれ」

「特別な人しか出来ないことかな」

「お姉ちゃんが特別な人てこと？」

「うん、そうだね」

「なんで女の人に来て、男にできないものか。教えてよ」

「やってみる？」

少年に闘争心呼びよこしてしまったと、彼女は少々反省いたしました。少年が失望したら玩具を宙に飛ばして楽しませてあげようと考えていました。

「手のひらに乗せたら、同じ風に言葉を投げかけてごらん」

彼女が言葉を発すると玩具はくるくる手のひらで回りました。その様子を見ていた少年もまねをしますが玩具はびくともしません。少年がいらだっているのとグレーティアが側に寄りモリウスの小さな手のひらを覆うように手を差し伸べると不思議なことに玩具は小さく回りました。これに少年は大喜び。逆にグレーティアは補助があったとはいえ、少年が魔法の入りに口に立ったこと気がつきました。この子は魔法の素質があるのだと彼女は気がつきました。

「ね、お姉ちゃんこの町の人？」

「よその人ですよ」

「残念、おいら好きになっただけどさよならか・・・で、何時までいるの？」

「あす朝出発かな」

「早い。で何処に行くの？」

「北の町」

「そうか、じゃ二度と逢えないな」

「記念にこれのもつとすごい飛ばし方教えてあげるから」

「本当？しっかり憶えるよ」

それから少年は必死になって呪文を覚え、彼女の補助なしに玩具を動かせるようになりました。

「これで大丈夫。魔法使いになれそうだね」

「魔法使い？あまり興味ないな」

少年は不服そうな顔をしました。

「そうなの。何が好きなの？」

「おいら大きくなったら赤鬼騎士になるんだ」

「騎士かあ。だったら剣の使い方教えてあげようか」

「え、お姉ちゃん女の人のくせに剣術も出来るの？」

「すこしね」

グレーティアはにつこり微笑むと近くに落ちている木の枝を二本拾い一本を少年に手渡ししました。

「背筋は真っ直ぐ、お尻が出たり反り気味になっても駄目。頭も同様に目が平行になるように首が傾いちゃいけないよ。剣先と足先鼻の先が一直線上に揃うように半身になること」

言われるまま少年は姿勢をしますがあちらこちらゆがんで、彼女に直されます。

「肩に力が入っているから楽にして。肘を少し曲げる。全身はゆったり構えないと素早く動けませんよ。剣は腕先だけで動かすものでなくて全身で動かすもので、足先の力が胴を通じ腕、剣先と伝送させるの」

モリウスは姿勢を収縮状態から解放へなんども繰り返しました。

「剣は真っ直ぐ刺すものだけど、螺旋を画いて放されるものです。これは防御についても同様に螺旋を画いて相手の剣の威力を相殺するの。さあ突いてきてごらん」

少年は枝で突いてくると、巻き込まれたように外に弾かれました。

「こんな風にね」

「なんだか力が吸い取られたみたいだ」

「もっと分かるように。どんどん突いてきてごらん」

少年は彼女追いつめてやろうと意地悪い思いが湧いて出て、激しく攻め立てましたがグレイティアは涼しい顔をして全てを受け流してしまいました。少年は息切れして腕を降ろしもう十分だという表情をしました。

「お姉ちゃんすごいや。ぜんぜん当たらない」

「螺旋というものが分かった？」

「なんとなくね。姉ちゃんなら赤鬼騎士になれるよ」

「騎士に？」

「いけない。女の人が赤鬼騎士にはなれないんだった。男だったらなれたのになあ」

「どちらにしても騎士のなるつもりはないから」

「そうだよ」

少年は馬鹿なことを言ったものと苦笑しました。

その後も二人は練習を重ね、少年の立ち姿勢も様になりかけたころプエラ達が戻ってきて少年とグレーティアはここでさよならをしたのでした。

今日は畑仕事はお休みでしたが、家の仕事で大忙しでした。お母さんは家の掃除とか後かたづけで動き回りました。久しぶりに台所では実をぐつぐつ煮てとりとしたジャムを作るお母さんの姿があり、彼女は満足げに瓶詰めした容器の列を眺めていました。

息子のモリウスは遊びたいさかりで一つ二つの仕事を与えたものの何処かに行ってしまうし、夫は納屋に整理や修理さらに壊れた柵など補修しているはずなのですがこれまたいつの間にやらいなくなってしまう男共はどうしてこうも駄目なのかと彼女はご立腹でした。しかしまだ小さい娘が大きくなったらいろいろ自分を手伝ってくれるに違いないと明るく未来に夢を描いていました。そうこうするうちに日も傾き夕飯の仕度に取りかからなくてはならなくなりました。竈にはジャムを作った時の火種が残っていていつでも調理可能でした。しかしまずは井戸水を汲み上げてからです。桶をもって外に出てみると丁度疲れた様子で夫が息子を連れて帰って来たのでした。「姿が見えないと思ったらこいつ町にいやがった」

夫は息子の頭をばんばんと叩くと、モリウスは不服そうな顔をしていました。

「人のこと言えて。あなた今までどちらに？」

「それはだ、男の大切な用事があってだな」

次の言葉が思いつかなくアクイロはしどろもどろの返答しかできませんでした。

「二人して井戸水汲み上げて頂戴」

きつぱりお母さんは命令すると、すぐすごとお父さんと息子は桶を手に持ったのでした。

いつもの慌ただしく作った料理と違って今日は手間のかかったも

のが食卓に並びました。お母さんはスプーンをふうふうしながら娘に食べさせていました。息子はお腹を空かしていたのか口一杯にほおばりむしゃむしゃ食べ、喉を詰まらせると慌てて水を流し込みました。

「それじゃいつか食い物を喉に詰まらせて死んでしまうぞ」

呆れたようにお父さんは言いました。でもお母さんがお父さんのお皿を覗いてみると嫌いなものが選り分けられていてどっちもどっちと思いました。

「その残さないで下さいよ」

「これはだな。最後に食べようと残しているんだ」

お父さんの苦しい言い訳でした。

「そつえば、門番のひとが貴方に頼まれた物だとか言っであれを置いていったわよ」

お母さんが指し示すところに白い包みがありました。

（尋ね人来たるか）心の中でお父さんは呟きました。

「また変な物頼んでいないでしょうね」

「開けてのお楽しみさ」

「まあ」

食事の後も片付けでお母さんは大忙し食器の片付けのあと取り込んでいた洗濯物をしまい込んでいます。お父さんというと道具の手入れをしていました。モリウスは最初は妹を相手を暫くはしていたものの退屈して剣士のまねなどしていました。

「とうちゃん、どうだい。おいらすごいだろう」

道具をぴかぴかに磨き上げていたお父さんは頭を起こし息子の方をみると、なかなかの姿勢をしています。

「なんだ、やたら美味くなったな。様になっているぞ」

「見直したかい」

息子は自慢げでした。

「なんだ、誰かに剣でも教わったのか？」

「公園で会ったお姉ちゃんの教わったんだ」

「女の剣士が珍しい」

「強いんだよ」

「ほう」

お父さんは息子には女の技で十分と面白がっていました。

「それからね。これ作ってもらったんだ」

取り出されたものは小さな飛ぶ玩具でした。

「そいつは。なるほどこれは面白いな。こんな小さくなるとはな」

「小さいだけじゃないんだ」

モリウスは指で弾くと玩具は部屋の中を飛んで戻ってまいりました。これにはお父さんも感心しました。

「良くできているなあ。これなら危なくない」

「危なくないですって！」

突然お母さんが話しに加わってきました。

「部屋でこんな物飛ばしたら危険でしょう。今も思わずよけようと思いましたよ」

「そうだそうだ。危険だろう」

お父さんは変わり身が早いのでした。

「そんなに怒らないでよ。こんなことも出来るんだ」

モリウスは手の中の玩具に言葉を投げかけると玩具は回転し始めゆっくり浮上したのでした。あっけに取られるお父さんとお母さんをしりめにそれは悠々と宙を舞ったのでした。

「あなたこれって」

「魔法だな」

アクイロは渋い顔をしました。

彼は息子から発せられた言葉が魔法のものだと直ぐ分かりました。まだ幼稚でよちよち歩きの魔法でしたがしっかりとした成文をしていました。自然発生的なものでなく訓練された整った文法でした。

「これね、お姉ちゃんから教わったんだ」

この時、アクイロの顔が真顔に変化しました。

「お姉ちゃんは、隣のお姉ちゃんぐらいの娘だったかい」

お父さんは慎重に訊ねました。

「そうだよ。ものすごく綺麗なひとだったよ」

（この娘に違いない！）アクイ口は高鳴る鼓動を隠し息子と語らい合います。

「明日もう一度会うといい」

「それが駄目なんだ。お姉ちゃんは明日朝早く北に向かって旅立つんだ」

「本当か」

お父さんの驚いた様子に息子は何かと小首を傾げました。

「お父さん。なにか若い娘に御執心みたいですけど」

お母さんはぬーと顔を近づけてきました。一寸怒っているようにも見えました。

「美人という言葉に釣られるんじゃないでしょうね」

「馬鹿を言つな。息子の為に考えているんだ」

「そうかしら」

お母さんの返事は冷ややかなものでした。

お父さんは何事もなかったように道具の手入れを初め、息子は手の中で玩具をくるくる回していました。手入れをしながらアクロイは明日が決戦の日であると心に言い聞かせました。家族に気づかれないように出かけ、決着をつけたら早々に家族の元に戻ろうと考えていました。

朝、ロバの背中に荷物をくくりつけたソシウスは、近くで馬の手入れをしているレピダスを興味深げに眺めていました。結局この男敵はなのか味方なのか、すっきりしないその立ち位置に少々戸惑っていました。俺はこの男を信じていいものなのかとソシウスは自問自答を繰り返しましたが答えは出ませんでした。ケドルスの一件以来妙な連帯感は出来たものの仲間とい認めるにはまだまだ時間が必要でした。そこにプエラ達がやって来て、なにやら荷物を増やして

くれます。

「なんだその包み」

「食糧に決まっているじゃない」

「ここからは山越えてのはなくて、町から町への旅だ。野宿の心配はないぞ」

「だからその旅を楽しくしようとお菓子を買い込んだのよ」

「菓子だあ」

堂々と主張するプエラにソシウスは呆れます。

「おまえ、俺達逃避行してるて分かってるよな」

「もちろんじゃない。変なこと言うのね」

「おまえの行動に悲壮感てものがなくてな」

「楽しく逃げて何処が悪いの」

「変だろうそりゃ」

ソシウスはこいつには付いていけないと勝手にさせることにしました。フィディアはというとどことなく旅行気分のように浮かれているようでした。まだ旅も始まったばかりで疲れもなく新しい出来事に興味をそられるのは無理もないことでした。これが正常というものでプエラが長旅でへとへとなはずなのに元気がいいのが異常なものでした。

五人は宿を発つと町の北門を出て緩やかな丘陵を登り下りしながら続く道を北に向かいました。丘陵には朝靄がかかって木々の姿がぼんやりとした形で浮かんでいました。東から差す朝の光が木々を通してきらきら輝き霞を次第にうち消しています。

道を横切る小川。水は澄みずつと底の砂までしっかり見え、川の中では水草が長い髪のように流れに揺れていました。その小川の渡る道には石積み作りのアーチの橋が架かっておりその橋は少し苔むしていて端には草がへばりつくように生えていました。

フィディアは小高くなったアーチの橋の上から小川を泳ぶ魚の群を目で追いかけて、プエラは組まれた石に交互に足を乗せけんけんしながら渡っていきました。

その様子をため息混じりに口バの手綱をとるのはソシウスで、その隣をグレーティアは並んで歩いていました。

「昨日小僧と遊んだって？」

「ああ、そうだよ」

「あの小娘共とつき合わされなかったのは幸いだったな」

「そ、そうかな」

彼女は歯切れの悪い返事をしました。

「その子供赤鬼騎士に憧れていそうだった？」

「魔法使いより騎士になりたいらしいね」

「赤鬼騎士か、俺も憧れるな。コンジュレティオ配下の赤鬼騎士団といったら命知らずの連中ばかりだからな」

すると背後で鼻息を荒くする音がしました。

「赤鬼騎士団は気が荒い者の寄せ集めにしかすぎん。聞こえはいいが戦いの消耗品だ」

レビダスの手荒い評価でした。これにソシウスは一寸不愉快になりました。

「そういうが赤鬼騎士団は戦功を随分上げている。これを単なる寄せ集めとっていいのか」

「後先考えない頭の悪い猪武者ばかりでことだ」

黒虎騎士団と赤鬼騎士団の間には競争意識というものがあるのか、面白くなったソシウスはからかってやろうと考えました。

「そういうが、具体的になにがあるんだ」

「赤鬼騎士団に憧れて入団してくる者は多い、最近入団したもののなかに双手剣の使い手がいたがある地方の行政長官を殺害して行方をくらしました。その武芸のほどからコンジュレティオにも期待された人物だったらしいが、後先ない行動がおたづね者になってしまう結果を招いている」

「それは惜しいことだな」

「先を考えずに行動することは行き止まりに直面する。お前達、次の町ではある人物を訪ねるとしよう」

「ある人物？」

話が突然切り替わったのでソシウスは戸惑いました。

「お前達は気にならないのか。何故災いの元として命を狙われているのか」

「その理由が分かるのですか？」

グレーティアが興味深げに話しに参加してきました。

「俺も命令でもあり、あえてその理由は追求しなかったが。縛りから解放されてみるとその正当性の根拠について知りたくなってな」

「確かにその通りだな。身に覚えのないことで命を狙われては納得できない」

「それに転身に術を解く方法について訊ねたい」

「その方はできるのですか？」

グレーティア身を乗りだしました。

「魔法使いではないので、無理だろうが。誰かを紹介してくれるだろう」

「そうですね・・・」

「これから訪ねる人物は現政権以前にクーデターを実行し失敗した者たちの生き残りだ。

監獄の底で病死するところをデスペロに助けられ、現政権に加わることなくこんな田舎に引きこもっているというわけだ」

「そんな人物の所在をよくご存じでしたね」

「現政権に牙をむくこともあり得るからな。監視を付けるほどではないがチェックは怠りなくやっている」

「騎士のくせになんでもやっているんだな」

「俺達は治安部隊みたいなものだ。災いの根を摘むのが仕事だからな」

町より程なく歩いたところの小高い丘陵に北に行く道は真っ直ぐの延びていました。少し辺りは開けていて、緑の草の茂るなだらかな坂道は丘陵の頂上で見えなくなつて青い空は広がっていました。

まだ全体的に靄がかかったようでしたが低いところの林では雲がかつていたものの岡の上ははっきりとあたりを見渡せました。

一行が岡の坂道をどんどん登っていくと頂上のあたりで立つ人物を見かけました。この人物は北に向かつて見えなくなることなく、こちらに下つてせまって来るでもなく、そこに佇んでいるように見受けられました。

この人物はこんな所でなにをしているのだろうと一同がいぶかしんでいると、その人物はそれまで眺めていた遠くの山々の方から体の向きを変えて此方の方を真つ直ぐ見定めたのでした。

「あの人私たちの方を見つめていますよ」

フィディアは心配そうに言いました。

「気にしないのよ。お早うて元気にご返事すれば大丈夫」

プエラのちゃめつけたつぷりの言葉でした。

「あれは俺達を待つていたようだな。なんの用があるというのかな」

「あの農夫姿は通りがかりの人と、とらえたほうがいいのかもかもしれませんね」

グレーティアは追っ手のことを考えていました。

「それはどうかな用心したほうがいいだろう」

レピダスは注意を促しました。

男はもう目の前でした。農夫姿のその人物は組んでいた腕を降ろしこちらに語りかけて来たのでした。

「待ちかねたぞ」

不敵な笑いを浮かべ男は道の真ん中に仁王立ちになりました。

男の言葉を聞いてソシウスは獲物を肩に担ぐと前に飛び出しました。

「それは待たせたな。それで俺達になんの用だ」

「俺は女魔法使いを捜している。その３人の娘のうち魔法使いは誰だ」

「なんのことだ、人違いしてないか」

「そうか、そうだろうな」

突然、林のなかに四本の竜巻が起こったかと思うと木々をへし折りながら一同に向かって移動してきました。靄のなか静寂に包まれた林は轟音とともに嵐の世界に一変しました。竜巻は黒々とした渦を描き、からだをくねらせどんどん迫ってきました。

フィディアの驚き叫んだ声は暴風にかき消され、打ち付ける風の音だけ聞こえるのでした。竜巻の中では枝やら草やらが宙に巻き上げられ吸い寄せられるように上空に消えていきました。やがて一本の渦が一同を襲おうとしたとき、それは霧散したのでした。

「なるほどお前ということか」

男は魔法の呪文が相殺されたことに満足し、その魔法の使い手が防御魔法でなく攻撃魔法で無力化したことで確信を得たのでした。

男は被っていた麦藁帽子を整えました。すると残り3本の竜巻は消え辺りに静寂が戻ってきました。

「魔法使いかい手荒い歓迎だな。それであいつになんの用だ？」

何事もなかったかのようにソシウスは言い放しました。

「なあに、命を頂戴するだけだ」

男も平然と返しました。

「なんなの。こんな涼しくて気分さわやかな朝に通せんぼして命下さいて、あんたこそ畑に返りなさい！」

「プエラなんてことを」

プエラの剣幕におろおろしてフィディアは彼女の腕を掴みます。

「こら！その芋おじさん私と勝負よ」

男を睨み付けていたソシウスは背後でプエラが騒ぎ始めたので、やれやれと背後を振り返りました。

するとこの様子を後ろで見ていたレピダスは失笑すると馬に跨りその場を去ろうとしました。

「何処に行くんだ？」

慌ててソシウスが声をかけると

「つき合いは此処までだ。後はお前達で好きにしろ」

とレピダスは言葉を残すとその場を去ってしまいました。その後姿を呆然としてレピダスは立ちつくし、その後無性に怒りがこみ上げてきました。所詮あいつはそんな奴なんだ信じるほうが可笑しいのだとソシウスは沸き起こる怒りを理性で抑えました。

「お前達の仲間は薄情だな」

男は苦笑します。

「彼奴はたまたま一緒に歩いていただけだ。仲間じゃない」

「そうか、すまんがあの騒がしい嬢ちゃん遠くに離れさせてくれないか。巻き添えさせては不憫だ」

言われて振り向き、去りゆくレピダスに叫んでいるプエラを見て同感だと思いました。

「フィディアすまんがプエラを連れてその裂け目に非難してくれ」
懇願するように言うと、フィディアはまだまだしゃべり足りないプエラを無理矢理引っ張って離れたところに避難したのでした。

「私の名前はグレーティア。あなたは」

「俺はアクイロだ」

「お見受けしたところ一般の方のように思えますが、私の命を狙われる理由はなんでしょう」

「職場復帰のためだ」

「取引が行われているということですね」

「それにお前はどうも世の中を混乱させる原因のようだ」

「それは私にもよく分かりません」

「でなければ、こんな大規模に搜索なんてしないさ」

「宜しければ見逃してもらえませんか」

彼女は男に無理を承知で頼み込んでみました。

「おまえさん、蚊が飛んできたかどうか。殺すだろう」

「害ということですか」

「俺には実績が必要だ」

「貴方は部外者です。貴方が私を殺したとして、その相手が魔法使いであったという報告を果たして信じてくれるのでしょうか」

「なにを馬鹿な」

「なんの証拠もないのですよ」

グレーティアはアクイ口の弱いところを突いていきました。

「信じてくれるに決まっている」

アクイ口は少し狼狽えている様子でした。

「そうでしょうか。それに貴方はご家族の方がいるのではないですか」

「変なことを言う奴だ。もう何も言っても駄目だ」

うち消すように帽子を地面にうち捨てると、激しい怒り顔をグレーティアに向けました。

「お前の相手は俺だよ」

アクイ口が攻撃に移たと感じたソシウスは前触れもなく大きく斧を振りかざしました。しかしアクイ口の反応は早くそれをかわすと彼の体を吹き飛ばしたのでした。大きな巨体が宙に舞い音を立てて地面に落ちました。落ちたところは幸い石も少なく草が茂っていたので、直ぐにソシウスは起きあがることができました。

「今度、変な真似をしたら殺すぞ」

アクイ口は警告をいたしました。

「相棒が殺されるのを黙って見てられるかってんだ」

ソシウスは全速力で駆け抜けると渾身の一撃を男に向けて振り下ろしました。しかしそれより早く魔法は繰り出され激しい衝撃が彼を襲い、それは地面を遠くまで削り背後の林に穴を開けました。ソシウスはというと以外や無事で魔法が放された瞬間なにやら丸いものに包まれてそれが相手の威力の前に碎け散ると吹き飛ばされたようなのでした。

「防御魔法か！」

アクイ口は娘が防御魔法で斧の男を守ったことが分かりました。しかしその魔法はまだ未熟なもので彼が放った風撃の前に碎け散ってしまふようなものでした。

（この娘攻撃魔法と防御魔法の両方使えるというのか、戦い方を考

えなくて」とアクイロは思いました。

この時前後左右から小石が飛んできてアクイロを襲いました。前触れもなく空の四方に黒いつぶつぶの様なものが出現したかと思うと勢いを付けて飛んできたので彼は一瞬戸惑いました。しかし難なく小石を捉え逆に娘に叩きつけたのでした。

「いろんなものを持っているんだな。しかし小石とは。そう言えばセラペンス配下に小石を投げるのが得意な奴がいたが。やたらと競争意識はあるのだが実力がいまいちだった」

思い出に浸りながら余裕で男は戦っていました。

「こんどこそぶった切ってやるぜ」

ソシウスが再び攻撃するとアクイロは風撃でなく竜巻を起こして彼を宙に舞い上げました。これにグレイティアは慌てて竜巻を相殺し消し去ると落ちてくるソシウスに突風をあてて地面落ちる衝撃を和らげようとしました。彼は地面に落ちてしまいそのまま起きあがってはきませんでした。彼女のところから離れていたのでソシウスが無事なのかは分かりませんでした。

「風の魔法もまあまあだな。元気のいい奴だったが、死んではいい。防御魔法は遠くに離れては効かないからな。いい選択だった」

「お望み通りの一対一になりましたよ」

「最初からそのつもりだ。お前の魔法見せてもらうぞ」

二人は向かい合い攻撃の機会を伺いました。まずはグレイティアが動きました。彼女から放された雷撃は稲光をもつてアクロイを襲いましたが彼はこれを慣れたように弾き草原に削ったような長い跡を残しました。

するとアクイロも反撃してきて風撃を放すとグレイティアはなんとかこれを弾き林の一部を消滅させました。風撃は雷撃と違い閃光や焼け焦げた跡は残らないため端からみるといきなり物が壊れていくように見えるのでした。ただ金属を擦ったような音が通過するので音と戦っているようでもありました。魔法使い達には術はこの様な効果音響として捉えられておらず、それは魔法文や数字が飛び交

っているように見えるのですた。

「なるほど女が散り散りになってしまはずだな」

「それは？」

「なあに褒めているんだよ」

アクイロが風撃を放すと、迎え撃つようにグレイティアも雷撃を放しました。二つの魔法は二人の間でぶつかり、お互いの圧力に逃げをなくし横に流れていってしまいました。勢い良く弾け飛んだ技は雷撃と風撃の二つの威力をもったまま地面を横一文引き裂いて消えました。

「なかなかやるな。では連続した攻撃に耐えられるかな」

アクイロは次々に風撃を放しました。連続攻撃の場合その数に反比例して威力は落ちるものですが男の風撃は先ほど受けた威力そのまものものでした。とつさに防御陣を発動させたのですが風撃はいつも簡単にそれを破壊したのでした。少なからず彼女はダメージを受けてしまいました。

「間違いだな。未熟な技では防げない」

再びいくつもの風撃がグレイティアを襲い、今度はそれを弾き交わしたのでした。小石の時と分けが違いました。一つでも受け損なうとそれでおしまいです。「しまった」と思った瞬間彼女の体は消し飛んでしまっていました。

懸命に技をグレイティアを受け、そのため彼女を中心として岡の大地が放射状にどんどん削られていきました。

技を放すアクイロも最初は余裕で戦っていましたが、このあたりから次第に娘が技を的確に捌き始めたことに驚きの目で見えていました。

（この娘、この短い間に成長している。早く倒さなくてはならない）
こう思っ て来た時でした。受け一方の娘の方から雷撃が飛んできたのです。とつさにこれを弾くとアクイロは技を見切つて攻撃に転じ始めたのだと悟りました。次第に数を増やす雷撃の魔法。まだこの様な若い者が放された魔法文を書き換え次の魔法が到達するまえ

に成文化した魔法を作成することが出来るのか驚きの眼差しを向けました。

二人の間で激しい興亡げ繰り広げられ周囲をずたずたに切り裂きました。雷撃が増えたこともあり草花がちりちりと燃え始めました。雷撃と風撃の数は同数となり互角の戦いでどちらの一步も退かない状態になってまいりました。ここでアクイロは雷撃の同時攻撃を受けこれに彼はたいそう驚いたのでした。

幸いにもその文が未完成で容易に捌くことができたものの完成したら不利になってしまいます。この娘の成長度を考えてもそのうち完成した文を放ってくるのは目に見えています。このような並列した文章は中級の上位者が行うもの、この娘侮りがたし。アクロは最後の手段を使うことにいたしました。

連攻撃を受けていたグレーティアは次第にそのリズムに慣れ次第に技を放す余裕が出てきたことを感じました。昔、追っ手の魔法使いと戦った時はまったく相手の攻撃を受け止めることも出来ない状態でしたが、数々の戦いを経てあの時よりは互角に戦えるほど上達していたのだと実感できたのでした。この戦いは気を少しでも抜いたら負けで意識を次々と放される文に集中しなくてはなりません。勝敗はどちらにこぼれるのか全くわからないのでした。

しかしここでグレーティアはある異変に気が付き始めました。それは次第に息が苦しくなってきたことでした。精神的疲労で呼吸が乱れはじめたのではありません明らかに周囲に異変が生じたのです。つぎつぎに繰り出される風撃の文を良く読み直してみると周囲の空気を奪っているのが分かりました。この時グレーティアは敵の策にはまってしまったことに気が付きました。次第に意識が朦朧として風撃を防ぐことは困難になってしまいました。

アクイロは相手がまんまと策にはまり呼吸困難で意識を失いそうな姿にこの勝負は自分に軍配があがることを確信しました。あと数回風撃をたたき込めばこの戦いは終わるはずでした。これでやっと

家族のもとに帰れると思った矢先でした。

一筋の矢が彼の首を貫いたのでした。息が止まりその放された方向を向くと弓を片手に持ち馬に乗った一人の男がいました。さきほど何処かに去っていた男であると分かると、策にまんまとはまったのは自分の方であつたと気づかされました。息が出来なくなつたアキロは最後の力を振り絞り娘だけは仕留めようしました。

「止めを刺せ。そいつは死んでいないぞ」

レピダスの声に意識を僅かに取り戻したグレイティアは雷撃を放すと、それは弱弱いものでした。しかしアキロは攻撃に移ろうとした瞬間でしたので彼は防御もままならず胸に大きな風穴を開けたのでした。そのまま男は仰向けに地面に倒れ砂埃がたちました。

「大丈夫かグレイティア」

馬を走らせてきたレピダスは馬上から声をかけました。

「おかげさまで助かりました」

彼女は倒れた敵を確かめにいくともう完全に息はありませんでした。

「その男のミスは魔法に自信を持ちすぎて周囲を軽視したことだ。魔法使いといえど万能でない。通常は護衛のものたちを連れているものだがな」

グレイティアはレピダスは単身で自分を仕留めようとした人物であつたことを思い出しました。

周囲を見渡すと岡の斜面は傷だらけで、ここで魔法使いの戦いが繰り広げられたのは一目瞭然でした。あたりには静けさが戻ってきたのはきたものの木々は薙ぎ倒されみるも無惨な姿でした。プエラ達の隠れていた方向に目をやると、騒ぎが静まったので恐る恐る顔を出している彼女らの姿がありました。彼女達はグレイティアのもとにやってくると再開に感激して大泣きしました。ソシウスはというと飛ばされた方向を探していると草むらの中にその姿を発見できました。意識を失っていたものの怪我はしていませんでした。彼は意識を取り戻すと斧を持って果敢に戦いに挑もうとしましたが辺りの

静けさに肩を落としました。

「はでにやちまったな」

「こんなもんだろう」

「俺達がいた痕跡になるなしないか」

ソシウスは心配そうに削られた地面をみました。

「魔法使いの喧嘩の跡はそう気にすることはない。問題なのはあの農夫だ。政府と繋がりがあつたとするなら命令による戦いとなる。」

そうすると相手は女魔法使いと判断されルートを悟られかねない」

「だとするなら、こいつの遺体はあの窪地に埋めておこう。発見されるまでの時間稼ぎにはなる」

一同は足早にその地を去り北に向かいました。

昼時、お父さんが出かけたきり返ってこないのとお母さんは心配してました。町で油を売っていることも十分考えられるのですが、昨日の出来事となにか関係があるのではと思えたのでした。モリウスに町に様子を見にいかせ、お母さんは家で待つことにいたしました。

モリウスは直ぐにも出かけお父さんがいそうなところを探しましたが、見あたりませんでした。疲れ切つて広場の芝の体を投げ出し寝そべっていると昨日のお父さんがお姉さんを興味深げにしていることを思い出しました。

もしやお父さんはそれを追いかけていったのではとモリウスはひらめきました。直ぐさま町の北門に向かってみると守衛のおじさんと旅人がなにやら話をしています。近くに寄つて盗み聞きしてみるとどうやら町を少し離れた岡の上で魔法使い同士の戦いがあつたということでした。魔法と聞きつけモリウスは思いあたるところがあつて北門から飛び出すとどんどん北に向かって走っていききました。

岡の頂上には放射状に無数の亀裂が走っていました。草木も黒く焼け焦げたところがあり戦いがごく最近あつたことを物語っていました。モリウスは岡の斜面をあちらこちら探していると見覚えのあ

るものを草むらから発見しました。それはお父さんはいつも被っていた帽子でした。この帽子を飛ばしてお父さんはモリウスを喜ばせていました。お父さんになにかあったんだ。そう少年は悟ると大きな声でお父さん呼びましたが、その声は辺りに響き渡るだけ、なんの返事を返ってきませんでした。静寂があたりを包むとモリウスはお父さんはもういないんだと涙を流しました。

第11回 向かい風（後書き）

アクイロー一家その後どうなったんでしょうか。気になるところです。

この翡翠記は数年の物語なので成長したモリウス君に登場していた
だく事は出来ません。

前回三顧の礼だと予告しましたがそこまで行きませんでした。でも物語の切れ目としてはお父さんが殺害されたところで終わったほうがいいような気がします。

次回の登場人物は中盤で再登場いたします。

第12回 反乱の芽（前書き）

<登場人物>

ビルトス 主人公の師（本名ダーナ）

グノー 主人公の兄弟子

グレーティア 主人公

プエラ 主人公の幼なじみの娘

レピダス 黒虎騎士団（銀弓のレピダス）

ソシウス 斧使いの大男（旋風のソシウス）

フィディア 祖母の家へ帰る少女（譚詩曲のフィディア）

デスペロ 魔法宰相

コンジュレティオ 軍総司令

ホステイス ヘテロ国魔法宰相

トラボー 反乱軍首魁

ハレエレシス 反乱軍参謀

フィデス トラボー配下魔法使い

ファルコ トラボー配下武将

第12回 反乱の芽

いいところなしでのびていたソシウスは不機嫌でした。魔法使いに子供同然にあしらわれ、何度もグレーティアには助けられる始末。最後は危機一髪を救ったのはレピダスで自分は道化も同然でした。敵を欺くにはまず味方からなどの賜れてはますますへこんでしまいます。レピダスの活躍にあれほど罵詈雑言をはいていたプエラも手のひらを返したように大絶賛。まったく世のうつろいゆくのは早いものです。ともあれ全員無事なのは満足すべきことなのでしょう。レピダスについても自分が倒れた後にグレーティアを救ったことにより信じていい男のように思えたきたのでした。

フィディアが旅の仲間に加わったことによってプエラはもっぱら彼女と話し、おしゃべりが尽きません。日常の細やかなことが延々と話し続けられ、どうしてそんなものに注意をむけられるのかさっぱりわかりません。料理はなにを入れたらどうなるとか、これが美味しいとか、この服のここが可愛いと、髪の手入れ方はこの様だとかそのような話題でありソシウスには全く興味の無いことでした。プエラにとってやっと女の子の話し相手が出来て嬉しい出来事に違いありません。なにはともあれ、この煩い娘から解放されたことは歓迎すべきことでした。

いっぽうグレーティアは率先して話しをするタイプでなく、ほとんどが聞き役となっていました。プエラが通りすがりの女性のエプロンについて滔々と話すとそれに合わせるしソシウスが馬で駆け抜けた男の獲物について語るとそれにもちゃんと対応していました。もともと命を狙われる身ではあまり陽気にならないのは事実で、身に覚えがないのに追っ手から災いの源と言われては気持ちが鬱いでしまうのは無理らしからぬことでした。とにかく早く転身の術を解いて晴れ晴れとした気持ちにさせることが肝要でした。

レピダスは何を考えているのかさっぱり分からない人物でした。

現在のメンバーに中では一番経験も豊富で、頼られる存在といったものでありそのことがソシウスにとってなにか頼なことでした。とはいえそのような理由でグレイティアを危険にさせる訳にいかずレピダスの意見については尊重をしてました。

新しく仲間になったフィディアはまだまだ遠慮がちでプエラの後を付いてゆくといった感じでした。せつかく持ってきた豎琴も音色を奏することもなく彼女の腕に抱かれただけでした。

プエラは馬の背中に乗るとまるで巨人のようになったように見えている景色が一変することをフィディアに力説しました。とくに高い木の枝にもう少しで届きそうで、いつも見上げている男共を見下ろすのは痛快らしく、少々嫌がるフィディアの背中を押して馬に乗せようとなりました。馬に乗せろという少女に身勝手だという顔のレピダスでしたが、おろおろするフィディアの様子が面白く結局は同意したのでした。

でも馬は近づいてみると大きなものです。顔が信じられないくらい長くて自分の頭の何倍もあってこれは作り物では思わせてしまいます。それに大きな目玉がくりくり動いてなにか怖いのです。時々大きなぶるぶるという震わせる音をたてるので驚いてしまします。

フィディアはレピダスに助けられて馬の鞍に腰掛けてみたものの、馬の背が波打って動くのでおっかな吃驚でややこわばった表情のまま耐えていました。あまりにも地面から離れているので落っこちたら痛そうです。しかし暫くするとその高さにも慣れ周囲の様子を観察できる程度には落ち着いてまいりました。確かにプエラは言うように上から見上げる様子は少し違います。人の頭の上がよく見え、ゆったりと進みます。森の中を進むと木々が頭すれすれを通過していきます。ステンドグラスのように緑に透けた葉っぱがすっかり見えませんでした。

しばらく行くと大きな木の並木道に出ました。茶色地肌や落ち葉は地面には見あたらず薄緑の絨毯が敷き詰められたようになってい

ました。それは小さな花が雪のように地面に降り積もったあとなのでした。そしてその緑の花道は延々と続いていました。

「これみんな花なの？」

フィディアの言葉にレピダスは踏んでいた地面を見ました。

「そうだな」

見上げると薄く緑染められた小さな花が大きな木の枝一杯に無数の花を咲かせていました。それは傍目には木々につもった雪のようでした。頭の上からちらほらと花が落ち、それは緑の絨毯となって道を覆い尽くしていました。

「花と言えばピンクとか白だけど淡い緑の花もすてきだね。一見葉っぱの色に似ていて魅力なさそうなんだけど、よく見ると控えめでさわやかな色をしているわ」

「そういうものか」

「これがみんな真つ赤な花だったらどう。空も地面も真つ赤つか。とも気持ち悪くて歩けたものではないでしょう」

「まあそうだな」

「それにこんな夏に一杯花を咲かせるなんて珍しいわ。春にはどこもかしこも花だらけでさわがしいのに、ひっそりとこんな隅で静かに夏に花を咲かせているのよ」

「変わりものということなんだろうな」

「あら、慎ましかで上品なのよこの木は。ほらみて物語の姫様があの中をこちらに歩んできても不思議はないわ。そんな雰囲気故此処にはあるの」

「そういうものとレピダスはあらためて並木を見上げると、木々には淡く綿のようなものが覆っていました。」

薄緑の絨毯はそのあとと続き旅人達の目を楽しませるとそこで途切れていました。フィディアは名残惜しそうに馬の背からその並木道を振り返っていました。

再び林の中を進み二三度緩やかな曲がりをしたあと、目の前が開けてきました。これまでは草原が広がっていることが普通でしたが

ここは違っていました。彼等の前に広がってたのは大きな湖でした。
「なんて綺麗な湖なのでしょう」

フィディアはその景色に瞳を輝かせていました。これは彼女に限らずグレーティアやプエラも同様でした。彼女らは育ったのは港町で海は見慣れたものでしたが湖はなく、平原の木々に囲まれた穏やかな湖の姿は美しく感じたのでした。とくにこれまでの旅の途中にはこのような風景はなく険しい山々やどこまでも続く平原みたなものばかりでしたので、このような湖には心が癒されるのでした。

道は湖の岸辺を巡り右には森と山々、左には湖とその境目を延びていました。湖の岸辺には水草が繁茂し白い花を咲かせており、木々は湖のぎりぎりまで枝を伸ばしその先を水に浸けんばかりの姿でした。湖の対岸は遠く此方と同様に繁った森の姿だけが分かるくらいでした。湖は風に吹かれて表面に僅かの波を立てていたものの穏やかで、水面に光が反射して波に煌めきそのむこうには漁師たちが網を投げ漁をする姿が見受けられました。

暫くいくと漁師達の村があり、子供等が走り回っていました。この辺りの主要道なためか旅人に子供達は珍しがることもなく、まわりつくということもありませんでした。むしろ漁村の大人達が物を売ろうと声をかけてくるのでした。

この漁村を過ぎ北に向かうと森は湖から退き周囲が見渡せました。水辺には白い鳥が長い足を水に浸け水底に頭を向けると時々素早く嘴で突いていました。その近くには水鳥の親子が水の中を列を作って泳いでおり、空を飛んでいた鳥が近くに勢い良く水しぶきをあげて舞い降りると慌てて進路を変えて反対方向に去っていつてしまいました。

「この湖は瓊筵戦争で空いた窪みに出来たものであるという伝承があるな。それによるとこの湖のあったところにはかつて都があり芙蓉姫の一撃を浴びてこの様になったというものだ」

「こんな大きな湖がですか？」

「どこかの誰かが伝説と結びつけたのだろうか。そんな魔法はあ

り得ないさ」

レピダスの説明にフィディアは誰かの作り事であると全く信じていませんでした。彼女にとって芙蓉姫は英雄的な恐ろしい存在でなく愛情に満ち苦しむ人だからでした。

「伯父さんに引き取られた時ここは一度だけ来ました。その時こんな所に住めたらいいなと思いました」

「ここにか？」

「でも着いた先はなにも変哲もないようなところで」

「ほとんどがそうだ。この湖も大きいだけでたいしたことはないありきたりのものだ」

「そうなんですか？私魚や鳥がいっぱいいて楽しそうに見えるんですけど」

「そうだな、もっと山間の湖には滝など流れ落ち湖に山が映えて美しいし、海に近い下流ではもっと湖の数も多いし鳥たちもここ以上に飛んでくる」

「私そういう所に行ってみたいです」

「その時は来る、今回みたいないな」

「みてみて、海でもないのに島があるわ」

プエラははしゃいで指さしました。

その方向をみると湖の中に複数の島があり、その上には木々があったかも島を沈めてしまいうにぎっしり繁っていました。

「彼の島に上陸したくなるぜ」

ソシウスは場違いのようにぼつねんと湖の中にある島に冒険心を抱きました。

「私たちマーレは島だらけでありきたりのはずなんだっただけ、やはり湖の島てなんか違うのよね」

「なんだろうね。海に果てはないからかな」

グレーティアも興味深げに眺めています。

「ね、ここで一休みしない？景色もいいし」

「そうだね」

ソシウスたちが足を止めたのでレピダスは休息にはいったことを理解しました。

「ここで休むのか？」

「そうだが」

「目的地が直ぐそこなんだが」

「例の人物の家か。みんな疲れているし、俺だつて魔法使いに痛い目にあっているので休みたい。それからでもいいんじゃないのか。すぐそこなんだろう」

プエラ達が勝手に店開きしているのでレピダスは諦め馬をつなぎ止めました。

敷き布を広げるとプエラとフィディアは座り袋の中身を広げました。グレーティアは出てきたお菓子の山に呆れため息をつくと隅に腰掛け、ソシウスとレピダスはどうしたものかと大きな石に腰を下ろしました。

「食べてみて。前の町のお店いい仕事しているのよ。これなんて最高に美味しいの」

プエラは買い物上手を自慢し、むりやり手に持たせました。

「この焼き加減最高でしょう。ちよつと真似できないわ。どんな手順で焼いたのかしらふつくらしているし食欲そそののね」

「そうですね。冷めてしまったのにまだ美味しいですから」

フィディアはその製法を読み解こうとしていましたが、どうやら分からないようでした。

ソシウスはこの女共しょつちゆう食っているなとぼやきながらしぶしぶ菓子を口の中に入れました。

「う美味い！」

予想に反して美味かったのでソシウスは食いしん坊達がいるのもいいかなと心変わりしました。ソシウスが口一杯にほおばって食べるので、あんなに馬鹿にしていたのにと彼女達は愉快になってどんどんお菓子を与えました。

「そつえばフィディアは豎琴をもっているけどなにか弾けるのか

？」

口をもぐもぐさせソシウスは一度も彼女が奏でたことがないことに単なる形見の品にすいないのではと思っていました。

「なんてこと言うの。詮索ししないの」

プエラはかばおうとするとフィディアは静かに笑いました。

「はい、弾けますよ」

そう言うとき彼女は豎琴の弦を締め軽く調律を致しました。

彼女が軽く弦を弾くと綺麗な和音が響き渡り、みんなの耳を引きつけました。ゆっくりとしたテンポで一つ一つ弦が弾かれ落ち着いた旋律が奏でられます。共鳴板からはなんとも言えない深くゆつたりとした音がこぼれてまいります。そして前奏が終わると彼女は恋の詩を歌い始めました。静かに始まった歌は幾度かの抑揚を経て次第に大きな高鳴りを作り出し皆の心を虜にします。夜のしじまのなかで星に願いを込めるその詩は彼女の澄んだ声を通じて、乙女の恋いこがれる心の様を思い描かせたのでした。

「凄い、フィディア。吟遊詩人みたい」

プエラは驚いたように声を張り上げました。

「まったくだ、俺は豎琴は飾りかと思っていたがたしたものだぜ」
ソシウスも咀嚼していた口も止まって聞き惚れていました。

「お褒めの言葉有り難う御座います」

「その詩は芙蓉姫の歌ですね」

「はい、私彼女のことを好きなんです」

グレーティアの問いにフィディアは嬉しそうに答えました。

「珍しいですね。彼女の伝説は勇ましいことばかりのはずですが」
「それは違います。恐ろしい魔法の使い手で捉えられています、実は繊細で純粋な方だったのです」

「後に炎王と名乗り広大な領土を治める王ともなると勇ましい姿が作られるものだ。本人の真の姿を離れてな」

レピダスはフィディアを庇うように言いました。

「ねえ、フィディアこう踊るような元気のいい曲やってくれない？」

「はい、では村の花嫁を」

彼女が再び豎琴を手に取り歌い始めようとしたところ、湖の方から引き裂くような声が聞こえてきました。けたたましい声に一同は驚き声のする湖に首を振ると、そこには大きな怪物が二頭いたのです。その姿は遠くにあつたものの建物などぺしゃんこしてしまいうくらいの巨体をしているのが分かりました。

「あれは、シルラス！」

「なんだそれは」

「水性の怪物で、水の中にいるせいかな巨体で人の力ではなかなか倒し難い。魔法使いであれば別だが、それでもある程度高位でなければ致命傷を与えることは出来ないだろう」

「グレーティアそうなのか？」

「確かに、今のレベルでは傷を負わせられるのは確かですが致命傷を与えるには何度も攻撃しなくてはならないでしょう」

「まあ倒せないことはないんだな」

「しかしそれは近づけたらの話で、あの様に遠くにいては手の施しようがありません」

「そうか、相手は水の上だったな」

悔しそうにソシウスは舌打ちしました。

「あの二頭、先ほど通過した漁村に向かってっているわよ」

プエラが怪物を指さし慌てた調子で叫びました。

「不味いな。レピダスなにかいい知恵はないか？」

「俺がグレーティアを馬に乗せて漁村で待ち受けるしかあるまい。」

あの早さで移動していては間に合いそうにもないが

「しかしそれしかないでしょう。射程内に入れば此方におびき寄せすることも出来ます」

怪物は水しぶきを上げながらどんどん左方に移動していきます。その細長い体は黒く時々放されるけたたましい声は心を氷つかせました。

二人が馬に乗ろうとしたときでした、突然怪物の回りに水を叩く轟

音のようなものが起こり二頭を囲むような水の柱が立ち上がったのでした。怪物は行く手を柱に阻まれ狂ったようにその場で暴れました。

「あれは人？」

フィディアが何かに気がついたような声をあげました。湖のなかに滑るように水の上を移動している三人の姿がありました。

「あいつらはいったい」

ソシウスが正体を掴めぬまま湖面を速い速度で移動する者達を啞然とした様子で眺めていました。湖面に立つ者達と怪物の間は随分離れていたのですが、シルラスを覆い尽くした水の柱はこの者達に作られたのは確かなようでした。暫くすると怪物を覆い尽くした柱は変化をみせ鞭のように怪物達を撃ちました。シルラスはけたたましい声を上げ暴れ狂いました。

「あの様な離れた距離から技を繰り出すとはただ者ではありません」
グレーティアは正体不明の者達に警戒の念を抱きました。

「確かに、お前には出来ない芸当だ。何者だ彼奴。まさか追っ手ではないだろうな」

ソシウスは口バに背負わせた斧を手を持ちました。

激しく変化する水の柱。狭い檻の中で暴れていたシルラスはやがてその身が次第に宙に浮かび上がって来るのを感じました。怪物たち二頭は重さがないかのように、水の輪に包まれどんどん上昇します。中では怪物たちが檻を逃げださんと巨体をくねらせていましたが無駄な抵抗のようでした。

グレーティア達が眺めた位置からしてもずいぶん高いところまで持ち上げられたことが分かり、一同は驚異的な技に呆氣にとられたいました。やがて怪物を持ち上げた水の球体が弾け飛んだと思えた瞬間湖面から真っ直ぐ怪物達めがけ水撃が突き抜けました。

シルラス達の巨体はその攻撃の前に一瞬で昇華してしまいました。肉の破片でなく粉みたいなのが湖一杯に風に吹かれて散っていました。

「あいつらは上級クラスの魔法使いだ！」

レピダスは相手の驚異的な技にただ者でないことを察知しました。
「そのようですね。あの破壊力は普通ではありません」

グレーティアも放された魔法の言葉に上級者であることはわかりました。この解説不可能で力に満ちた魔法は昔師と敵が戦った魔法のような強烈な破壊力をもったものであると読みとれました。自分には到底太刀打ち出来ない技に彼女は力の差を実感しました。

「となると、彼奴等が追ってでないことを祈るだけだな」

ソシウスは湖浮かぶ者達に警戒の念を抱きました。

「こちらに気がつかないならいいのだがな」

レピダスはことの様子を静かに見守りました。

怪物達が消失したあと数分間、湖の浮かぶ者達に動く様子もなく岸から眺めるグレーティア達はその後の展開を注視していました。

やがて謎の人物達は動き始めたのですがその方向はなんとその光景を他人事のように眺めていた一同に向かってでした。

「相棒用心しろ。あいつらこっちにやって来るぜ！」

「おい、その斧は引つ込めた方がいい」

レピダスはソシウスに注意しました。

「戦闘能力が違いすぎる。下手に刺激させるな。ここは言葉でかわすんだ」

「くそー。おあずけくらった犬だな。こうなったら度胸あるのみ」

ソシウスはほぞを固めました。

水面を走り抜けた者達は水辺まで到達し、そこからゆっくりとこちらに近づいてきました。一同は彼等がそう出るか固唾を呑んで待ちかまえました。

こちらに歩いてきたのは三人の男達でした。一番先頭の男はまだ若く15、6といったもの。のこり二人は年輩で一人はがっしりとした戦士のような体格で、もう一人は隠者の様な様相をしていました。一同の緊張と裏腹に迫ってきた若い男は前に出ると親しげに語りかけてきたのでした。

「レディー三人もいらつしやるとは、ピクニックでしたか。どうやら僕たちあなた達を驚かせてしまったようですね。」

申し訳なさそうに若い男は頭を掻きました。

「俺達に何か用なのか？」

レピダスはすかさず相手に探りをいれました。

「用というほどのものではないのです。私の連れが気になることがあると此方に参ったのです。怪しまれて当然ですね。僕の名はトラボー。後ろにいる大きい男がファルコ。もう一人の法衣を着ているのがフィデスです」

以外と礼儀正しい態度に安心したのかソシウスは気軽に話しかけました。

「あんたたちの怪物退治見させてもらった。とても俺達には出ない技だったよ。あんたが殺ったのかい」

「私は魔法なんて出来ませんよ。このフィデスがしたのです」

「そうかい。お連れの方は大した魔法使いだ。彼の怪物をいとも簡単に退治して」

「お褒めの言葉は有り難いのですが、魔法はそんなに優れてはいませんよ」

「ところであんた達は此処の人かい」

「この土地の者ではありません。ガツリアから参りまして何処と言うのではありません。この国にやって来たのは昔悪い伯父さんに家屋敷の財産を取られてしまつて、それを返してもらおうと生まれ故郷に帰つてきて来たのです。」

「それは災難だったな。親の財産を取り返せることを祈るよ」

「有り難う御座います。この地に参りましたのはある方に味方になつていただくべく説得を試みる為です」

「そりゃ、うまくいくといいな」

「それがなかなか困難で」

青年は苦笑いしました。

「ところで俺達の気になることてなんなんだ？」

青年は思い出したかのように振り返りフィデスに訪ねると、法衣の男はグレーティア達を一人一人見つめました。

「この中にはいないな」

男はこの様に言ったもののまだ納得いかないような顔をしていました。

「勘違いということか」

「いや、先ほどシルラスとの戦闘中に恐るべき魔力を持った者からの視線を感じたのは確かだ。その眼力は明らかに我々の能力を読みとっていた。おそらくは上級魔法使い。しかもトップクラスのはず」

「では彼等の中にそのものがあるというのか」

「残念ながら。見渡したところ該当者はいない。彼の娘はどうやら魔法使いのようだがまだレベルが低い」

「だとすれば、見当違いの方を探したのではないか」

「確かにこちらの方からの視線を感じたのだが」

フィデスは周囲を見渡しましたがそれらしい気配を感じることはありませんでした。

「どうやら勘違いのようした。おじゃまをして申し訳ない」

「なにいいことよ」

「ところであの娘さんの魔法はなんの魔法です」

話題がグレーティアのことになったのでソシウスはひらめきました。

「攻撃魔法なんだが」

「攻撃魔法のお嬢さんですか。それはそれは」

同情にも似た顔をトラボーはいたしました。それはやがて気が狂ってしまう運命を哀れんだものでした。

「こいつが攻撃魔法を使えるのは元が男だった訳で、転身の術をかけられこのようになってしまったんだ。初対面のアンタがたにこんなことを頼むのもなんだが。その法衣の方に術を解いてもらいたいのだが」

青年は意外そうな顔をしてグレーティアを見たものの、納得した

よう相づちをうつとフィデスに問いかけました。

「どうだ出来るか？」

「転身の技を解くのは簡単だが。このままでよからう」

法衣の男の冷たい返事でした。

「そう言わないでくれ。こいつは困っているんだ」

ソシウスは慌てて懇願します。

「もういい加減昔のことは忘れたほうがいい。今に慣れるんだな」

法衣の男は冷たく突きはなしました。

「フィデス。可哀想に思えるのだが」

「そのことは自分で解決することになるだろう。俺に出来ることはない」

そう言う男はその場を去っていきました。

「力になれなくて申し訳ない」

青年は詫びると、ファルコと一緒に後を追いかけてきました。

「くそー、あの野郎ケチだな」

ソシウスが地団駄踏んで悔しがっていつとグレーティアが肩に手をやりました。

「あの男が言うように自分たちで解決する問題なんですよ」

「そいつは何時になるんだ。それまで我慢できるのかよお前は」

「気長にいきましょう」

レピダスは湖面を疾走して去って行く三人を目で追っていました。

「ともかく、追っ手でなかったのは幸いだ。あの魔法使い相手ではこの場所で全てが終わったはずだし、それ以上の望みはしないことだ」

「それもそうだな」

レピダスの斜に構えた態度にいつも少し癪に触るソシウスでしたが、間違っていないことにしぶしぶ同意しなくてはなりませんでした。

「せっかくのお休みが台無しだわ」

プエラは不満たらたらにお菓子をもしゃもしゃ食べ始めました。

「俺達のせいじゃじゃないぜ」

「分かっているわよ。あの人達なんなのかしら人のことじろじろ見て嫌だわ」

「不満なのは分かるがおまえ何時まで食っているんだ」

「あら一番食べていたのはあんたでしょう」

ここでソシウスは言葉に詰まりました。たしかに貪りついていたのは自分なのでした。

「ほら。誰かを訪ねなくてはならないだろう」

返事に屈したのでソシウスはごまかしました。

「誰？」

「誰だっけ」

ソシウスはレピダスに助け船を要求いたしました。

「ハレエレスだ」

「そうそいっただ」

ソシウスは思い出したかのようなそぶりをしてみたのでプエラは呆れたように店じまいをはじめました。

「さあいいわよ。そのなんとかシスて人に逢いにいきましょうか」

ロバに荷物を積むとプエラは案内しなさいとソシウスをせかしました。ソシウスは行き先を知らないのでレピダスを先頭に水辺の道を北に向かいました。

どのくらい進んだところでしょうか町に辿り着きました。この町はクリークが走り巡っていて少し進んでは石の橋また進んでは石の橋とかなり小さく区画されていました。橋の欄干に手についてクリークの先をみると、水があるところまで降りる道がありそこで女性の人が野菜を洗っていました。二階の家の窓からは旅人の通り過ぎるのを眺めている老人の姿があり、彼等の横を荷物を背負った男が走りすぎていきました。いくつかの橋を渡ってクリークの湖近くまでやってくると、そこには漁船が数多く水に浮かんでおり海ではないでいか防波堤のようなもので囲まれてはおらず前には広々とした湖が広がっていました。きらきら光る湖面を左にして町の水辺の

満ちを進むとやがて町の端にでて目的地がこの町ではなかったので拍子抜けした一同は、そのままレピダスに引率されてどんどん進んでいきました。

「どこまで行くんだ？」

心配になつてソシウスが訪ねるとレピダスは静かに笑つて湖の方を指さしました。その方向をみてみると陸地から突き出て棧橋が曲がりくねつて湖の上をはしっており、その先には水の中に足を押し立てた家がありました。さながら湖の中に浮かぶ家といったかんじで、縁側から釣り糸を垂れば舟の上にいるかのように錯覚しそうなものでした。

「湖の中に建つ家なんてなにか素敵ですね」

フィディアは夢見心地に手を組みました。

「そうか、荒らしの時は大変そうだが」
レピダスはからかいました。

「でも有るべきところでないところに家があるて不思議なことですわ」

「そんなものか」

「キラキラ光る湖の中に橋がかかつてその先に小さな家がある光景で素晴らしくありませんか」

「まあ、綺麗だな・・・」

「ここに住む方はどんな人なんです。きっと心が澄んだ人なんですよ」

「ねじ曲がつているが」

「まあ」

「そうだな、不思議な老人だ。博識な人物で魔法使いではないが本質を見抜く能力をもっている」

ロバと馬を近くの杭に繋ぎ止めると、軋む音をたてる棧橋を恐る恐る渡つていき玄関のところまでやって来ました。玄関には呼び鈴がついていて軽く金属音を響かせると奥から白髪交じりの皺の深い男が出て参りました。

「黒虎騎士団か。何の用だ」

レピダスの姿を認めた老人は怪訝そうに訪ねました。

「少し教えてもらいたいことがあってな」

「儂はもう政治とは縁を切った存在だ。書画の書き方について質問したいというわけか？」

ハレエレシスは皮肉っぽく訊ねました。

「ちよつと違うが、中に入っても良いか」

「いいとも、中は取り調べにはいい部屋だ」

老人はドアを開けると中で待ち受けました。するとレピダスの後ろからぞろぞろと人がついてきたにで少々戸惑いました。

「これはなにかな？」

「おれの連れだ気にするな」

レピダスはなんの説明もしませんでした。一同が部屋に入っている姿を一人一人眺めていた老人は突然なにかにすごく狼狽した様子で目を見開き少し震えていました。

「どうした、気分が悪そうだが」

レピダスは老人の硬直したぎこちない動きを怪しみ訊ねました。

「なんでもない。一寸持病が出ただけだ。」

そういうとハレエレシスは静かに椅子に腰掛けました。老人に勧められ一同も座るとレピダスが口を開きました。

「単刀直入に話そう。今宰相はある人物の殺害のため地域一帯に魔法使いを使わしている。この標的のことなんだが」

「大捕り物をやっているというわけか。ところで国家機密を後ろの連中のいる前で話していいのか」

「それはかまわん。その標的は攻撃魔法を使う15、6の娘となっている」

「ほう、それは面白い」

「この娘の狙われる理由というのが、国に災いをもたらすということなのだがそんな娘が危険なのか不思議でならない。そこでだ宰相がヘテロへまわす人員を割いてまで執行する作戦の意味、国家の災

いとは何かを知りたいのだが心当たりはないだろうか」

「なにか曖昧さがある話だな。娘についてあまりにも漠然としていて、それでやっていては捕まりはせんだろうな。情報のなさを露呈しているな」

「その通りだ。そこまで急ぐ理由も分らない」

「少し思い当たらぬでもないが。的はずれかもしれぬ」

「それでもいい。教えてくれ」

「魔法宰相デスペロはまだ若い頃研究していたものがあつた。それは瓊筵戦争の隠された部分だつた。この時代については炎王が統一朝をうち立ていった戦いの記録ばかりが残っているが一般の伝承では消された部分が存在するようなのだ。これに奴は御執心といったところだつたらしい、もしかしたら現在も研究中なのかもしれないな。じつはこ研究には別に二人仲間がいて一人はヘテロ国魔法宰相ホステイス、もう一人は魔法博士ダーナだ」

「なんと、この国の魔法三巨頭ではないですか。それが同じ研究をしていたと・・・」

「まあ、この国の魔法学徒の優等生が三人も登場し、しかも同じ研究をしていたら普通に考えても薄気味悪いことであろうな」

「瓊筵戦争の時代なにかあつたのだろうか」

「このパテリアにも昔から魔法は存在したが、もつと初期的なものだつた。ところが瓊筵戦争のころ劇的な進化をみせ魔法の威力が増大した。その激変ぶりは目を見張るものがあり果ては威力はあるが全く制御不能の禁断の魔法なるものも登場してきた。あまりにも急激な変化にこれらの魔法は外界からもたらされたのではないかと推測されている」

「魔法がこの国のものでない」と

「魔法だけではない。シルバの森に生息する怪物どもはこの時代に現れ出たようなのだ」

「なんですと。昔からいたわけではないのか」

「その通り、何かに導かれこの地に現れたといったところか」

「呼び込んだ者がいるなどと」

「怪物だけならいいのだがな」

老人は椅子から立つと棚に並んでいた陶器を運び、蓋をあけると奇妙な肉の様な物体がありました。

「これは儂が牢解放された後、行方不明になったダーナの書斎で見つけたものだ。デスペロに気づかれないようにくすねてきたものなのだが」

「なんですこれは」

「未知の生命体の一部だ」

「謎の生物ということか」

「これは傷をつけると、激しい勢いで修復する。どこからか養分を得ている訳でもないし腐敗もしない。魔法博士はこれを培養していたようだ。これがダーナの家にあったとすると、これに関係した研究をデスペロもしていた可能性がある」

「するとホステイスもしていた可能性が・・・」

「それはどうか分からぬな。確かに若い学徒の時は一緒に研究してはいただがその後年数も経ち袂を分かっている。噂ではホステイスの才能を恐れたデスペロが謀略をもつて罠にはめたとある」

「ホステイスは反逆罪によって一級魔法使い等に襲われ半死半生の状態でヘテロに逃れたというあれか」

「その後、奴は逃れたヘテロ国の王に才能を認められ宰相の地位まで上り詰めた。足を失った恨みは消えることなくデスペロへの復讐を誓っているという」

「もしか、瓊筵戦争の時代が再びこの地にやって来ることを宰相は恐れているのだろうか」

「かもしれぬし、そうでないかもしれない」

老人の雲を掴むような話しについてゆけず話はここで終わってしまいました。

「もう一つお願いしたいことがあるのだが、魔法を解いてほしいのだが」

「僕は魔法使いではないよ。ものの真の姿や本質について少し分かるといった程度のものでなんの力もない」

ハレエレスは笑いながら手を振りました。

「では、とりあえず診てもらえないだろうか。なにか手だてがあったら教えて欲しい。一番右手にいる人物なのだが転身の術で女にされている」

「転身の術とな。その技が出来るものはこの国でもほとんどいないはずだ。珍しい」

老人はグレーティアを招き寄せると食い入るように見渡しました。
「完全に女体化しておるな。なにやら体全体に魔法の文らしきものが覆っているな。これが転身の術のそれなのか？」

暫くハレエレスは深い思索のなかに浸り込んでいましたが、次第に険しい顔になっていきました。右手の指は思索に連動するように何度も顎をもみほぐし、額のしわは深くなっていました。そして微かに老人の瞳に鋭い輝きが走りました。

「どうかしたか」

「いやなにも」

ここで老人は我に返りにこやかな顔をしました。

「駄目だな。なにも分かん」

「そうかやはり駄目か。では術を解ける者を知らないか」

「それだったら、お前の方が知り合いが多いだろうて。上級魔法使いにでも頼むんだな」

「それはそうだが」

「なにか事情がありそうだな。まあ当てがないならこのままでもよからう。醜いならいざ知らず美人になったのだから良いではないか」
けらけら老人は笑います。

「酷いことを言うな。こちらは真面目なんだが」

「すまんすまん。ただ、いまあるということは無意味にあるということではないと言ったことだ。何故その姿にさせられたのかの訳を知るべきだな」

「言っていることが分からないが。時間を割いてくれたことには礼をいう。我々はこれでお暇をする」

「気を悪くしてしまったようだな。許せよ」

レピダス達は会釈すると老人の家から出て行きました。最後に家を出ようとしたソシウスにハレエレスは呼び止めました。

「その若いの一寸待て！」

「俺か？」

慌てて呼び止めた老人の声にソシウスは何事かと振り返りました。

「お前だ、体の大きいの」

老人の横柄な態度に少し癪に触りましたがソシウスは丁寧に対応しました。

「なかなか見所のある奴だ」

「おだてるのが上手だな」

「なーに本当のことだ。儂は本質を見抜くからな」

「で、俺に何の用だ。悪いが仲間を待たせる訳にはいかない」

老人は見えない場所にソシウスを導くと、小声で語りかけました。

「お前は聖剣グラディウスを手にとったな？」

「聖剣？なんだそれ」

「黎明期にあった伝説の剣だ」

「古い剣なら遺跡で触ったな。でも先が砕けた剣だったが」

「それだ。雄剣の方に違いない」

「そななら相棒も触っているぜ」

「多分あの娘じゃな。剣の在処は誰も見つけれないはずだがお前達は導かれたのだろう」

「道ばたにあったようだったが」

「ともかく聖剣はお前を選んだということだ」

「剣が選ぶって・・・」

「これから大きな戦いが始まる。その最終局面で勝敗を決する重要な役をお前は演じることになるう。」

老人は懐から二つのバッジを取り出し、ソシウスの手にしっかり

と持たせました。

「なんだいこれは？」

「これは瓊筵戦争の時代のものだ。金のものは異界の海を渡ることができ、銀のものは魔より姿を消すことが出来る。二つとも今は眠りにについているが時が来れば甦るであろう」

「なんのことが分からないが」

「時が来れば分かるようになる。よいかこの二つは誰にも知られてはならない」

「誰にもか？」

「そうだ。特に娘には悟られるな」

「欲しがるからか？」

「そんなところだ。さあ仲間の所へ行け。これ以上は怪しまれる」
押し出されるようにソシウスは家の外にでると、意味不明の話しに小首を傾げ時々老人の家を振り返りながらグレーティア達に追いつきました。

老人は遠くに去り行く一行をみて安堵の息をこぼし椅子に腰掛け、小さく揺れる椅子の中でハレエレススは呟きました。

「戦いの角笛は鳴るか・・・」

疲れが出たのかハレエレスはその身をゆったりと椅子に預けべランダから静かに波打つ湖を眺めて僅かばかり浅い眠りにはいつていました。次に目を覚ましたときは湖の湖面には舟が一艘浮かんでいました。老人は今夜の夕飯のおかずでも釣り上げようと竿を片手に持ち上げた時でした、呼び鈴が再び鳴り誰かがやってきたのでした。

ハレエレススが扉を開いてみると、玄関に立っていたのは青年と屈強な男それに法衣をまとった者でした。

「おまえさん達だったか」

「何度も申し訳有りません。是非先生には仲間に加わって頂きたく」
若者は慇懃に語りました。

「中に入りなさい。話を聞こう」

老人は三人を中に通すことに致しました。三人が席に着くとハレエレスは改めて三人の顔を見定めました。

「名前はなんだったのう」

「私がトラボー。右の体格がいいのがファルコ。左の法衣の者がフイデスです」

「なかなか頼もしい連れをお持ちだ。湖にシルラスが現れたが退治したのお前達だろう。大した技じゃな」

「有り難う御座います」

「ところで何度も訪ねられているが、儂にはなんの力もないのだが」
老人は疑問を投げかけてみました。

「先生、それはご謙遜というものです。現政権以前にクーデターを実行なされた方。その実力は分かっています」

「あれは失敗であつた。故に儂は牢に入れられた。そんな者を信じるのか？」

「私たちの調べでは、お仲間が勝手に先走り自滅しただけのことです。先生は早急に手を引いたのでお命は助かったのでしょうか」

「ほう、研究熱心だな。あれは内部からの政権強奪だったが、お前達のは反乱だ。条件が違いすぎないか」

「奪うことに違いはありません。それに先生がここで大人しく朽ちてしまわれる方には思えません。何かの志があられるのでは？」

「若いのに賢いな。では儂からも一言述べるとしよう。この二人ガツリアから借りたろう。その他資金は隣国頼みか？国を盗った後の条件はなんだ！」

ハレエレスは厳しく問い糾しました。

「流石に先生お見通しでしたか。確かに隣国に逃れた私は援助を受けてまいりました。条件は島一つです」

「なるほどあれか。確かに欲しがっていたな」

老人は納得したように鬚を撫でました。

「首魁のアウトダックが謎の男に倒され反乱軍は解体しましたが、依

然として地下では勢力を保っています私たちはこれらを指揮し旗を揚げるつもりです」

「止めておけ。ヘテロとの戦いが収束してコンジュレティオが主力を引き連れてやって来れば簡単に鎮圧されるぞ」

「ならばガツリアの兵を借りて・・・」

「馬鹿者、島以外の領地を手放すというのか！ 儂に考えがある」
「どのような」

「こんな田舎では兵は起こさん。狙うは一大貿易港フォルム。この近くで立ち上げ貿易港ルース、ビダ街道を抑えこの国の西半分を頂くとしよう。」

「そのようなことが出来るのですか」

驚いたようにトラボーは目を見開きました。

「魔法博士と言われた知友の残したものを使つてな」

老人は不敵に笑いました。

「もしか先生お仲間に加わって頂けるのですか？」

「仲間になるとは言わないぞ。お前達を利用したいただけだ。お前達も儂を利用すればよからう」

青年は二人に目で同意を求めました。

「それで結構です。ご協力頂けますか？」

「お前達は三度儂の庵に訪れ、礼をもって請うたからには応じなくてはならないだろう」 青年の顔に笑みがこぼれました。

「今から旅立つでしょう。お前達は準備は良いか」

ハレエレス勢い良く立ち上がると若者は老人の性急さに驚きました。
「先生、そう急がれなくとも」

老人は静かに言いました。

「戦いは始まっていたのだよ。今日それを告げる者達がやってきた」

第12回 反乱の芽（後書き）

これだけ書いたのにちつとも物語が先に進みません。だらだらした性格がそのまま小説に現れるのでしょうか。この調子なら主要人物が全て登場するのはいつのことやら。

ところでフィディアの持っている豎琴は本当はリュートのつもりだったのですが漢字でなんと表現していいのか分からないので豎琴と書いてしまいました。豎琴というとそうもハープ系のようなのでちよつとイメージと違いますがそのままいっちゃいます。

お菓子描写はよくわかりませんでした。菓子など作った事ないので曖昧になりました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9889u/>

翡翠記

2011年10月10日03時26分発行